

中尾遺跡第3次発掘調査報告書

大谷工業団地再整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

令和5年度

倉吉市教育委員会

中尾遺跡第3次発掘調査報告書

大谷工業団地再整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査



令和5年度

倉吉市教育委員会



1号堅穴建物出土鉄矛・板状鉄斧・鋸造鉄斧

※左端の鉄矛の全長が 54.6cm。

序

この報告書は、大谷工業団地再整備事業に伴い、令和元年～3年度に鳥取県倉吉市大谷字中尾において行った埋蔵文化財の発掘調査の記録です。

鳥取県の中部に位置する倉吉市には、豊かな自然とともに数多くの優れた文化財が伝えられています。そのなかでも本遺跡が所在する社地区では、伯耆国府跡や伯耆国分寺跡（いずれも国指定史跡）をはじめ、旧石器時代から中世に至るまでの幅広い時代の遺跡が確認されています。

今回の調査では、旧石器時代の石器や縄文時代の落し穴、弥生時代中期～古墳時代前期の集落跡、古墳時代中期～後期の古墳群などが確認され、この地域に暮らしていた人々の時代ごとに異なる活動の一端が明らかとなりました。また、弥生時代の竪穴建物での舶載鉄器の出土状況は国内で他に例がなく、鉄器の流通や祭祀を考える上での重要な発見となりました。

この報告書が地域の歴史の解明、あるいは教育・研究の一資料として、また文化財の理解・活用のためお役に立てば幸いに存じます。

最後になりましたが、調査に際し多大なご協力をいただきました株式会社明治製作所、地元関係者ならびに関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

令和6年3月

倉吉市教育委員会

教育長 小椋 博幸

例　　言

1 本報告書は、大谷工業団地再整備事業に伴う事前調査として、令和元年～3年度に倉吉市教育委員会が鳥取県倉吉市大谷字中尾において実施した埋蔵文化財発掘調査の記録である。

2 調査体制は次のような組織・編成である。

令和元年～3年度　　調査主体　倉吉市教育委員会

事務局　倉吉市教育委員会事務局文化財課

小椋 博幸（教育長）

山中 敏幸（事務局長 2年度まで）

種子 真一（事務局長 3年度）

根鈴智津子（文化財課課長 元年度／専門員 2年度）　藤井 貴男（文化財課課長 2年度から）

岡本 智則（文化財係係長 元年度／文化財課課長補佐兼文化財係係長 2年度から）

加藤 誠司（文化財係主任 元年度／文化財係主幹 2年度から）

箕田 拓郎（文化財係主任）　山増諭美子（文化財係主任）

田中 貴志（文化財係主任 2年11月から3年3月まで）　西村 和恵（文化財係主任 3年度）

小田 芳弘（文化財係主任学芸員 元年7月まで／文化財係兼博物館主任学芸員 元年8月から）

片岡 啓介（文化財係学芸員）　出口 亜美（文化財係主任 2年度まで）

田邊 歩（文化財係主任 元年度）　西浦 千賀（文化財係主任 2年度から）

橋本 有正（文化財係主任 3年度）

進木 和美（発掘調査補助員 元年9月から）

猪口亜也子（事務員）

松原 雄二（建築技師）

内務整理 秋元葉子・足羽由里香・進木和美（元年8月まで）・谷口公也（2年度から）・徳田郁美・中尾あゆみ（元年度）・山松紀文（2年度から）・福田ことり（奈良大学学生、元年度）

令和4年～5年度　　調査主体　倉吉市教育委員会

事務局　倉吉市教育委員会事務局文化財課

小椋 博幸（教育長）

種子 真一（事務局長 4年度）

石賀 大生（事務局長 5年度）

藤井 貴男（文化財課課長）

岡本 智則（文化財課課長補佐兼文化財保護係係長）

箕田 拓郎（文化財保護係主任学芸員）

田中 貴志（文化財保護係主任 4年2月から）

西村 和恵（文化財保護係主任 4年度）

西本 愛（文化財保護係主任 5年度）

谷口 礼（埋蔵文化財係主任）

加藤 誠司（埋蔵文化財係係長）

片岡 啓介（埋蔵文化財係主任学芸員）

小田 芳弘（埋蔵文化財係主任学芸員）

橋本 有正（埋蔵文化財係学芸員）

西浦 千賀（埋蔵文化財係学芸員）

川本 晶子（事務員）

進木 和美（発掘調査補助員）

松原 雄二（建築技師）

内務整理 秋元葉子・足羽由里香・谷口公也・徳田郁美（4年度）・山根孝（4年度）・山松紀文（4年度）

3 現地調査は、元年度に加藤・田邊、2年度に片岡・西浦、3年度に小田・西浦・橋本が担当し、進木の補助を受けた。遺構写真撮影は、各年度の担当調査員が行った。

4 出土遺物の実測及び観察は片岡・西浦・橋本・谷口・秋元・山松が行い、遺物写真撮影は小田・片岡・西浦・橋本が行った。

5 本書の執筆は、調査員が討議し、小田・片岡・西浦・橋本が行い、文末に文責を記した。本書の編集は、小田が行った。

6 IV章・V章は出土遺物の鑑定結果や論考を寄稿していただいたものである。

・炭化材の樹種同定や¹⁴C年代測定などの自然科学分析は、文化財調査コンサルタント株式会社に委託した。

・人骨の鑑定は、鳥取大学 岡崎健治氏に依頼した。

・石枕のPCN分析は、島根大学エスチュアリー研究センター 渡辺正巳氏に依頼した。

・1号堅穴建物出土鉄器の論考は、愛媛大学アジア古代産業考古学研究センター 村上恭通氏、公益財団法人元興寺文化財研究所 塚本敏夫氏にお願いした。

7 第1図は、国土地理院発行の1:25,000地形図「倉吉」の一部に加筆したものである。第2図は平成元年修正測量の1:2,500国土基本図をもとに加筆したものである。

8 挿図中の方位及び座標値は、第2図を除き、国土座標第V座標系（世界測地系）の北を指す。

9 遺物に付した記号・番号は、本文・挿図・図版で統一した。

10 調査によって得られた資料は、倉吉市教育委員会が保管している。

11 現地調査及び遺物整理において以下の諸氏にご指導をいただいた。記して謝意を表します。（順不同・敬称略）

眞田廣幸、森下哲哉、下條信行、村上恭通、塚本敏夫、初村武寛、森岡秀人、高尾浩司、高橋章司、水村直人、橋本勝雄、長友朋子、中村大介、米田克彦、大賀克彦

本文目次

I	発掘調査に至る経過	1
II	位置と歴史的環境	1
III	調査の概要	5
1	遺構	5
(1)	落し穴	5
(2)	竪穴建物	9
(3)	掘立柱建物	22
(4)	柵列	25
(5)	貯蔵穴	25
(6)	土壙	25
(7)	古墳	30
(8)	木棺墓	90
(9)	土壙墓	90
(10)	溝	97
(11)	段状遺構	101
(12)	土器埋設遺構	101
2	遺物	102
IV	鑑定	134
1	中尾遺跡第3次調査に伴う自然科学分析	134
2	中尾遺跡第3次調査出土の古墳人骨	143
3	中尾遺跡第3次調査25号墳2号・3号主体部石枕を対象としたPCN分析	145
V	特論	149
1	中尾遺跡1号竪穴建物の鉄器とその出土状況	149
2	中尾遺跡1号竪穴建物出土鉄鉸・板状鉄斧・鋸造鉄斧に残る有機質痕跡とその意義	153
VI	まとめ	157
	報告書抄録	

挿図目次

第1図	周辺の地形と遺跡分布図	2	第10図	3号・4号竪穴建物遺構図	13
第2図	調査区位置図	3	第11図	5号竪穴建物遺構図	14
第3図	第3次発掘調査遺構全体図	4	第12図	6号竪穴建物遺構図	15
第4図	1号～5号落し穴遺構図	6	第13図	7号・8号竪穴建物遺構図	16
第5図	6号～10号落し穴遺構図	7	第14図	9号竪穴建物遺構図	17
第6図	11号～14号落し穴遺構図	8	第15図	10号竪穴建物遺構図	18
第7図	1号竪穴建物遺構図	10	第16図	11号竪穴建物遺構図	19
第8図	1号竪穴建物鉄器出土状況図	11	第17図	1号～3号掘立柱建物遺構図	21
第9図	2号竪穴建物遺構図	12	第18図	4号・5号掘立柱建物遺構図	23

第 19 図	6 号～8 号掘立柱建物遺構図	24	第 57 図	17 号墳 2 号埋葬施設遺構図	67
第 20 図	1 号柵列及び 1 号貯蔵穴遺構図	25	第 58 図	18 号～20 号墳遺構図	69
第 21 図	1 号・2 号土壙遺構図	26	第 59 図	21 号墳遺構図及び 1 号埋葬施設遺構図	70
第 22 図	3 号～5 号土壙遺構図	27	第 60 図	22 号墳遺構図	71
第 23 図	6 号～8 号土壙遺構図	28	第 61 図	22 号墳 1 号埋葬施設遺構図及び 23 号墳遺構図	
第 24 図	9 号・10 号土壙遺構図	29			72
第 25 図	1 号墳遺構図	31	第 62 図	22 号墳 2 号埋葬施設遺構図	73
第 26 図	1 号墳 1 号～3 号・6 号埋葬施設遺構図	33	第 63 図	24 号墳遺構図及び 1 号埋葬施設遺構図	75
第 27 図	1 号墳 4 号・7 号埋葬施設遺構図	34	第 64 図	25 号墳遺構図	76
第 28 図	1 号墳 5 号埋葬施設遺構図	35	第 65 図	25 号墳主体部掘方遺構図	77
第 29 図	1 号墳 8 号・9 号埋葬施設遺構図	36	第 66 図	25 号墳 1 号主体部遺構図	78
第 30 図	1 号墳 10 号埋葬施設遺構図	37	第 67 図	25 号墳 2 号主体部遺構図	79
第 31 図	1 号墳 11 号・12 号埋葬施設遺構図	38	第 68 図	25 号墳 3 号主体部遺構図	81
第 32 図	1 号墳 13 号・14 号埋葬施設遺構図	39	第 69 図	25 号墳 1 号埋葬施設遺構図	83
第 33 図	2 号・5 号墳遺構図	40	第 70 図	25 号墳 2 号埋葬施設遺構図	85
第 34 図	3 号墳遺構図及び遺物出土状況図	41	第 71 図	1 号・2 号木棺墓遺構図	91
第 35 図	4 号墳遺構図及び遺物出土状況図	43	第 72 図	3 号木棺墓遺構図	92
第 36 図	4 号墳 1 号埋葬施設遺構図	44	第 73 図	4 号木棺墓遺構図	93
第 37 図	4 号墳 2 号埋葬施設遺構図	45	第 74 図	5 号木棺墓遺構図	94
第 38 図	6 号墳遺構図	46	第 75 図	1 号・2 号土壙墓遺構図	95
第 39 図	6 号墳 1 号主体部遺構図	47	第 76 図	3 号土壙墓遺構図	96
第 40 図	7 号墳遺構図及び 1 号埋葬施設遺構図	49	第 77 図	1 号～5 号溝遺構図	98
第 41 図	8 号墳遺構図	49	第 78 図	6 号～8 号・11 号溝遺構図	99
第 42 図	8 号墳 1 号主体部遺構図	50	第 79 図	9 号～10 号溝遺構図及び 1 号段状遺構遺構図	
第 43 図	8 号墳 2 号主体部遺構図	51			100
第 44 図	8 号墳 1 号埋葬施設遺構図	52	第 80 図	1 号・2 号土器埋設遺構遺構図	101
第 45 図	10 号墳遺構図及び 1 号埋葬施設遺構図	53	第 81 図	1 号竪穴建物出土土器（1）	103
第 46 図	9 号墳遺構図及び 11 号墳遺構図	54	第 82 図	1 号竪穴建物出土土器（2）	104
第 47 図	11 号墳 1 号埋葬施設遺構図	55	第 83 図	2 号～6 号竪穴建物出土土器	105
第 48 図	12 号墳遺構図、13 号墳遺構図及び遺物出土状況図	57	第 84 図	7 号・9 号～11 号竪穴建物、1 号掘立柱建物、1 号貯蔵穴出土土器	107
第 49 図	13 号墳 1 号・2 号埋葬施設遺構図	58	第 85 図	1 号・2 号土壙出土土器	109
第 50 図	13 号墳 3 号埋葬施設遺構図	59	第 86 図	1 号～3 号墳出土土器	111
第 51 図	14 号墳遺構図及び 1 号・2 号埋葬施設遺構図		第 87 図	4 号・5 号・8 号・10 号墳出土土器	113
		60	第 88 図	11 号・13 号墳出土土器	115
第 52 図	15 号墳遺構図及び 1 号埋葬施設遺構図	61	第 89 図	14 号～17 号墳出土土器	117
第 53 図	16 号墳遺構図	62	第 90 図	19 号～21 号墳出土土器	119
第 54 図	16 号墳 1 号埋葬施設遺構図	63	第 91 図	22 号～25 号墳出土土器	121
第 55 図	16 号墳 2 号埋葬施設遺構図	64	第 92 図	1 号段状遺構、1 号・2 号土器埋設遺構、遺構外出土土器、土製品	123
第 56 図	17 号墳遺構図、遺物出土状況図及び 1 号埋葬施設遺構図	65	第 93 図	1 号竪穴建物出土鉄器	125

第 94 図	1 号・4 号・11 号墳出土鉄器	126	(B 1)	144	
第 95 図	25 号墳、3 号溝、1 号段状遺構、遺構外出土 鉄器	127	第 111 図	25 号墳 3 号主体部から出土した頭蓋冠の破片 (B 1)	144
第 96 図	1 号竪穴建物、16 号・25 号墳出土玉類、5 号 竪穴建物、1 号墳出土玉作関係遺物	128	第 112 図	25 号墳 3 号主体部から出土した大臼歯の歯冠 (B 2)	144
第 97 図	ナイフ形石器、尖頭器、石刃、剥片	129	第 113 図	25 号墳 3 号主体部から出土した上顎左大臼歯 の歯冠 (B 3)	144
第 98 図	石鏃、石匙、石錐	130	第 114 図	25 号墳 3 号主体部から出土した犬歯の歯冠 (B 4)	144
第 99 図	1 号貯蔵穴出土石錐、5 号竪穴建物等出土磨製 石斧、1 号竪穴建物等出土砥石	131	第 115 図	TP、TOC/TN の分布	147
第 100 図	5 号・9 号竪穴建物出土敲石	132	第 116 図	中尾遺跡と茶戸里遺跡の鉄器	149
第 101 図	1 号竪穴建物出土台石	133	第 117 図	中国・日本の二条突帶鑄造鉄斧各種	150
第 102 図	遺構配置図	134	第 118 図	尾高浅山遺跡 1 号墓の墳頂面に突き刺さった鉄 刀	151
第 103 図	1 号竪穴建物平面図 (試料採取地点)	134	第 119 図	1 号竪穴建物遺物出土状況図	153
第 104 図	樹種写真図版 1	137	第 120 図	1 号竪穴建物鉄器出土状況	153
第 105 図	樹種写真図版 2	138	第 121 図	鉄鋸の有機質痕跡	154
第 106 図	種実写真図版	139	第 122 図	板状鉄斧の有機質痕跡	154
第 107 図	暦年較正結果	139	第 123 図	鑄造鉄斧の有機質痕跡	154
第 108 図	微小部蛍光 X 線による定性分析 (スペクトル): R2956	141	第 124 図	鑄造鉄斧袋部内部の CT 画像	155
第 109 図	微小部蛍光 X 線による定性分析 (スペクトル): R1861	141	第 125 図	第 1 ~ 3 次調査遺構全体図	164
第 110 図	25 号墳 2 号主体部から出土した頭蓋冠の破片				

表 目 次

第 1 表	落し穴一覧	5	第 9 表	溝一覧	97
第 2 表	竪穴建物一覧	20	第 10 表	出土遺物一覧	102
第 3 表	掘立柱建物一覧	22	第 11 表	樹種同定結果	135
第 4 表	土壙一覧	29	第 12 表	種実同定結果	139
第 5 表	古墳一覧	87	第 13 表	AMS 年代測定結果	139
第 6 表	古墳主体部・埋葬施設一覧	88	第 14 表	顔料分析結果	140
第 7 表	木棺墓一覧	92	第 15 表	分析結果一覧	146
第 8 表	土壙墓一覧	96			

図 版 目 次

卷頭図版	1号堅穴建物出土鉄矛・板状鉄斧・鋸造鉄斧	図版 26	23号・24号墳
図版 1	調査前全景、調査後全景	図版 27	25号墳
図版 2	調査後全景	図版 28	25号墳
図版 3	1号～14号落し穴	図版 29	25号墳
図版 4	1号堅穴建物	図版 30	25号墳、1号～5号木棺墓、1号～3号土壙墓
図版 5	1号堅穴建物		
図版 6	2号～4号・8号堅穴建物	図版 31	1号～11号溝、1号段状遺構、1号・2号土器埋設遺構
図版 7	5号～7号堅穴建物	図版 32	1号・2号堅穴建物出土土器
図版 8	9号～11号堅穴建物	図版 33	3号～7号・9号～11号堅穴建物、1号掘立柱建物出土土器
図版 9	1号～5号掘立柱建物、1号柵列		
図版 10	6号～8号掘立柱建物、1号貯蔵穴、1号・2号土壤	図版 34	1号貯蔵穴、1号・2号土壙出土土器
図版 11	3号～9号土壤	図版 35	1号～3号墳出土土器
図版 12	古墳群、1号墳	図版 36	4号・5号・8号・10号墳出土土器
図版 13	1号墳	図版 37	11号・13号・14号墳出土土器
図版 14	1号墳	図版 38	15～17号・19号墳出土土器
図版 15	2号・3号墳	図版 39	20号～24号墳出土土器
図版 16	4号・5号墳	図版 40	25号墳、1号段状遺構、1号・2号土器埋設遺構、遺構外出土土器、土製品
図版 17	6号・7号墳		
図版 18	8号墳	図版 41	1号堅穴建物出土鉄器
図版 19	9号・10号墳	図版 42	1号・4号・11号・25号墳、3号溝、1号段状遺構、遺構外出土鉄器
図版 20	11号・12号墳		
図版 21	13号・14号墳	図版 43	1号堅穴建物、16号・25号墳出土玉類、5号堅穴建物、1号墳出土玉作関係遺物、ナイフ形石器、尖頭器、石刃、剥片、石鏃、石匙、石錐
図版 22	15号・16号墳		
図版 23	17号・18号墳		
図版 24	19号～21号墳	図版 44	1号貯蔵穴出土石錐、5号堅穴建物等出土磨製石斧、1号堅穴建物等出土砥石、敲石、台石
図版 25	21号・22号墳		

I 発掘調査に至る経過

平成 29 年 11 月、倉吉市企画産業部商工観光課から倉吉市教育委員会に、大谷工業団地再整備事業に先立ち、倉吉市大谷字中尾の低丘陵上における埋蔵文化財の取扱いについての協議があった。丘陵上には中尾遺跡が所在し、先端部側では倉吉市教育委員会が平成 3 年度¹⁾ 及び平成 26 ~ 28 年度²⁾ に本発掘調査を行い、縄文時代の落し穴 159 基、弥生時代前期～後期の竪穴建物 25 棟、掘立柱建物 21 棟、貯蔵穴 13 基、古墳時代後期頃の円墳 2 基などを確認した。さらに、基部側にあたる当該地でも平成 7 年 4 ~ 5 月³⁾ 及び平成 30 年 6 月⁴⁾ に倉吉市教育委員会が国・県の補助を受けて試掘・確認調査を行い、丘陵上で遺構・遺物を確認した。これらを受け、倉吉市教育委員会が事業範囲全域の本発掘調査を行うこととなった。調査期間は令和元年 8 月 1 日から令和 4 年 3 月 31 日まで、調査面積は 14,000 m²である。

(小田)

註

- 1) 根鈴智津子ほか『中尾遺跡発掘調査報告書』倉吉市文化財報告書第 69 集、倉吉市教育委員会、1992 年
- 2) 勢村茉莉子ほか『中尾遺跡第 2 次発掘調査報告書』倉吉市文化財報告書第 150 集、倉吉市教育委員会、2017 年
- 3) 森下哲哉「2. 大谷中尾地区（中尾遺跡）」『倉吉市内遺跡分布調査報告書 IX』倉吉市文化財報告書第 87 集、倉吉市教育委員会、1997 年
- 4) 加藤誠司「11. 大谷地区（中尾遺跡）」『倉吉市内遺跡分布調査報告書 20』倉吉市文化財報告書第 154 集、倉吉市教育委員会、2019 年

II 位置と歴史的環境

中尾遺跡は、倉吉市街地から北西へ約 3 km 離れた倉吉市大谷字中尾に所在する。四王寺山南麓の低丘陵上に位置し、西に大山や久米ヶ原丘陵、南東に打吹山、東に向山を望む。南には国府川が造りだした沖積平野が広がり、肥沃な水田地帯となっている。調査地の標高は約 22.5 ~ 31 m、水田面との比高差は 3 m 以上である。

当遺跡の周辺には多くの遺跡が分布する。以下、第 1 図の範囲を中心に、旧石器時代から古墳時代にかけての周辺の歴史的環境について概要を述べる。

旧石器時代の遺物として、中尾遺跡第 1 次 (64) 出土の国府型ナイフ形石器（黒曜石製）、長谷遺跡 (46) 出土のナイフ形石器（安山岩製）、上神 51 号墳 (6) 下層出土の船底形細石刃石核（黒曜石製）などが知られる。

縄文時代には、四王寺山西側の取木遺跡で早期の竪穴建物 1 棟と礫群 2 基が確認されている。また、中尾遺跡第 1・2 次 (65) や長谷遺跡などで多くの落し穴が調査され、丘陵上を狩猟場として利用していた様子が窺える。

弥生時代には、四王寺山周辺や久米ヶ原丘陵などの丘陵上に集落が多く分布し、竪穴建物と掘立柱建物、貯蔵穴で構成されることが多い。前期～後期の中尾遺跡第 1・2 次、中期～後期の後中尾遺跡、中峯遺跡、後期の夏谷遺跡、コザンコウ遺跡、両長谷遺跡などが調査されている。また、東前遺跡 (61) では中期の玉作工房が確認されている。墳墓としては、イキス遺跡 (1) で前期の木棺墓・土壙墓群が調査されている。後期の墳墓は四王寺山裾部に分布し、柴栗墳丘墓 (25) や大谷後口谷墳丘墓群 (66)、三度舞墳丘墓 (52) などが確認されている。

古墳時代前期になると、四王寺山周辺では、三角縁神獣鏡を含む 3 面の舶載鏡や多量の鉄製武器・農工具が出土した国分寺古墳（前方後方墳ないし前方後円墳・全長約 60 m）(71) をはじめ、上神大将塚古墳（円墳・直径約 25 m）(24) や大谷大将塚古墳（前方後円墳・全長約 50 m）(51) といった首長墳が相次いで築造された。中期から後期には古墳の数が増加し、円墳 22 基からなるイザ原古墳群 (55) や円墳 5 基からなる小林古墳群 (54)、円墳や帆立貝式古墳など 28 基からなる沢ベリ遺跡 (56 ~ 59) などが調査されている。

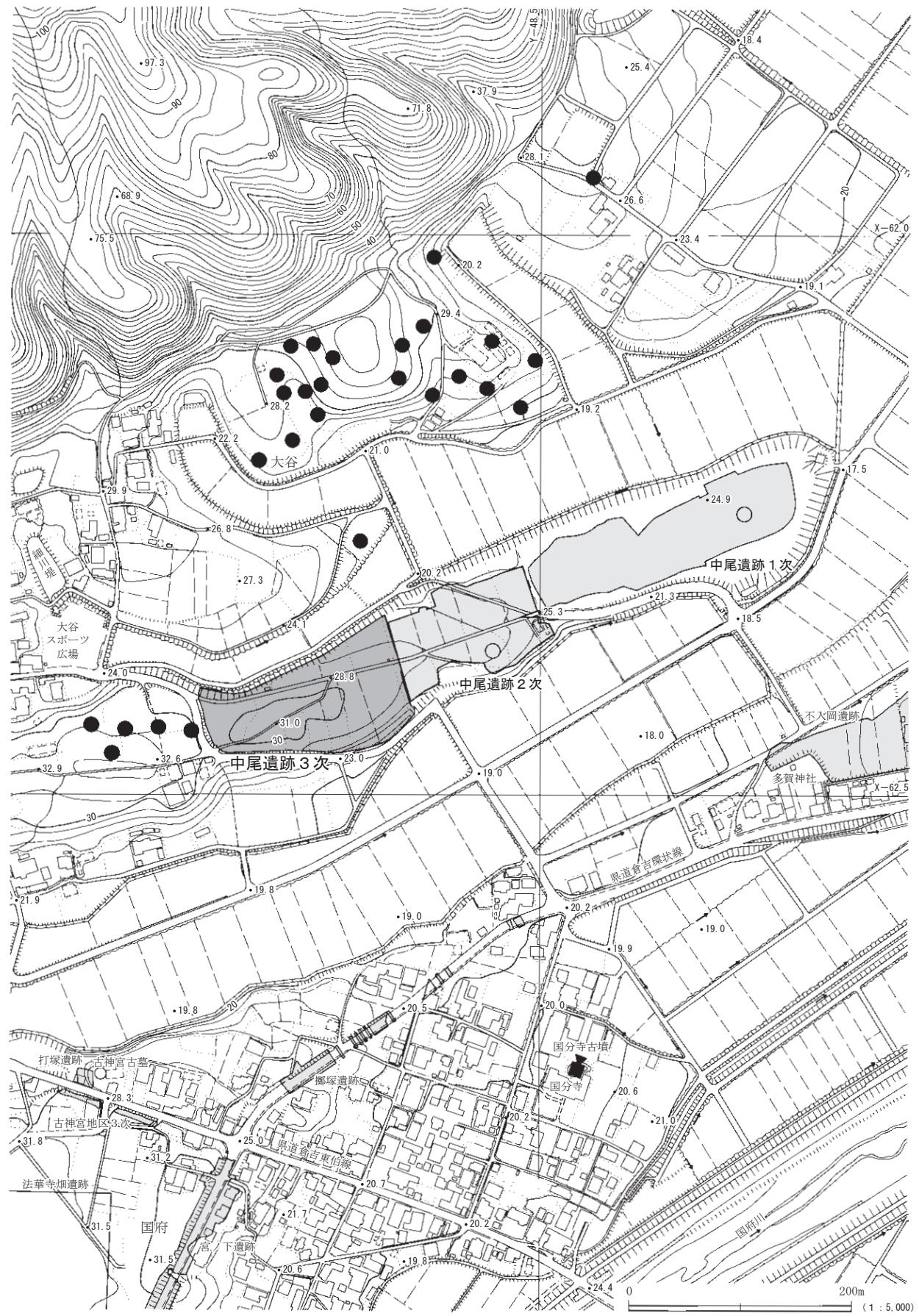
古墳時代の集落は、弥生時代と同様に竪穴建物と掘立柱建物で構成される。弥生時代後期から継続する夏谷遺跡、前期の宮ノ下遺跡 (73)、擲塚遺跡 (72)、前期と後期の桜木遺跡 (15)、中期の不入岡遺跡 (62)、後期の西山遺跡 (13)、西前遺跡 (27) などが調査されている。また、祭祀に関する遺跡は、人形や動物形をはじめとする小型の土製品が多数出土した谷畑遺跡 (14) のほか、クズマ遺跡 (8 ~ 11)、イガミ松遺跡 (12)、上神宮ノ前遺跡 (16) などが知られ、四王寺山北側の上神地域に集中している。

(小田)



- | | | | | |
|-------------|-------------|------------|------------------|--------------------|
| 1 イキス遺跡 | 17 平畑ヶ遺跡第1次 | 33 若林2号墳 | 49 四王寺跡 | 65 中尾遺跡第2次 |
| 2 上神古墳群 | 18 平畑ヶ遺跡第2次 | 34 土下古墳群 | 50 大谷城跡 | 66 大谷後口谷墳丘墓群 |
| 3 上神44号墳 | 19 東狭間古墳 | 35 下張坪遺跡 | 51 大谷大将塚古墳 | 67 向野遺跡 |
| 4 上神45号墳 | 20 猫山遺跡第1次 | 36 西平遺跡 | 52 三度舞墳丘墓 | 68 伯耆国府関連遺跡(古神宮地区) |
| 5 上神48号墳 | 21 猫山遺跡第2次 | 37 夏谷遺跡 | 53 イザ原遺跡 | 69 古神宮古墓 |
| 6 上神51号墳 | 22 猫山遺跡第3次 | 38 大平ラ遺跡 | 54 小林古墳群 | 70 打塚遺跡 |
| 7 上神119号墳 | 23 猫山遺跡第4次 | 39 中峰古墳群 | 55 イザ原古墳群 | 71 国分寺古墳 |
| 8 クズマ遺跡第1次 | 24 上神大将塚古墳 | 40 和田城跡 | 56 沢ベリ遺跡第1次 | 72 撈塚遺跡 |
| 9 クズマ遺跡第2次 | 25 柴栗墳丘墓 | 41 平ル林遺跡 | 57 沢ベリ遺跡第2次 | 73 宮ノ下遺跡 |
| 10 クズマ遺跡第3次 | 26 トドロケ遺跡 | 42 向山古墳群 | 58 沢ベリ遺跡第3次 | 74 伯耆国府跡 法華寺遺跡 |
| 11 クズマ遺跡第4次 | 27 西前遺跡 | 43 向山309号墳 | 59 沢ベリ遺跡第4次 | 75 国分寺北遺跡 |
| 12 イガミ松遺跡 | 28 西前1号墳 | 44 向山310号墳 | 60 茅林遺跡 | 76 伯耆国分寺跡 |
| 13 西山遺跡 | 29 米里三ノ寄遺跡 | 45 和田東城跡 | 61 東前遺跡 | 77 伯耆国府跡 国庁跡 |
| 14 谷畠遺跡 | 30 米里銅鐸出土地 | 46 長谷遺跡 | 62 伯耆国府跡 不入岡遺跡 | 78 河原毛田遺跡 |
| 15 桜木遺跡 | 31 八幡山遺跡 | 47 屋喜山古墳群 | 63 不入岡遺跡群(老本榎地区) | |
| 16 上神宮ノ前遺跡 | 32 若林遺跡 | 48 屋喜山9号墳 | 64 中尾遺跡第1次 | |

第1図 周辺の地形と遺跡分布図



第2図 調査区位置図

第3図 第3次発掘調査遺構全体図



III 調査の概要

調査地は、丘陵尾根上とその尾根から下る斜面に所在し、かつて畠地や果樹園として利用されていた。調査面積は 14,000 m²である。

調査地の基本層序は、上層から黒褐色土（表土）、黒色土（クロボク）、暗褐色土、褐色土（ソフトローム）、黄灰色砂質土（ホーキ火山灰砂層）、黄褐色砂質土（A T：始良丹沢火山灰層）、橙褐色粘質土（礫混じり粘質土層）、黄橙色土（D. K. P. : 大山・倉吉軽石層）である。調査では褐色土～黄橙色土上面で遺構検出を行った。

調査の結果、落し穴 14 基、堅穴建物 11 棟、掘立柱建物 8 棟、柵列 1 基、貯蔵穴 1 基、土壙 10 基、古墳 25 基、木棺墓 5 基、土壙墓 3 基、溝 11 条、段状遺構 1 基、土器埋設遺構 2 基、ピット多数を確認した。

以下、遺構・遺物に分けて調査の概要を述べる。

1 遺構

(1) 落し穴

丘陵尾根上とその尾根から下る北斜面で 14 基を確認した。その詳細は第 1 表に一括する。ここでは特徴的な落し穴 4 基について述べる。

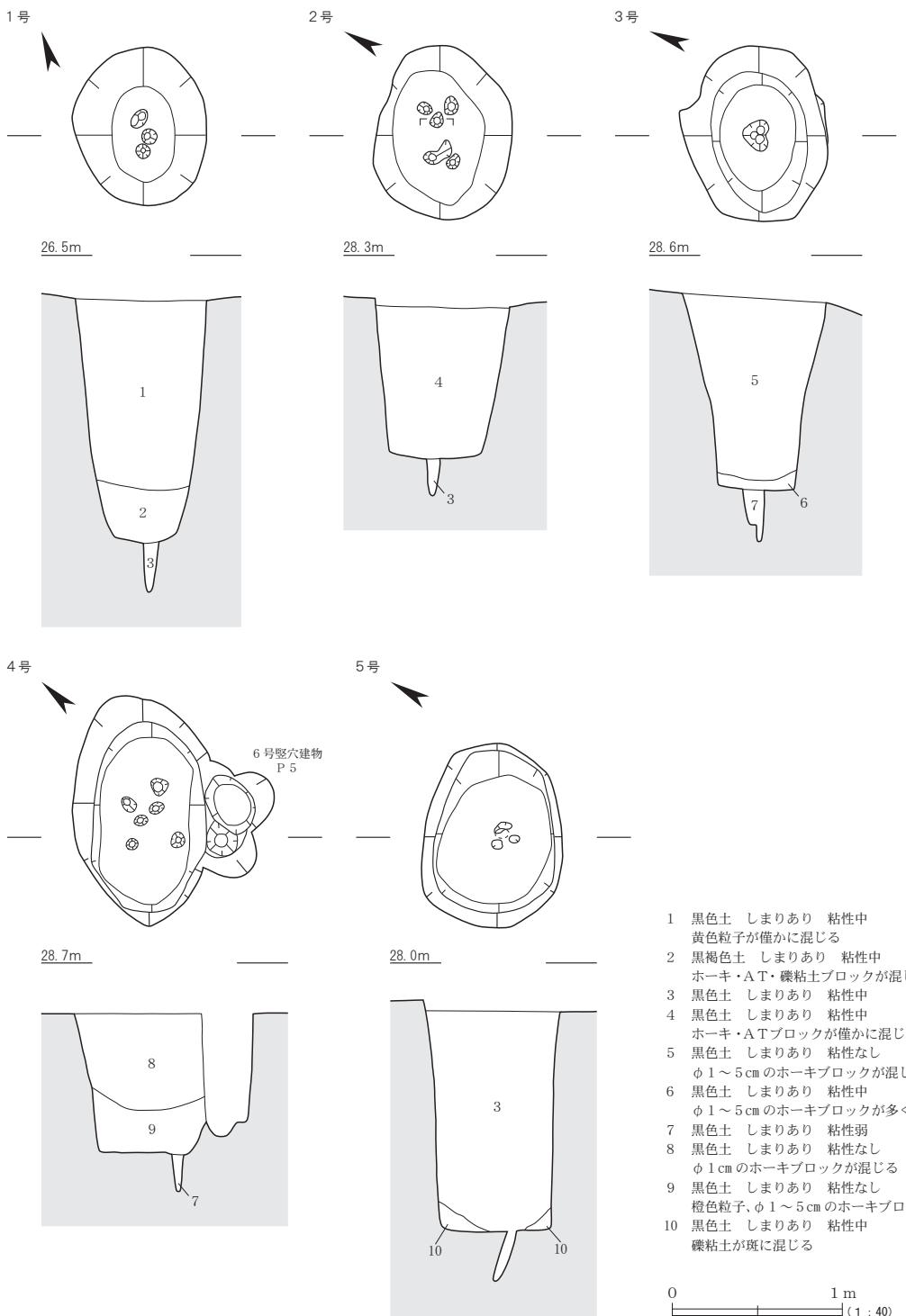
なお、落し穴の分類基準は第 1・2 次調査の報告¹⁾に準ずる。すなわち、底面の平面形を A : 円形、B : 楕円形、C : 長方形、D : 正方形の 4 つに、断面形を a : 開口部（検出面）から底部にかけて漸次狭くなる「スリバチ型」、b : 開口部から底部までほぼ垂直である「垂直型」、c : 開口部が底部に比べて狭く、オーバーハングの認められる「フラスコ型」の 3 つに大別し、平面形の大文字（A～D）と断面形の小文字（a～c）を組み合わせて分類する。

6 号落し穴 調査区の東部、丘陵尾根上の標高 29 m 付近に位置する。平面形は検出面・底面とも楕円形を呈し、断面形は垂直型で、B-b に分類される。規模は検出面では長径 1.16 m・短径 0.88 m、底面では長径 0.85 m・短径 0.74 m、検出面から底面までの深さは 0.78 m を測る。底面では、短径 3～8 cm・深さ 18～38 cm の杭穴を

第 1 表 落し穴一覧

法量：[] 現存値

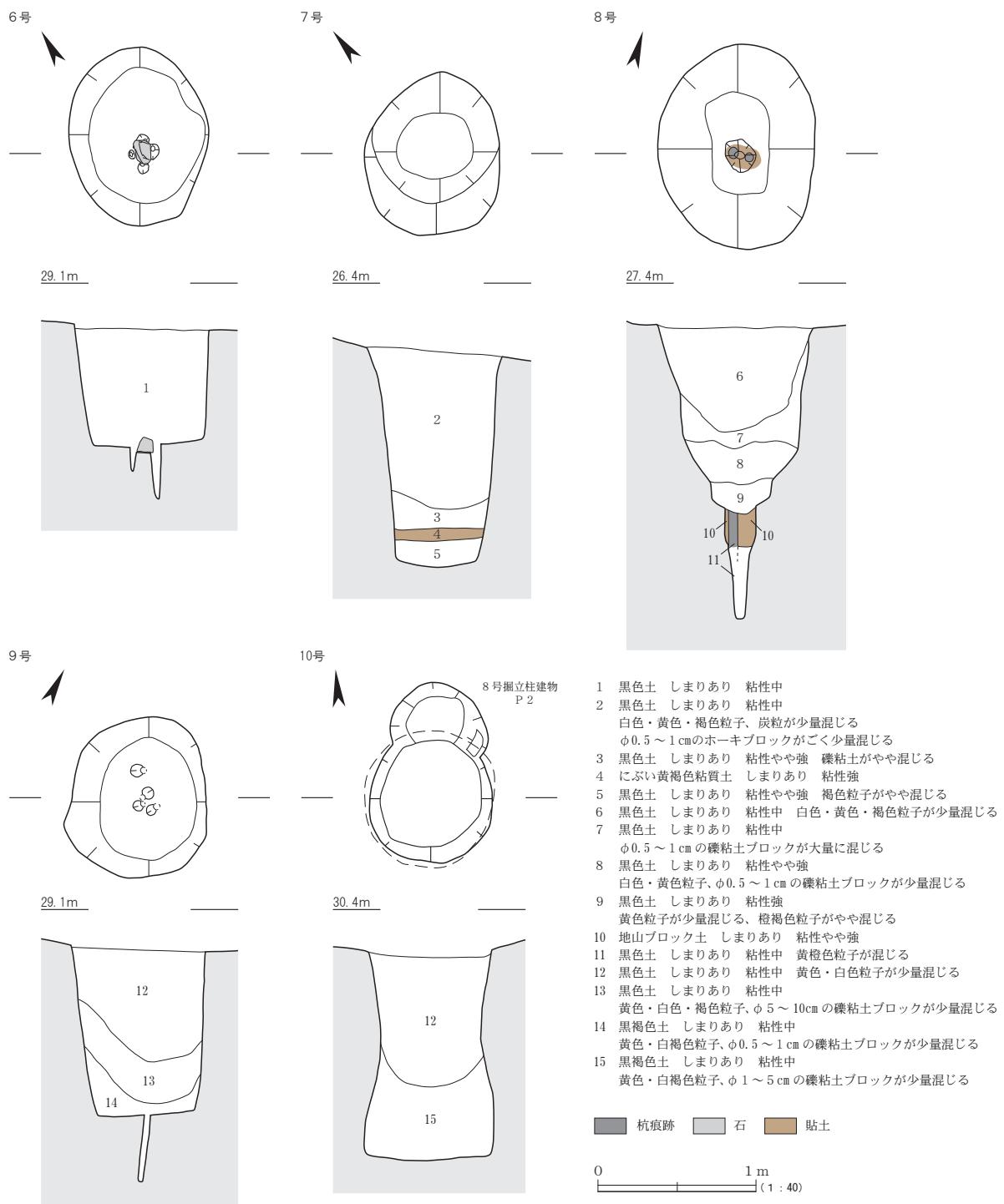
遺構名	位置・立地	平面形		断面形態	分類	検出面規模 (cm)	底面規模 (cm)	底面ピット		備考
		検出面	底面					数	短径-深さ (cm)	
1 号落し穴	調査区の東端、丘陵北斜面の標高 27 m 付近	楕円形	楕円形	スリバチ型	B-a	93 × 77 - 141	56 × 37	3	8 - 30	
2 号落し穴	調査区の東部、丘陵北肩部の標高 28 m 付近	楕円形	楕円形	スリバチ型	B-a	102 × 82 - 94	78 × 54	5	5 ~ 8 - 22 ~ 37	
3 号落し穴	調査区の東部、丘陵北肩部の標高 28.5 m 付近	楕円形	楕円形	スリバチ型	B-a	103 × 87 - 114	61 × 44	中央 1 (杭穴 3)	12 - 23 ~ 33	6 号堅穴建物に切られる。
4 号落し穴	調査区の東部、丘陵尾根上の標高 28.5 m 付近	楕円形	楕円形	スリバチ型	B-a	127 × [76] - 81	97 × 52	6	6 ~ 10 - 19 ~ 79	6 号堅穴建物に切られる。
5 号落し穴	調査区の東部、丘陵尾根上の標高 29 m 付近	楕円形	楕円形	垂直型	B-b	108 × 82 - 136	76 × 62	3	4 ~ 6 - 29	4 号堅穴建物に切られる。
6 号落し穴	調査区の東部、丘陵尾根上の標高 29 m 付近	楕円形	楕円形	垂直型	B-b	116 × 88 - 78	85 × 74	4	3 ~ 8 - 18 ~ 38	杭穴と杭穴の間から縦 1 点出土。
7 号落し穴	調査区の東部、丘陵尾根上の標高 29 m 付近	楕円形	円形	スリバチ型	A-a	103 × 85 - 138	48 × 41	0	—	埋土下層で貼土確認。
8 号落し穴	調査区の中央部、丘陵北斜面の標高 27 m 付近	楕円形	長方形	スリバチ型	C-a	133 × 99 - 116	68 × 36	中央 1	16 - 56	短径 5 ~ 6 cm の杭痕跡 2 本を確認。
9 号落し穴	調査区の中央部、丘陵北肩部の標高 29 m 付近	楕円形	楕円形	垂直型	B-b	101 × 90 - 108	77 × 61	4	6 ~ 8 - 23 ~ 42	
10 号落し穴	調査区の中央部、丘陵尾根上の標高 30 m 付近	円形	円形	フラスコ型	A-c	[77] × 78 - 132	67 × 64	0	—	8 号掘立柱建物に切られる。
11 号落し穴	調査区の中央部、丘陵尾根上の標高 30 m 付近	円形	円形	垂直型	A-b	86 × 74 - 30	68 × 61	中央 1	8 - 38	
12 号落し穴	調査区の西端、丘陵北斜面の標高 29.5 m 付近	円形	円形	スリバチ型	A-a	94 × 84 - 156	56 × 54	0	—	
13 号落し穴	調査区の西部、丘陵尾根上の標高 30 m 付近	円形	円形	垂直型	A-b	60 × 57 - 114	50 × 44	0	—	
14 号落し穴	調査区の西部、丘陵尾根上の標高 30 m 付近	円形	円形	スリバチ型	A-a	114 × 100 - 168	61 × 60	0	—	



第4図 1号～5号落し穴遺構図

4つ確認した。4つの杭穴に囲まれた位置で礫が1点出土しており、この礫は4本の杭を固定するために用いたものと考えられる。遺物は埋土から弥生土器片が出土した。

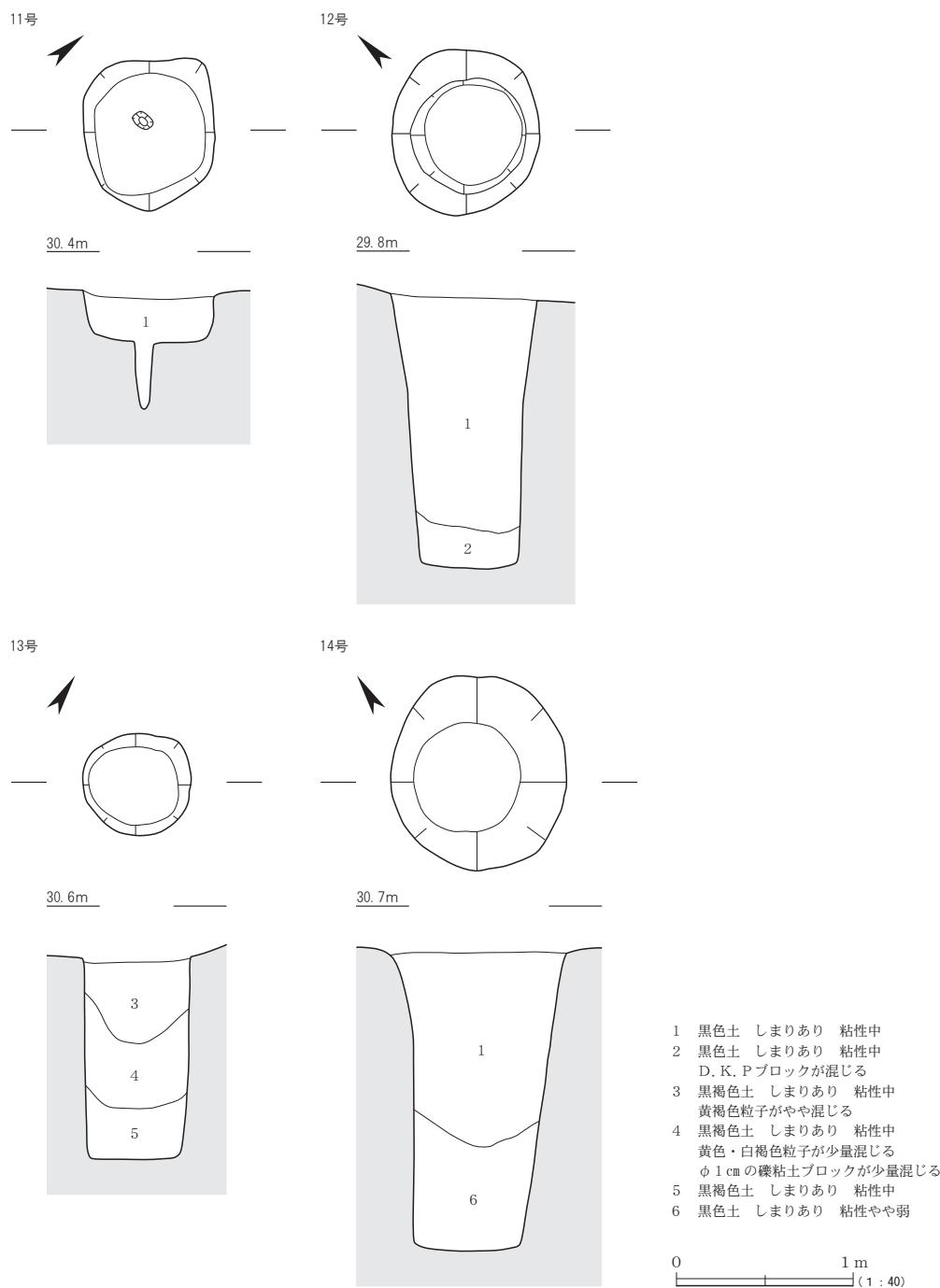
7号落し穴 調査区の東部、丘陵尾根上の標高29m付近に位置する。平面形は検出面では楕円形、底面では円形を呈し、断面形はスリバチ型で、A-aに分類される。規模は検出面では長径1.03m・短径0.85m、底面では長径0.48m・短径0.41m、検出面から底面までの深さは1.38mを測る。埋土の下層では、人為的に埋めた貼土を1層確認した(断面図4層)。底面では杭穴を確認しなかった。遺物は出土しなかった。



第5図 6号～10号落し穴遺構図

8号落し穴 調査区の中央部、丘陵北斜面の標高27m付近に位置する。平面形は検出面では橢円形、底面では長方形を呈し、断面形はスリバチ型であり、C-aに分類される。規模は検出面では長軸1.33m・短軸0.99m、底面では長軸0.68m・短軸0.36m、検出面から底面までの深さ1.16mを測る。埋土の下層では短径5～6cmの杭痕跡を2本確認し、底面の中央では短径16cm・深さ56cmの杭穴を1つ確認した。遺物は出土しなかった。

10号落し穴 調査区の中央部、丘陵尾根上の標高30～30.25m付近に位置し、8号掘立柱建物に切られる。



第6図 11号～14号落し穴遺構図

平面形は検出面・底面とも円形を呈し、断面形はフラスコ型であり、A-cに分類される。規模は検出面では確認できた長径0.77m・短径0.78m、底面では長径0.67m・短径0.64m、検出面から底面までの深さ1.32mを測る。底面では杭穴を確認しなかった。遺物は出土しなかった。

(小田)

註

- 1) 根鈴智津子ほか『中尾遺跡発掘調査報告書』倉吉市文化財調査報告書第69集、倉吉市教育委員会、1992年
- 勢村茉莉子ほか『中尾遺跡第2次発掘調査報告書』倉吉市文化財調査報告書第150集、倉吉市教育委員会、2017年

(2) 壇穴建物

丘陵尾根上とその尾根から下る南斜面で 11 棟を確認した。その詳細は第 2 表に一括し、以下、各遺構について述べる。

1号壇穴建物 調査区の北部、丘陵尾根上の標高 28 m 付近に位置する。建物の西側 1/2 を確認した。東側 1/2 は 2 次調査で調査済みである。検出した主柱穴・周壁溝から、A 期→B 期への建て替え（拡張）を確認した。

A 期の平面形は円形を呈し、床面の規模は東西 6.5 m、南北 6.0 m を測る。床面積は約 32 m² と推定される。周壁溝は全周し、幅 13cm、床面からの深さ 5 cm を測る。主柱穴は P 1～P 3、P 5～P 7 の 6 基である。主柱穴は長軸 66～88 cm の楕円形を呈す。柱穴間距離に特徴が見られ、6 辺のうち P 1～P 7 間が 3.33 m、P 3～P 5 間が 3.40 m と、他 4 辺の 2.5 m 前後に比して約 0.9 m 長い。建物中央に中央ピット P 8 が設けられている。P 8 は隅丸長方形を呈し、掘方は 2 段で、上段が長軸 118 cm、短軸 96 cm、下段が長軸 74 cm、短軸 60 cm を測る。P 8 の両脇には P 4・P 9 が伴う。P 4 は直径 68 cm、P 9 は直径 64 cm の円形を呈す。P 4・8・9 は一直線に並び、軸は丘陵尾根筋の方向に沿う。

B 期の平面形は円形を呈し、床面の規模は東西 6.9 m、南北 6.7 m を測る。床面積は約 37 m² と推定され、検出面からの深さは 65 cm を測る。周壁溝は全周し、幅 13cm、床面からの深さ 6 cm を測る。主柱穴は A 期の主柱穴を利用し、柱穴掘方内でわずかに柱位置を外側にずらしている。すべての主柱穴で直径 20～34 cm の柱痕跡を確認した。中央ピット P 8 とその両脇の P 4・9 は A 期から存続する。貼床は建物北東隅で確認した。また P 8 の周辺で 10 箇所の焼土面を確認した。

柱穴のほかに 90 基近くの浅いピットを検出した。ピットの規模は直径 10～50 cm、深さは 10～50 cm を測る。周壁溝との切り合いや貼床との先後関係から A B 両期のピットが存在することがわかるが、個別に時期を判別するまでには至っていない。ピットの分布には偏りがあり、P 1～P 7 間の周壁溝寄りと、P 3～P 5 間の周壁溝寄りに多い。また建物中央付近のピットは規模が小さく、壁際のピットほど規模が大きいことも特徴的である。

本遺構は焼失建物で、炭化した建築部材が床面と壁面に貼り付くような形で出土した。主な炭化材は、垂木、小舞、梁、茅材で、建物西側が比較的遺りが良い。垂木は板状材や棒状材であり、建物中央から放射状に配置される。

炭化材下では鉄矛（F 1）、板状鉄斧（F 2）、鋳造鉄斧（F 3）が出土した。F 1 の出土位置は P 7 掘方埋土の直上にあたり、鋒部を建物の外側、袋端部を建物中央に向か横倒しの状態で出土した。鋒部直下に幅 5 cm、深さ 6 cm の窪みが見られ、当初鋒部を床面に突き立てた状態であった F 1 が建物中央に向かって倒れた際に床面の土が掘り起こされたものと考えられる。垂木 C 84 及び梁 C 79 が覆い被さる。F 2 は基部を下に、刃部を上にして P 7 の掘方埋土と柱痕跡の境に斜めに突き立った状態で出土した。F 3 は F 1 の北東約 0.5 m の床面で出土した。梁 C 79 が覆い被さる。また、F 3 と床面の間で炭化材片 C 114 が出土し、材の方向から垂木 C 100 の一部と思われる。

遺物は、前述の鉄器のほかに、P 4・5・9 埋土から弥生土器高坏（10）、床面で弥生土器広口壺（1）、長頸壺（2）、脚付壺（3）、甕（5～9）、器台（11）、ガラス管玉（J 19）、ガラス小玉（J 20）、石鏃（S 8）、砥石（S 17）、鉄床石と思われる台石（S 29）、埋土及び床面で 18 点の管玉（J 1～J 18）などが出土した。18 点の管玉のうち 14 点（J 5～J 18）は F 1 の南西約 1 m の床面でまとめて出土した。また検出面近くの埋土から墨書土器の皿（12・13）が出土した。

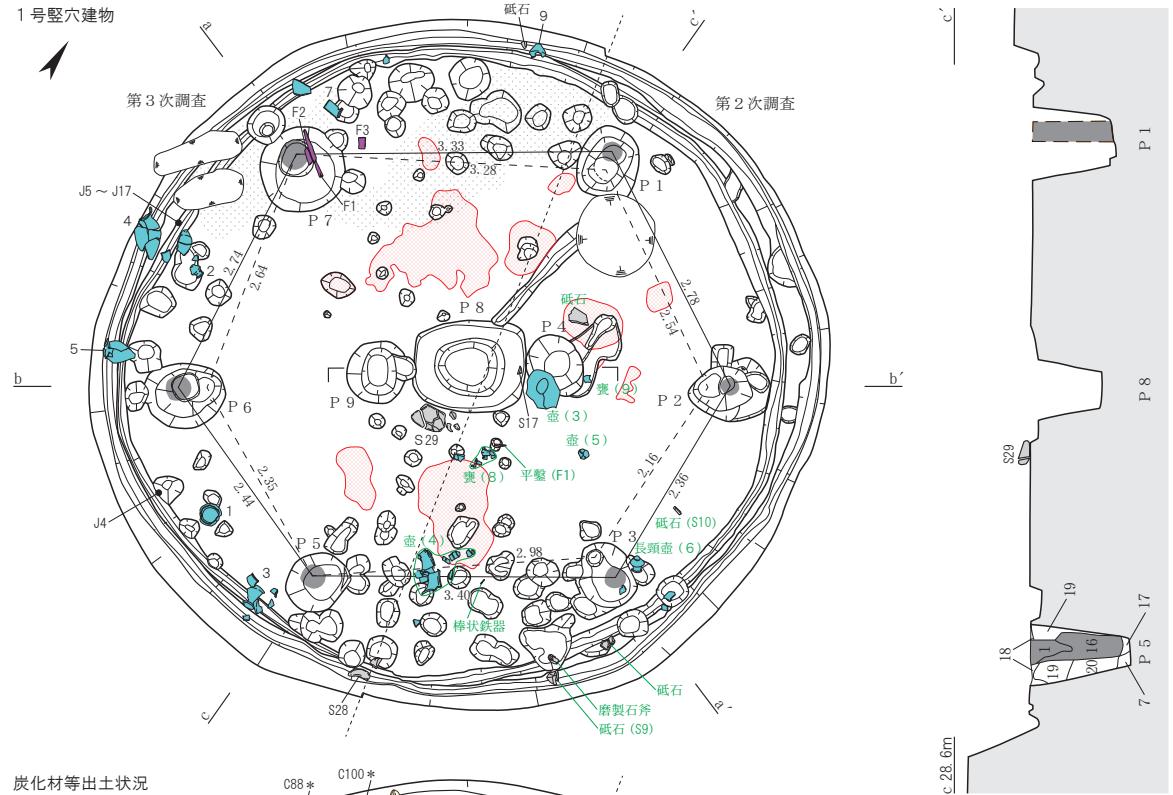
（片岡）

2号壇穴建物 1 号壇穴建物から南西へ約 47 m 離れた丘陵尾根上の標高 29.5 m 付近に位置する。検出した周壁溝から、A 期→B 期の建て替え（拡張）を確認した。

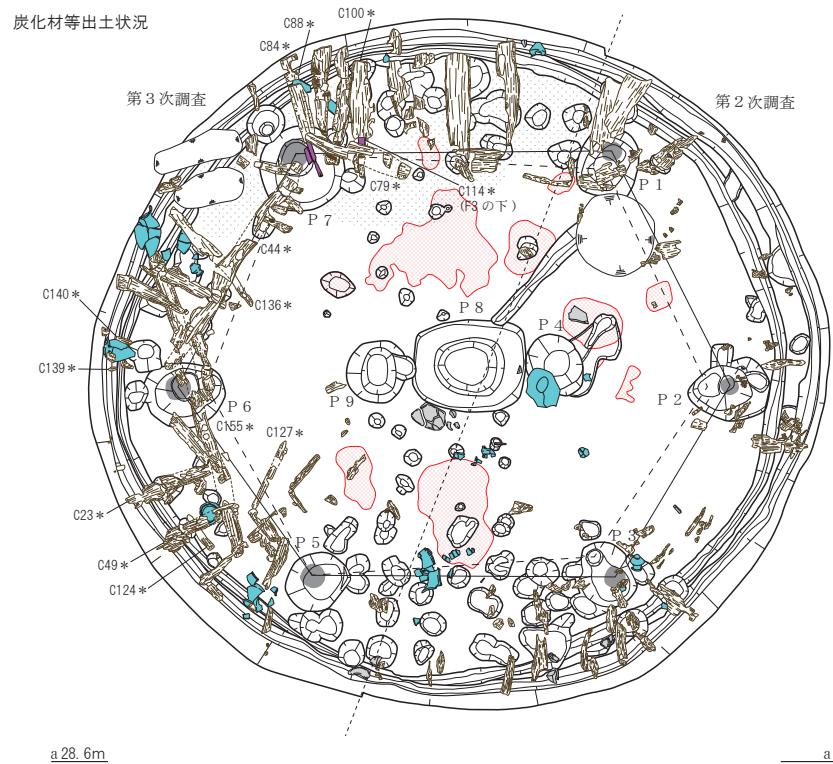
A 期の平面形は隅丸方形で、床面の規模は一辺 3.2 m、床面積は 9.8 m² と推定される。周壁溝は幅 14cm、検出面からの深さ 5 cm を測り、西・北・東側の一部が遺存する。A 期の柱穴や中央ピットは認められない。

B 期の平面形も隅丸方形で、床面は A 期より北東・南東・北西側に一回り大きく拡張され、その規模は長辺 4.4 m・短辺 4.0 m、床面積は 15.6 m²、検出面から床面までの深さは最大 36cm を測る。周壁溝は幅 21cm、検出面

1号堅穴建物



炭化材等出土状況

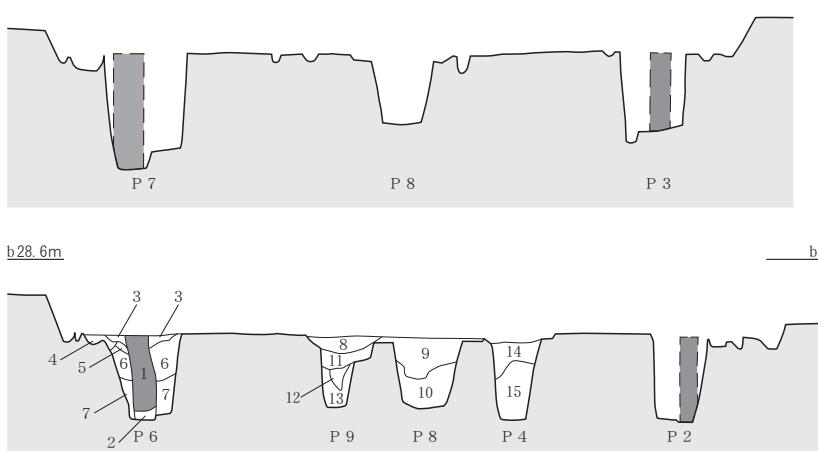


- 1 黒色土 しまりあり 粘性中
黄色粒子、炭化材が混じる
2 灰白色土 しまりあり（強） 粘性中
3 にぶい黄橙色土 しまりあり 粘性中
黄色粒子、黒褐色土が斑に混じる
4 黑褐色土 しまりあり 粘性中
ホーキブロックが多く混じる
5 にぶい黄色土 しまりあり 粘性中
ホーキブロックが僅かに混じる
6 にぶい黄橙色土 しまりあり 粘性中
ホーキブロックが多く混じる
7 にぶい黄橙色土 しまりあり 粘性中
ホーキブロックが混じる
8 黒色土 しまりあり 粘性中
炭粒、炭化材、ホーキ・ATブロックが混じる
9 8層よりホーキ・ATブロックの混じりが少ない
10 黒色土 しまりあり 粘性中
ホーキブロックが多く混じる
11 10層よりホーキブロックが多く混じる
12 にぶい黄橙色 しまりあり（弱） 粘性中
ホーキ・ATブロック、黒褐色土が混じる
13 12層より黒褐色土の混じりが少ない
14 黑褐色土 しまりあり 粘性なし
 $\phi 1.0 \sim 2.0\text{ cm}$ の地山ブロックが混じる
15 にぶい黄褐色土 しまりあり 粘性なし
 $\phi 2.0\text{ cm}$ 以下の黒色土ブロックが混じる
16 黒色土 しまりあり（弱） 粘性中
ホーキ・礫粘土ブロックが混じる
17 灰白色土 しまりあり（強） 粘性中
黒褐色土 しまりあり 粘性中
炭粒、ホーキ・ATブロックが混じる
19 にぶい黄橙色土 しまりあり（強） 粘性中
20 にぶい黄色土 しまりあり 粘性中
ホーキブロックが多く混じる

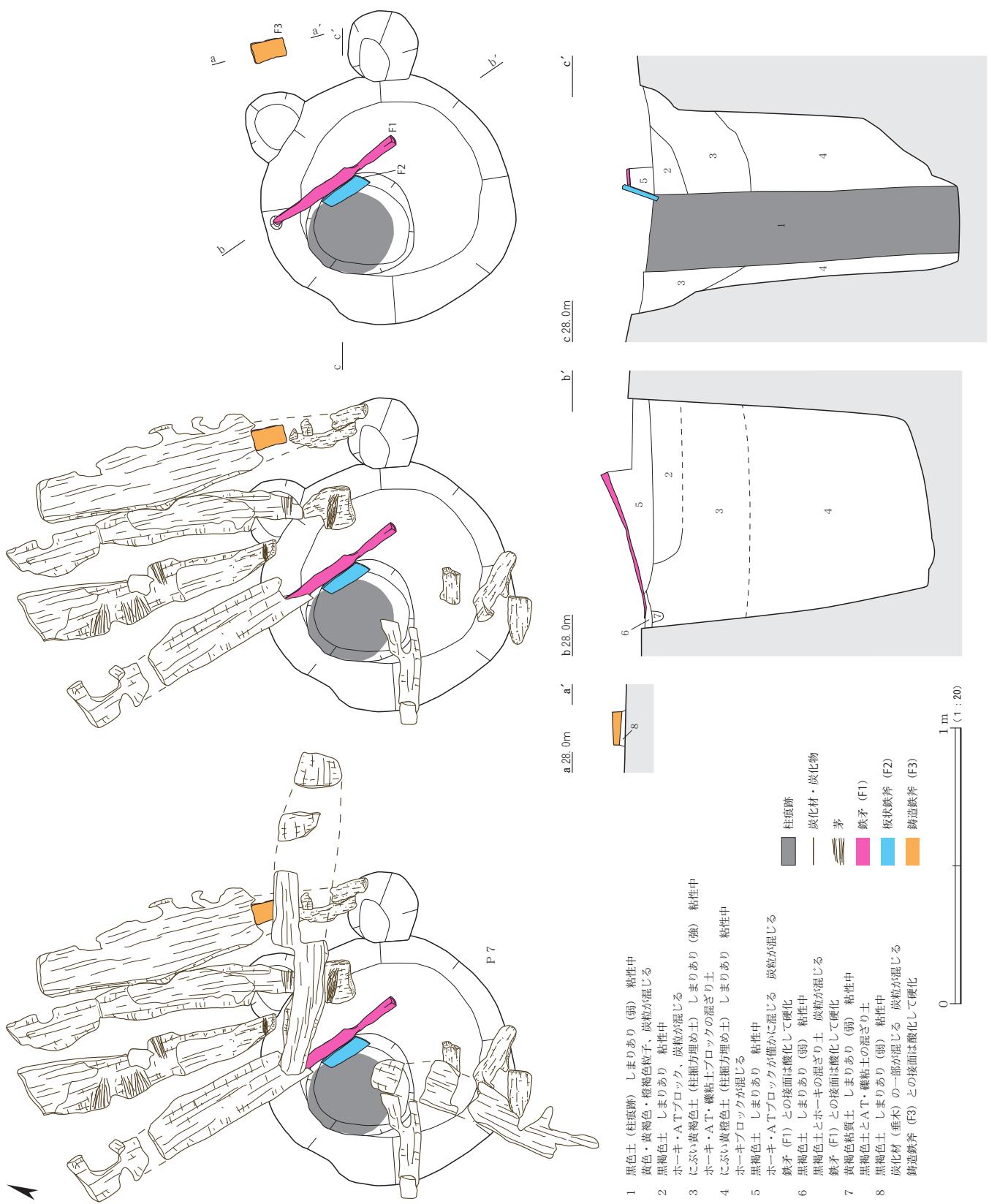
主柱 長径×短径-深さ		中央ビット	
P 1	77 × 68 - 84	P 8	上段 130 × 106 - 4 下段 75 × 65 - 72
P 2	88 × [61] - 92	P 4	69 × 59 - 84
P 3		P 9	68 × 67 - 76
P 5	72 × [58] - 82		[] 現存値
P 6	82 × 68 - 88		
P 7	93 × [89] - 120		

柱痕跡 贴床 燃土面
炭化材・炭化物 * 分析試料
土器 石 鉄器
緑文字 第2次調査の出土遺物及び遺物番号

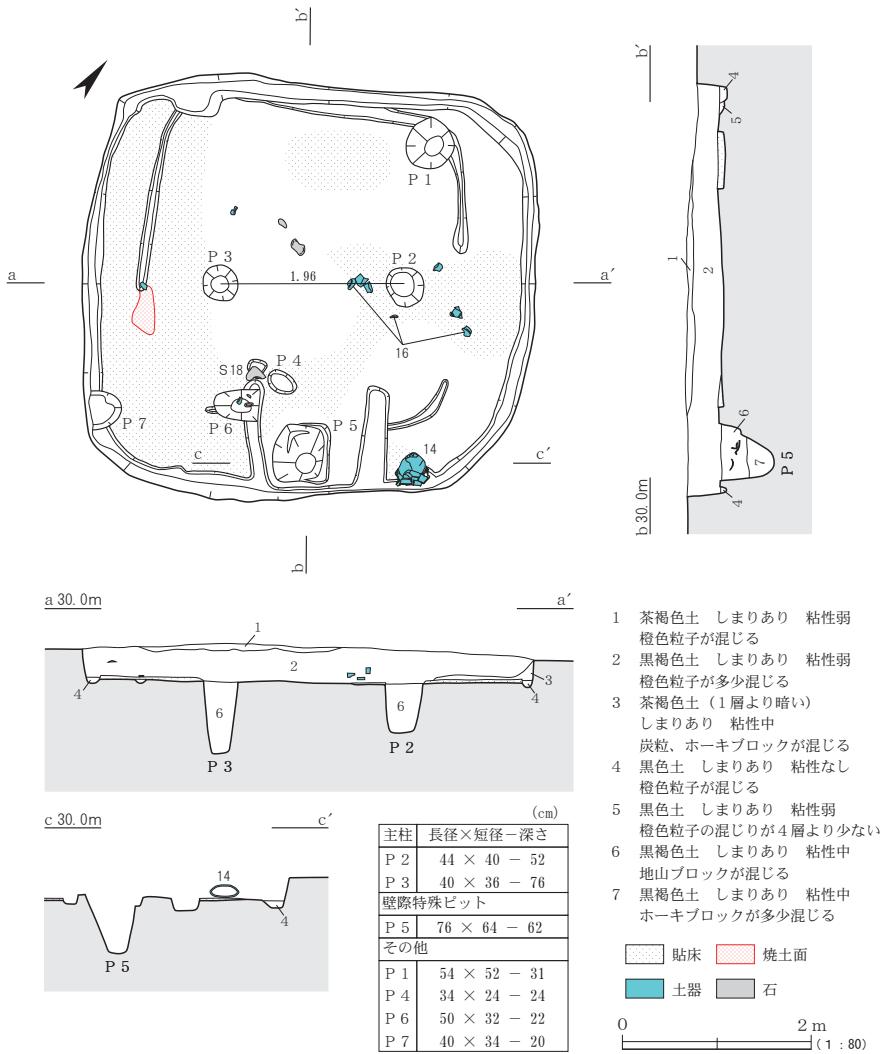
0 2 m (1 : 80)



第7図 1号堅穴建物遺構図



第8図 1号堅穴建物鉄器出土状況図



第9図 2号竖穴建物遺構図

からの深さ4cmを測り、全周する。B期の主柱穴はP2・P3の2基である。建物南東壁の中央には方形の壁際特殊ピットP5があり、その両脇に2条の間仕切り溝が伴う。間仕切り溝は周壁溝に直交して接続し、長さ1.0～1.1m、幅17～33cm、検出面からの深さ6～14cmを測る。P1・P3より南西側とP2・P4～P6の周りに貼床が施され、P3～P7間に1箇所の焼土面がみられる。

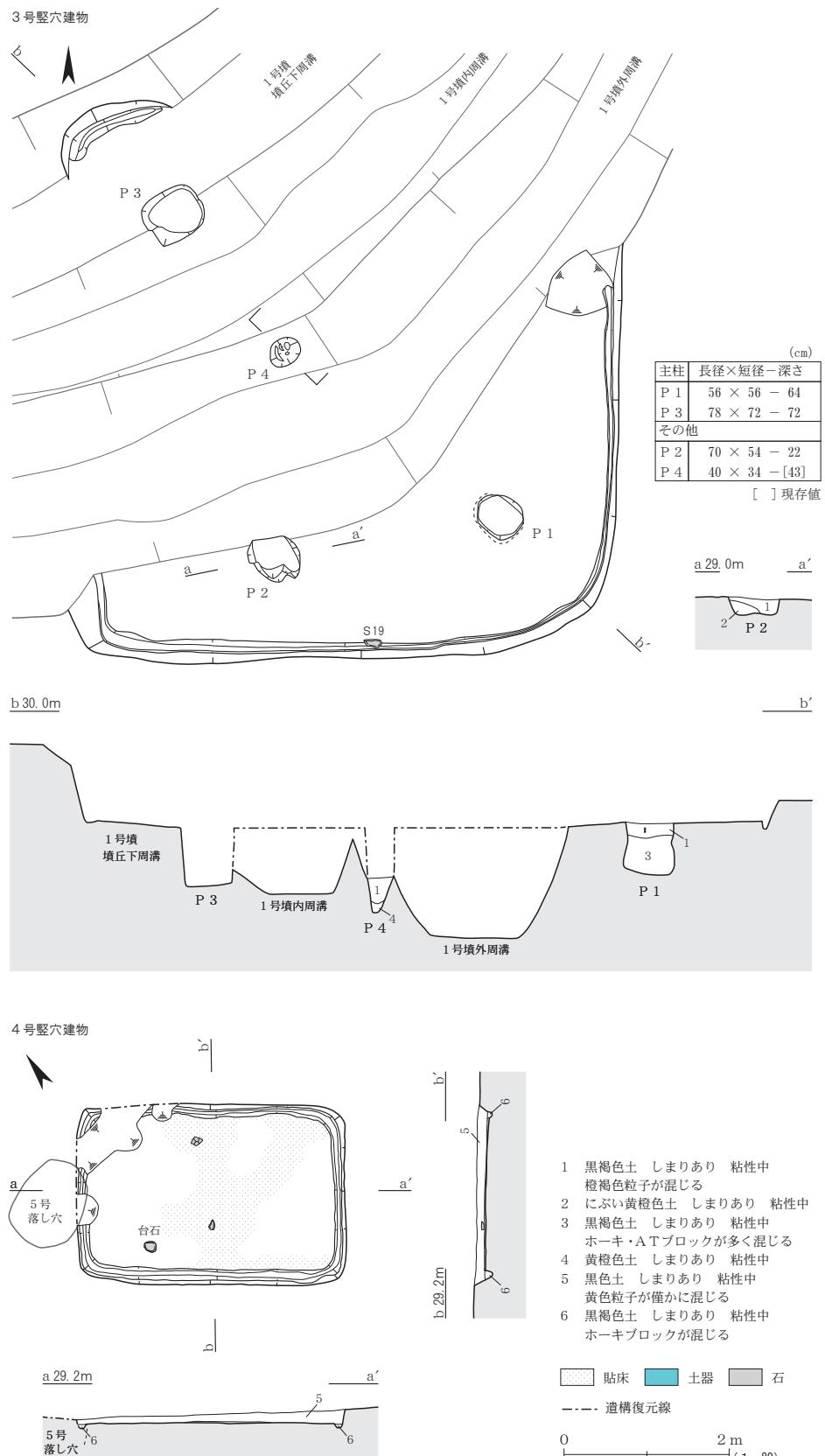
遺物は、床面で土師器甕(14)、高坏(15・16)、砥石(S18)、P5埋土から土師器甕、高坏、低脚坏(17)が出土した。このうち、14は完形に近い甕で、建物南東壁沿いで横倒しの状態だった。
(小田)

3号竖穴建物 1号竖穴建物から南西へ約33m離れた丘陵尾根上の標高29m付近に位置する。1号墳周溝・墳丘下周溝に床面の1/2以上を切られるが、平面形は隅丸方形と推定され、床面の規模は南北6.3m・東西6.1m、床面積は38.9m²に復元される。検出面から床面までの深さは最大30cmを測る。周壁溝は幅8cm、検出面からの深さ8cmを測り、1号墳に切られた範囲を除いて全周する。確認できた主柱穴はP1・P3の2基に留まるが、2基を床面の四隅を結ぶ対角線上で検出したことから、本来の主柱穴は4基と推定される。なお、中央ピットや貼床、焼土面は確認できなかった。

遺物は、床面で砥石(S19)、埋土から土師器小型丸底壺(18)、甕(19)が出土した。
(小田)

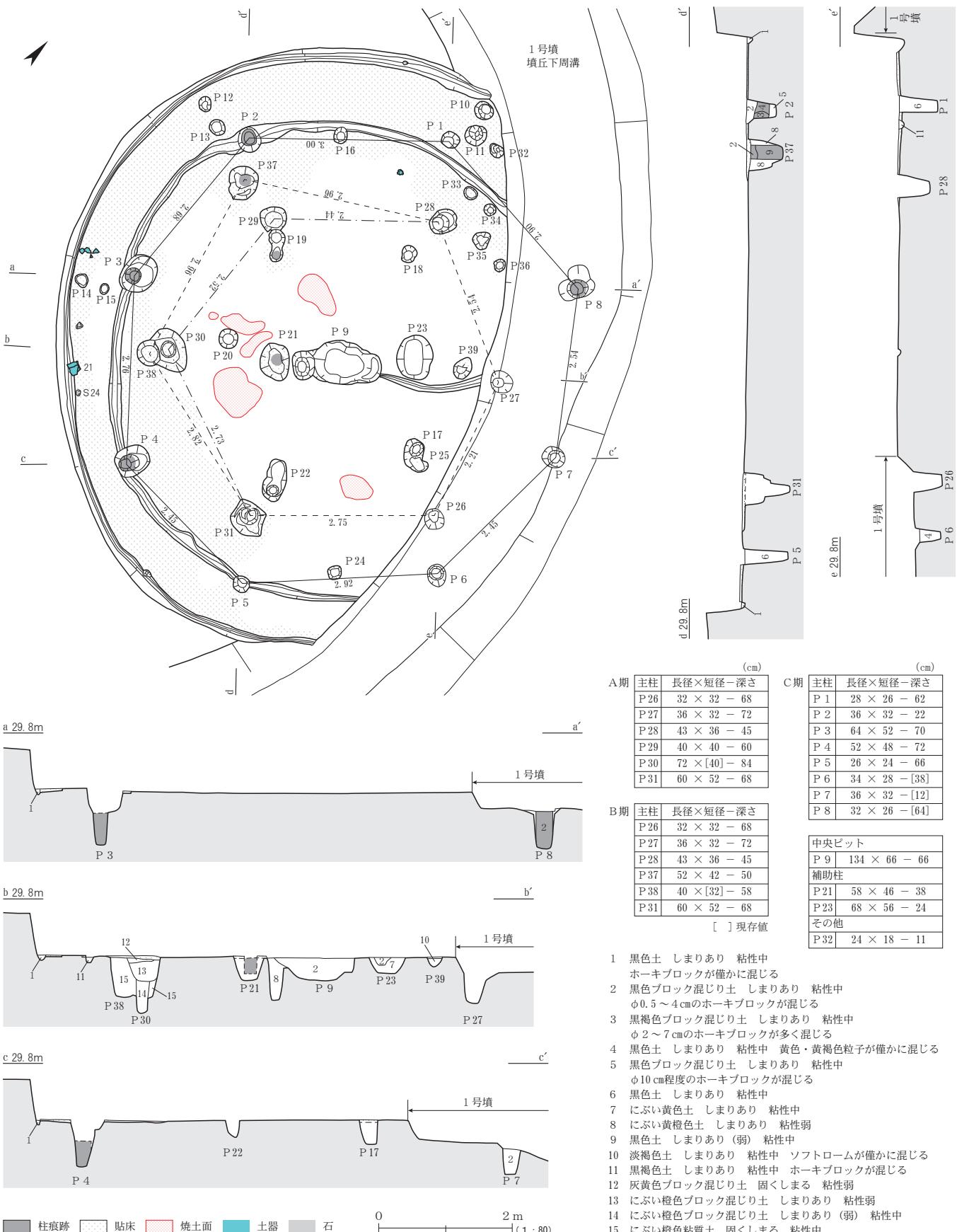
4号竖穴建物 1号竖穴建物から南西へ約13m離れた丘陵尾根上の標高29m付近に位置し、5号落し穴を切る。平面形は長方形で、床面の規模は長辺3.0m・短辺1.7m、床面積は5.3m²、検出面から床面までの深さは最大10cmを測る。周壁溝は幅13cm、検出面からの深さ7cmを測り、耕作機械による攪乱を受けた北側を除いて全周する。この建物に伴う柱穴や中央ピットは認められない。建物中央辺りと長辺側の壁際を中心に、床面に貼床が施される。

遺物は、床面で弥生土器片、台石、検出面で弥生土器甕(20)が出土した。
(小田)

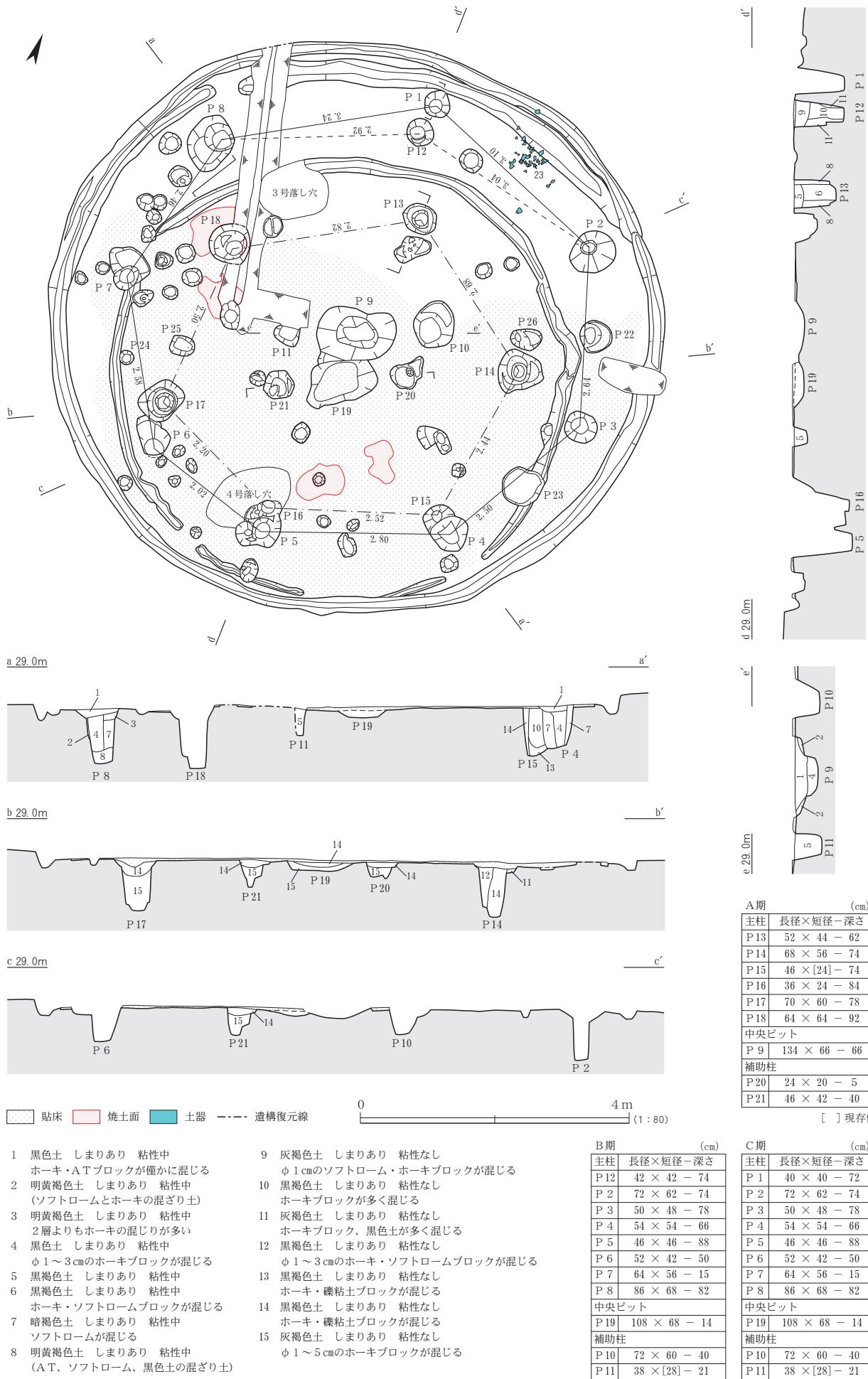


第10図 3号・4号堅穴建物遺構図

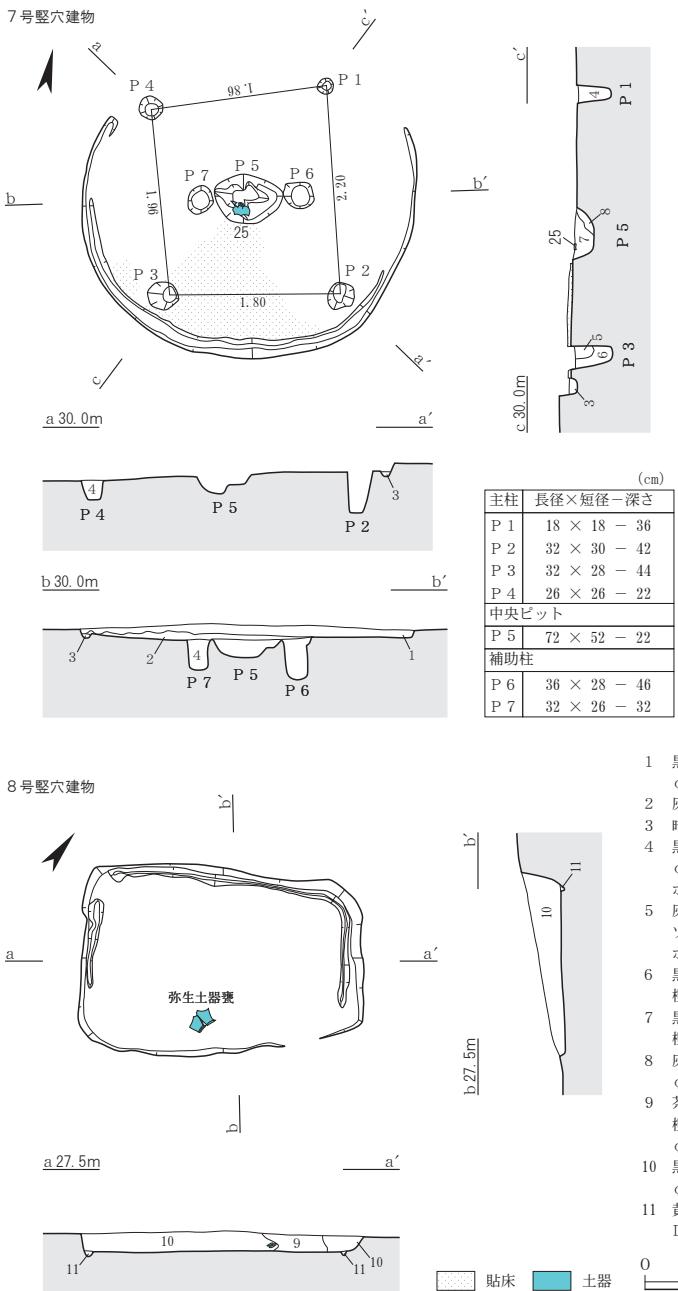
5号堅穴建物 4号堅穴建物から南西へ約7m離れた丘陵尾根上の標高29m付近に位置し、1号墳墳丘下周溝に東側約1/4を切られる。検出した主柱穴・周壁溝から、A期→B期→C期の建て替え（拡張）を確認した。A期の平面形は円形と推定され、床面の規模は南北6.8m・東西約5.8m、床面積は約36.6m²と復元される。周壁溝は幅15cm、検出面からの深さ4cmを測り、1号墳に切られた東側を除いて全周する。A期の主柱穴はP



第11図 5号竖穴建物遺構図



第12図 6号堅穴建物遺構図

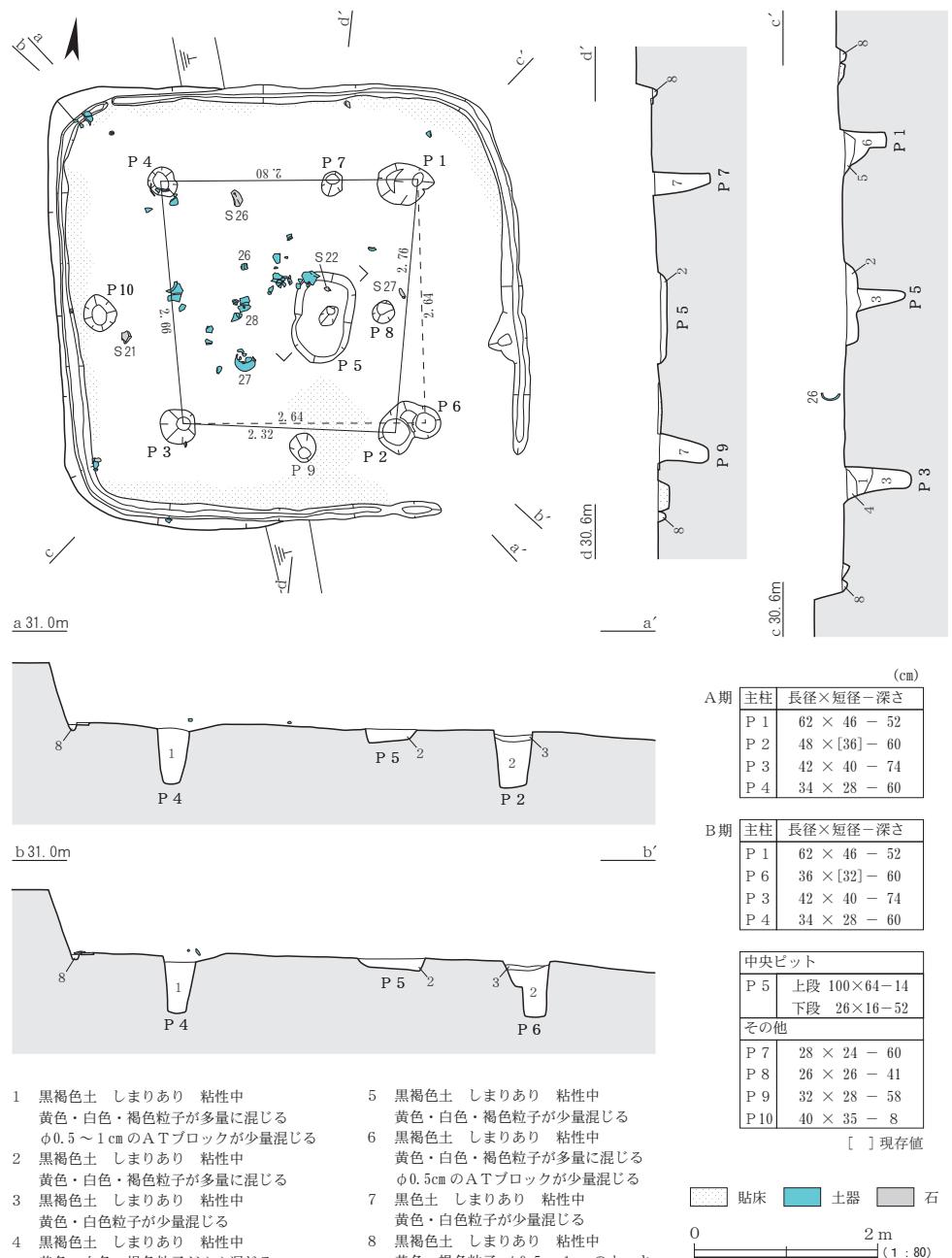


第13図 7号・8号堅穴建物遺構図

26～P 31の6基で、これらの中心に中央ピットP 9が設けられている。

B期には、A期の主柱穴P 29・P 30の建て替えが行われたのみであり、建物の平面形及び床面の規模、周壁溝、中央ピットはA期と同じである。B期の主柱穴はA期と共有するP 26～P 28・P 31と新たに作られたP 37・P 38の6基で、P 37では直径18cmの柱痕跡を確認した。

C期の平面形も円形と推定され、床面はA・B期よりも一回り大きく拡張され、その規模は南北8.6m・東西約6.7m、床面積は58.4m²に復元される。検出面から床面までの深さは最大62cmを測る。周壁溝は幅18cm、検出面からの深さ7cmを測り、1号墳に切られた東側を除いて全周する。C期の主柱穴はP 1～P 8の8基で、P 2～P 4・P 8では直径14～18cmの柱痕跡を確認した。中央ピットP 9の両隣にあるP 21・P 23は補助柱穴と考えられ、P 21では直径20cmの柱痕跡を確認した。そして、P 1～P 6間のP 17・P 18・P 39やP 2～P 5間のP 19・P 20・P 22のほか、P 1～P 2間のP 16、P 5～P 6間のP 24、P 1～P 8間のP 34は間柱穴と考えられ、P 19では直径14cmの柱痕跡を確認した。また、P 9から東へ向かって、幅14cm・検出面から



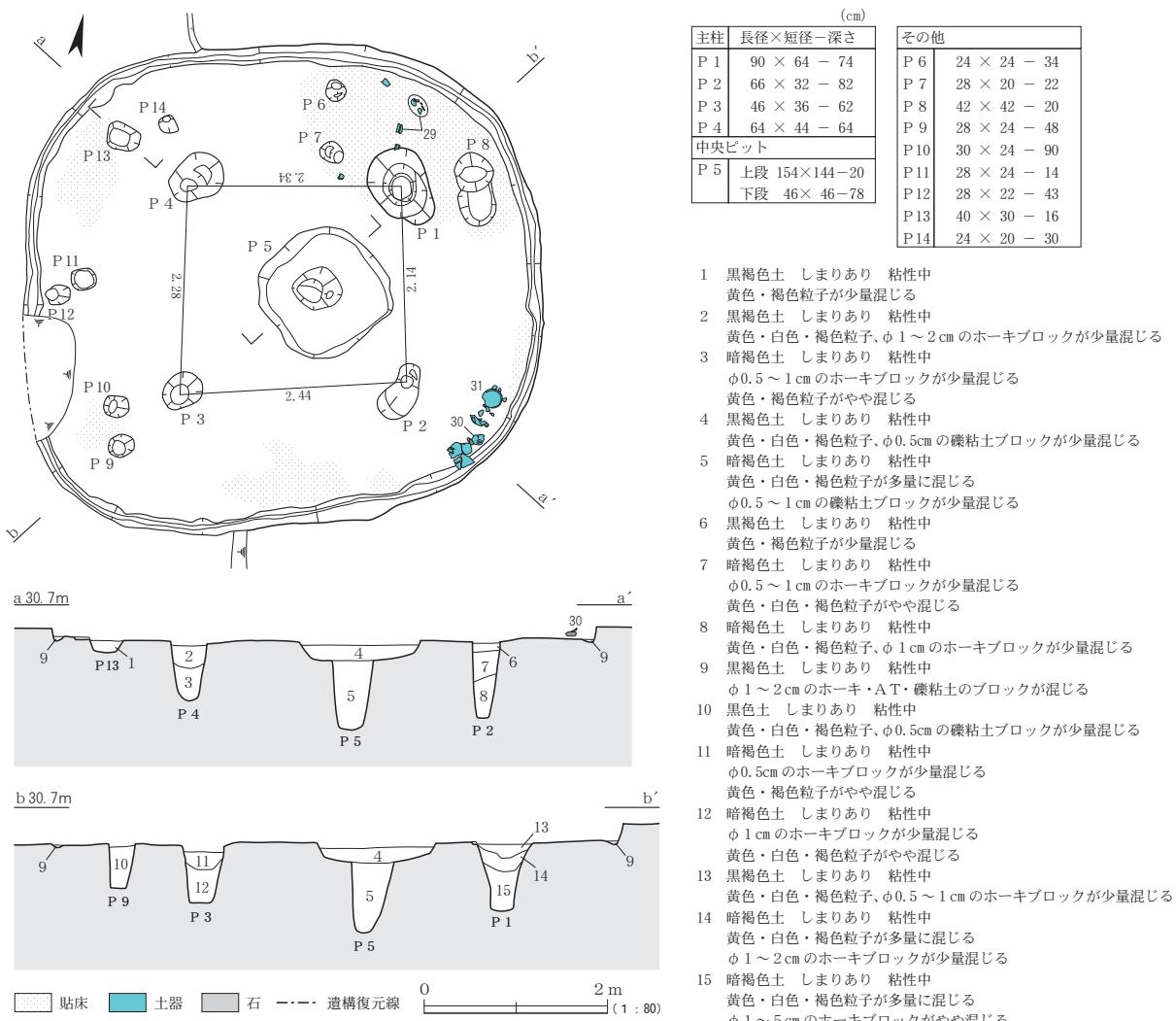
第14図 9号竖穴建物遺構図

の深さ4cmの間仕切り溝がやや湾曲しながら延びる。A期の主柱穴より外側の床面に貼床が施され、A期の主柱穴より内側の床面に大小6箇所の焼土面がみられる。

遺物は、建物床面で弥生土器甕(21)、敲石(S 24)、P 19底面で敲石(S 25)、P 32埋土から水晶剥片(J 24)、緑色凝灰岩剥片(J 25)、建物埋土から弥生土器高坏(22)、土製紡錘車(D 1)、磨製石斧(S 15)、敲石(S 23)が出土した。(小田)

6号竖穴建物 5号竖穴建物から北へ約8m離れた丘陵尾根上の標高28.5m付近に位置し、3号・4号落し穴を切る。検出した主柱穴・周壁溝から、A期→B期→C期の建て替え(拡張)を確認した。

A期の平面形は円形と推定され、床面の規模は南北6.4m・東西6.2m、床面積は32.4m²と復元される。周壁溝は幅20cm、検出面からの深さ7cmを測り、所々途切れながらもほぼ全周する。A期の主柱穴はP 13～P 18の6基で、中央ピットP 19の両隣にあるP 20・P 21は補助柱穴と考えられる。



第 15 図 10 号竖穴建物遺構図

B期の平面形も円形と推定され、床面はA期より東・北・西側に一回り大きく拡張され、その規模は東西 8.4 m・南北 7.6 m、床面積は 52.0 m²と復元される。周壁溝は幅 24cm、検出面からの深さ 8 cm を測り、ほぼ全周する。B期の主柱穴はP 2～P 8・P 12 の 6 基で、中央ピット P 9 の両隣にある P 10・P 11 は補助柱穴と考えられる。

C期の平面形は円形で、床面はB期より北・西側に拡張され、その規模は東西 8.6 m・南北 8.2 m、床面積は 54.9 m²、検出面から床面までの深さは最大 12cm を測る。周壁溝は幅 24cm、検出面からの深さ 8 cm を測り、全周する。C期の主柱穴はB期と共有するP 2～P 8 と新たに作られたP 1 の 6 基で、中央ピット P 9 と補助柱穴と考えられるP 10・P 11 はB期と同じである。主に建物の西半部に小ピットが多く認められる。建物の南半部を中心として床面に貼床が施され、A期の周壁溝より内側には4箇所の焼土面がみられる。

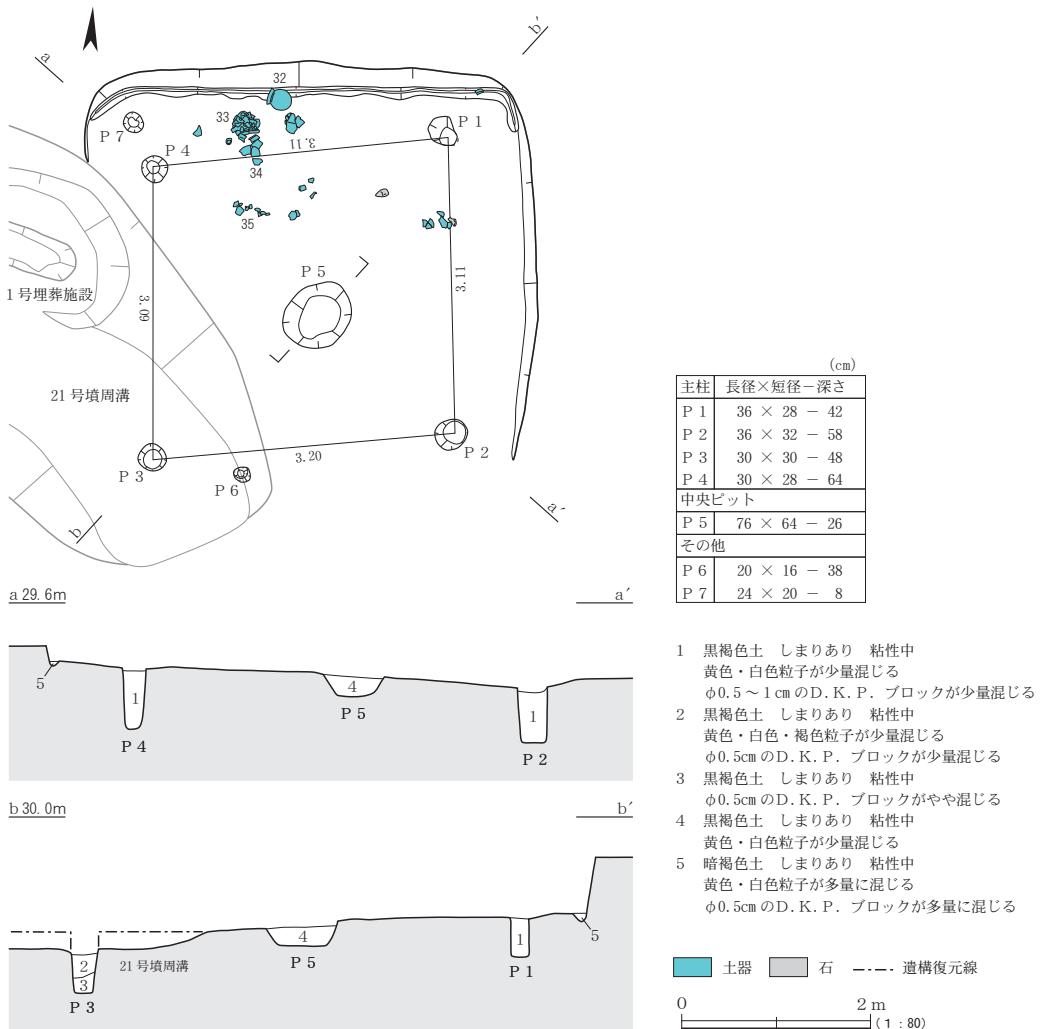
遺物は、床面で弥生土器甕 (23)、P 9 埋土から弥生土器甕 (24)、建物埋土から砥石 (S 20) が出土した。

(小田)

7号竖穴建物 2号竖穴建物から西へ約 9 m 離れた丘陵尾根上の標高 29.5 m 付近に位置する。建物の北端は削平されているが、平面形は円形と推定され、床面の規模は直径 3.4 m、床面積は 8.1 m²と復元される。検出面から床面までの深さは最大 10cm を測る。周壁溝は幅 15cm、検出面からの深さ 4 cm を測り、削平された北端を除いてほぼ全周する。主柱穴はP 1～P 4 の 4 基で、中央ピット P 5 の両隣にある P 6・P 7 は補助柱穴と考えられる。P 2・P 3・P 5 に囲まれる建物南側を中心に、床面には貼床が施される。

遺物は、P 5 埋土から土師器高坏 (25)、建物埋土から土製紡錘車 (D 2) が出土した。

(小田)



第16図 11号竪穴建物遺構図

8号竪穴建物 5号竪穴建物から南へ約22m離れた丘陵南斜面の標高26.5～27m付近に位置する。平面形は長方形で、床面の規模は長辺2.6m・短辺1.8m、床面積は4.2m²、検出面から床面までの深さは最大30cmを測る。周壁溝は幅8cm、検出面からの深さ3cmを測り、南東側（長辺側）を除いて全周する。この建物に伴う柱穴や中央ピットは認められない。

遺物は、床面で弥生土器甕が出土した。

（小田）

9号竪穴建物 調査区の中央部、丘陵尾根上の標高30m付近に位置し、南西隅を19号墳に切られる。東側約2/3は後世に削平されている。検出した主柱穴から、A期→B期の建て替えを確認した。A期・B期とも平面形は方形で、床面の規模は東西4.6m・南北4.4m、床面積は19.9m²、検出面から床面までの深さは最大53cmを測る。周壁溝は幅15cm、検出面からの深さ6cmを測り、ほぼ全周する。A期の主柱穴がP1～P4の4基、B期の主柱穴がP1・3・4・6の4基で、柱痕跡は確認されなかった。中央ピットP5は二段掘りである。P7・P9は、主柱穴と主柱穴の間に並ぶことから間柱穴と考えられる。P2～P9間や周壁溝周辺の床面に貼床が施される。

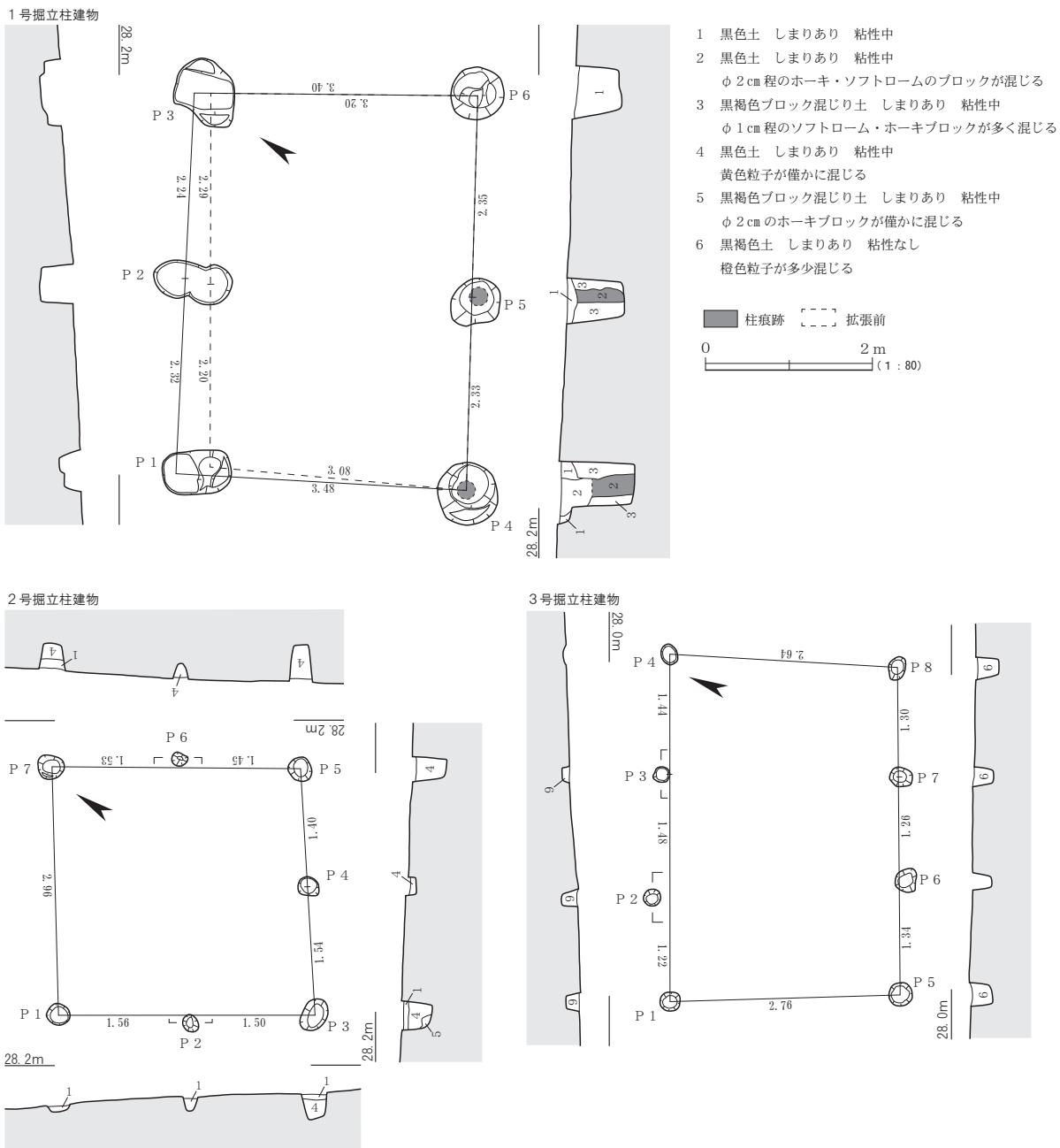
遺物は、床面で土師器壺（26）、甕（27）、高坏（28）、脚部、砥石（S21・S22）、敲石（S26・S27）が出土した。また、後世の削平の影響が少ない西側の埋土中層から土師器小片が多量に出土した。

（橋本）

10号竪穴建物 9号竪穴建物から西に15m離れた丘陵尾根上の標高30.5m付近に位置する。西側約1/3は後世に削平されている。平面形は隅丸方形で、床面の規模は東西4.7m・南北5.2m、床面積は22.6m²、検出面から床面までの深さは最大25cmを測る。周壁溝は幅14cm、検出面からの深さ9cmを測り、全周する。主柱穴

第2表 標穴建物一覧

遺構名	位置・立地	建て替え	床面	規模 (m)	床面積 (m ²)	検出面 ~床面 (cm)	周壁溝 幅(cm)	主柱穴 (基)	補助柱 穴(基)	中央 ビット (基)	壁土面 (箇所)	出土遺物			備考
												床面	埋土中	その他	
1号標穴建物 (A期)			円形	東西6.5×南北6.4	33.5	—	13	6	2	1	不明	弥生土器広口壺(1)、長頸壺(2)、脚付壺(3)、壺(4)、小型甕(5・7)、高杯(8)、管玉(9)、鍛造鉄斧(F3)、菅玉(10)、石錐(11)、J1～J4(12)、S10(13)、S13(14)、S17(15)、ガラス小玉(16)、石繖(17)、S8(18)、砾石(S19)	P4・埋土：弥生土器甕(6)、P4・5・9・埋土：弥生土器甕(7)、高杯(10)、P7直上：鉢矛(F1)、板状鍬斧(F2)	遺構の車半分を第2次調査で調査済み、焼失標穴建物。A期の住居内での位置を外側に拡張して建て替えた。	
1号標穴建物 (B期)	調査区の北部、丘陵尾根上の標高28m付近	1回	円形	東西6.9×南北6.7	37.9	65	13	6	2	1	10	堆土：弥生土器台(11)、9・S10(12)、S13(13)、理土上層 墓着土器皿(14)、S17(15)、S18(16)、砾石(17)	P4・埋土：弥生土器甕(18)、P4・5・9・埋土：弥生土器甕(19)	1号標穴建物に2条の間仕切り溝を伴う。	
2号標穴建物 (A期)	調査区の中央やや北東寄り、丘陵尾根上の標高29.5m付近	1回	隅丸方形	北東-南西3.2×北東-南東3.2	(9.8)	—	14	0	0	0	0	土師器甕(14)、萬杯(15)、砾石(18)	P5・埋土：土師器甕、萬杯、低脚杯(17)	駆逐特殊ピッコロトP.5は、兩脇に5号落しづ穴を切る。	
2号標穴建物 (B期)	調査区の東部、丘陵尾根上の標高29m付近	1回	隅丸方形	北東-南西4.4×北東-南東4.0	15.6	36	21	2	0	0	1	砾石(19)	土師器小型丸底壺(18)、甕(19)	1号標穴建物・填丘下周溝に切れられる。	
3号標穴建物	調査区の北部、丘陵尾根上の標高29m付近	なし	隅丸方形	南北[6.3]×東西[6.1]	(38.9)	30	8	[2] (4)	[0]	[0]	[0]	砾石(19)	検出面：弥生土器片、合石	5号落しづ穴を切る。	
4号標穴建物	調査区の北部、丘陵尾根上の標高29m付近	なし	長方形	北西-南東3.0×東西1.7	5.3	10	13	0	0	0	0	砾石(20)	検出面：弥生土器甕(20)		
5号標穴建物 (A期)			円形	南北6.8×東西[5.8]	(36.6)	—	15	6	2	1	0				
5号標穴建物 (B期)	調査区の北部、丘陵尾根上の標高29m付近	2回	円形	南北6.8×東西[5.8]	(36.6)	—	15	6	2	1	0				1号標穴下周溝に切れられる。
5号標穴建物 (C期)			円形	南北8.6×東西[6.7]	(58.4)	62	18	8	2	1	6	砾石(21)、破石(S24)	P19底面：鐵石(S25)、P22埋土：土製妨睡車(D1)、磨製石斧(S15)、鐵石(S23)		
6号標穴建物 (A期)	調査区の北部、丘陵尾根上の標高28.5m付近	2回	円形	東西6.2×南北6.4	32.4	—	20	6	2	1	0				3号・4号落しづ穴を切る。
6号標穴建物 (B期)	調査区の東部、丘陵尾根上の標高28.5m付近	1回	円形	東西8.4×南北7.6	52.0	—	24	6	2	1	4				
6号標穴建物 (C期)	調査区の中央、丘陵尾根上の標高28.5m付近	なし	円形	東西8.6×南北8.2	54.9	12	24	6	2	1	4	弥生土器甕(23)	砾石(S20)	P9・埋土：弥生土器甕(24)	
7号標穴建物	調査区の東部、丘陵尾根上の標高26.5m付近	なし	長方形	東西3.4×南北[2.9]	(8.1)	10	15	4	2	1	0	弥生土器甕	土製妨睡車(D2)	P5・埋土：土師器高杯(25)	
8号標穴建物	調査区の東部、丘陵尾根上の標高26.5m付近	なし	方形	東西4.6×南北4.4	19.9	—	15	4	0	1	0				
9号標穴建物 (A期)	調査区の中央部、丘陵尾根上の標高30m付近	1回	方形	東西4.6×南北4.4	19.9	53	15	4	0	1	0	土師器蓋(26)、甕(27)、高杯(28)、鐵石(S21)、S22(29)、鐵石(S26・S27)	土師器小片	19号標周溝に切れられる。	
9号標穴建物 (B期)			隅丸方形	東西4.7×南北5.2	22.6	25	14	4	0	1	0	土師器甕(30)、土師器小片			
10号標穴建物	調査区の西部、丘陵尾根上の標高30.5m付近	なし	円形	東西4.6×南北4.4	17.7	60	10	4	0	1	0	土師器甕(32・33)、高杯(34)、低脚杯(35)	土師器小片	21号標周溝に切れられる。	
11号標穴建物	調査区の南部、丘陵尾根上の標高29.5m付近	なし	方形	東西4.4×南北(4.5)	(17.7)										



第17図 1号～3号掘立柱建物遺構図

はP1～P4の4基で、柱痕跡は確認されなかった。中央ピットP5は二段掘りである。P1周辺など一部の床面に貼床が施される。

遺物は、北東隅の床面で土師器甕(29)、南東隅の床面で土師器甕、高坏(30)、鼓形器台(31)がまとまって出土した。
(橋本)

11号竪穴建物 10号竪穴建物から南に6m離れた丘陵南斜面の標高29～29.5m付近に位置する。建物西壁は21号墳に切られ、斜面の低い側にあたる南壁は削平されている。平面形は方形で、推定した床面の規模は東西4.4m・南北4.5m、床面積は17.7m²に復元され、検出面から床面までの深さは最大60cmを測る。周壁溝は幅10cm、検出面からの深さ5cmを測り、北壁付近のみで確認した。主柱穴はP1～P4の4基で、柱痕跡は確認されなかった。P5は最大径36cmの中央ピットである。

遺物は、北側の床面で土師器甕(32・33)、高坏(34)、低脚坏(35)が出土した。

(橋本)

(3) 掘立柱建物

丘陵尾根上と北肩部で8棟を確認した。その詳細は第3表に一括し、以下、各遺構について述べる。

1号掘立柱建物 調査区の北東部、丘陵北肩部の標高27.5～28mに位置する。一回建て替えが行われており、建物北側を北に拡張している。拡張前は桁行2間（約4.7m）×梁行1間（約3.2m）、建物面積は15.0m²、長方形度は1.47。拡張後は桁行2間（約4.7m）×梁行1間（約3.5m）、建物面積は16.45m²、長方形度は1.34。桁行の方向はN-55°-Eである。柱穴の形状は円形及び橢円形を呈し、直径64～92cmである。遺物はP4埋土上層から土師器甕（36）が出土。その他、須恵器片が出土した。なお、2号掘立柱建物と重なり合っているが、先後関係は不明。

2号掘立柱建物 調査区の北東部、丘陵北肩部の標高27.5～28mに位置する。桁行2間（約3.0m）×梁行2間（約3.1m）、建物面積は8.7m²、長方形度は1.03。桁行の方向はN-55°-Eである。柱穴の形状は円形を呈し、直径16～40cmである。遺物は土師器片が出土した。

3号掘立柱建物 調査区の北東部、丘陵北肩部の標高27.5～28mに位置する。桁行3間（約4.2m）×梁行1間（約2.8m）、建物面積は11.3m²、長方形度は1.50。桁行の方向はN-66°-Eである。柱穴の形状は円形を呈し、直径12～28cmである。遺物は出土しなかった。4号掘立柱建物と重なり合っているが、先後関係は不明。

4号掘立柱建物 調査区の北東部、丘陵北肩部の標高27～27.5mに位置する。桁行3間（約5.9m）×梁行1間（約4.3m）、建物面積は25.3m²、長方形度は1.37。桁行の方向はN-63°-Eである。柱穴の形状は円形を呈し、直径32～64cmである。遺物は土師器甕の小片と須恵器片が出土した。

5号掘立柱建物 調査区の北部、7号竪穴建物から北東へ約2m離れた丘陵尾根上の標高29～29.5mに位置する。桁行3間（約4.5m）×梁行3間（約5.0m）、建物面積は20.3m²、長方形度は1.00。桁行の方向はN-3°-Wである。柱穴の形状は円形を呈し、直径24～50cmである。遺物は土師器甕の小片が出土した。

6号掘立柱建物 調査区の北部、丘陵北肩部の標高28mに位置する。桁行2間（約2.7m）×梁行1間（約2.9m）、建物面積は7.8m²、長方形度は1.07。桁行の方向はN-110°-Wである。柱穴の形状は円形を呈し、直径12～16cmである。P2において直径8cmの円形の柱痕跡を確認した。遺物は弥生土器片が出土した。

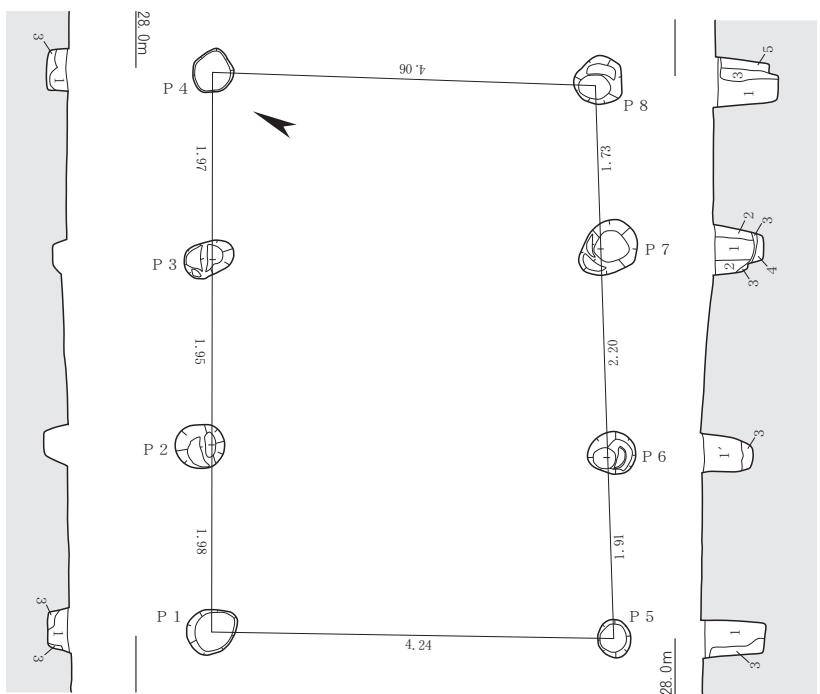
7号掘立柱建物 調査区中央部、丘陵尾根上の標高29.5～30mに位置する。桁行2間（約3.7m）×梁行1間（約3.7m）、建物面積は13.7m²、長方形度は1.00。桁行の方向はN-70°-Eである。柱穴の形状は円形を呈し、直径10～20cmである。遺物は出土しなかった。

8号掘立柱建物 調査区中央部、丘陵尾根上の標高30～30.5mに位置する。桁行2間（約3.7m）×梁行1間（約3.7m）、建物面積は13.7m²、長方形度は1.00。桁行の方向はN-69°-Eである。柱穴の形状は円形を呈し、直径24～36cmである。P2が10号落し穴を切る。遺物は土師器片が出土した。 (西浦)

第3表 掘立柱建物一覧

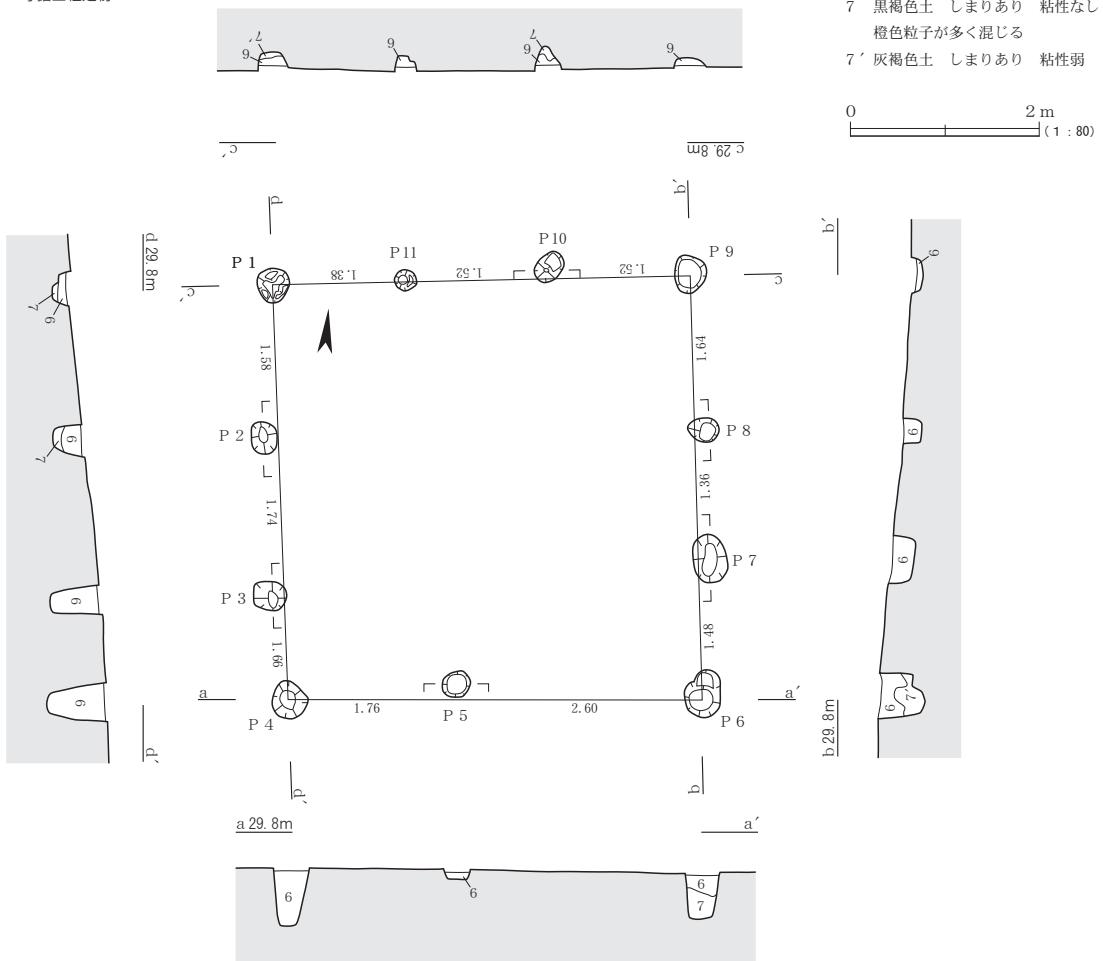
遺構名	位置・立地	主軸	規模		建物面積 (m ²)	長方形度	柱穴		柱痕跡 直径(cm)	出土遺物	備考
			桁行	梁行			平面形	直径(cm)			
1号掘立柱建物	調査区の北東部、丘陵北肩部の標高27.5～28m	N-55°-E	2間 (4.7m)	1間 (3.2m)	15.0	1.47	円形、 橢円形	64～92	なし	P4埋土： 土師器甕 (36)	北側へ拡張して建 て替え。2号掘立 柱建物と重なり合 う。
2号掘立柱建物	調査区の北東部、丘陵北肩部の標高27.5～28m	N-55°-E	2間 (3.0m)	2間 (3.1m)	8.7	1.03	円形	16～40	なし	埋土：土師 器片	1号掘立柱建物と 重なり合う。
3号掘立柱建物	調査区の北東部、丘陵北肩部の標高27.5～28m	N-66°-E	3間 (4.2m)	1間 (2.8m)	11.3	1.50	円形	12～28	なし	なし	4号掘立柱建物と 重なり合う。
4号掘立柱建物	調査区の北東部、丘陵北肩部の標高27～27.5m	N-63°-E	3間 (5.9m)	1間 (4.3m)	25.3	1.37	円形	32～64	なし	埋土：土師 器甕、須恵 器片	3号掘立柱建物と 重なり合う。
5号掘立柱建物	調査区の北部、丘陵尾根上の標高29～29.5m	N-3°-W	3間 (4.5m)	3間 (5.0m)	20.3	1.00	円形	24～50	なし	埋土：土師 器甕	
6号掘立柱建物	調査区の北部、丘陵北肩部の標高28m	N-110°-W	2間 (2.7m)	1間 (2.9m)	7.8	1.07	円形	12～16	8	埋土：弥生 土器片	
7号掘立柱建物	調査区中央部、丘陵尾根上の標高29.5～30m	N-70°-E	2間 (3.7m)	1間 (3.7m)	13.7	1.00	円形	10～20	なし	なし	
8号掘立柱建物	調査区中央部、丘陵尾根上の標高30～30.5m	N-69°-E	2間 (3.7m)	1間 (3.7m)	13.7	1.00	円形	24～36	なし	土師器片	P2が10号落し穴 を切る。

4号掘立柱建物



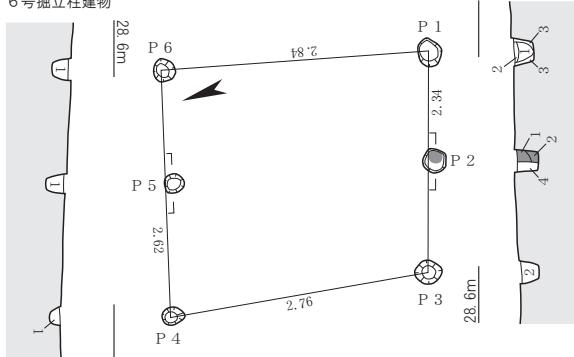
- 1 黒褐色土 しまりあり 粘性なし
橙色粒子、 ϕ 1 cm 以下のホーキブロックが混じる
- 1' 黒褐色土 しまりあり 粘性なし
橙色粒子、 ϕ 1 ~ 3 cm のホーキブロックが混じる
- 2 茶褐色土 しまりあり 粘性なし
 ϕ 1 ~ 5 cm のホーキブロックが混じる
- 3 暗褐色土 しまりあり 粘性なし
 ϕ 1 cm のホーキブロックが多く混じる
- 4 黒色土 しまり弱 粘性なし
- 5 茶褐色土 しまり弱 粘性なし
- 6 黒褐色土 しまりあり 粘性なし
橙色粒子が混じる
- 7 黒褐色土 しまりあり 粘性なし
橙色粒子が多く混じる
- 7' 灰褐色土 しまりあり 粘性弱

5号掘立柱建物

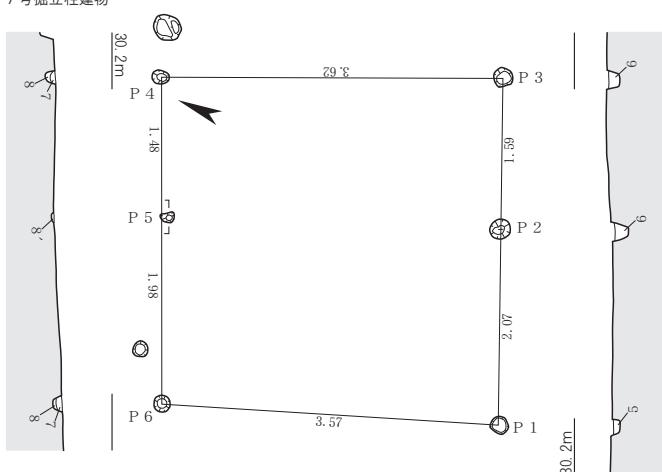


第18図 4号・5号掘立柱建物遺構図

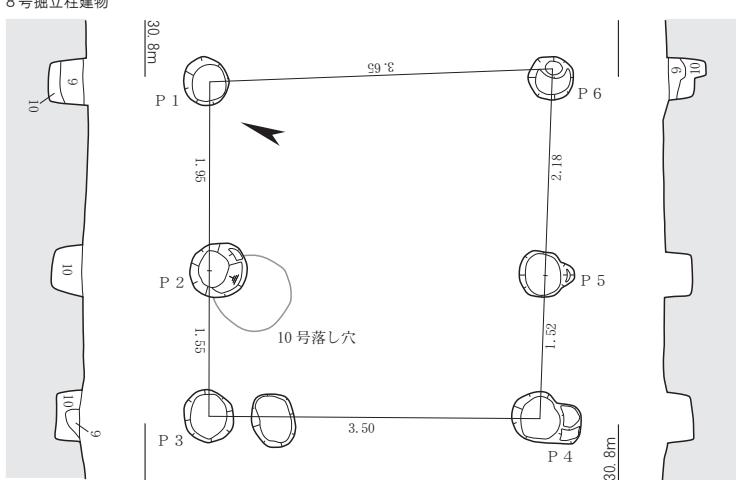
6号掘立柱建物



7号掘立柱建物



8号掘立柱建物



- 1 黒色土 しまりあり 粘性中
炭粒、黄色・白色粒子が少量混じる
- 2 黒色土 しまりあり 粘性中
黄色粒子、 $\phi 1 \sim 3\text{cm}$ のホーキブロックが混じる
- 3 黒褐色土 しまりあり 粘性中
黄色粒子が混じる
- 4 暗褐色土と黒色土の混じり土 しまりあり 粘性中
黄色粒子が多く混じる
白色粒、 $\phi 0.5\text{cm}$ のホーキブロックが混じる
- 5 黒色土 しまりあり 粘性中
黄色・白色・褐色粒子、 $\phi 1\text{cm}$ のホーキブロックが少量混じる
- 6 黒色土 しまりあり 粘性中
黄色・褐色粒子が少量混じる
- 7 黒色土 しまりあり 粘性中
黄色・白色粒子が少量混じる
- 8 黑褐色土 しまりあり 粘性中
黄色・褐色粒子、 $\phi 1\text{cm}$ の礫粘土ブロックが少量混じる
- 8' 黑褐色土 しまりあり 粘性中
黄色・褐色粒子が少量混じる
- 9 黑褐色土 しまりあり 粘性中
 $\phi 1\text{cm}$ のホーキブロックが混じる
- 10 暗褐色土 しまりあり 粘性中
 $\phi 3 \sim 5\text{cm}$ のホーキ・AT・礫粘土ブロックが混じる

柱痕跡

0 2 m (1 : 80)

第19図 6号～8号掘立柱建物遺構図

(4) 柵列

1号柵列 調査区の中央部、7号竪穴建物の南西側、丘陵尾根上の標高29.5m付近に位置する東西に延びる柵列。主軸はN-69°-Eで、3間(5.06m)確認した。柱穴の形状は円形を呈し、直径は0.24~0.28mである。

遺物は出土しなかった。
(西浦)

(5) 貯蔵穴

1号貯蔵穴 調査区の北東部、標高26.5~27m付近に位置する。平面形は検出面・床面とも隅丸長方形を呈する。断面形は開口部が狭く、底部が広い袋状である。規模は検出面では長軸1.68m・短軸0.89m、底面では長軸1.84m・短軸1.16mを測る。検出面から底面までの深さは1.2mを測り、床面積は2.13m²である。

遺物は比較的多く、床面で弥生土器甕、埋土下層からは弥生土器壺(37・38)、台付壺(39・40)、石錐(S14)が出土した。
(西浦)

(6) 土壙

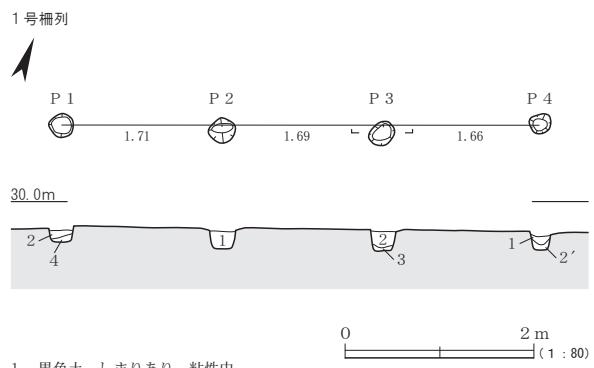
丘陵尾根上~南斜面で10基を確認した。その詳細は第4表に一括する。ここでは特徴的な土壙2基について述べる。

1号土壙 調査区の東部、1号墳の東側、丘陵尾根上の標高29m付近に位置する。南東隅がピットと切り合う。主軸はN-16°-E。平面形は隅丸長方形。規模は長軸1.84m・短軸0.84m、検出面からの深さ0.68mを測る。

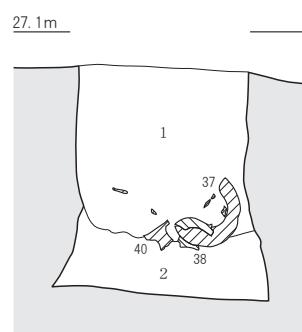
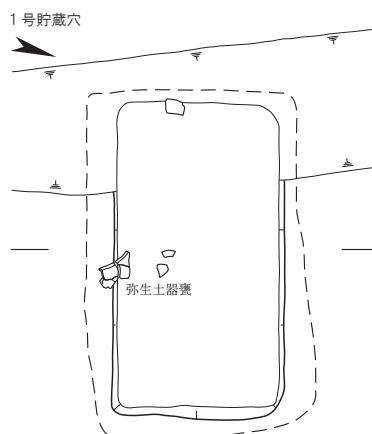
遺物は、埋土中から弥生土器壺(41・44)、甕(45)、無頸壺(42)、脚付壺(43)、小型甕(46・47)、高壙(48)が出土した。

2号土壙 調査区の南東部、丘陵南斜面の標高27~27.5mに位置し、2号墳周溝に切られる。主軸はN-43°-W。平面形は長方形。断面形は逆台形で、規模は長軸2.2m・短軸1.88m、検出面からの深さ0.52mを測る。

遺物は、埋土中から弥生土器高壙(49)が出土した。
(西浦)

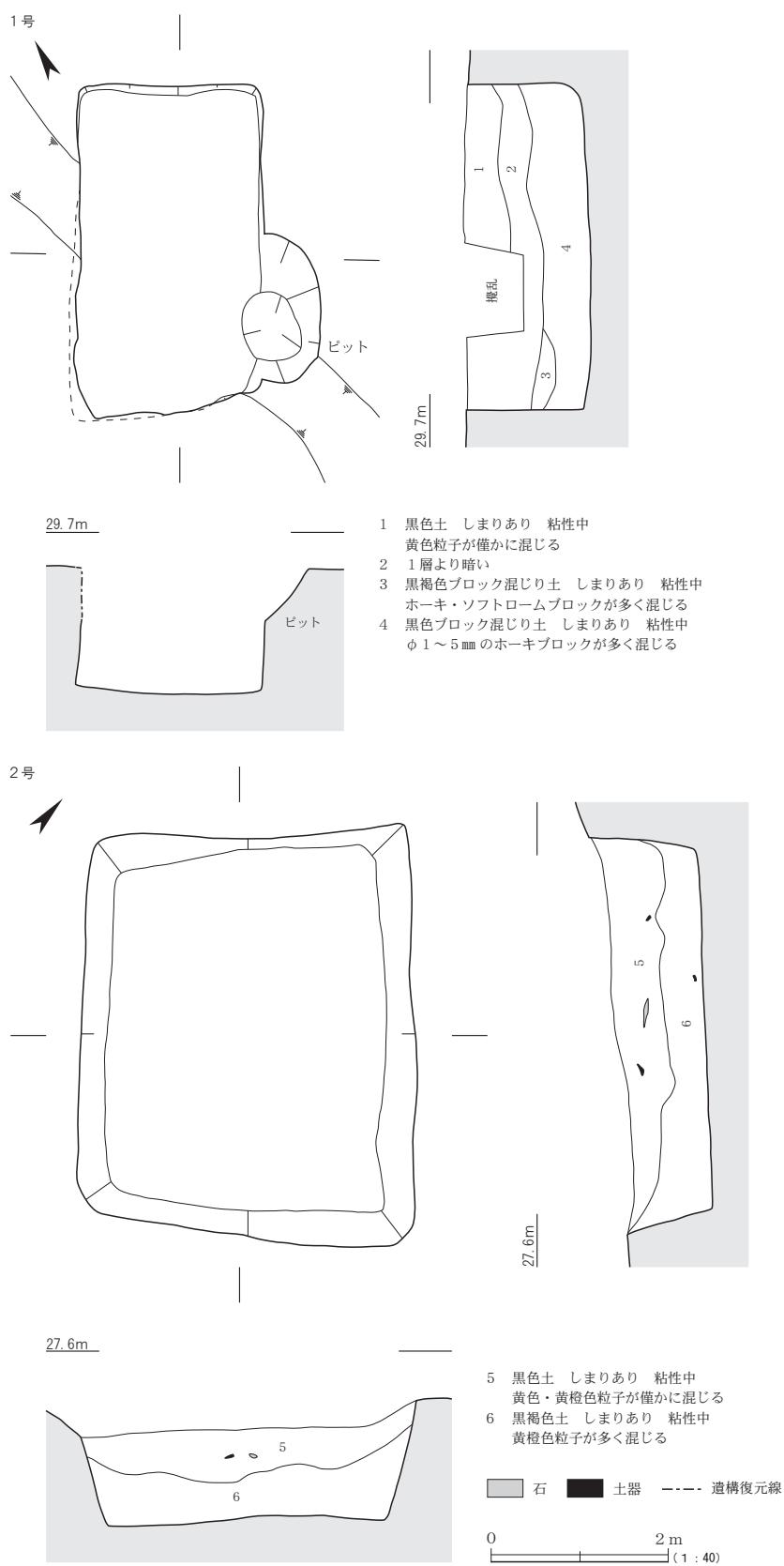


- 1 黒色土 しまりあり 粘性中
- 2 黒色土 しまりあり 粘性中
黄色粒子、φ0.5~1cmのホーキブロックが少量混じる
- 2' 黒色土 しまりあり 粘性中
黄色粒子、φ1~3cmのホーキブロックが混じる
- 3 黒褐色土 しまりあり 粘性中
黄色粒子、φ0.5~1cmのホーキブロックが混じる
- 4 暗褐色土 しまりあり 粘性中
黄色粒子、φ0.5cmのホーキブロックが混じる

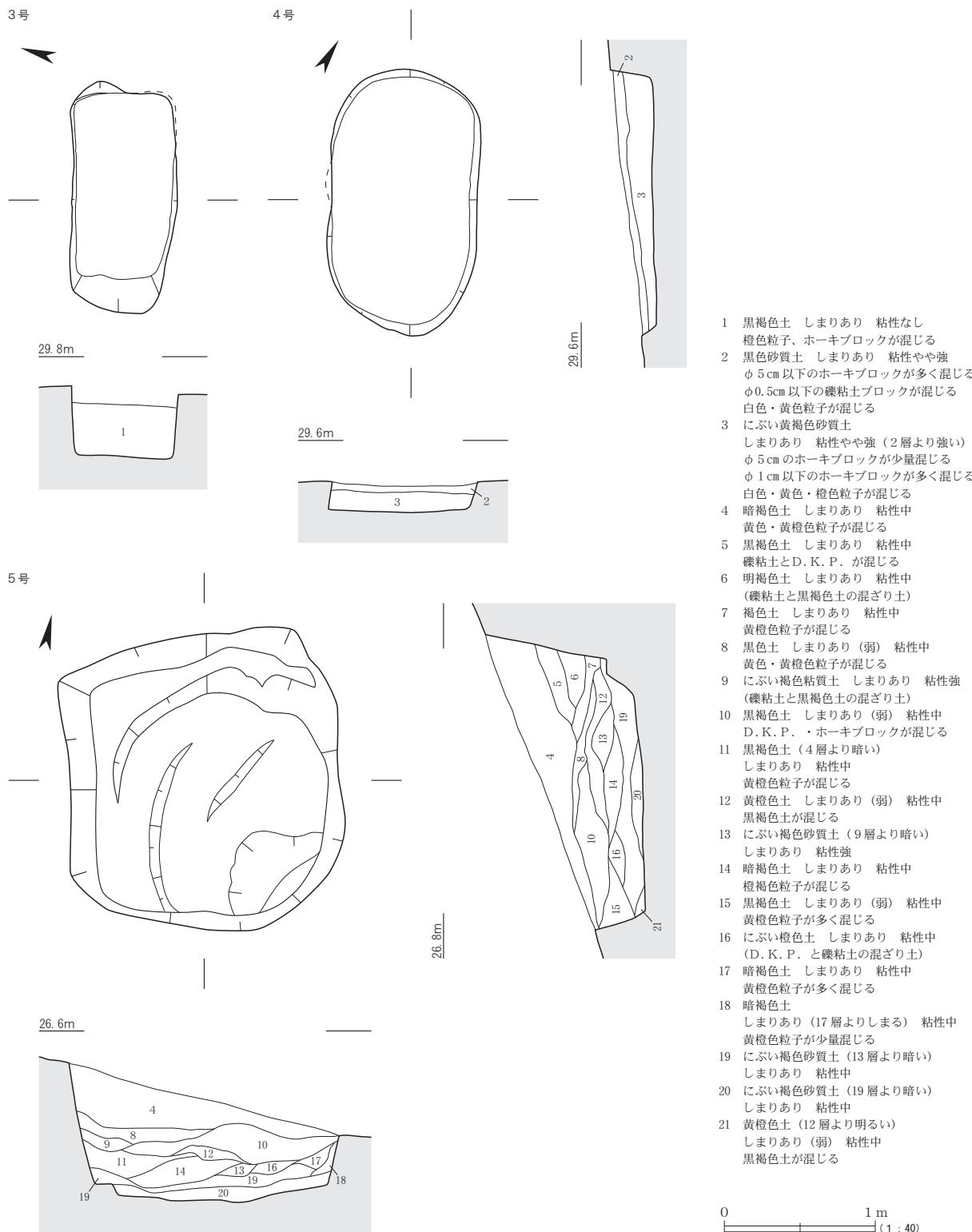


- 1 黒色土 しまりあり 粘性中
橙色粒子がごく少量混じる
- 2 黒色土 しまりあり 粘性中
φ3cmの礫粘土ブロックが混じる
橙色粒子が混じる(1層より多量)

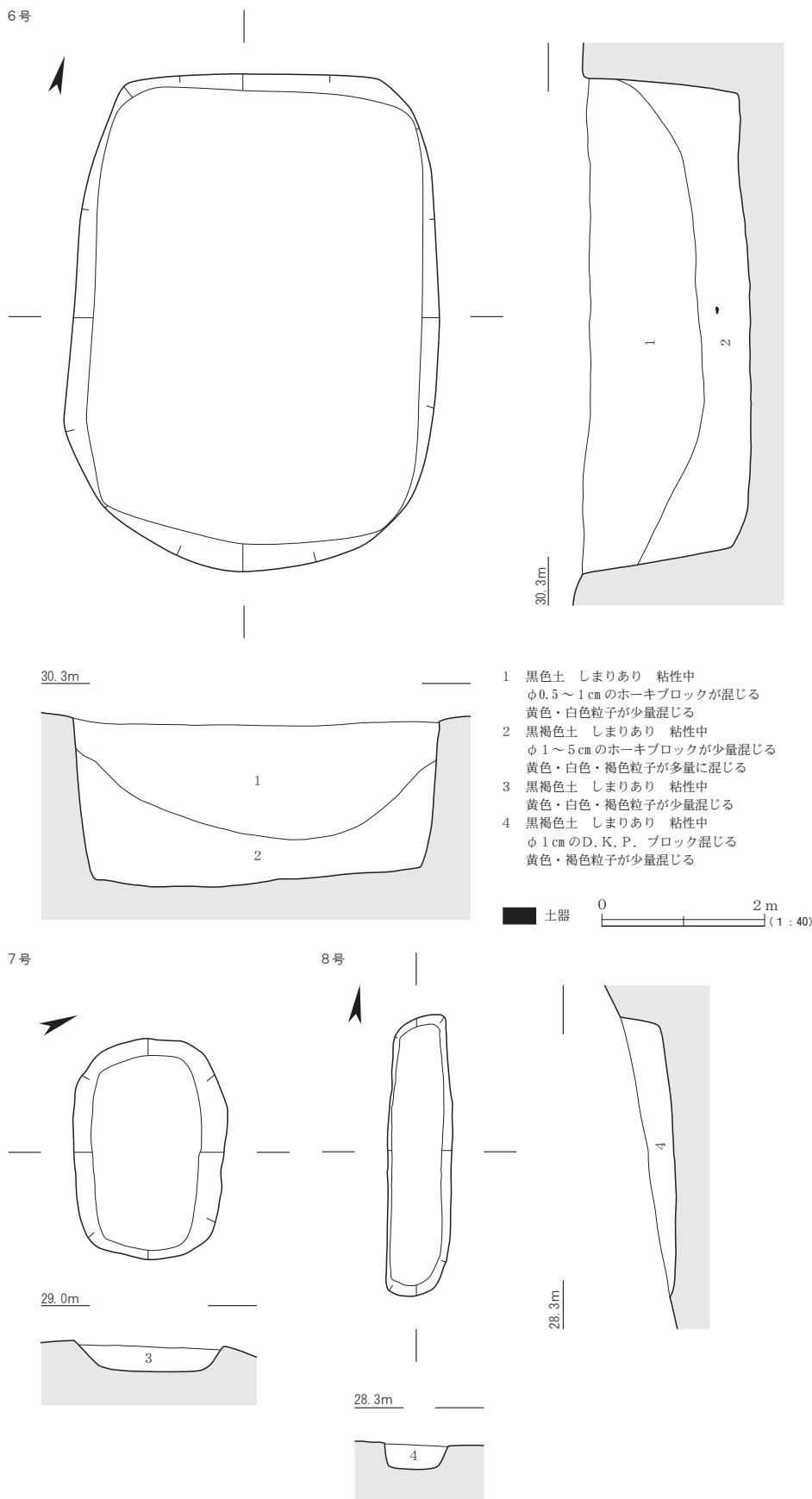
第20図 1号柵列及び1号貯蔵穴遺構図



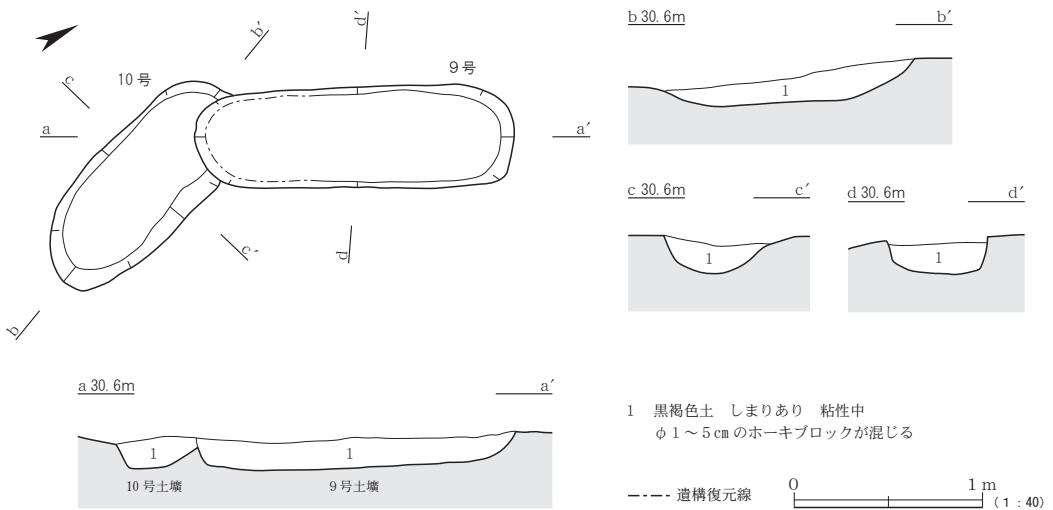
第 21 図 1 号・2 号土壤遺構図



第22図 3号～5号土壤遺構図



第23図 6号～8号土壤遺構図



第24図 9号・10号土壤遺構図

第4表 土壤一覧

遺構名	位置・立地	平面形		断面形態	検出面規模(cm)	床面規模(cm)	出土遺物	備考
		検出面	底面		長軸×短軸-深さ			
1号土壤	調査区の東端、丘陵尾根上の標高 29 m付近	隅丸 長方形	隅丸 長方形	垂直	184 × 84 - 68	180 × 100	埋土: 弥生土器壺(41-44)、甕(45)、無頸壺(42)、脚付壺(43)、小型甕(46・47)、高坏(48)	ピットと切り合う。
2号土壤	調査区の南東部、丘陵南斜面の標高 27 ~ 27.5 m付近	長方形	長方形	逆台形	220 × 188 - 52	204 × 160	埋土: 弥生土器高坏(49)	2号墳周溝に切られる。
3号土壤	調査区の東部、丘陵尾根上の標高 29.5 m付近	隅丸 長方形	隅丸 長方形	垂直	144 × 68 - 44	120 × 60	なし	
4号土壤	調査区の東部、丘陵南肩部の標高 29 m付近	楕円形	楕円形	逆台形	176 × 96 - 16	160 × 92	弥生土器片	
5号土壤	調査区の南東部、丘陵南斜面の標高 26 ~ 26.5 m付近	隅丸方形	隅丸方形	逆台形	196 × 180 - 68	168 × 152	なし	9号墳周溝を切る。
6号土壤	調査区の中央部、丘陵尾根上の標高 30 m付近	隅丸 長方形	隅丸 長方形	逆台形	304 × 224 - 96	276 × 200	弥生土器甕	
7号土壤	調査区の中央部、丘陵尾根上の標高 30 m付近	楕円形	楕円形	逆台形	136 × 92 - 16	120 × 64	土師器片	16号墳周溝と切り合う。
8号土壤	調査区中央部、丘陵南斜面の標高 29 m付近	隅丸 長方形	隅丸 長方形	逆台形	172 × 40 - 16	160 × 28	なし	平面形から土壤墓の可能性もあり。
9号土壤	調査区西端、丘陵尾根上の標高 30 m付近	隅丸 長方形	隅丸 長方形	逆台形	168 × 52 - 16	156 × 44	なし	10号土壤を切る。
10号土壤	調査区西端、丘陵尾根上の標高 30 m付近	隅丸 長方形	隅丸 長方形	逆台形	132 × 56 - 16	116 × 40	なし	9号土壤に切られる。

(7) 古墳

丘陵尾根上とその尾根から下る南斜面で 25 基を確認した。このうち主体部を確認できた古墳は 4 基、周溝内外で副次的な埋葬施設を確認できた古墳は 15 基である。そして、確認した主体部は箱式石棺墓 2 基、木棺墓 2 基、土壙墓 3 基の計 7 基で、副次的な埋葬施設は箱式石棺墓 2 基、石蓋土壙墓 6 基、木棺墓 2 基、土壙墓 25 基の計 35 基である。古墳の詳細を第 5 表、主体部・埋葬施設の詳細を第 6 表に一括し、以下、各遺構について述べる。

1号墳

調査区の東部、丘陵尾根上の標高 29 ~ 29.5 m 付近に位置する円墳であり、3号・5号竪穴建物を切る。調査前に古墳の高まりが認められたが、調査の結果、旧表土（黒色土）より上層が削平されており、墳丘盛土や主体部は遺存しない。古墳の規模は直径 18.2 m、二重の周溝（以下、内側の周溝を「内周溝」、外側の周溝を「外周溝」という。）を含めて直径 28.8 m、内周溝底面から墳丘頂部までの高さは 2.4 m を測る。内周溝の内縁に沿つて墳丘下周溝と考えられる溝が全周し、規模は幅 1.8 ~ 2.5 m、検出面からの深さ 0.9 m を測る。

二重の周溝のうち、内周溝は全周する。外周溝は北側を除いて確認したが、本来は全周したと考えられる。内周溝の断面形は逆台形で、幅 1.2 ~ 2.6 m、検出面からの深さは最大 1.7 m を測る。外周溝の断面形も逆台形で、幅 1.7 ~ 4.1 m、検出面からの深さは最大 1.2 m を測る。周溝内で 10 基、周溝外で 4 基の埋葬施設を確認した。

外周溝南西側の底面で須恵器片が集中する箇所を確認し、須恵器坏蓋（53）、坏身（54）、甕などがまとまって出土した。また、外周溝南側の底面で須恵器坏蓋（52）、聰（56）、南西側の底面付近で土師器塊（50）が出土し、内周溝南東側の埋土下層から須恵器坏身（55）、南西側の埋土上層から赤色塗彩の土師器塊（51）が出土した。ほかに、外周溝北西側の表土から土玉（D 3）、墳丘下周溝北西側の埋土から黒曜石剥片（S 5）、墳丘上北東側から管玉未成品（J 23）、安山岩製石鎌（S 11）などが出土した。

1号埋葬施設 外周溝西側の底面の内寄りに位置し、外周溝の壁を掘り込むように造られた土壙墓である。主軸は N - 10° - W である。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長さ 0.87 m、幅 0.30 m、検出面からの深さは最大 0.19 m を測る。頭位は北側と推定される。墓壙内から遺物は出土しなかった。

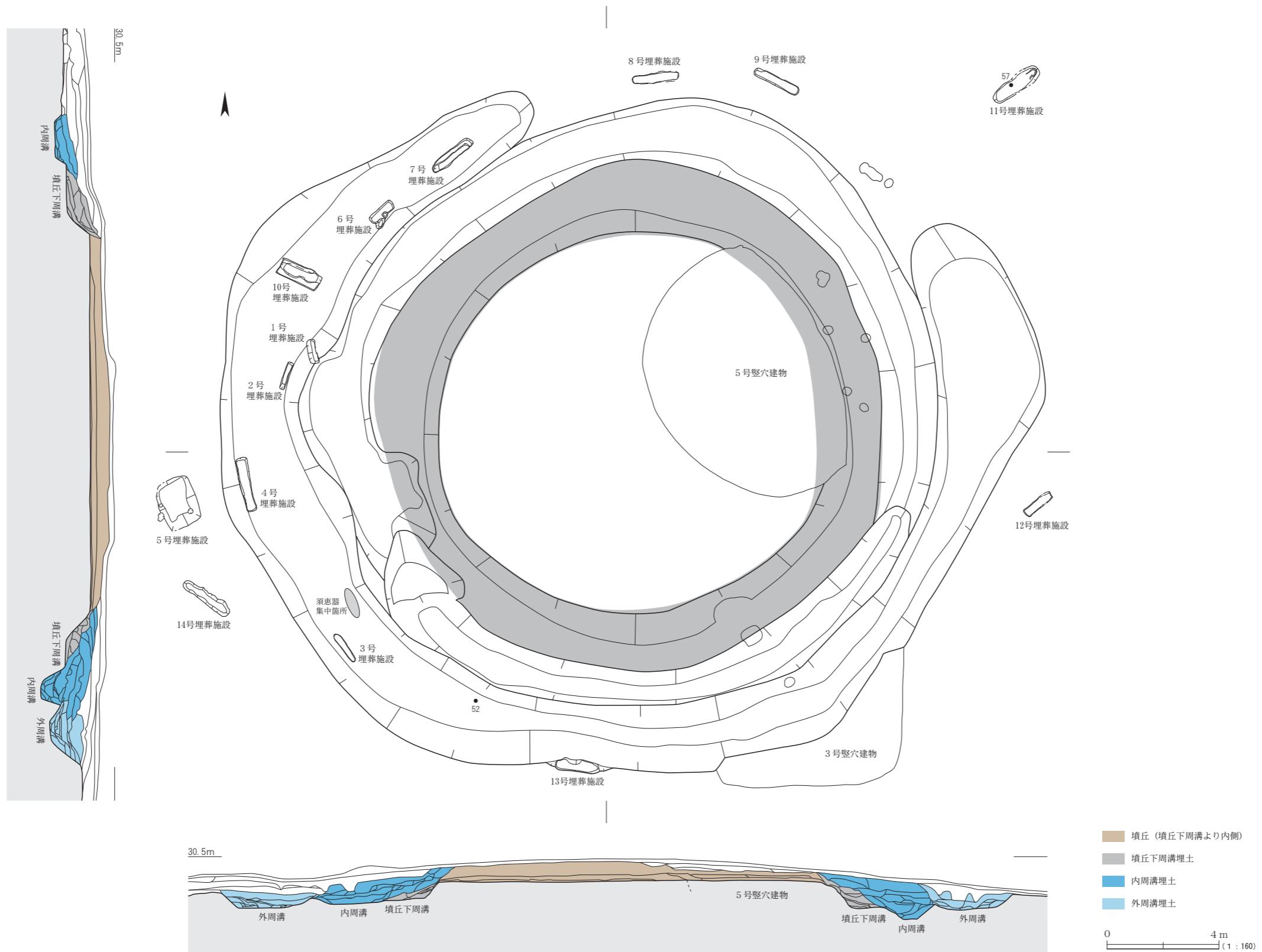
2号埋葬施設 外周溝西側の底面の内寄りに位置する土壙墓である。主軸は N - 21° - E で、周溝に平行する。平面形は長方形を呈し、規模は長さ 0.91 m、幅は北東側で 0.21 m、南西側で 0.20 m と北東側がわずかに広く、検出面からの深さは最大 0.32 m を測る。頭位は北東側と推定される。墓壙埋土から土器片が出土した。

3号埋葬施設 外周溝西側の底面の外寄りに位置する土壙墓である。主軸は N - 34° - W で、周溝に平行する。平面形は長楕円形を呈し、規模は長さ 1.20 m、幅は北西側で 0.24 m、南東側で 0.21 m と北西側が広く、検出面からの深さは最大 0.36 m を測る。頭位は北西側と推定される。墓壙埋土から土器片が出土した。

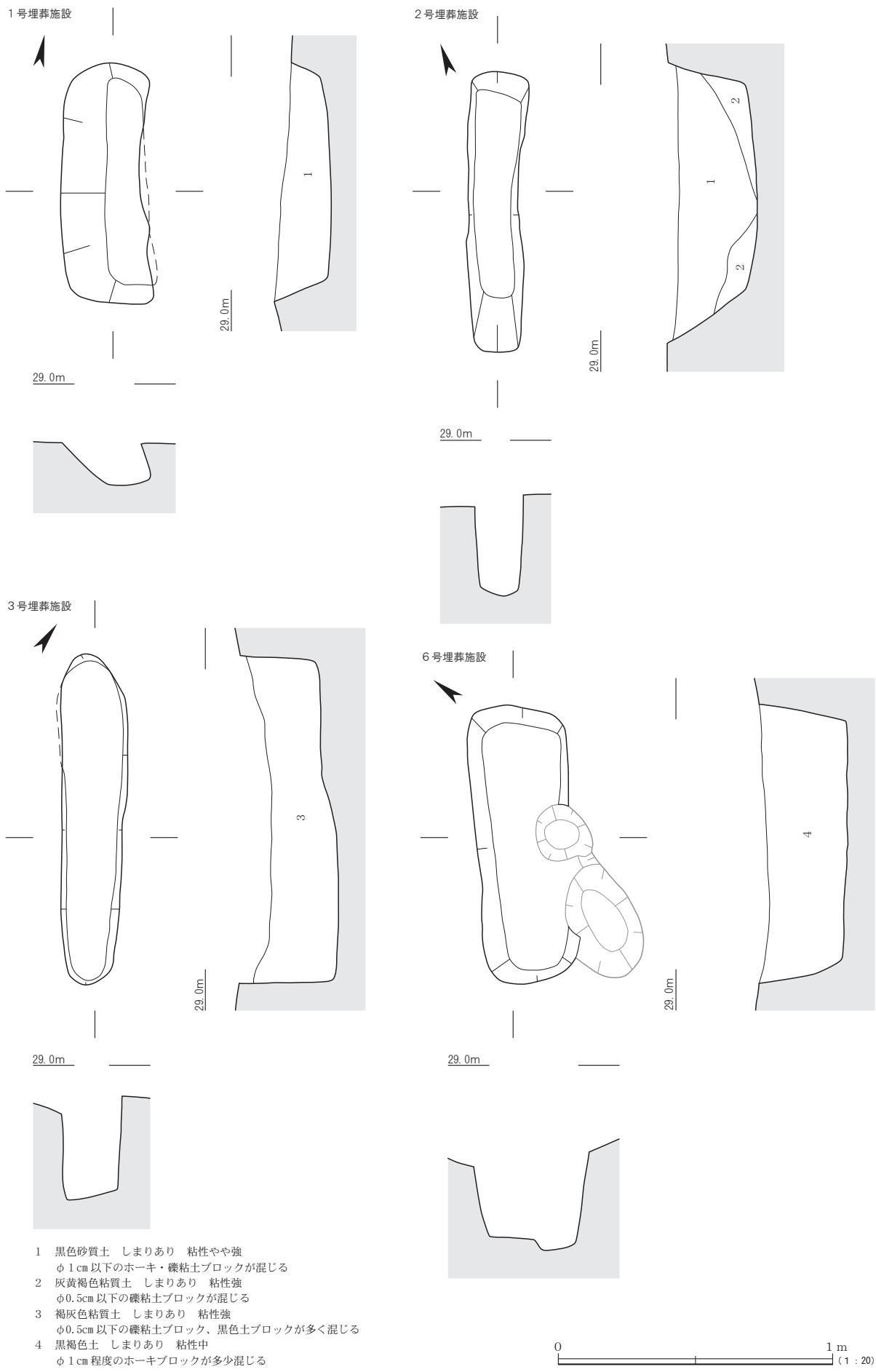
4号埋葬施設 外周溝西側の底面の外寄りに位置する土壙墓である。主軸は N - 13.5° - W で、周溝に平行する。平面形は長方形を呈し、規模は長さ 1.94 m、幅は北側で 0.42 m、南側で 0.37 m と北側が広く、検出面からの深さは最大 0.42 m を測る。頭位は北側と推定される。副葬品としては墓壙埋土下層から鉄滓（F 4）が出土した。また、埋土から土器片が出土した。

5号埋葬施設 周溝外の西側に位置する土壙墓である。主軸は N - 22.5° - W で、周溝に平行する。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長さ 1.76 m、幅は北西側で 1.36 m、南東側で 1.34 m と北西側がわずかに広く、検出面からの深さは最大 0.36 m を測る。頭位は北西側と推定される。墓壙内から遺物は出土しなかった。

6号埋葬施設 外周溝北西側の底面の内寄りに位置する土壙墓で、ピットと切り合う。主軸は N - 52° - E で、周溝に平行する。平面形は長方形を呈し、規模は長さ 1.00 m、幅は北東側で 0.36 m、南西側で 0.35 m と北東側がわずかに広く、検出面からの深さは最大 0.31 m を測る。頭位は北東側と推定される。墓壙埋土から土器片

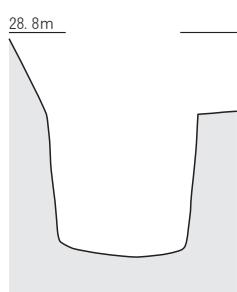
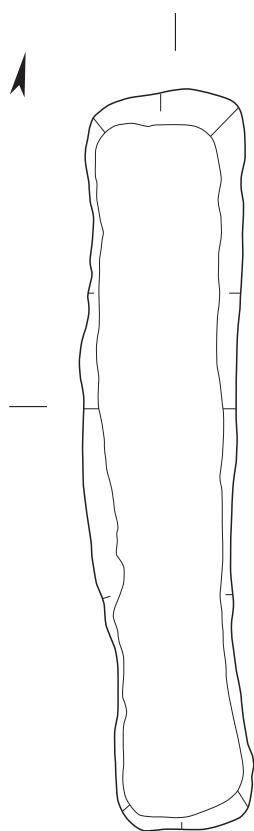


第25図 1号墳遺構図

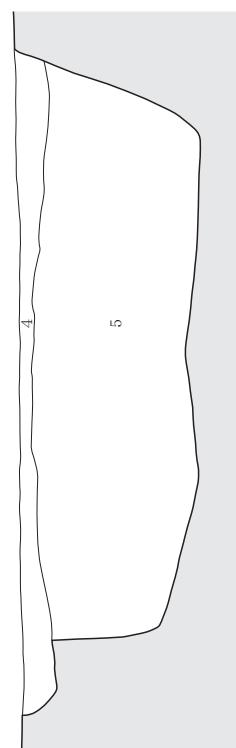
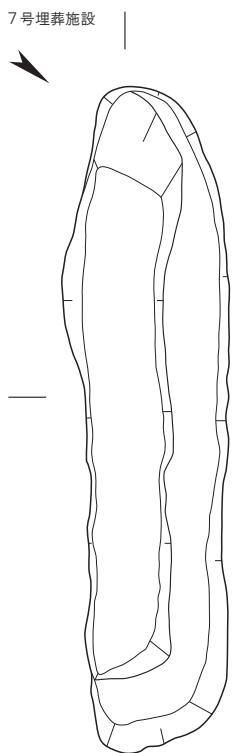
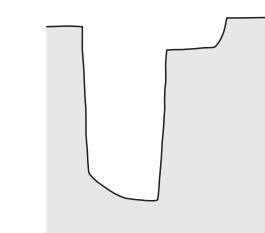
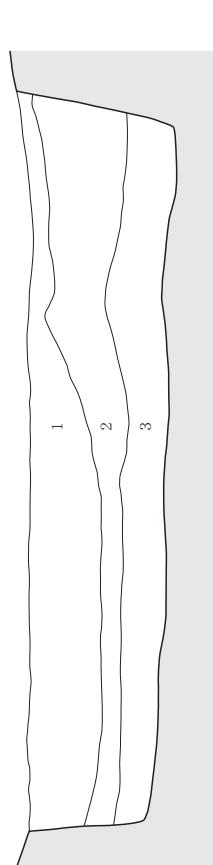


第26図 1号墳1号～3号・6号埋葬施設遺構図

4号埋葬施設



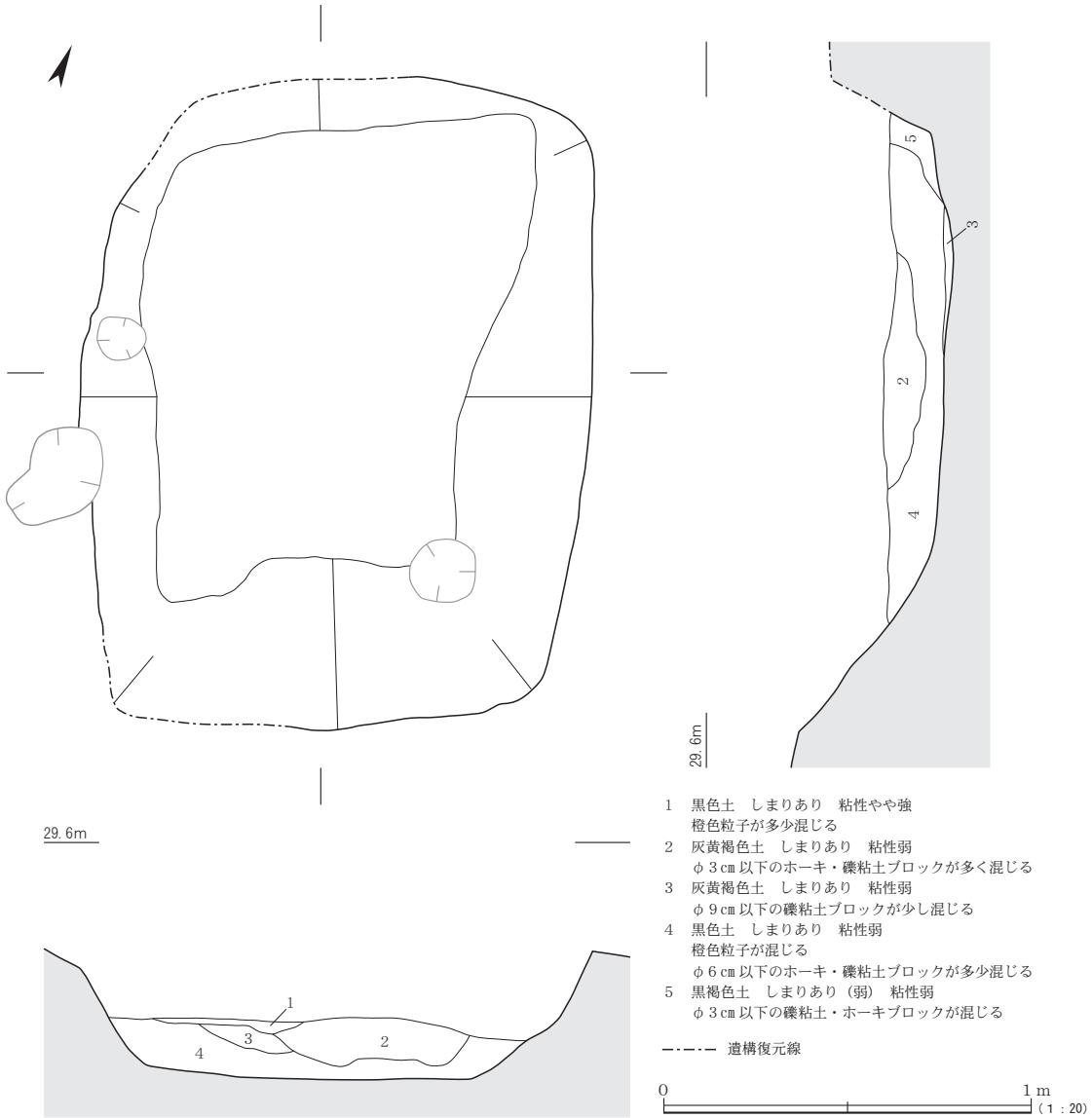
7号埋葬施設



- 1 にぶい黄橙色粘質土 しまりあり 粘性強
礫粘土主体の土にホーキブロックや黒色土が混じる
- 2 黄橙色土 しまりあり 粘性中
礫粘土・ホーキブロックが混じる
- 3 にぶい黄橙色粘質土 しまりあり 粘性強
1層にATブロックが混じる
- 4 黒褐色土 しまりあり 粘性中
φ 1 cm程度のホーキブロックが多少混じる
- 5 黒褐色土 しまりあり 粘性中
4層よりホーキブロックの混じりが少ない

0 1 m (1 : 20)

第27図 1号墳4号・7号埋葬施設遺構図



第28図 1号墳5号埋葬施設遺構図

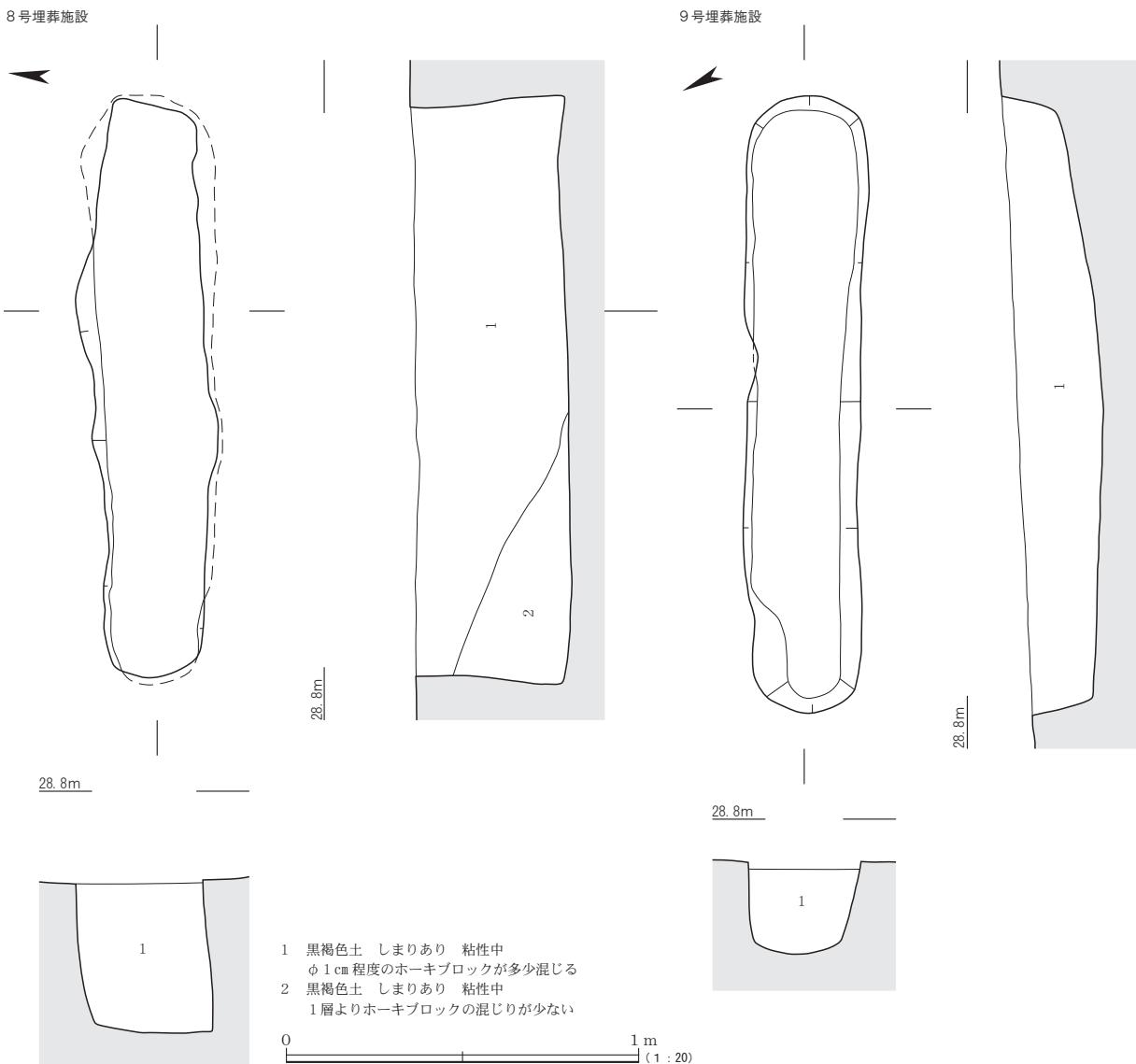
が出土した。

7号埋葬施設 外周溝北西側の底面に位置する土壙墓で、ピットと切り合う。主軸はN-54°-Eで、周溝に平行する。墓壙は北東・北西側が二段掘りで、平面形は歪な長方形を呈する。規模は上段が長さ1.76m、幅0.38~0.44m、検出面からの深さは最大0.08mを測り、下段が長さ1.51m、幅は南西側で0.27m、北東側で0.23mと南西側が広く、深さは最大0.41mを測る。頭位は南西側と推定される。墓壙埋土から土器片が出土した。

8号埋葬施設 外周溝北側の底面に位置する土壙墓である。主軸はN-86°-Eで、周溝に平行する。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長さ1.61m、検出面での幅は東側で0.26m、西側で0.28mとわずかに西側が広いが、壁面がオーバーハングするため底面での幅は東側で0.38m、西側で0.24mと東側が広い。検出面からの深さは最大0.44mを測る。頭位は東側と推定される。墓壙埋土から土師器片が出土した。

9号埋葬施設 外周溝北東側の底面に位置する土壙墓である。主軸はN-115°-Eで、周溝に平行する。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長さ1.75m、幅は南東側で0.35m、北西側で0.31mと南東側が広く、検出面からの深さは最大0.24mを測る。頭位は南東側と推定される。墓壙内から遺物は出土しなかった。

10号埋葬施設 外周溝北西側の底面に位置する土壙墓である。主軸はN-125°-Wで、周溝に直交する。墓



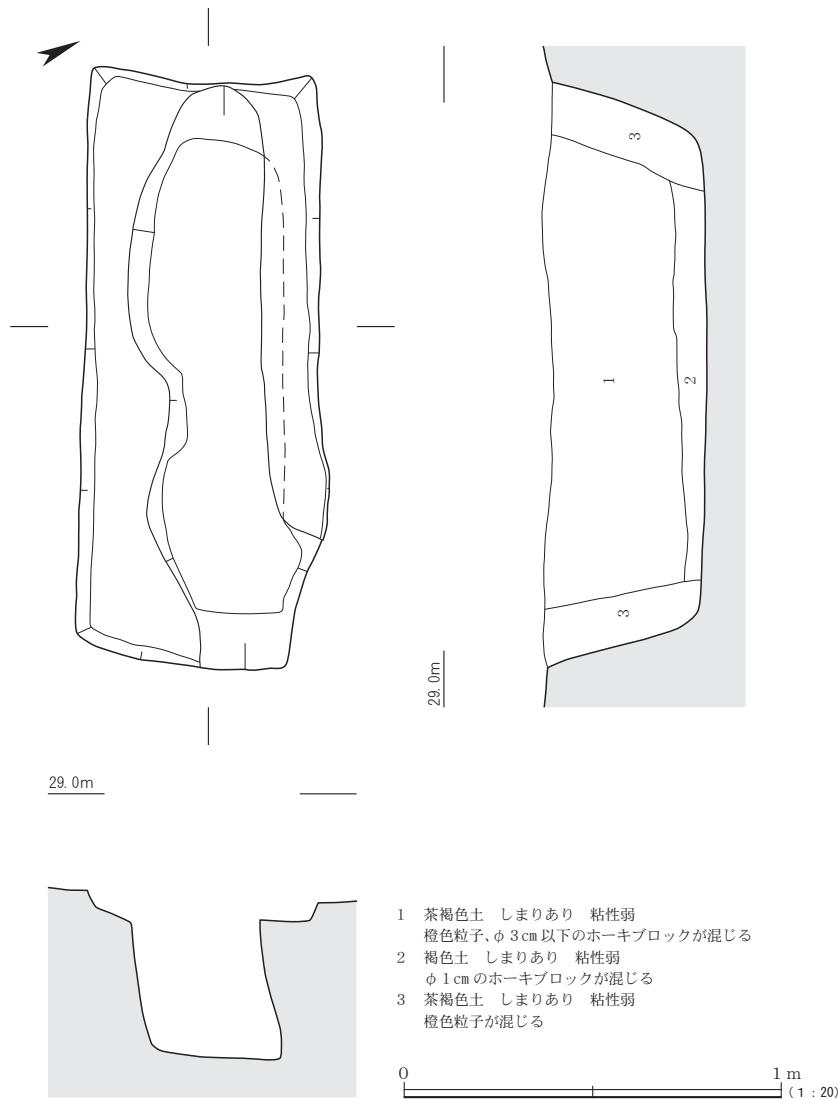
第29図 1号墳8号・9号埋葬施設遺構図

墳は北東・南西側（長辺側）が二段掘りで、平面形は隅丸長方形を呈する。規模は上段が長さ 1.54 m、幅 0.62 ~ 0.66 m、検出面からの深さは最大 0.05 m を測り、下段が長さ 1.50 m、幅は北西側で 0.44 m、南東側で 0.32 m と北西側が広く、深さは最大 0.42 m を測る。頭位は北西側と推定される。墓壙埋土から土器片が出土した。

11号埋葬施設 周溝外の北東側に位置する土壙墓である。主軸は N - 34° - E で、周溝に直交する。平面形は長楕円形を呈し、規模は長さ 1.91 m、幅は北東側で 0.62 m、南西側で 0.46 m と北東側が広く、検出面からの深さは最大 0.3 m を測る。頭位は北東側と推定される。副葬品としては墓壙埋土下層から須恵器坏身（57）、埋土から鉄鏃（F 5）が出土した。また、埋土から須恵器片、土器片が出土した。

12号埋葬施設 周溝外の東側に位置する土壙墓である。主軸は N - 129° - W で、周溝に平行する。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長さ 1.16 m、幅は南西側で 0.34 m、北東側で 0.29 m と南西側が広く、検出面からの深さは最大 0.27 m を測る。頭位は南西側と推定される。墓壙埋土から須恵器片が出土した。

13号埋葬施設 外周溝南側の掘方外縁に接する土壙墓である。主軸は N - 86° - W で、周溝に平行する。平面形は歪な長楕円形を呈し、規模は長さ 1.60 m、幅は西側で 0.46 m、東側で 0.41 m と西側が広く、検出面か



第30図 1号墳10号埋葬施設遺構図

らの深さは最大 0.15 m を測る。頭位は西側と推定される。墓壙内から遺物は出土しなかった。

14号埋葬施設 周溝外の南西側に位置する土壙墓である。主軸は N – 124.5° – E で、周溝にほぼ平行する。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長さ 1.92 m、幅は南東側で 0.49 m、北西側で 0.35 m と南東側が広く、検出面からの深さは最大 0.14 m を測る。頭位は南東側と推定される。副葬品としては墓壙検出面で鉄刀子（F 6）が出土した。また、墓壙埋土から弥生土器片が出土した。
(小田)

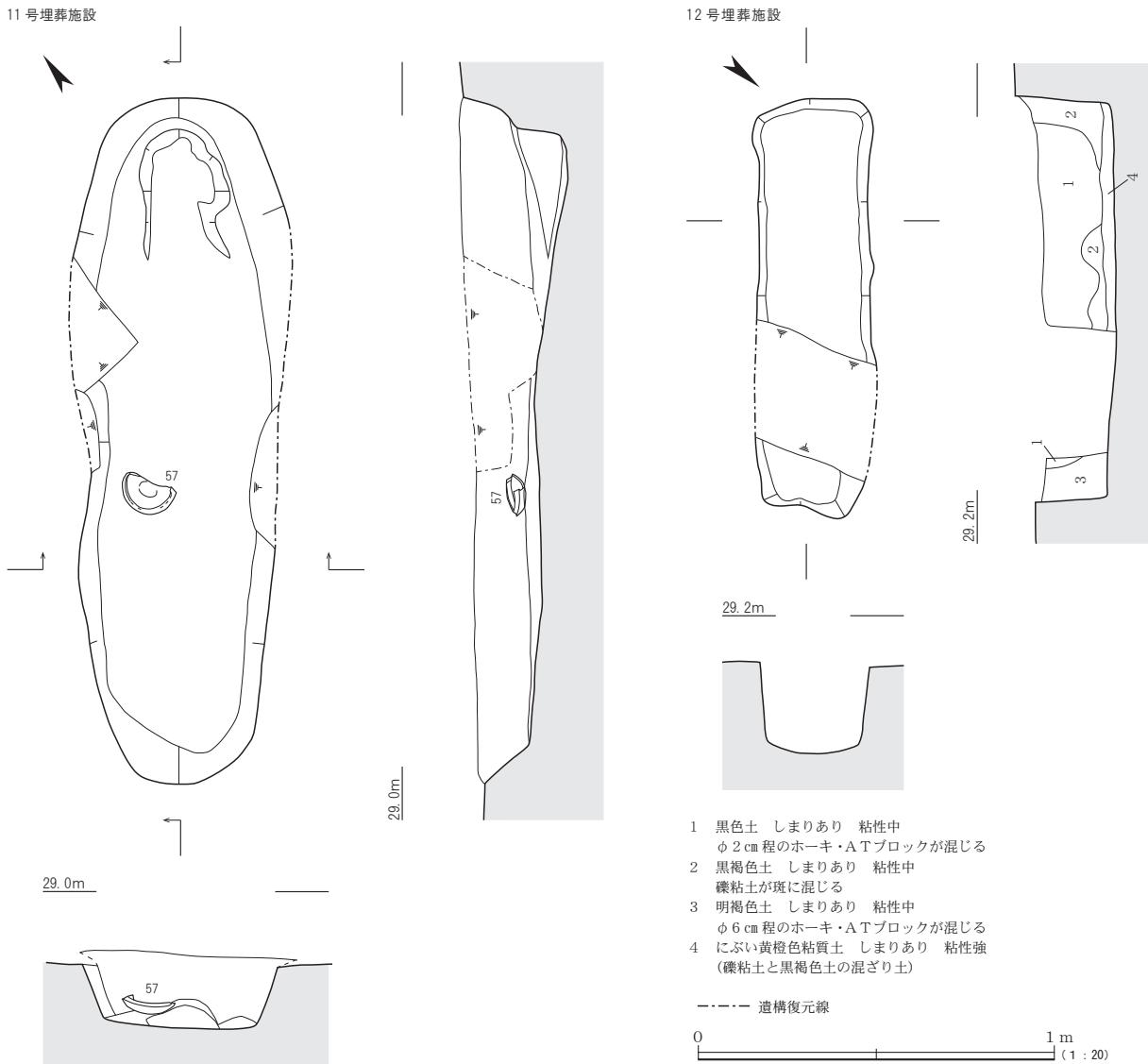
2号墳

1号墳から南東へ約 4 m 離れた、丘陵南肩部の標高 27 ~ 28.5 m 付近に位置する円墳で、5号墳と 2号土壙を切る。墳丘は削平されているが、規模は直径 10.6 m、周溝を含めて直径 15.5 m を測る。

周溝は、尾根側にあたる北西側で約 1/2 を確認した。断面形は U 字形で、幅 2.8 ~ 3.2 m、検出面からの深さは最大 1.2 m を測る。周溝西側の底面で土師器塊（58）、東側の埋土下層から土師器甕、須恵器坏蓋（59）、坏身（60）が出土した。

なお、主体部や副次的な埋葬施設は確認できなかった。

(小田)



第31図 1号墳11号・12号埋葬施設遺構図

3号墳

2号墳から西へ約9m離れた、丘陵南肩部の標高28.5～29.5m付近に位置する円墳である。墳丘は削平されているが、規模は直径11.1m、周溝を含めて直径15.6mを測る。

周溝は、尾根側にあたる北西側で約1/2を確認した。断面形はU字形で、幅2.1～3.3m、検出面からの深さは最大1.2mを測り、西側が一段深く掘り込まれている。この深く掘り込まれた周溝底面で土師器直口壺(61)、甕(62)、脚付甕(63～71)が供献状態で出土した。

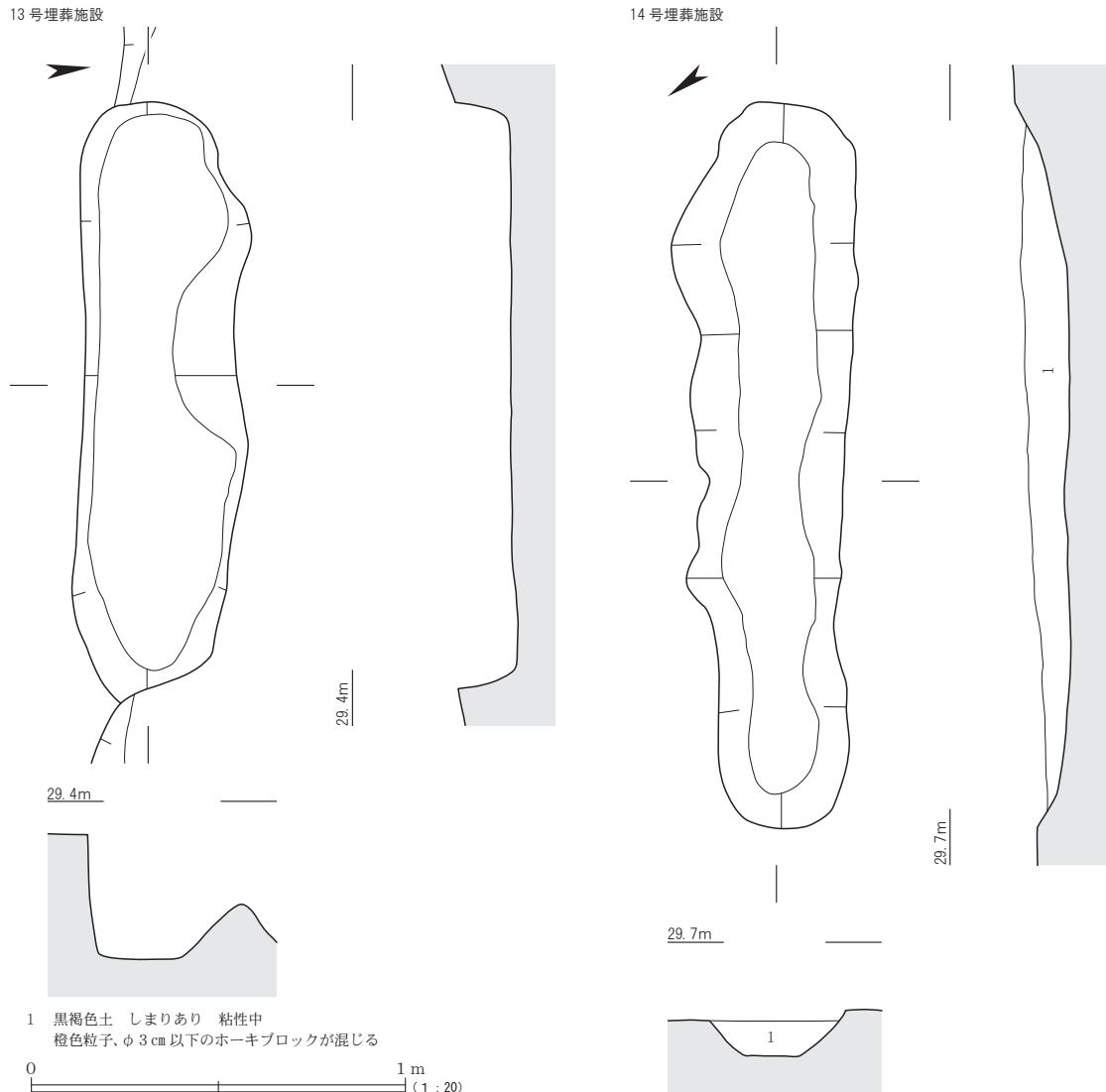
なお、主体部や副次的な埋葬施設は確認できなかった。

(小田)

4号墳

3号墳から西へ約4m離れた、丘陵南肩部の標高28.5～29.5m付近に位置する円墳である。墳丘は削平されているが、復元される墳丘規模は直径11.2m、周溝を含めて直径15.3mである。周溝の内側に墳丘下周溝と考えられる溝が半円状に巡り、断面形は逆台形で、幅0.9～1.3m、検出面からの深さは最大0.5mを測る。墳丘下周溝東側の埋土から土師器甕(73)、西側の埋土から須恵器坏蓋(75)が出土した。

周溝は、尾根側にあたる北西側で約1/3を確認した。断面形は逆台形で、幅1.1～2.2m、検出面からの深さ



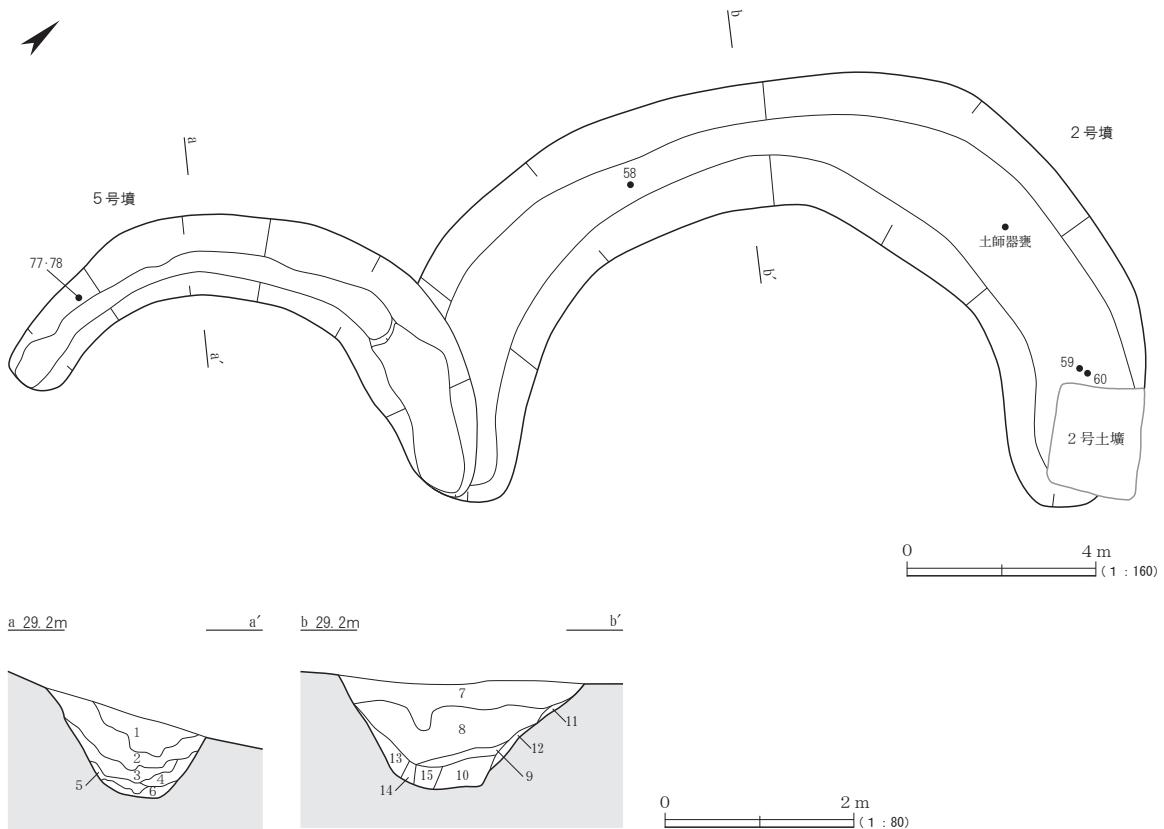
第32図 1号墳 13号・14号埋葬施設遺構図

は最大 0.8 m を測る。周溝内・外の北東側で埋葬施設を 1 基ずつ確認した。

また、周溝北側の底面に掘られた短径 0.33 m、深さ 0.32 m のピットに、土師器甕 (72) が正位で据えられ、甕の開口部を塞ぐように高坏 (74) が正位で重ねられていた。これらの土師器は供献状態を示すと考えられる。ほかに、周溝西側の底面で鉄鏃 (F 7) と不明鉄製品 (F 8・F 9)、西側の埋土から須恵器坏蓋 (75)、坏身 (76)、西側の検出面で鞍金具 (F 10) が出土した。

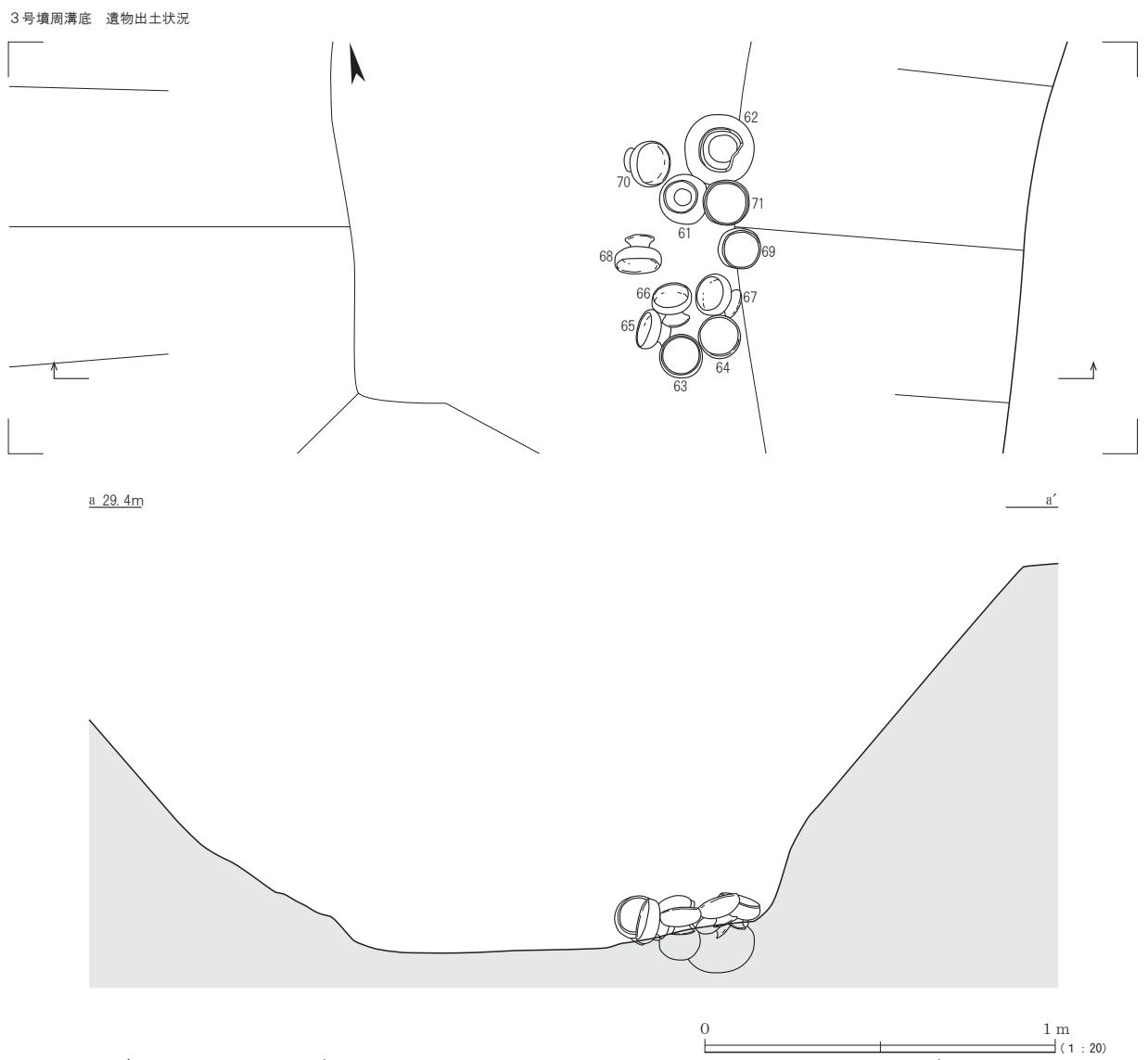
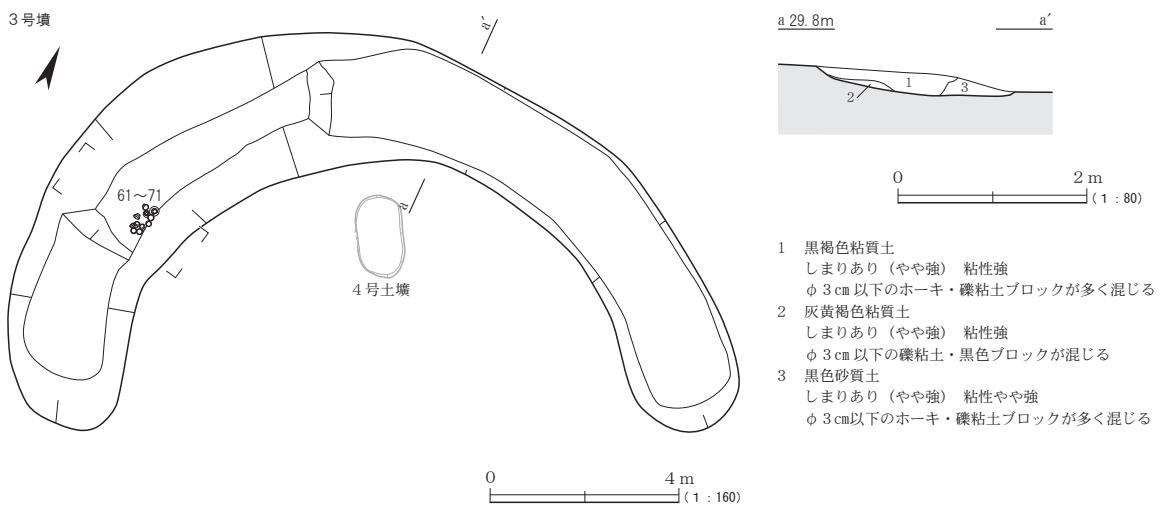
1号埋葬施設 周溝外の北東側に位置する石蓋土壙墓である。主軸は N - 107.5° - E で、周溝に平行する。蓋石は 2 枚の板石からなり、長さ 0.96 m、幅 0.85 m を測る。墓壙は二段掘りで、平面形は隅丸長方形を呈する。規模は上段が長さ 1.63 m、幅 1.04 m、検出面からの深さ 0.10 m、下段が長さ 0.79 m、幅は南東側で 0.23 m、北西側で 0.22 m と南東側がわずかに広く、深さ 0.21 m を測る。底面の南東小口側には 1 枚の平石からなる枕が置かれており、頭位は南東側と推定される。墓壙内から遺物は出土しなかった。

2号埋葬施設 周溝北東側の底面に位置する石蓋土壙墓である。主軸は N - 135° - E で、周溝に平行する。蓋石は 5 枚の板石を並べたもので、規模は長さ 1.28 m、幅 0.73 m を測る。墓壙は二段掘りで、平面形は隅丸長方形を呈する。規模は上段が長さ 1.80 m、幅 0.86 ~ 0.97 m、検出面からの深さ 0.10 m、下段が長さ 1.18 m、



- | | | |
|--|---|--|
| 1 黒褐色土
しまりあり(弱) 粘性中
黄色粒子が混じる | 6 黄橙色土
しまりあり 粘性中
橙褐色粒子、礫粘土ブロックが混じる | 11 7層と礫粘土の混じり土
しまりあり(やや強) 粘性強 |
| 2 褐色土
しまりあり 粘性中
黄色・黄橙色粒子が多く混じる | 7 黒褐色砂質土
しまりあり(やや強) 粘性やや強
白色・黄色・橙色粒子が混じる
ϕ 0.5cm程のホーキブロックがごく少量混じる | 12 にぶい橙色砂質土
しまりあり(やや強) 粘性やや強
白色・橙色粒子、 ϕ 0.5cm以下のD.K.P. ブロックが混じる |
| 3 明褐色土
しまりあり 粘性中
黄橙色粒子が混じる | 8 黒色砂質土
しまりあり(強) 粘性やや強
白色・黄色・橙色粒子、 ϕ 0.5cm以下のホーキ・D.K.P. ブロックが混じる | 13 8層に橙褐色粒子が混じる
しまりやや強 粘性やや弱 |
| 4 明褐色土
しまりあり 粘性中
黄橙色粒子が3層より多く混じる | 9 8層と10層の混じり土
しまりあり(やや強) 粘性やや強 | 14 8層に ϕ 0.5cm以下のD.K.P. ブロックが多く混じる
しまりあり(やや強) 粘性やや強 |
| 5 黒褐色土
しまりあり 粘性中
黄橙色粒子が多く混じる | 10 にぶい褐色砂質土
しまりあり(強) 粘性やや強
ϕ 0.5cm以下の礫粘土・D.K.P. ブロックがやや多く混じる | 15 灰黄褐色砂質土
しまりあり(やや強) 粘性やや強
白色・橙褐色粒子が多く混じる |

第33図 2号・5号墳遺構図



第34図 3号墳遺構図及び遺物出土状況図

幅は南東側で 0.33 m、北西側で 0.29 m と南東側が広く、深さ 0.22 m を測る。頭位は南東側と推定される。底面の南東小口側に長径 0.22 m、深さ 0.05 m の浅いピットが掘られている。墓壙埋土から土器片が出土した。

(小田)

5号墳

調査区の南東部、丘陵南斜面の標高 27.5 ~ 28 m 付近に立地する円墳であり、北側を 2号墳の周溝に切られる。墳丘は削平されているが、規模は直径約 9 m 周溝を含めて 10.2 m を測る。周溝は斜面の高い側にあたる北西側で約 1/3 を検出した。周溝の断面は U 字形で、肩部幅 2.0 m、検出面からの深さは最大 0.9 m を測る。周溝底で土師器壺蓋形土器 (77) と脚部を欠く土師器有蓋高壺形土器 (78) が正位で据えられた状態で出土した。

主体部や周溝内埋葬施設は確認していない。

(片岡)

6号墳

調査区の南東部、丘陵南斜面の標高 26 ~ 27 m 付近に立地する円墳であり、西側の 7号墳、南側の 9号墳を切る。墳丘は削平されているが、規模は直径約 10 m 周溝を含めて直径 13.1 m を測る。周溝は斜面の高い側にあたる北西側で約 1/2 を検出した。周溝の断面は U 字形で、肩部幅 4.2 m、検出面からの深さは最大 1.4 m を測る。周溝内から遺物は出土しなかった。

主体部を 1 基確認した。周溝内埋葬施設は確認していない。

1号主体部 墳丘頂部北西寄りに位置する木棺墓である。主軸は N - 61° - E で、墓壙の平面形は隅丸長方形を呈する。墓壙は二段掘りで、規模は上段が長さ 2.6 m、幅 1.5 m、深さ 0.2 m、下段は長さ 2.12 m、幅は西側で 0.65 m、東側で 0.6 m、深さ 0.34 m を測る。下段の断面観察により、東西で小口板の痕跡が確認できた。両小口板から分かる木棺の長さは内法で約 1.7 m を測る。棺底の比高差は西側が東側より 8 cm 高く、墓壙の幅からも西側が頭位と推定される。墓壙内から遺構に伴う遺物は出土しなかった。

(片岡)

7号墳

調査区の南東部、丘陵南斜面の標高 25.0 ~ 28 m 付近に立地する円墳である。墳丘は削平されているが、規模は直径 8.4 m 周溝を含めて直径 11.8 m を測る。周溝は全周すると思われるが、東側を 6号墳と 9号墳、南側を 10号墳に切られ、南西側で 8号墳と切り合う。周溝の断面は U 字形で、肩部幅 2.0 m、検出面からの深さは最大 0.3 m を測る。また、周溝北東側では、階段状の遺構を確認した。外側の壁面に沿って地山を削り出し、4段のステップが設けられている。規模は、長さ約 2.2 m、幅 0.6 m、高さ 0.35 m を測る。周溝内から遺物は出土しなかった。

主体部は確認していない。周溝内南側で埋葬施設を 1 基確認した。

1号埋葬施設 周溝内南西側に位置する土壙墓である。主軸は N - 15° - E で、周溝に平行する。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長さ 1.1 m、幅は北側で 0.45 m、南側で 0.4 m と北側が広く、深さは最大 0.24 m を測る。頭位は北側と推定される。埋土から遺物は出土しなかった。

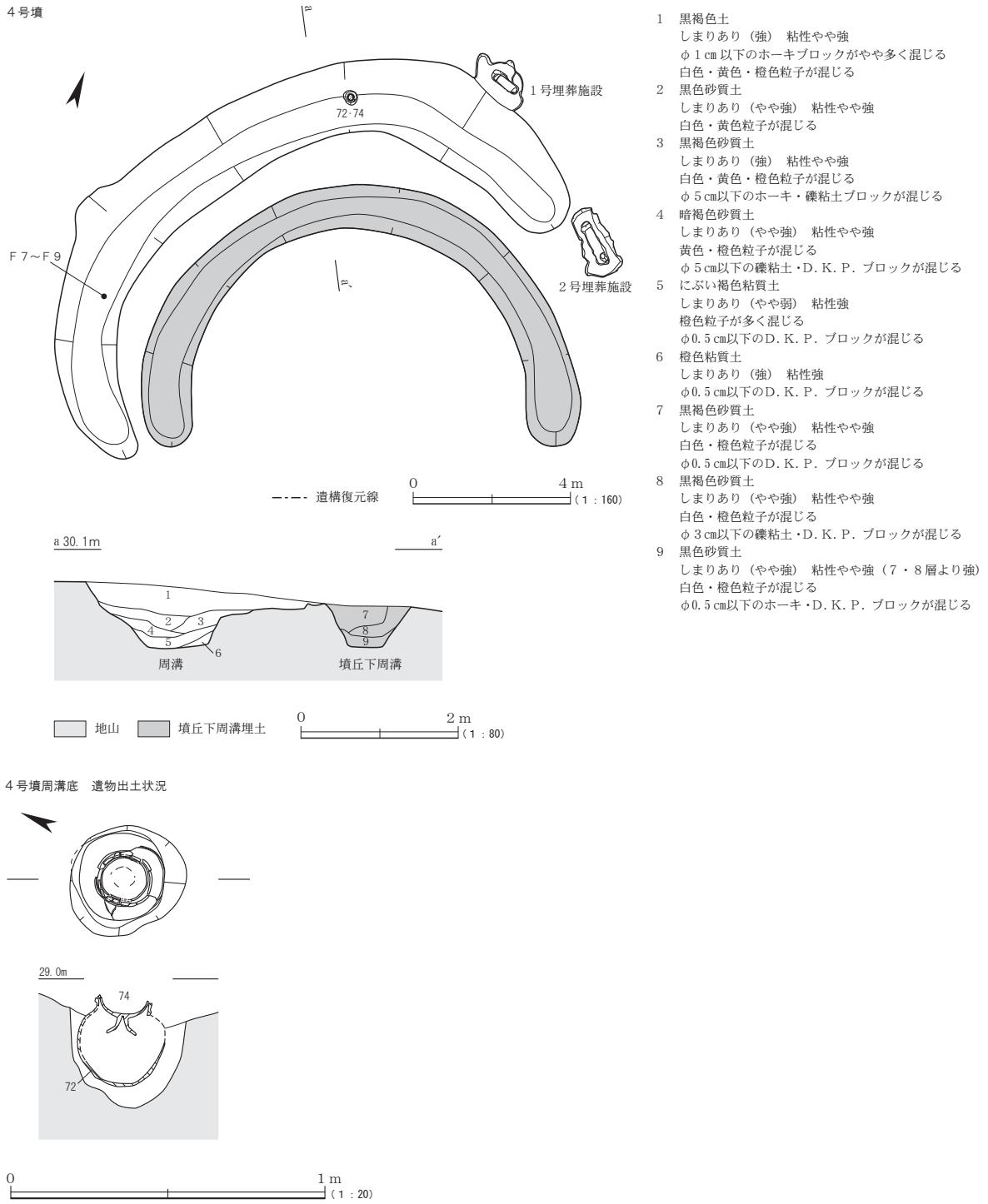
(片岡)

8号墳

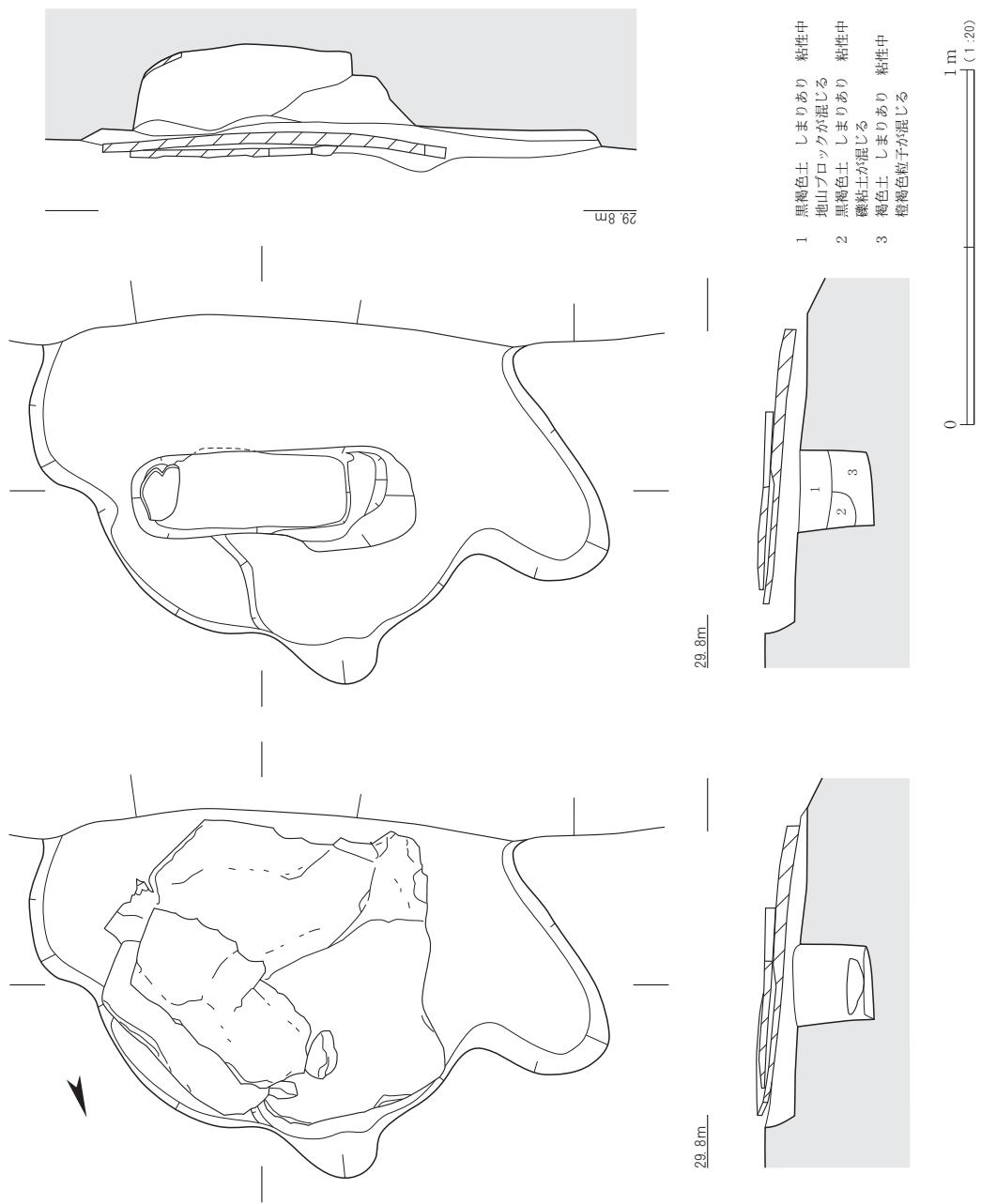
調査区の南東部、丘陵南斜面の標高 26 ~ 27.5 m 付近に位置する円墳であり、7号墳と切り合う。墳丘は削平されているが、墳丘規模は直径 11 m、周溝を含めると直径 17.6 m を測る。周溝は尾根側にあたる北西側で約 1/2 を検出した。周溝の断面形は U 字形で、幅は 1.9 ~ 3.6 m、検出面からの深さは 2.0 m を測る。遺物は周溝底面で大型の土師器甕 (79) と須恵器甕 (80) がそれぞれ正位で横並びに据えられた状態で出土した。

墳丘上でほぼ主軸のそろった 2基の主体部と、周溝内で 1基の埋葬施設を確認した。

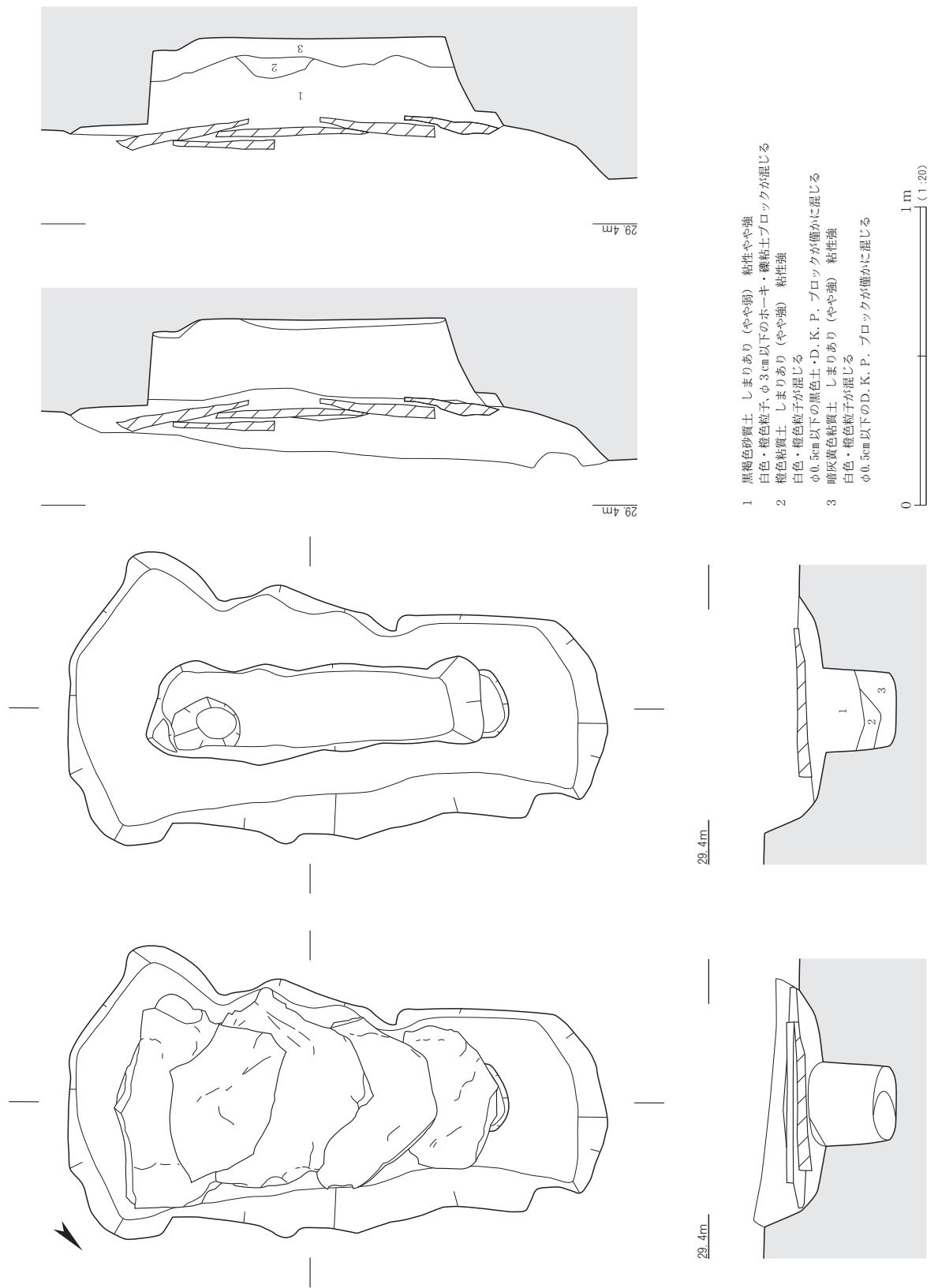
1号主体部 墳丘上の東側に位置する土壙墓である。主軸は N - 19° - W。平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長さ 1.94 m、幅は北西側で 1.36 m、南東側で 1.22 m と北西側が広く、深さは最大 0.72 m を測る。頭位は北西側と推定される。遺物は出土しなかった。



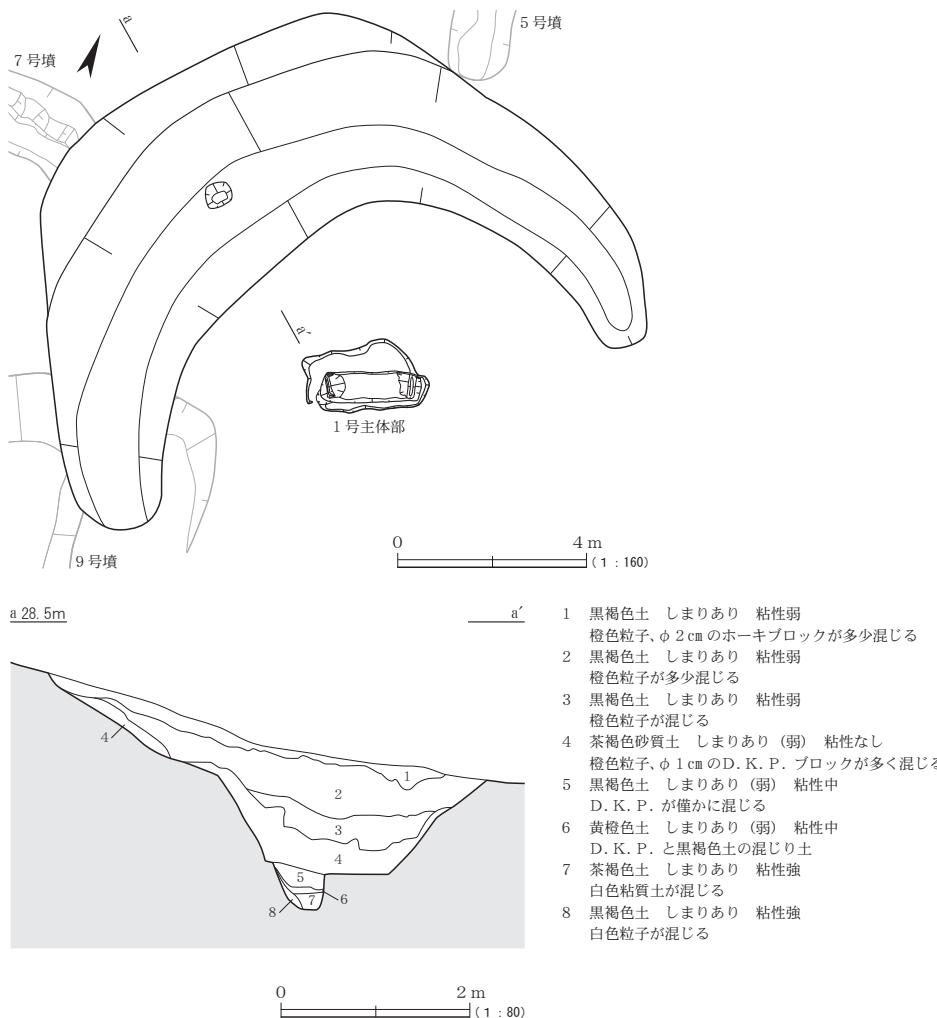
第35図 4号墳遺構図及び遺物出土状況図



第36図 4号墳1号埋葬施設遺構図



第37図 4号墳2号埋葬施設遺構図



2号主体部 1号主体部の東隣に位置する土壙墓である。主軸はN-23°-W。平面形は隅丸長方形を呈する。

規模は長さ2.34 m、幅は北西側で1.36 m、南東側で1.24 mと北西側が広く、深さは最大0.5 mを測る。頭位は北西側と推定される。遺物は出土しなかった。

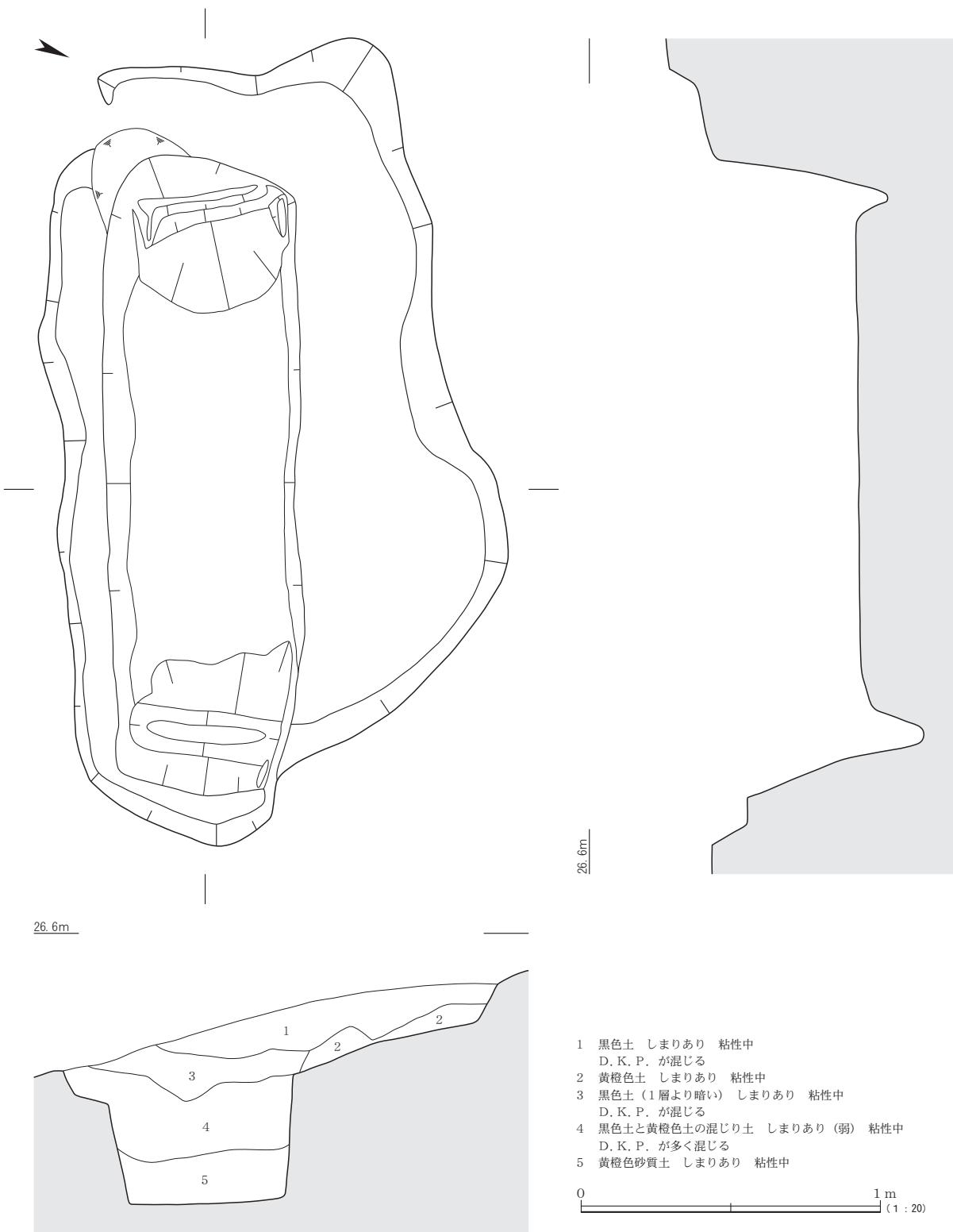
1号埋葬施設 周溝内の東側に位置する石蓋土壙墓である。主軸はN-29°-Wで、周溝に平行する。蓋石は4枚の板石を並べたもので、規模は長軸1.2 m、短軸0.6 mを測る。平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長さ0.9 m、幅は北西側で0.29 m、南東側で0.30 m、検出面からの深さは最大0.3 mを測る。底面は南東へ傾斜していることから、頭位は北西側と推定される。墓壙内から遺物は出土しなかった。
(西浦)

9号墳

調査区の南東部、丘陵南斜面の標高23～26 m付近に位置する。6号墳を切り、7号墳に切られる。墳丘は削平され、形状は不明である。周溝は西側で約1/6を検出した。周溝の断面形はU字形で、幅は1.7～3.3 m、検出面からの深さは1.1 mを測る。遺物は埋土中から土師器片が出土した。
(西浦)

10号墳

調査区の南東部、丘陵南斜面の標高24～25 m付近に立地する円墳であり、7号墳を切る。墳丘は削平されているが、規模は直径約9 m、周溝を含めると直径9.6 mを測る。周溝は斜面の高い側にあたる北西側で約1/4を検出した。周溝の断面はなだらかなU字形で、肩部幅3.0 m、検出面からの深さは最大1.76 mを測る。周溝底で土師器甕(81)が正位で据えられた状態で出土した。



第39図 6号墳1号主体部遺構図

主体部は確認していない。周溝内南西側で埋葬施設を1基確認した。

1号埋葬施設 周溝内南西側に位置する土壙墓である。主軸はN-5°-Wで、周溝に平行する。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長さ1.09m、幅は北側で0.3m、南側で0.3m、深さ0.1mを測る。頭位は北側と推定される。埋土から遺物は出土しなかった。
(片岡)

11号墳

調査区の南東部、丘陵南斜面の標高24~25.5m付近に位置する方墳で、南側が調査区外である。墳丘は削平されており、確認できた規模は南北3.4m、東西13m、周溝を含めると南北10m、東西19.4mを測る。周溝の断面形は逆台形で、幅0.9m~5.2m、検出面からの深さは最大5.2mを測る。北側の周溝が東側西側の周溝より一段深く掘り込まれている。遺物は北側の周溝底で土師器甕(82)が出土した。

1号埋葬施設 周溝外の北側に位置する土壙墓である。主軸はN-69°-Eで、北側の周溝に平行する。墓壙は二段堀りで、平面形は隅丸長方形を呈する。規模は上段が長さ3m、幅は西側で0.96m、東側で0.94m、検出面からの深さは0.38mを測る。下段が長さ2.26m、幅は西側で0.28m、東側で0.26mと西側が広く、深さは0.18mを測る。頭位は西側と推定される。副葬品としては上段面の東側、下段の東小口側の直上で上から鉄鑿(F14)・鉄鍔鋤先(F11)・鉄鎌(F12)・鉄鉈(F13)が重なって出土。また、西端で上段から下段にかけて須恵器坏蓋5点(86~90)・坏身5点(94~98)が出土。その他、中央部で上段から下段にかけて須恵器坏蓋3点(83~85)・坏身3点(91~93)が出土した。
(西浦)

12号墳

調査区の東部、丘陵南斜面の標高25.5~26.0m付近に立地する。円墳と思われるが、東側の大部分が調査区外である。墳丘規模は不明。周溝は斜面の高い側にあたる北西側で一部を検出した。周溝の断面は逆台形で、肩部幅2.3m、検出面からの深さは最大0.8mを測る。周溝内から遺物は出土しなかった。

主体部や周溝内埋葬施設は確認していない。

(片岡)

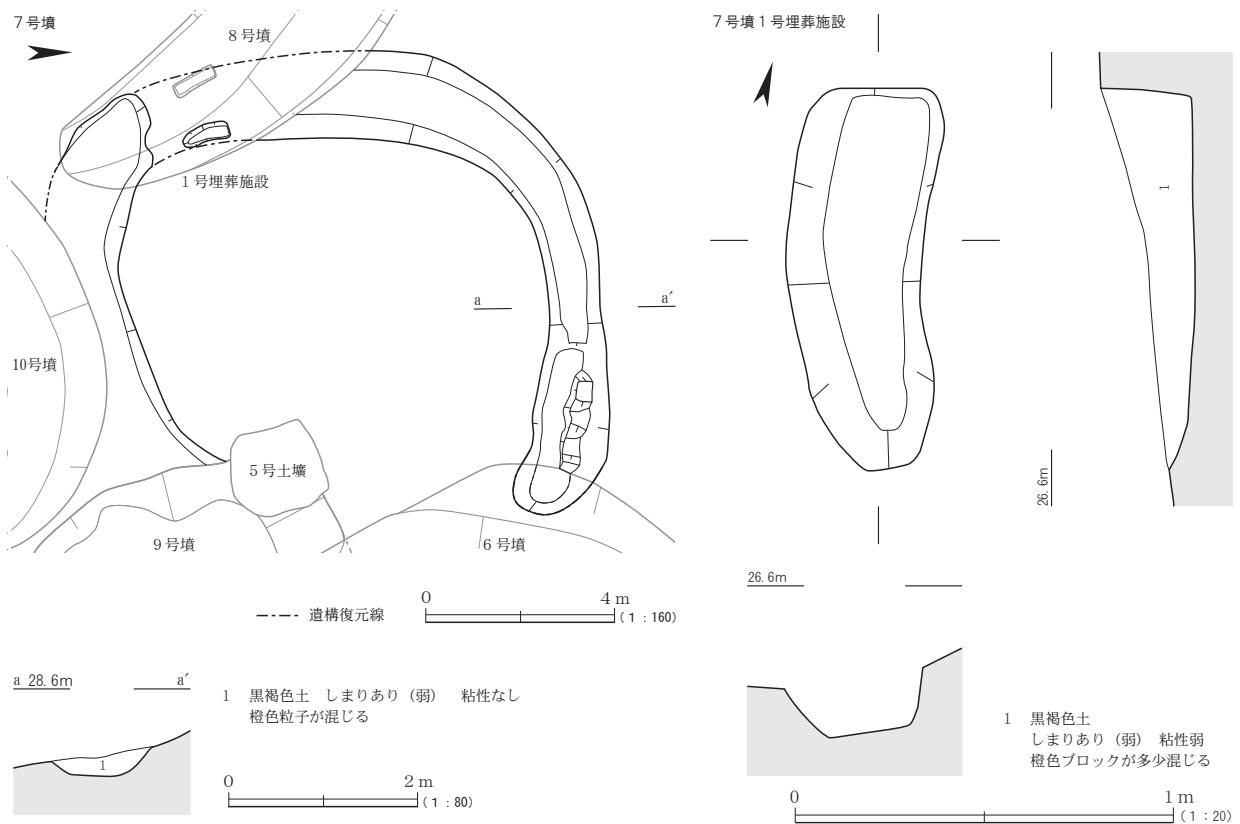
13号墳

調査区の東部、丘陵尾根上の標高30m付近に位置する円墳である。墳丘が削平されているが、規模は直径9.6m、周溝を含めた規模は直径14mを測る。周溝は尾根側にあたる北側で約1/2を検出した。周溝の断面はU字形で、幅は0.4~2.2m、検出面からの深さは1.7mを測る。遺物は北西側の周溝底より須恵器坏身4点(105~108)、須恵器坏蓋(103)、土師器塊(100)、土師器穂形土器(102)が供獻状態で出土した。102は須恵器坏蓋(103)の上に重ねられていた。その他、北側の周溝底で土師器甕(99)が出土。入れ子状になっており甕の内部から須恵器坏蓋(104)が出土した。

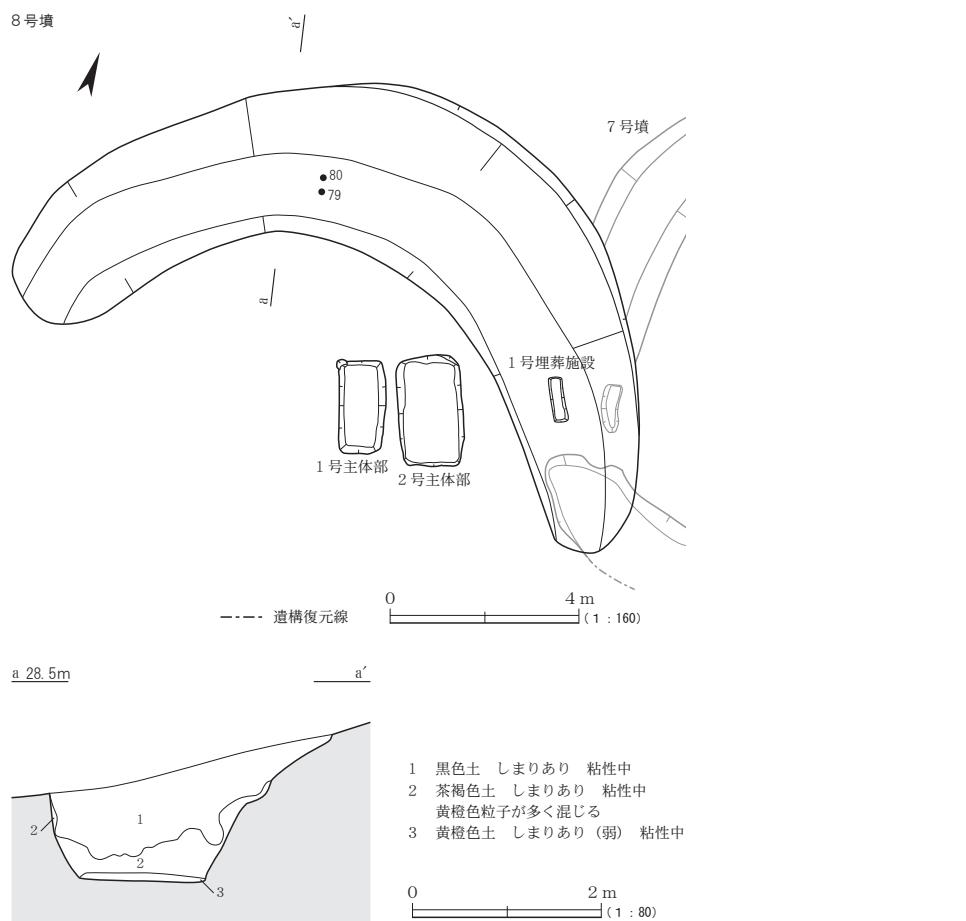
1号埋葬施設 東側の周溝の延長線上に位置する土壙墓である。主軸はN-33°-E。平面形は隅丸長方形。規模は長さ0.7m、幅は南東側で0.21m、北西側で0.22mと北西側が広く、検出面からの深さは最大0.2mを測る。頭位は北西側と推定される。墓壙内から遺物は出土しなかった。

2号埋葬施設 墳丘の南東側に位置する木棺墓である。主軸はN-10°-E。平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長さ1.6m、幅は北西側で0.88m、南東側で0.8mと北西側が広く、検出面からの深さ0.4mを測る。床面の両小口側で小口板の痕跡を確認した。両小口板から木棺の長さは、内法で1.2mを測る。頭位は北西側と推定される。墓壙内から遺物は出土しなかった。

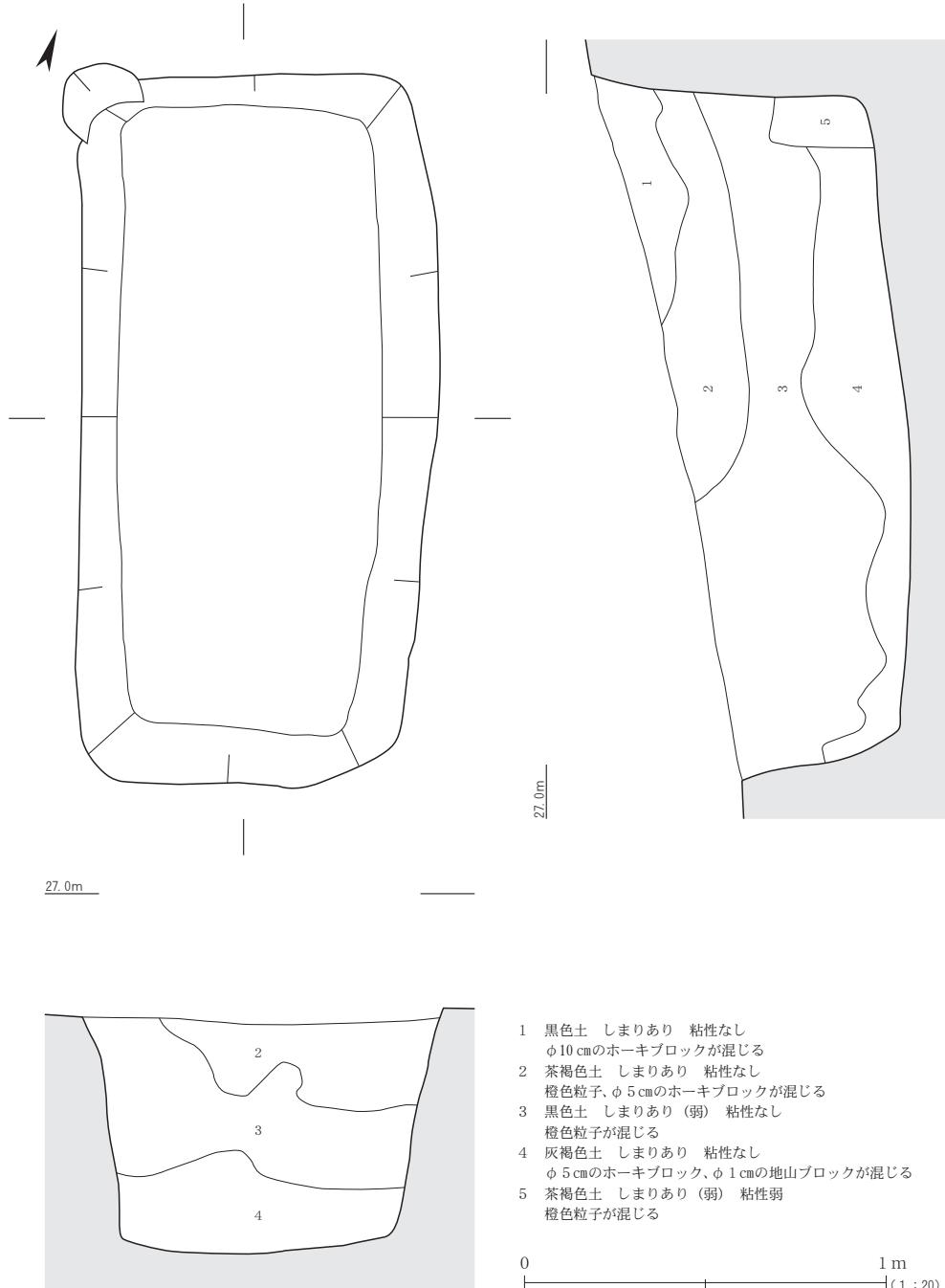
3号埋葬施設 墳丘の南東側に位置する木棺墓である。主軸はN-111°-Eで、等高線に平行する。平面形は隅丸長方形。規模は長さ1.26m、幅は北東側で0.62m、南西側で0.6mと北東側が広く、検出面からの深さは最大0.34mを測る。床面の両小口側で小口板の痕跡を確認した。両小口板から木棺の長さは内法で1.0mを測る。頭位は北東側と推定される。墓壙内から遺物は出土しなかった。
(西浦)



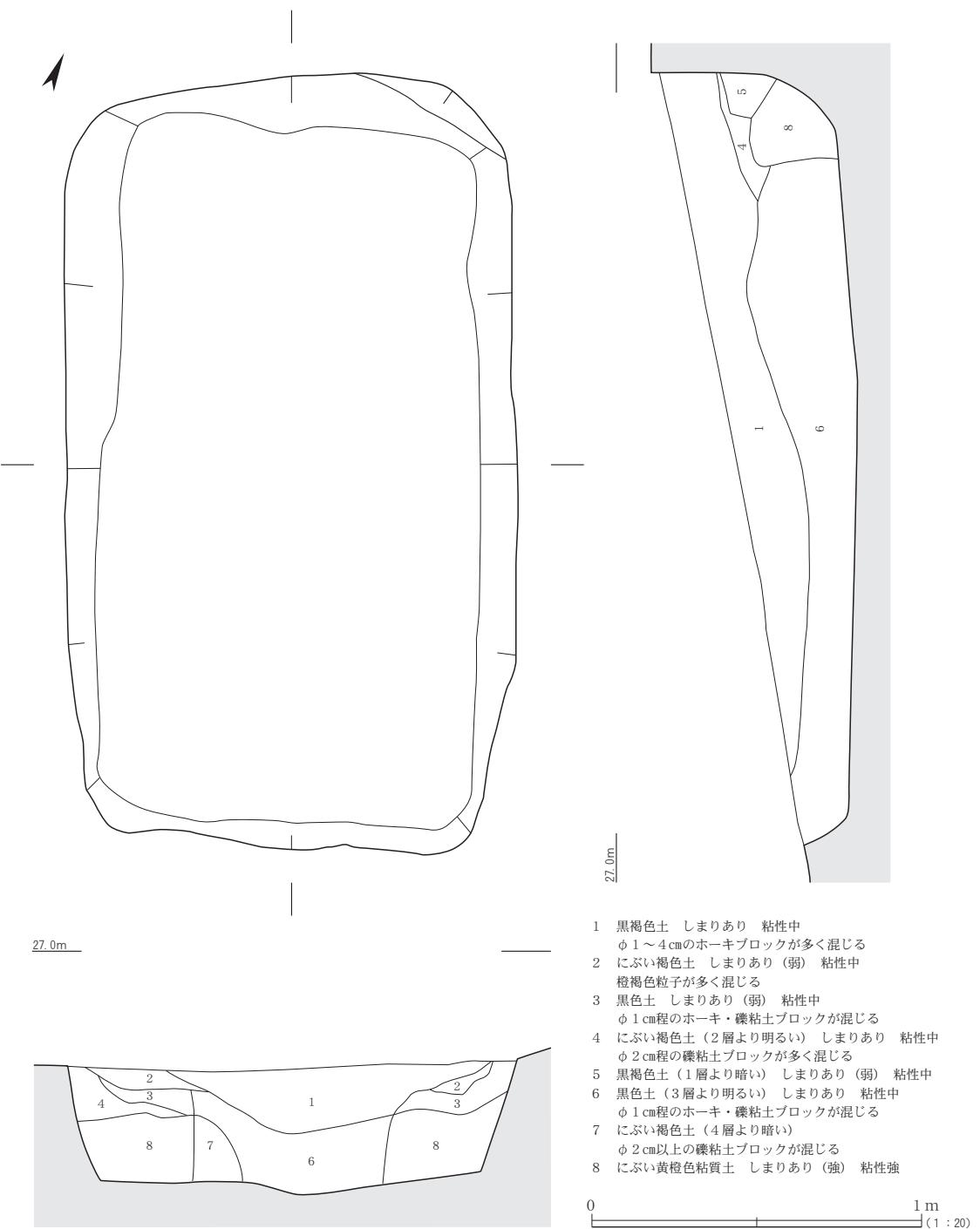
第40図 7号墳遺構図及び1号埋葬施設遺構図



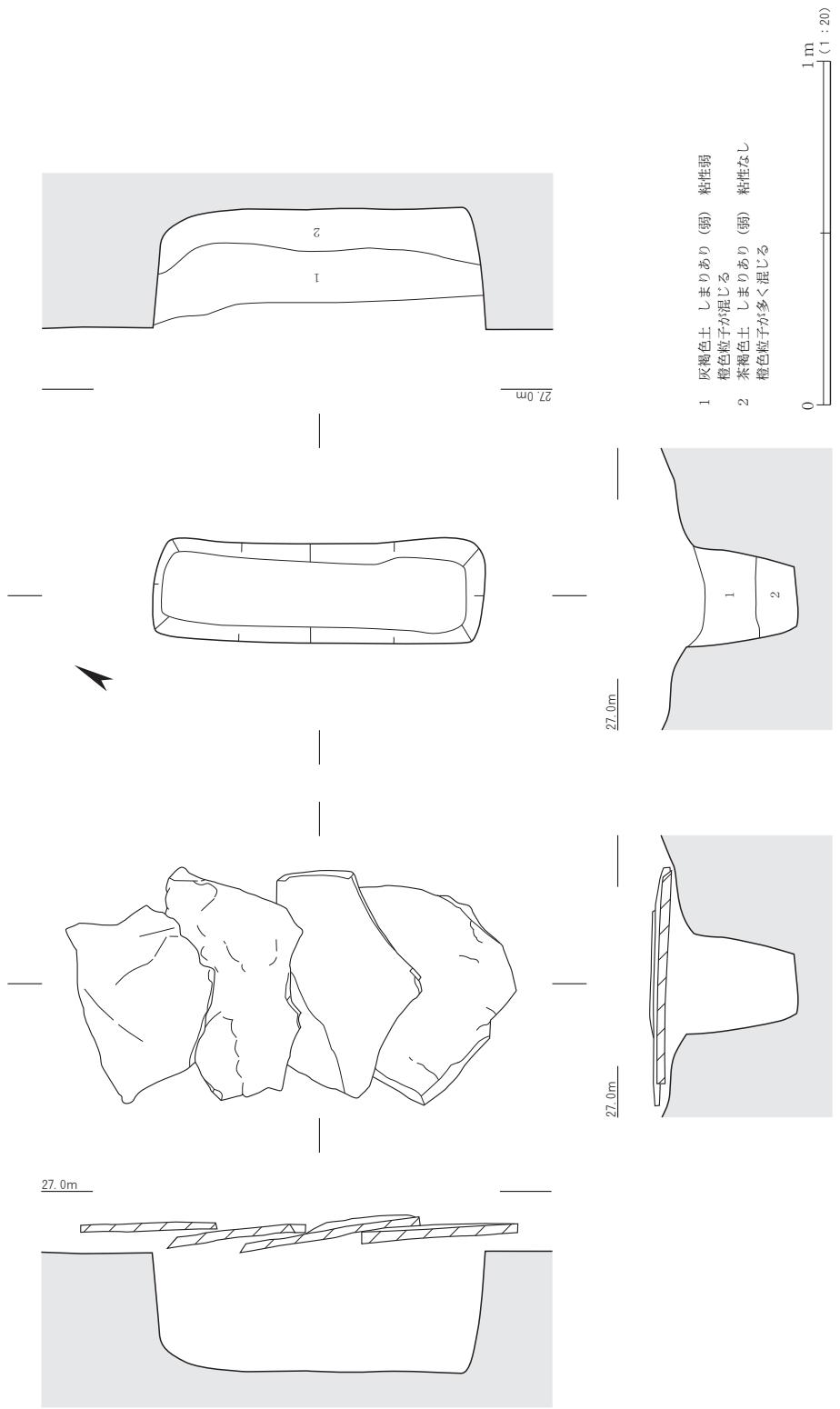
第41図 8号墳遺構図



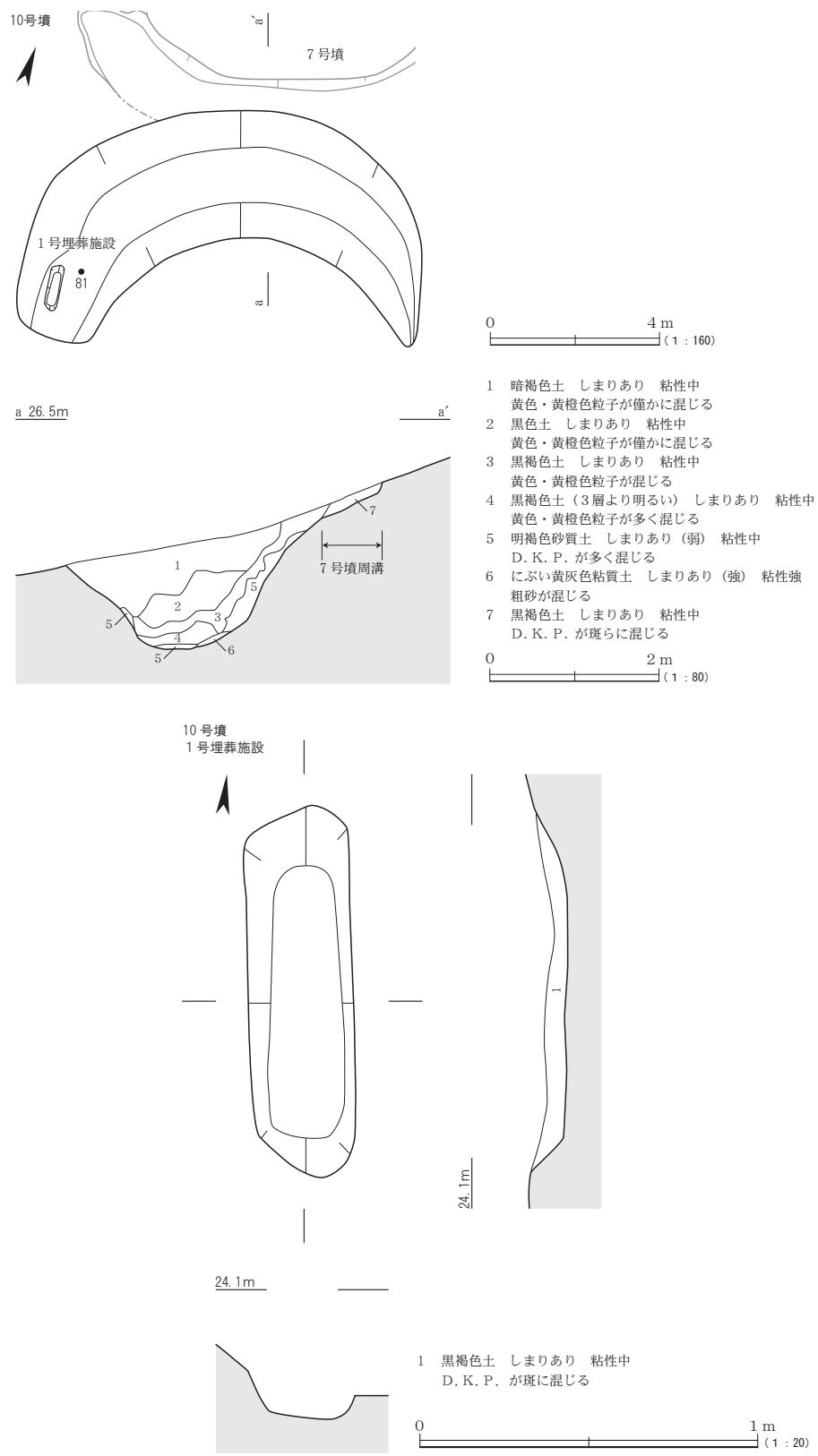
第42図 8号墳1号主体部遺構図



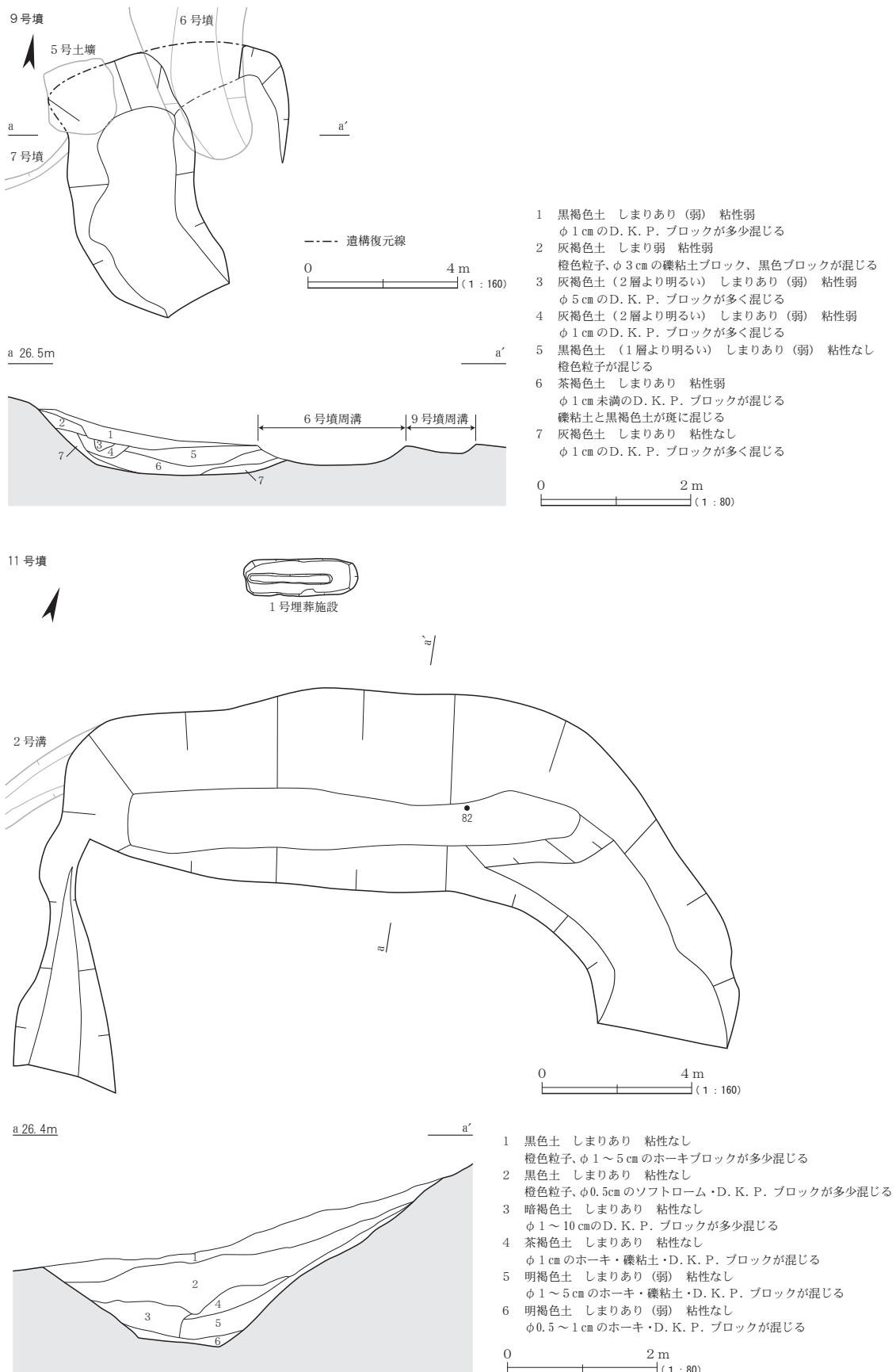
第43図 8号墳2号主体部遺構図



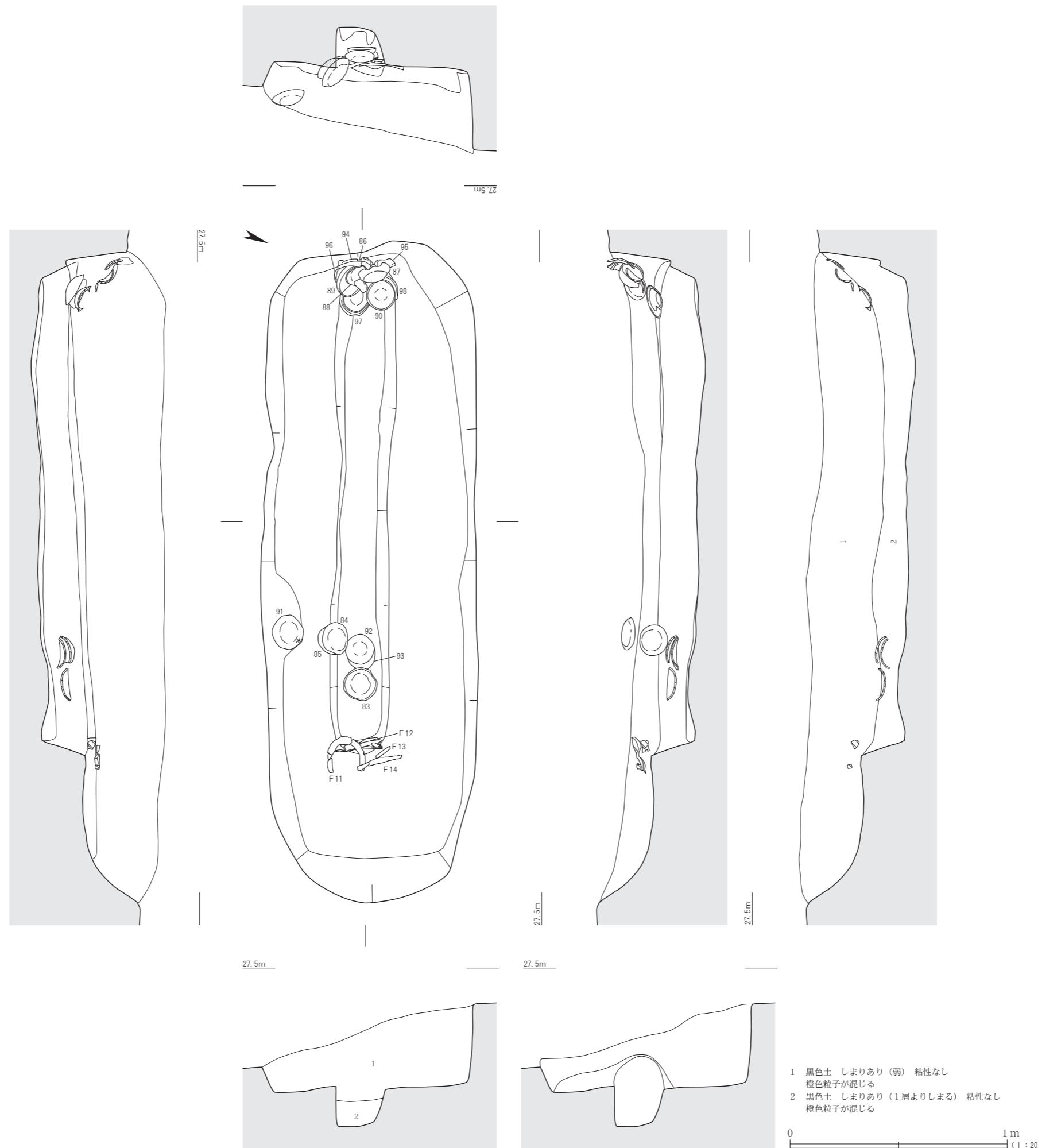
第44図 8号墳1号埋葬施設遺構図



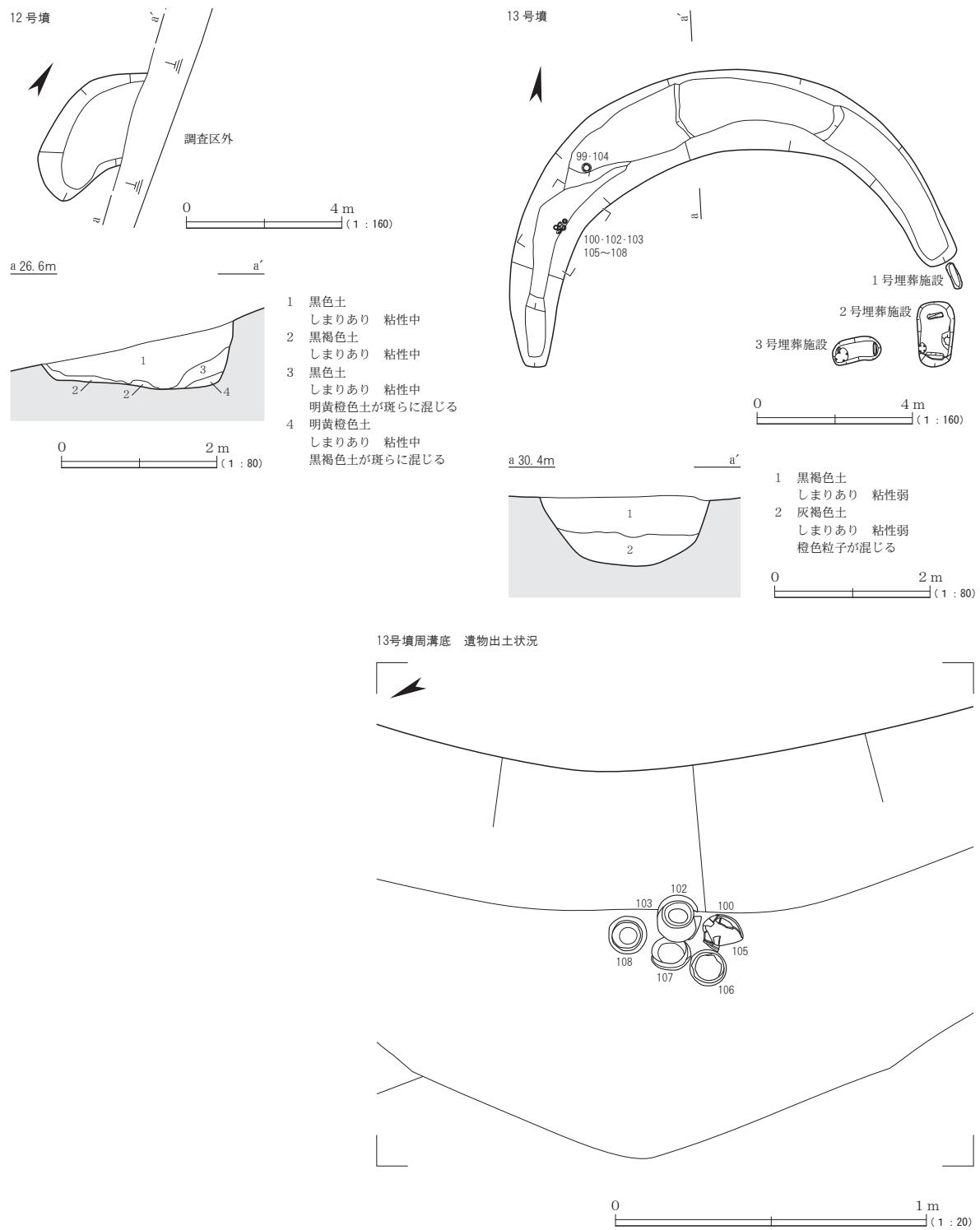
第45図 10号墳遺構図及び1号埋葬施設遺構図



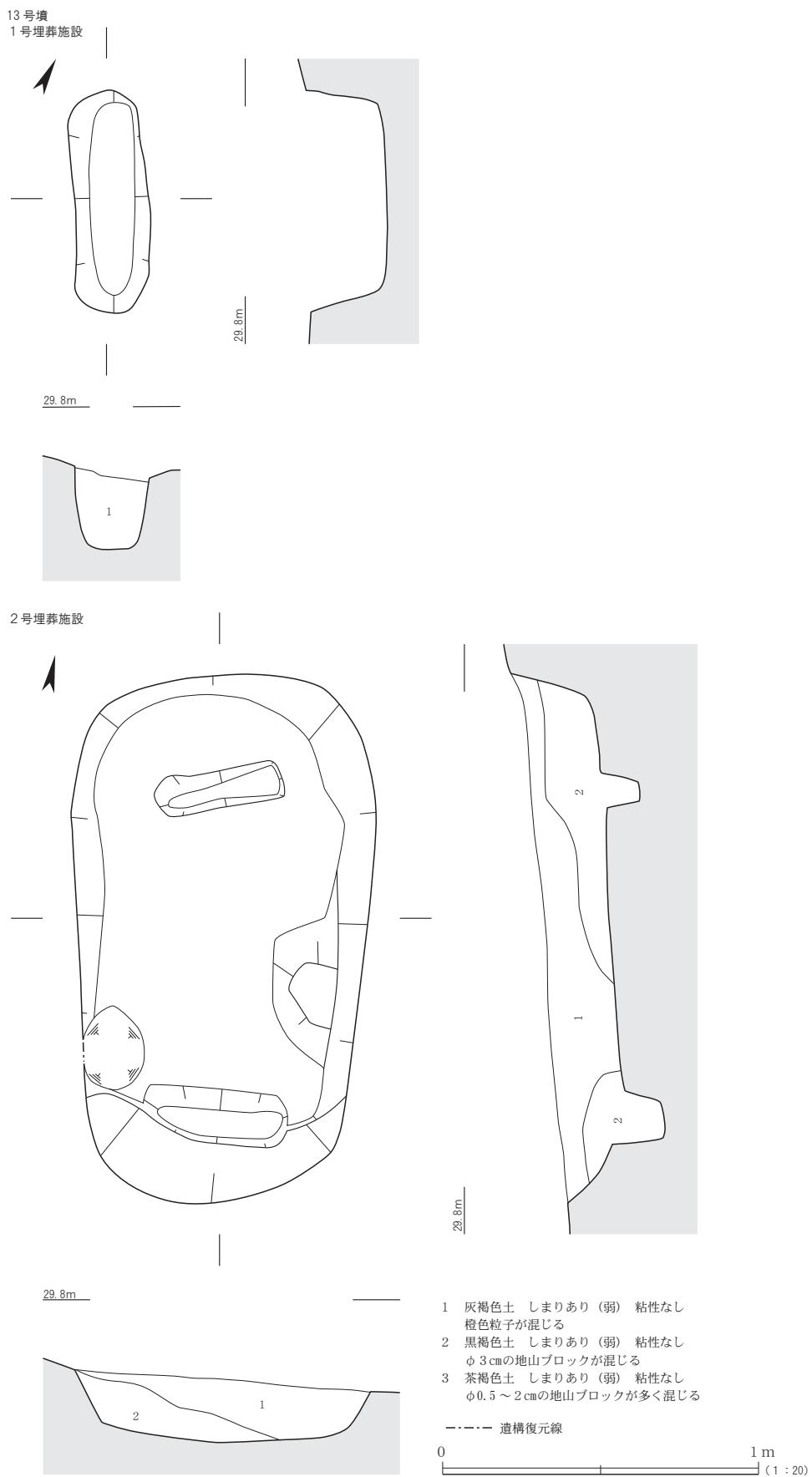
第46図 9号墳遺構図及び11号墳遺構図



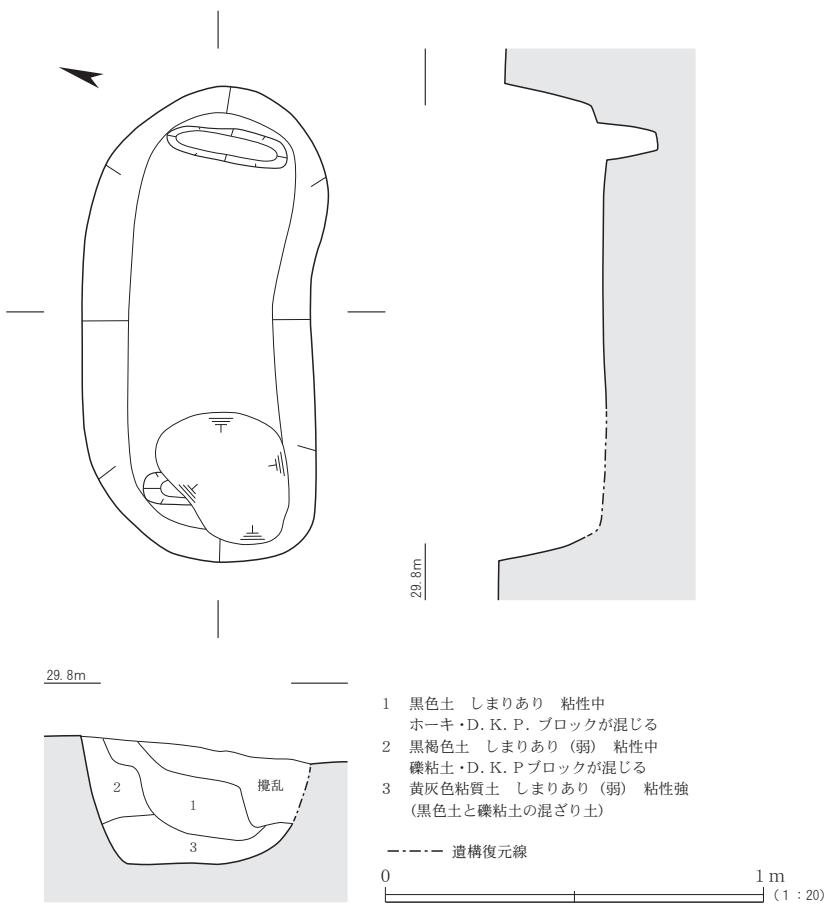
第47図 11号墳1号埋葬施設遺構図



第48図 12号墳遺構図、13号墳遺構図及び遺物出土状況図



第49図 13号墳1号・2号埋葬施設遺構図



第 50 図 13 号墳 3 号埋葬施設遺構図

14 号墳

調査区の東部、丘陵尾根上の標高 28 m 付近に立地する。周溝の一部を確認したのみで、東側の大部分が調査区外である。墳丘規模は不明。周溝の断面は浅いU字形を呈し、確認した肩部幅 1.8 m、検出面からの深さは最大 0.2 m を測る。周溝埋土から須恵器高坏（109）などが出土した。

主体部は確認していない。周溝内西側で埋葬施設を 2 基確認した。

1号埋葬施設 周溝内西側に位置する土壙墓で、北東側は調査区外である。主軸は N - 20° - E で、周溝に平行する。平面形は隅丸長方形を呈し、確認できた規模は長さ 0.75 m、幅は北東側が 0.2 m、南西側が 0.17 m と北東側が広く、深さ 0.34 m を測る。頭位は北東と推定される。埋土から遺物は出土しなかった。

2号埋葬施設 周溝内西側に位置する土壙墓である。主軸は N - 14° - W で、周溝に平行する。平面形は橢円形を呈し、規模は長さ 1.36 m、幅は北西側が 0.55 m、南東側が 0.4 m と北西側が広く、深さ 0.1 m を測る。頭位は北西側と推定される。埋土から遺物は出土しなかった。
(片岡)

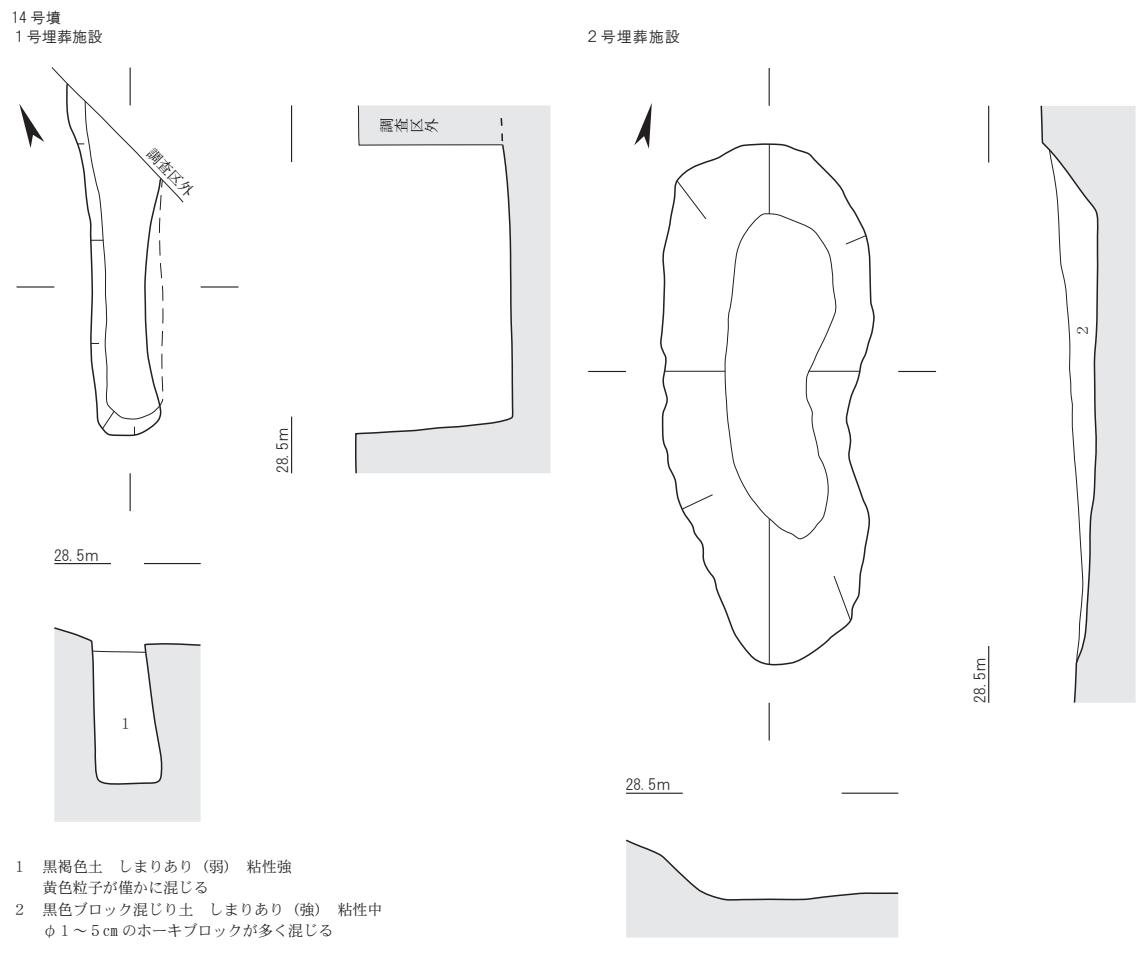
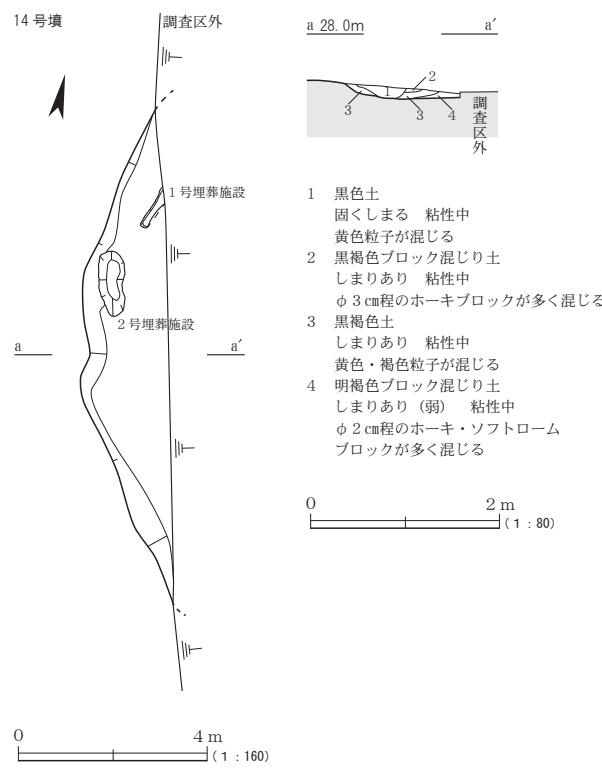
15 号墳

調査区の南東部、丘陵南斜面の標高 23 m 付近に位置する。周溝の一部を確認し、墳丘などは調査区外に位置する。周溝の断面形はU字形で、確認できた規模は幅 3.8 m、深さ最大 3.2 m を測る。周溝埋土から土師器片が出土した。

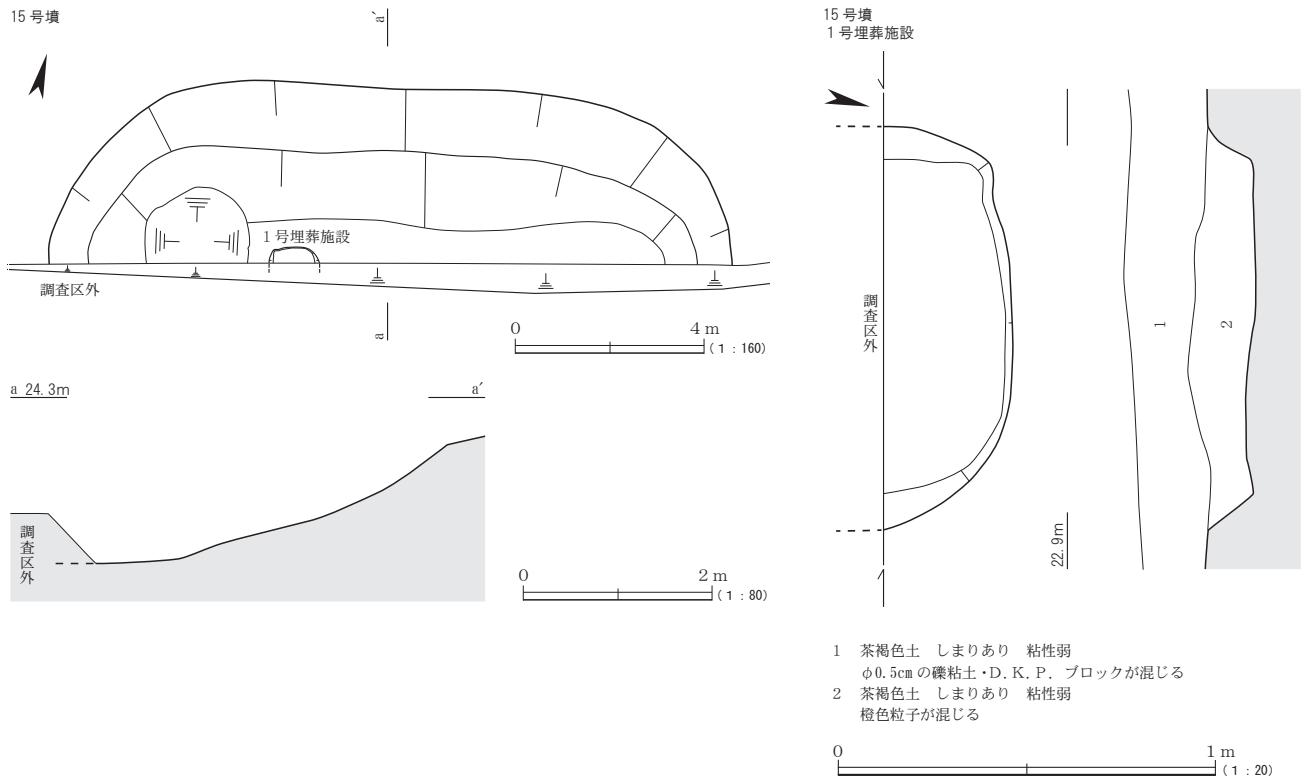
1号埋葬施設 周溝の西側に位置し、南側半分は調査区外に広がる。主軸は N - 36° - E。平面形は隅丸長方形を呈する。確認できた規模は長さ 1.1 m、幅 0.4 m、検出面からの深さは最大 0.2 m を測る。墓壙埋土から土師器甕（110）が出土した。
(西浦)

16 号墳

調査区の中央付近、丘陵尾根上の標高 29 ~ 30.5 m 付近に位置する円墳であり、7号土壙と切り合う。墳丘は



第51図 14号墳遺構図及び1号・2号埋葬施設遺構図



第52図 15号墳遺構図及び1号埋葬施設遺構図

削平されているが、規模は直径 20.7 m、周溝を含めて直径 24.2 m を測る。また、周溝東側の内縁に沿って墳丘下周溝と考えられる溝が巡り、規模は幅 1.8 ~ 2.5 m、検出面からの深さ 0.3 m を測る。

周溝は、攪乱に切られる西側を除き、途切れながら全周する。南東側では長さ 1.14 m、幅 0.52 m の範囲で外側に拡張されている。周溝の断面形はU字形で、幅 1.0 ~ 3.8 m、検出面からの深さは最大 0.6 m を測る。周溝内の南東側と拡張部で埋葬施設を 1 基ずつ確認した。また、周溝東側の底面で、土師器塊(111)と須恵器坏身(113)が正位で、須恵器坏蓋(112)と天地をひっくり返した須恵器坏身(114)が重ねられた状態で出土した。これらの土器はいずれも完形品で、供献状態を示すと考えられる。ほかに、南側の周溝埋土下層から須恵器有蓋高坏(116)、中層から須恵器罐(117)、南西側の周溝埋土下層から須恵器坏身(115)が出土した。

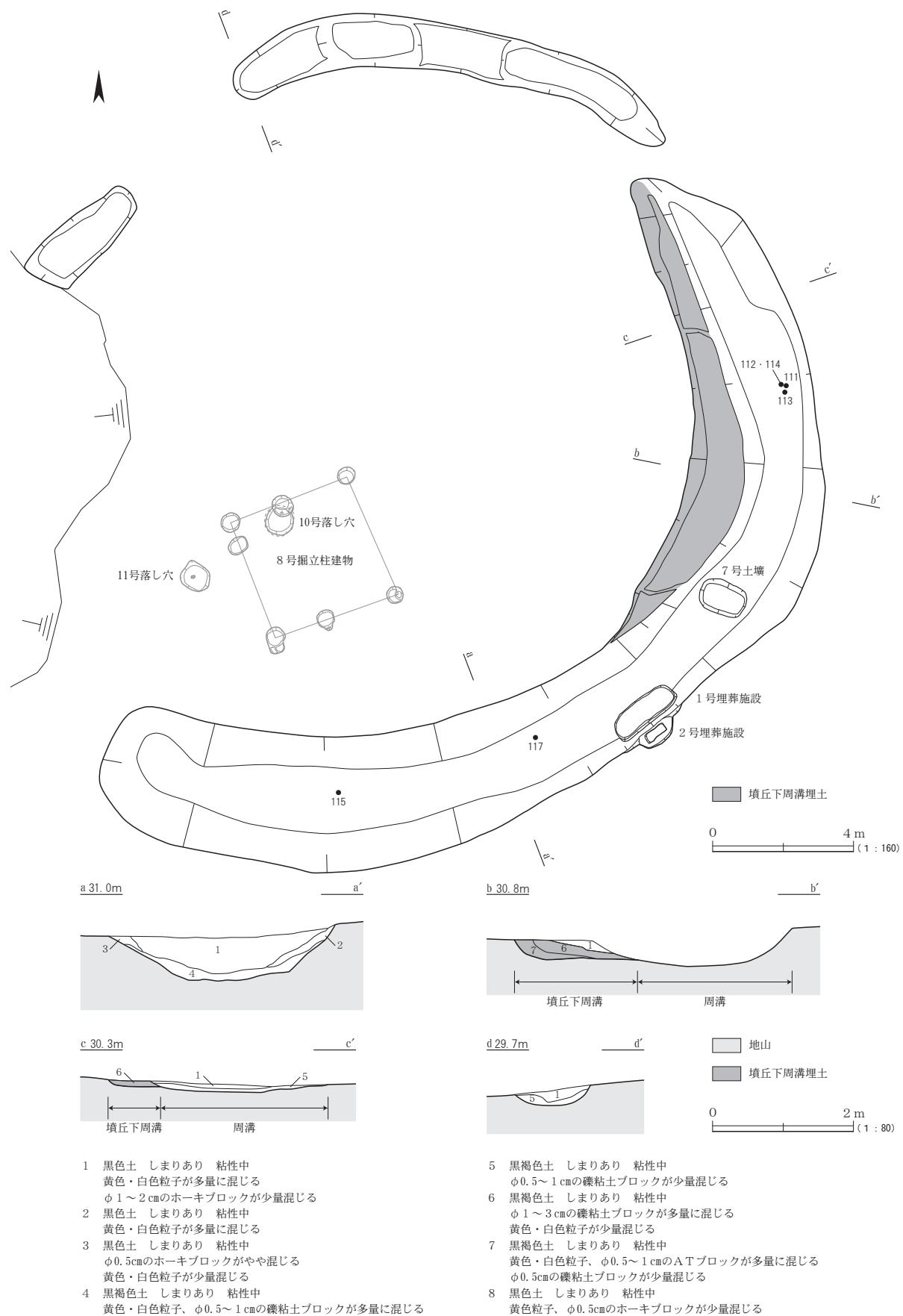
1号埋葬施設 周溝南東側の底面の外寄りに位置する土壙墓である。主軸は N - 51° - E で、周溝に平行する。墓壙の平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長さ 1.98 m、幅 0.70 m、検出面からの深さ 0.11 m を測る。頭位は北東側と推定される。墓壙埋土から土器片が出土した。

2号埋葬施設 周溝拡張部、1号埋葬施設の南東側に隣接する石蓋土壙墓である。主軸は N - 129° - W で、周溝に平行する。蓋石は 2 枚の石からなり、長さ 0.92 m、幅 0.58 m を測る。墓壙は二段掘りで、平面形は長方形を呈する。規模は上段が長さ 1.14 m、幅 0.52 m、検出面からの深さ 0.09 m、下段が長さ 0.65 m、幅は南西側で 0.28 m、北東側で 0.26 m と南西側がわずかに広く、深さ 0.13 m を測る。頭位は南西側と推定される。副葬品としては、墓壙埋土から淡青色のガラス小玉(J 21)が出土した。また、墓壙埋土から土器片が出土した。

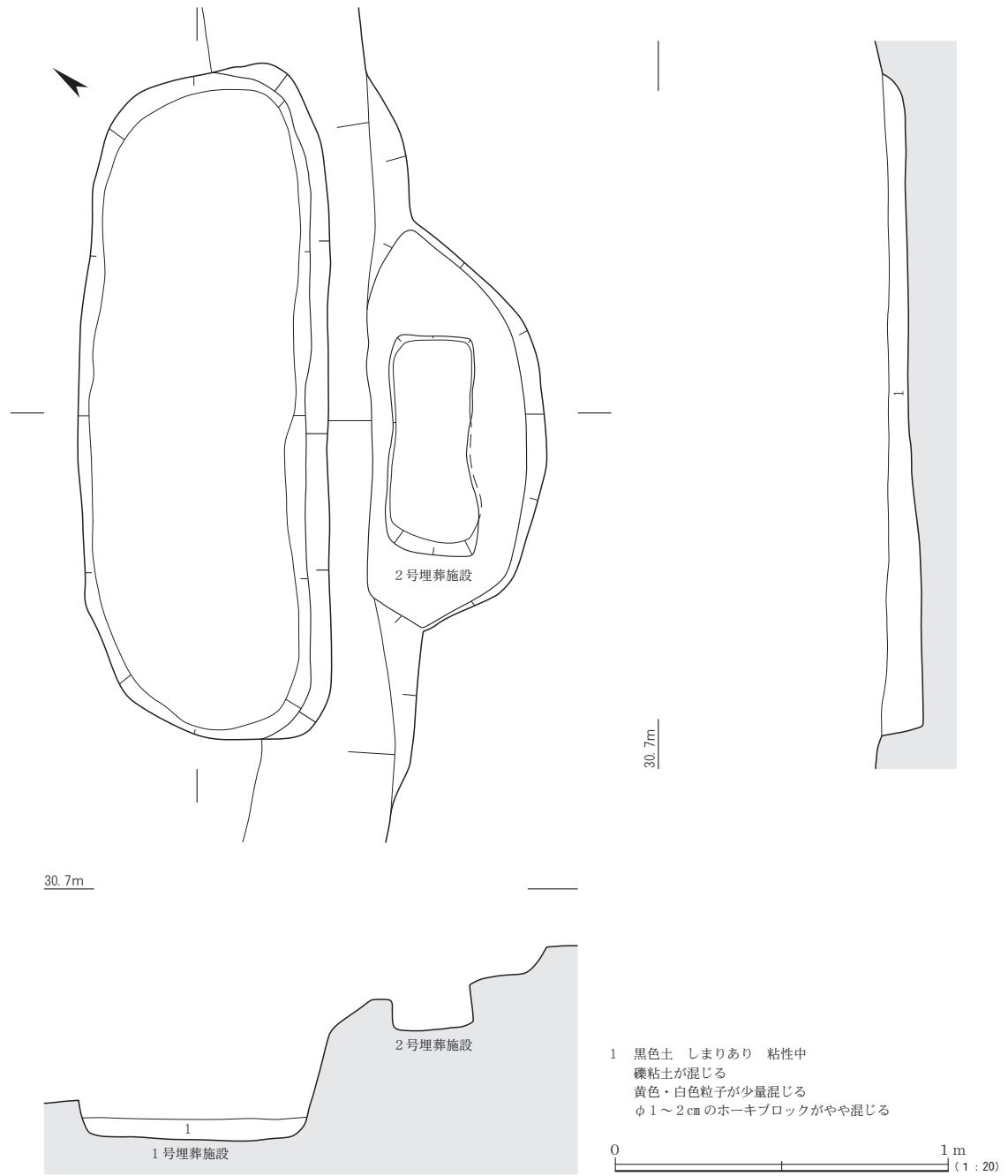
(小田)

17号墳

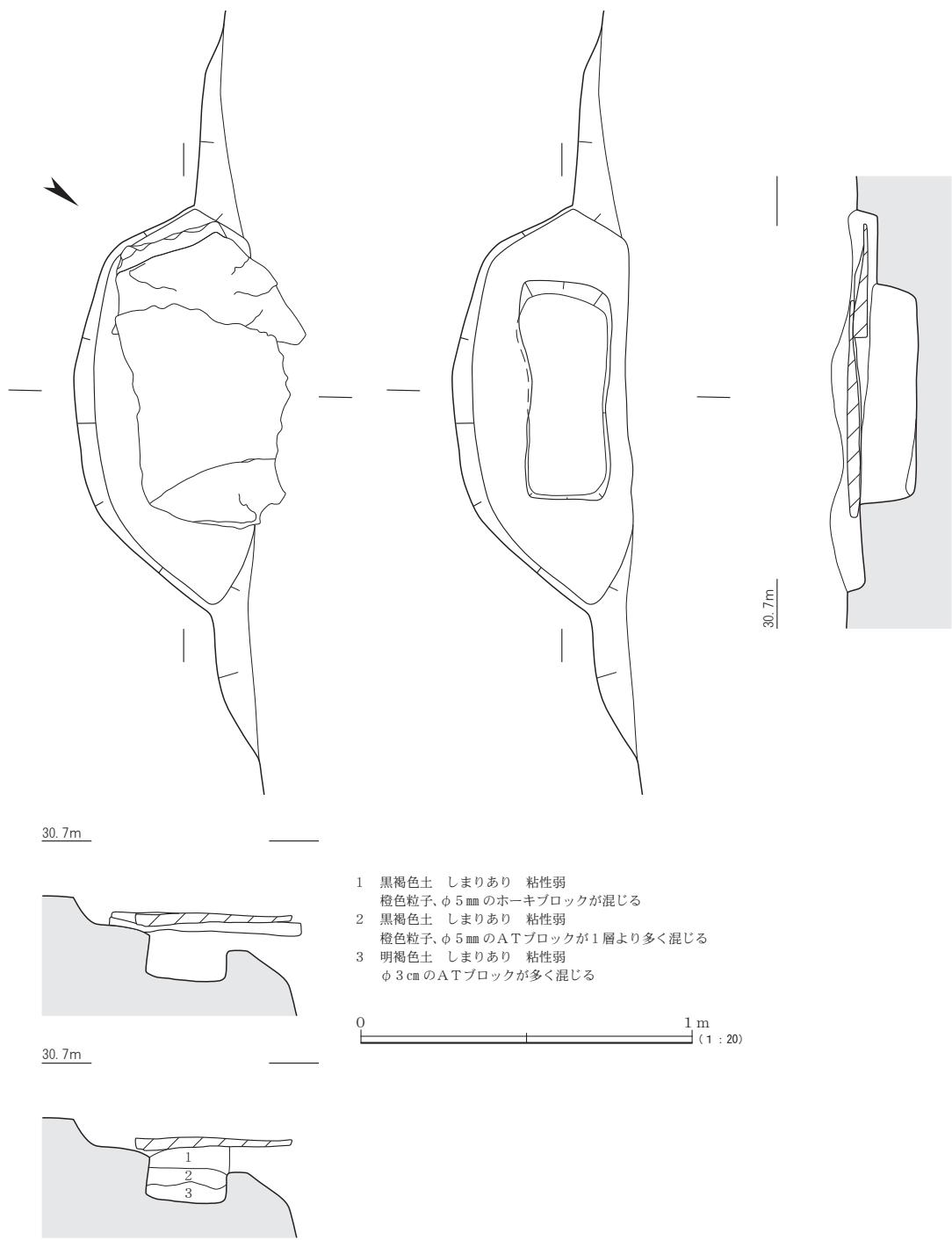
16号墳から南西へ約 5 m 離れた、丘陵尾根上の標高 30.5 m 付近に位置する円墳である。墳丘は削平されるだけでなく、墳丘上を横断して走っていた幅約 2.3 m の里道により大きく攪乱されて、1/4 以下が遺存する。復元される墳丘の規模は直径 10.0 m、周溝を含めて直径 13.8 m である。



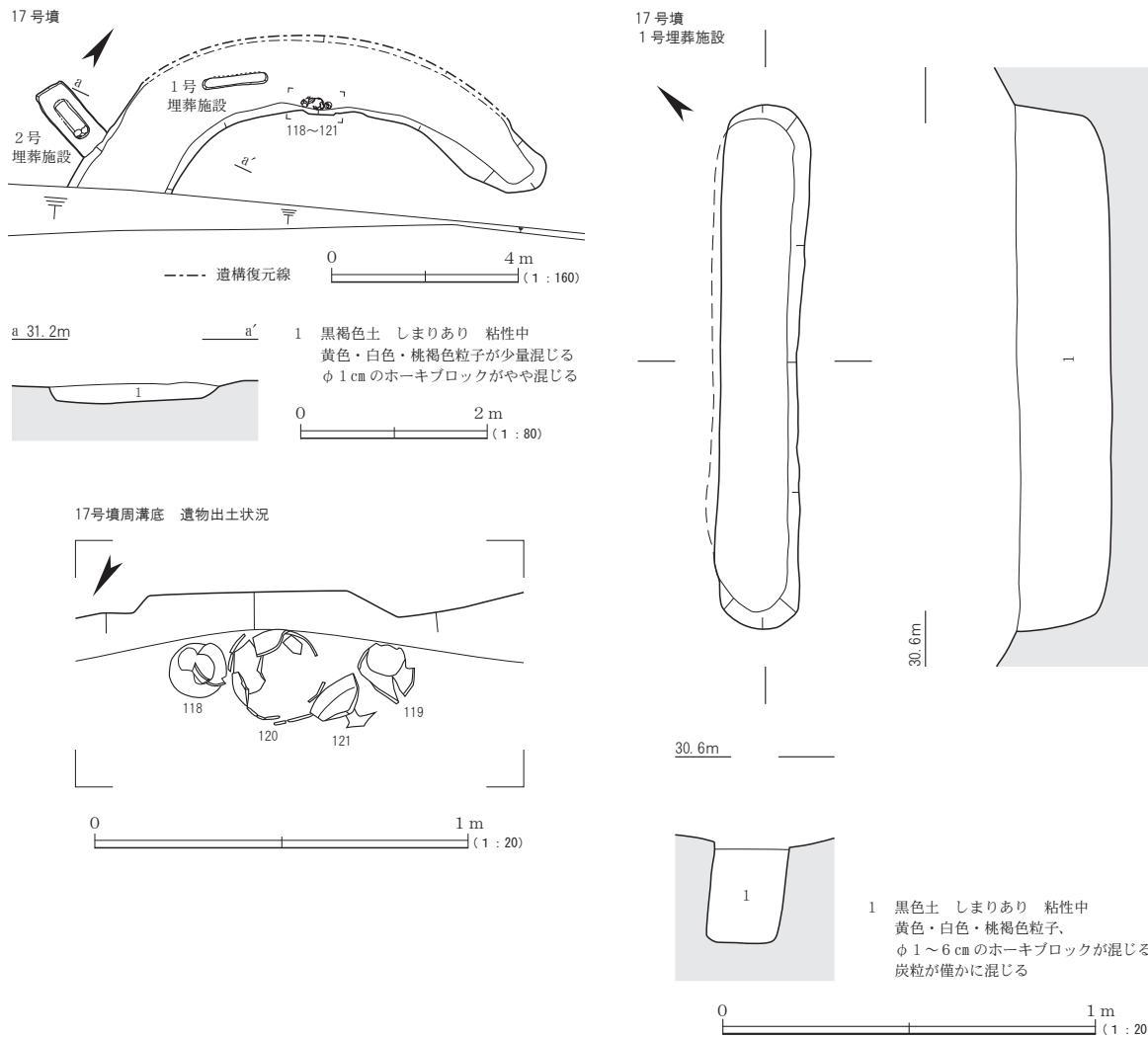
第53図 16号墳構造図



第 54 図 16 号墳 1 号埋葬施設遺構図



第 55 図 16 号墳 2 号埋葬施設遺構図



第 56 図 17 号墳遺構図、遺物出土状況図及び 1 号埋葬施設遺構図

周溝もわずかに遺存し、断面形は逆台形で、幅 1.0 ~ 1.9 m、検出面からの深さは最大 0.2 m を測る。周溝内の北西側と周溝外の西側で埋葬施設を 1 基ずつ確認した。

また、周溝北西側の底面では、土師器直口壺 (118・119)、甕 (120)、高坏 (121)、塊 (122) が供献状態で出土した。

1号埋葬施設 周溝北西側の底面に位置する土壙墓である。主軸は N - 75° - E で、周溝に平行する。墓壙の平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長さ 1.40 m、幅は北東側で 0.23 m、南西側で 0.22 m と北東側がわずかに広く、検出面からの深さ 0.24 m を測る。頭位は北東側と推定される。墓壙埋土から土器片が出土した。

2号埋葬施設 周溝外の西側に位置する石蓋土壙墓である。主軸は N - 77.5° - W で、周溝にほぼ直交する。蓋石は 5 枚の安山岩板石と 1 枚の安山岩塊石を重ねたもので、長さ 1.50 m、幅 0.71 m を測る。墓壙は二段掘りで、平面形は長方形を呈する。規模は上段が長さ 1.64 m、幅 0.73 m、検出面からの深さ 0.07 m、下段が長さ 0.95 m、幅は北西側で 0.36 m、南東側で 0.32 m と北西側が広く、深さ 0.26 m を測る。底面の北西小口側には 2 枚の安山岩板石を V 字状に組んだ枕が置かれていて、頭位は北西側と推定される。墓壙内から遺物は出土しなかった。

(小田)

18号墳

調査区の中央部、丘陵尾根上の標高 30 m 付近に立地する円墳である。墳丘は削平されているが、規模は直径 15.4 m、周溝を含めて直径 17.6 m を測る。周溝は斜面の高い側にあたる北側で約 1/3 を検出した。周溝の断面

は逆台形で、肩部幅 1.9 m、検出面からの深さは最大 0.2 m を測る。墳丘寄りの西側周溝底 2 箇所で、据えられた土師器甕の底部のみが出土しており、供献土器と考えられる。また、埋土中層からは土師器片などが出土した。

主体部や周溝内埋葬施設は確認していない。

(橋本)

19号墳

調査区の中央部、丘陵南肩部の標高 29.5 ~ 30.5 m 付近に立地する円墳であり、西側で 20 号墳周溝、北東側で 9 号竪穴建物を切る。墳丘は削平されているが、規模は直径約 14 m、周溝を含めて直径 15.9 m を測る。周溝は斜面の高い側にあたる北西側で約 1/3 を検出した。周溝の断面は逆台形で、肩部幅 1.9 m、検出面からの深さは最大 0.4 m を測る。周溝北側の底面で土師器小型丸底壺 (124)、北西側の底面で土師器直口壺 (123)、甕 (125) が出土し、西側の底面で土師器甕 (126・127) が正位で据えられた状態で出土した。また、周溝埋土上層から平底の瓦質土器片が出土した。

主体部や周溝内埋葬施設は確認していない。

(橋本)

20号墳

調査区の中央部、丘陵南肩部の標高 29.5 ~ 30 m 付近に立地する円墳である。東側を 19 号墳に切られており、西側は削平されている。墳丘は削平されているが、規模は直径約 13 m、周溝を含めて直径 14.6 m を測る。周溝は斜面の高い側にあたる北側で約 1/3 を検出した。周溝の断面は U 字形で、肩部幅 1.6 m、検出面からの深さは最大 0.4 m を測る。周溝内西側の底面で土師器甕 (128) が正位で据えられた状態で出土した。また、周溝埋土中層から下層で土師器小片が出土した。

主体部や周溝内埋葬施設は確認していない。

(橋本)

21号墳

調査区の南西部、丘陵南肩部の標高 29 ~ 29.5 m 付近に立地する円墳であり、東側で 11 号竪穴建物を切り、北側で 8 号溝に切られる。墳丘は削平されているが、規模は直径約 15 m、周溝を含めて直径 18.5 m を測る。周溝は斜面の高い側にあたる北側で約 1/3 を検出した。周溝の断面は U 字形で、肩部幅 3.4 m、検出面からの深さは最大 0.9 m を測る。周溝西側の底面で土師器甕 (130) が正位で据えられた状態で出土し、北側の底面で土師器高坏 (131 ~ 135) が破片となって散らばった状態で出土した。周溝埋土下層から土師器直口壺 (129)、埋土中層から土師器小片、須恵器壺、埋土上層から須恵器小片、丹塗り土師器小片が出土した。

主体部は確認していない。周溝内北東側で埋葬施設を 1 基確認した。

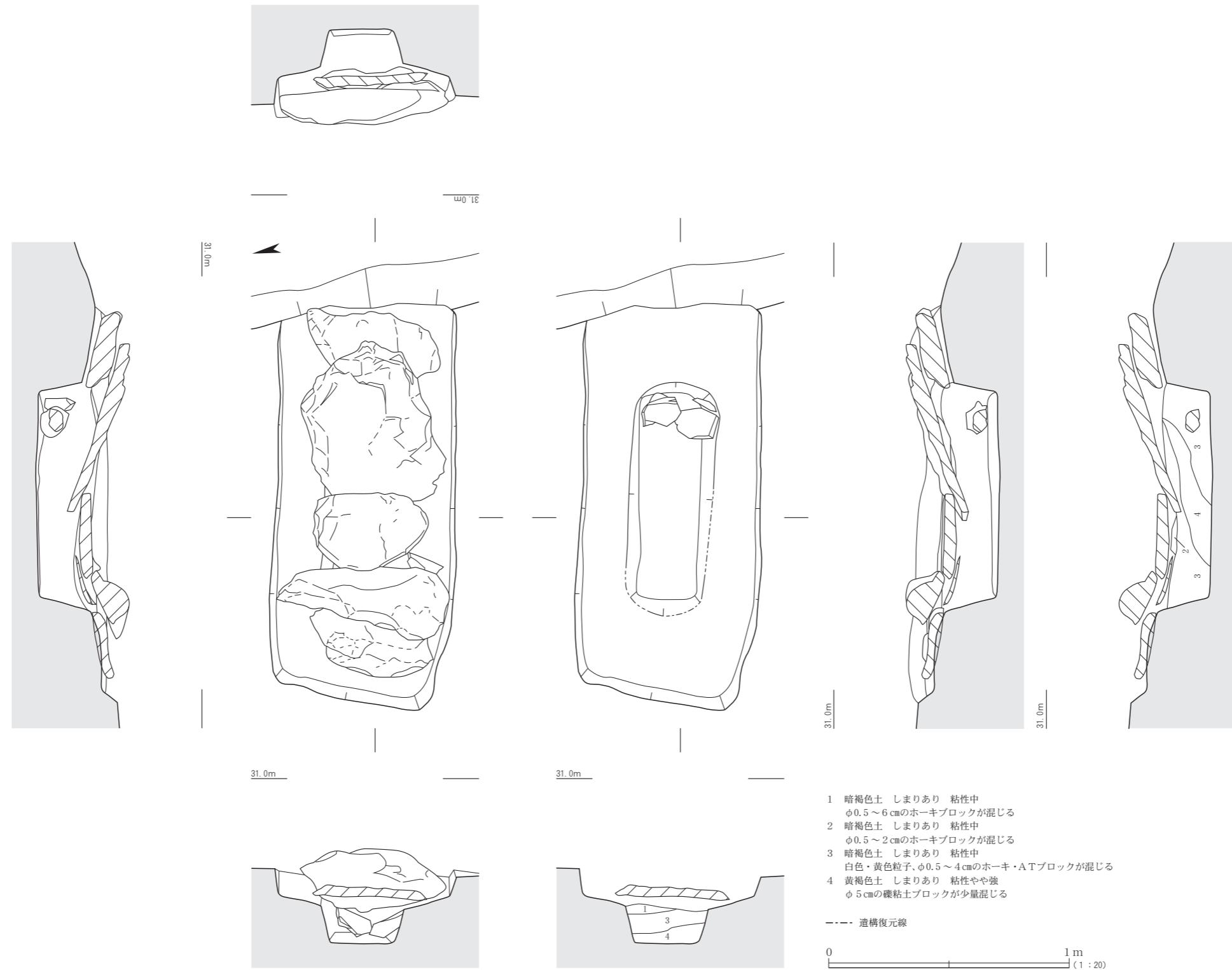
1号埋葬施設 周溝内北東側に位置し、周溝の壁を掘りこんで造られた土壙墓である。主軸は N - 20° - W で、周溝に平行する。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長さ 1.3 m、幅は東側で 0.4 m、西側で 0.44 m と西側がわずかに広く、深さ 0.3 m を測る。頭位は西側と推定される。墓壙内から土師器小片が出土した。 (橋本)

22号墳

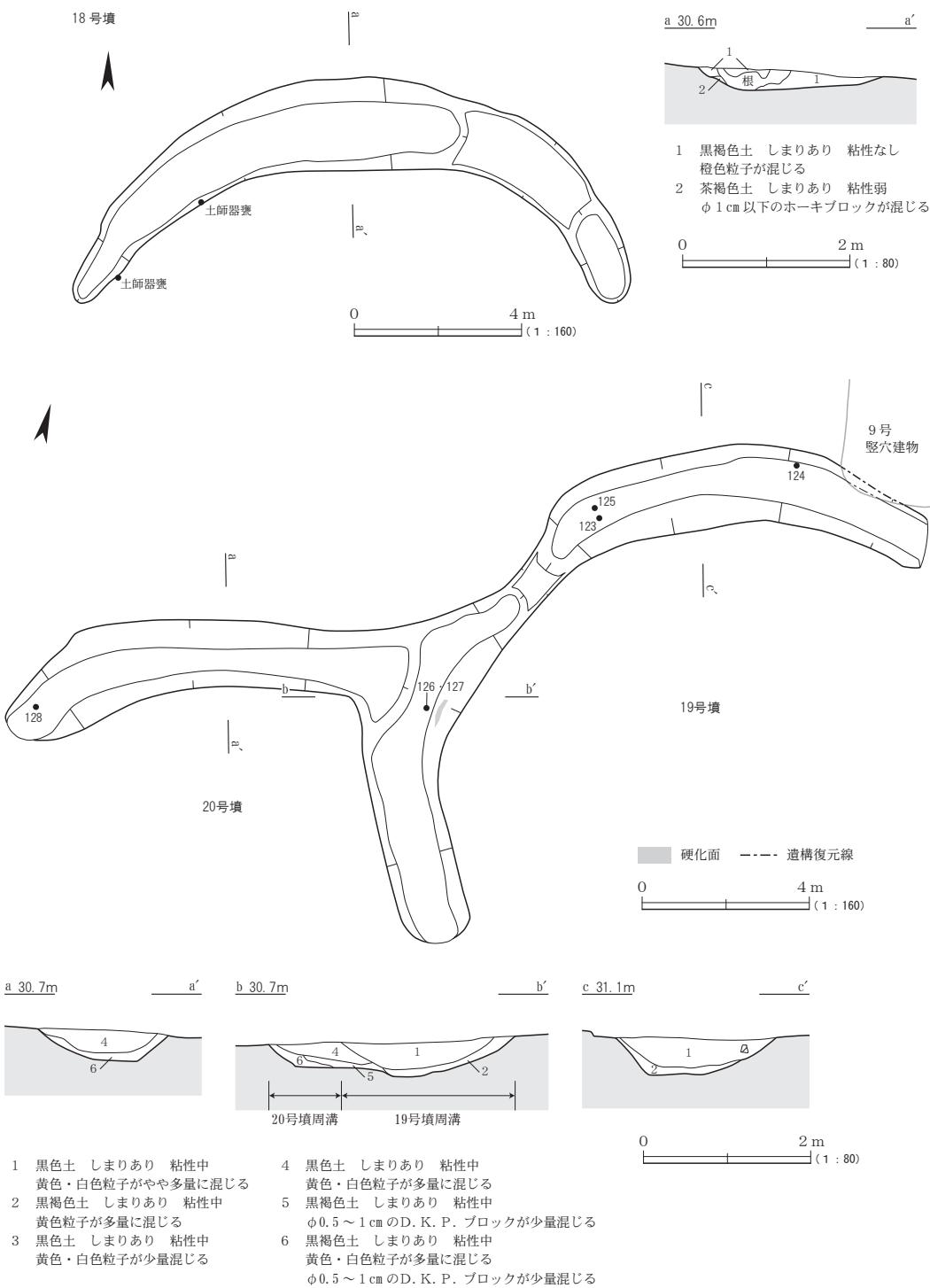
調査区の南部、丘陵南斜面の標高 28 ~ 29 m 付近に立地する円墳である。墳丘は削平されているが、規模は直径約 14 m、周溝を含めて直径 16.5 m を測る。周溝は斜面の高い側にあたる北西側で約 1/2 を検出した。周溝の断面は逆台形で、肩部幅 2.2 m、検出面からの深さは最大 1.1 m を測る。周溝西側の底面で土師器直口壺 (136)、須恵器坏身 (138)、周溝埋土中層から土師器甕 (137) が出土した。

主体部は確認していない。周溝内北西側で埋葬施設を 2 基確認した。

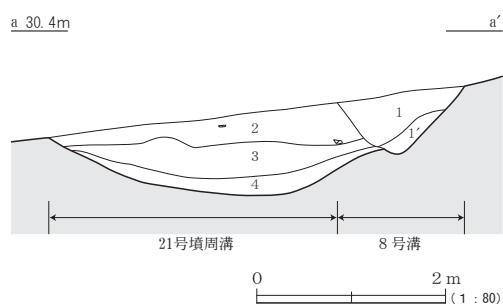
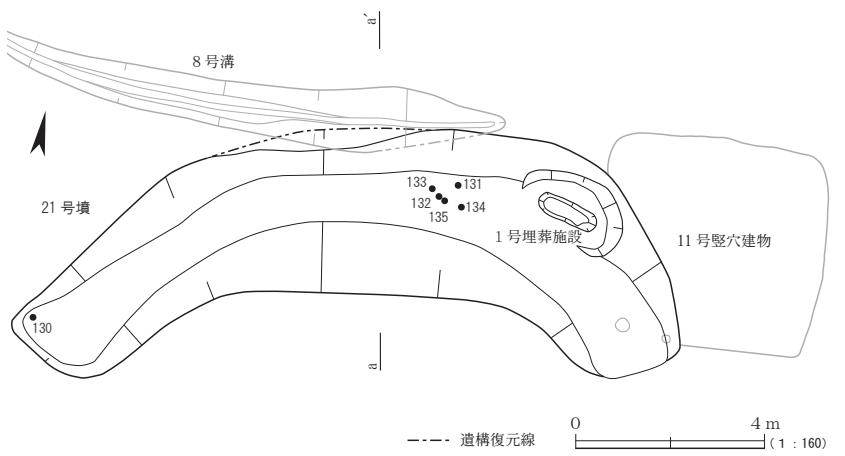
1号埋葬施設 周溝内北西側に位置する土壙墓である。主軸は N - 60° - W で、周溝に平行する。平面形は長方形を呈し、規模は長さ 2.2 m、幅は北東側で 0.5 m、南西側で 0.4 m と北東側が広く、深さ 0.3 m を測る。頭位は北東側と推定される。墓壙埋土から遺物は出土しなかった。



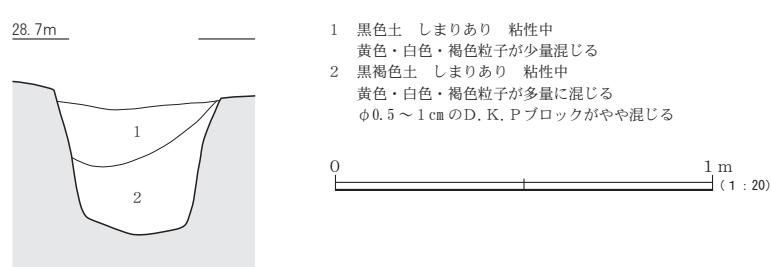
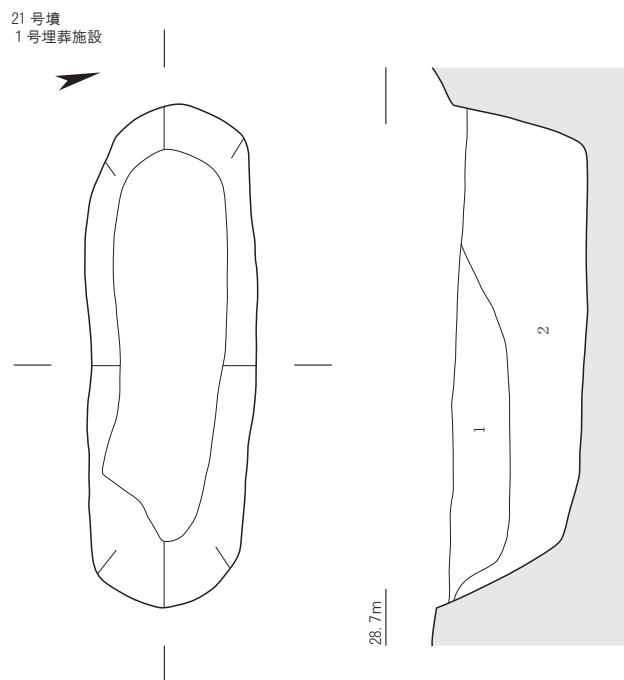
第 57 図 17 号墳 2 号埋葬施設遺構図



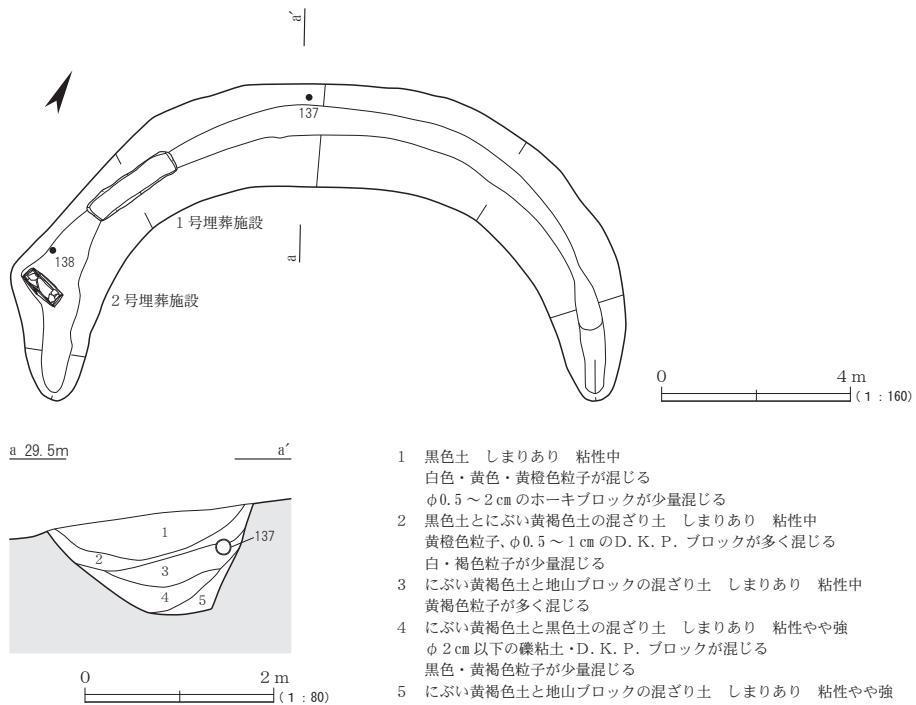
第58図 18号～20号墳遺構図



- 1 黒褐色土 しまりあり 粘性中
白色・黄色粒子、炭粒、 $\phi 0.5\text{cm}$ のホーキブロックが少量混じる
- 1' 黒褐色土 しまりあり 粘性中
1層に黄橙色粒子、 $\phi 1\text{cm}$ のD. K. P. ブロックが混じる
- 2 黒褐色土 しまりあり 粘性中
白色・黄色・褐色粒子、炭粒が混じる
- 3 黒色土 しまりあり 粘性中
白色・褐色粒子が少量混じる
- 4 黒褐色土 しまりあり (やや弱) 粘性中
黄橙色粒子、 $\phi 0.5\sim1\text{cm}$ のD. K. P. ブロックが多く混じる
 $\phi 4\text{cm}$ のホーキブロックが僅かに混じる



第 59 図 21 号墳遺構図及び 1 号埋葬施設遺構図



第 60 図 22 号墳遺構図

2号埋葬施設 周溝内北西側に位置し、周溝の壁を掘りこんで造られた箱式石棺墓である。主軸はN—10°—Wで、周溝に直交する。墓壙は隅丸長方形を呈し、規模は長さ0.9m、幅は0.5m、深さは0.3mである。蓋石は、大小の安山岩板石が5枚重なっていた。石棺は板石を用いて、小口石が1枚ずつ、側石が2枚ずつで構成される。石棺規模は、内法で長さ0.8m、幅は東小口側で0.22m、西小口側で0.2mと東小口側が広く、側石上面から棺床までの深さは0.19mを測る。石棺は、両側石が両小口石を挟み込むように組み合わせられ、棺床には大小の板石が3枚敷かれている。棺床の東小口側には2枚の板石をV字状に組んで枕が置かれており、頭位は東側と推定される。副葬品は出土しなかった。

(橋本)

23号墳

調査区の南部、丘陵南斜面の標高28～28.5m付近に立地する円墳である。墳丘は削平されており、推定される規模は直径約14.5m、周溝を含めて直径17.1mを測る。周溝は斜面の高い側にあたる北側で約1/4を検出した。周溝の断面はU字形で、肩部幅2.8m、検出面からの深さは最大0.7mを測る。周溝北側の底面で土師器直口壺(139)、甕(140)がそれぞれ正位で横並びに据えられた状態で出土した。また、周溝埋土中層から下層で土師器小片が出土した。

主体部や周溝内埋葬施設は確認していない。

(橋本)

24号墳

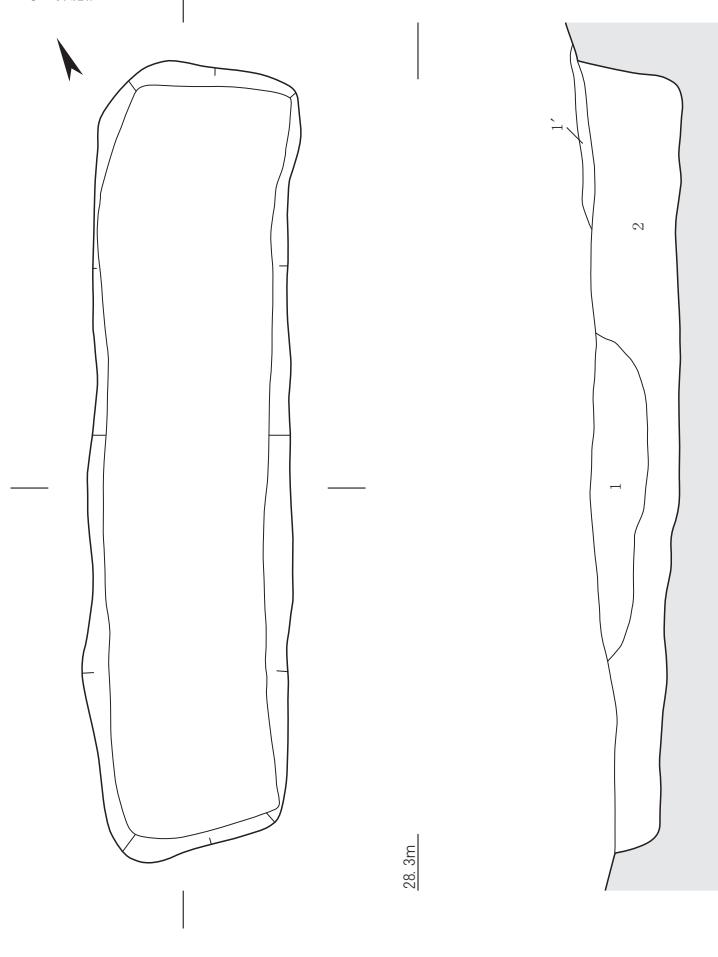
調査区の南部、丘陵南斜面の標高25.5～26.5m付近に立地する円墳である。墳丘は削平されているが、規模は直径約15m、周溝を含めて直径16.4mを測る。周溝は斜面の高い側にあたる北側で約1/3を検出した。周溝の断面はU字形で、肩部幅1.5m、検出面からの深さは最大0.7mを測る。周溝北東側の底面で土師器直口壺(141)が横倒しになった状態で出土した。

主体部を1基確認した。周溝内埋葬施設は確認していない。

1号主体部 墳丘頂部北寄りに位置する土壙墓で、南東側を2号溝に切られる。主軸はN—90°—Eで、墓壙の平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長さ1.4m、幅は西側で0.88m、復元した東側で0.86m検出面からの深さ0.2mを測る。墓壙の幅から、頭位は西側と推定される。墓壙内から土師器細片が出土した。

(橋本)

22号墳
1号埋葬施設

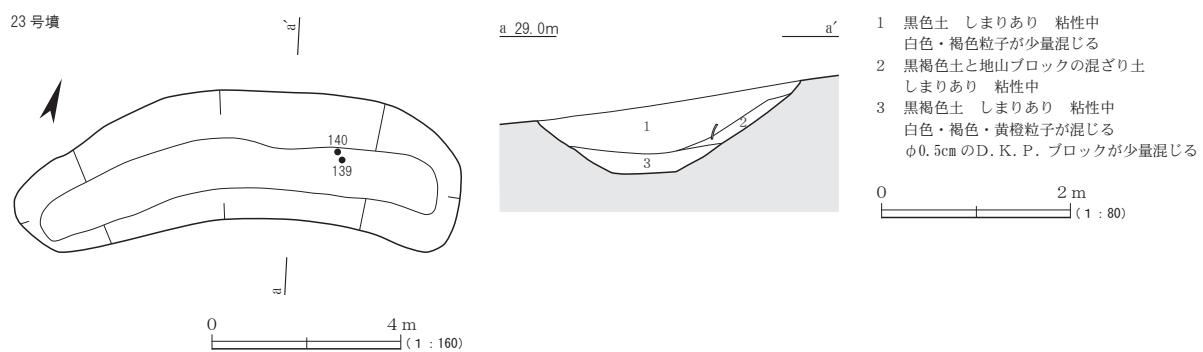


28.3m

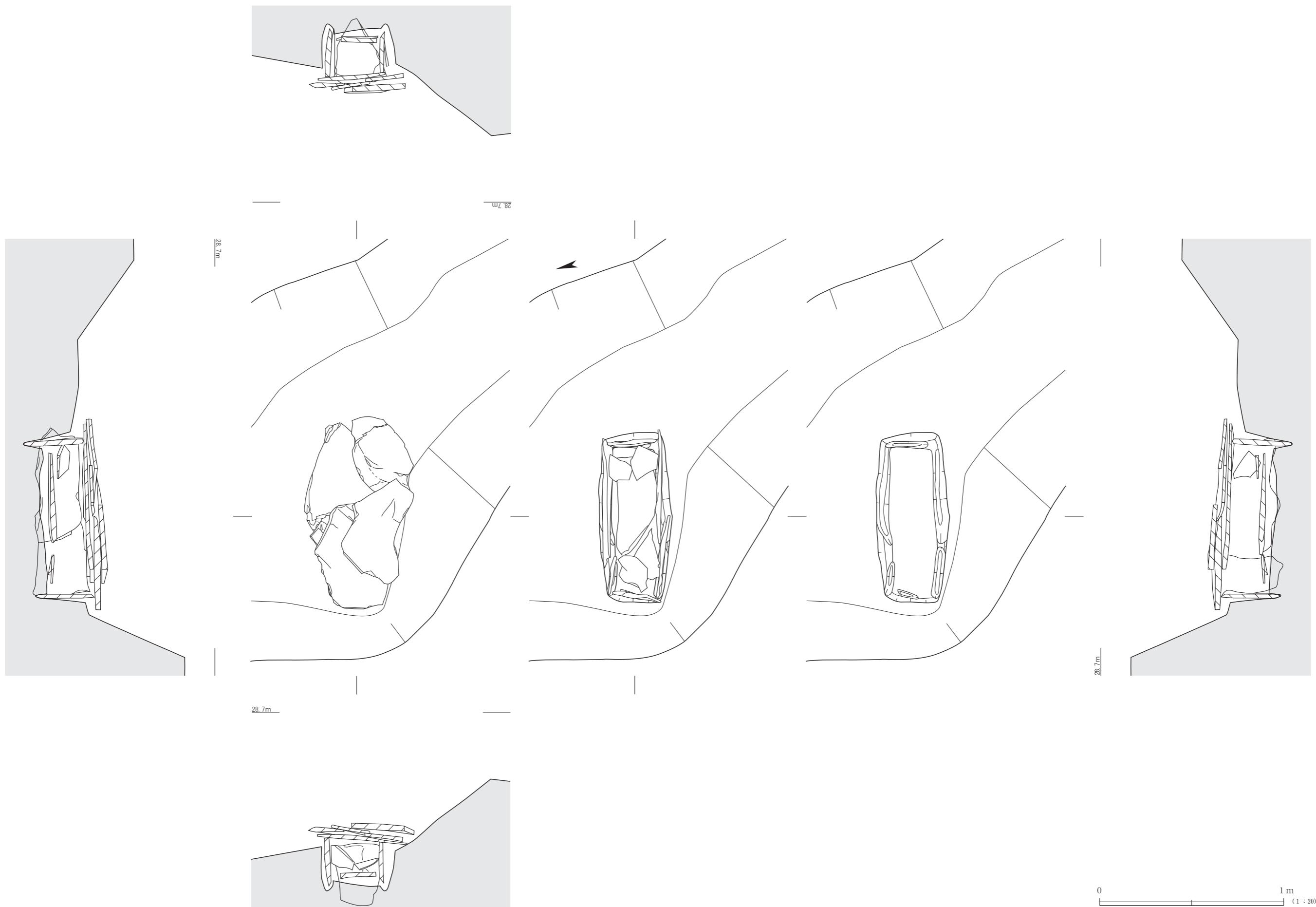
- 1 黒色土 しまりあり 粘性中
黄色・白色・褐色粒子が多量に混じる
 $\phi 0.5 \sim 1\text{ cm}$ の礫粘土・D, K, P. ブロックが少量混じる
1' 黒色土 しまりあり 粘性中
黄色・白色・褐色粒子が多量に混じる
 $\phi 0.5 \sim 1\text{ cm}$ のD, K, P. ブロックが少量混じる
2 黒褐色土 しまりあり 粘性中
黄色・白色粒子が多量に混じる
 $\phi 1 \sim 2\text{ cm}$ のD, K, P. ブロックが少量混じる

0 1 m (1 : 20)

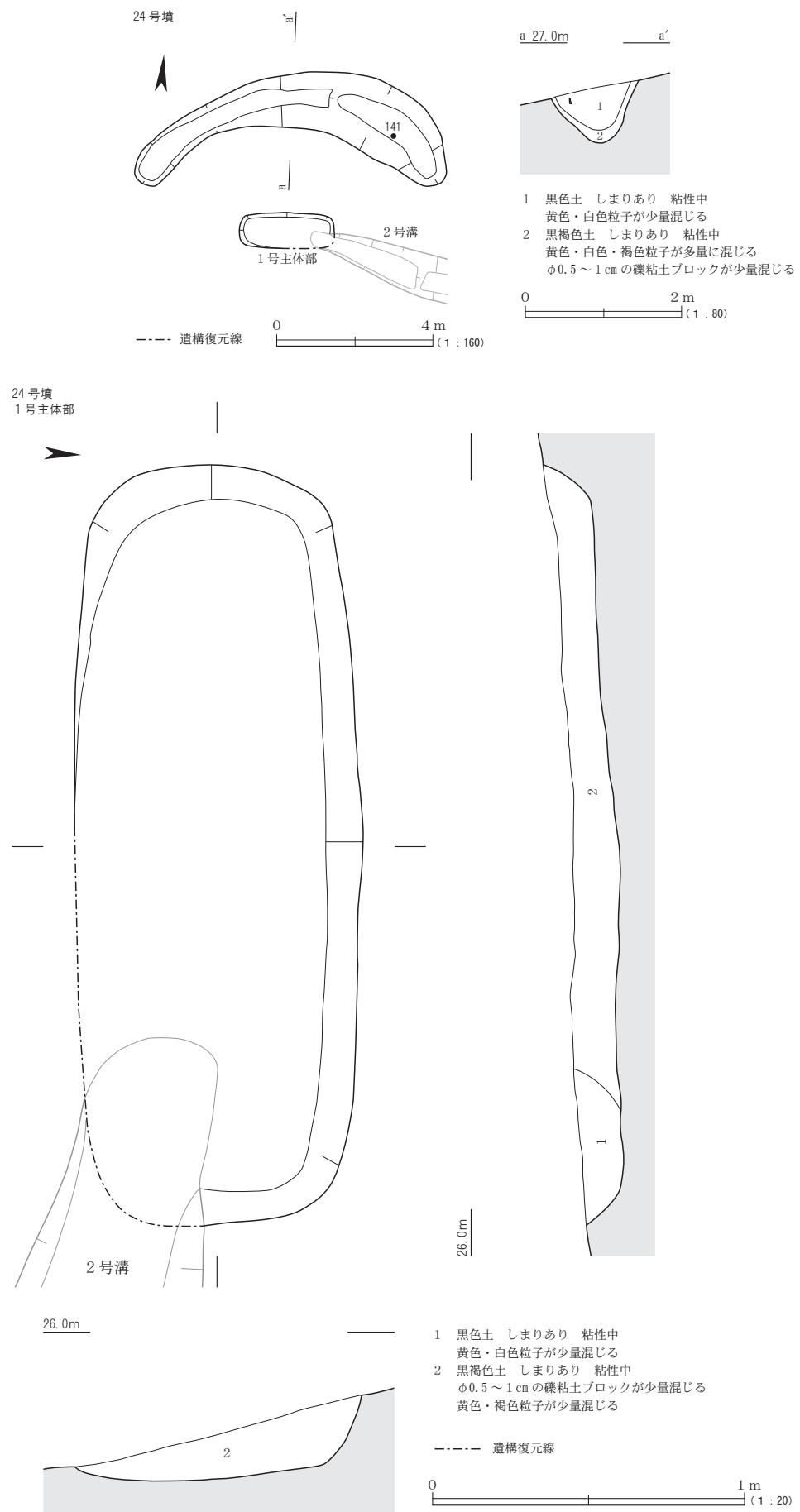
23号墳



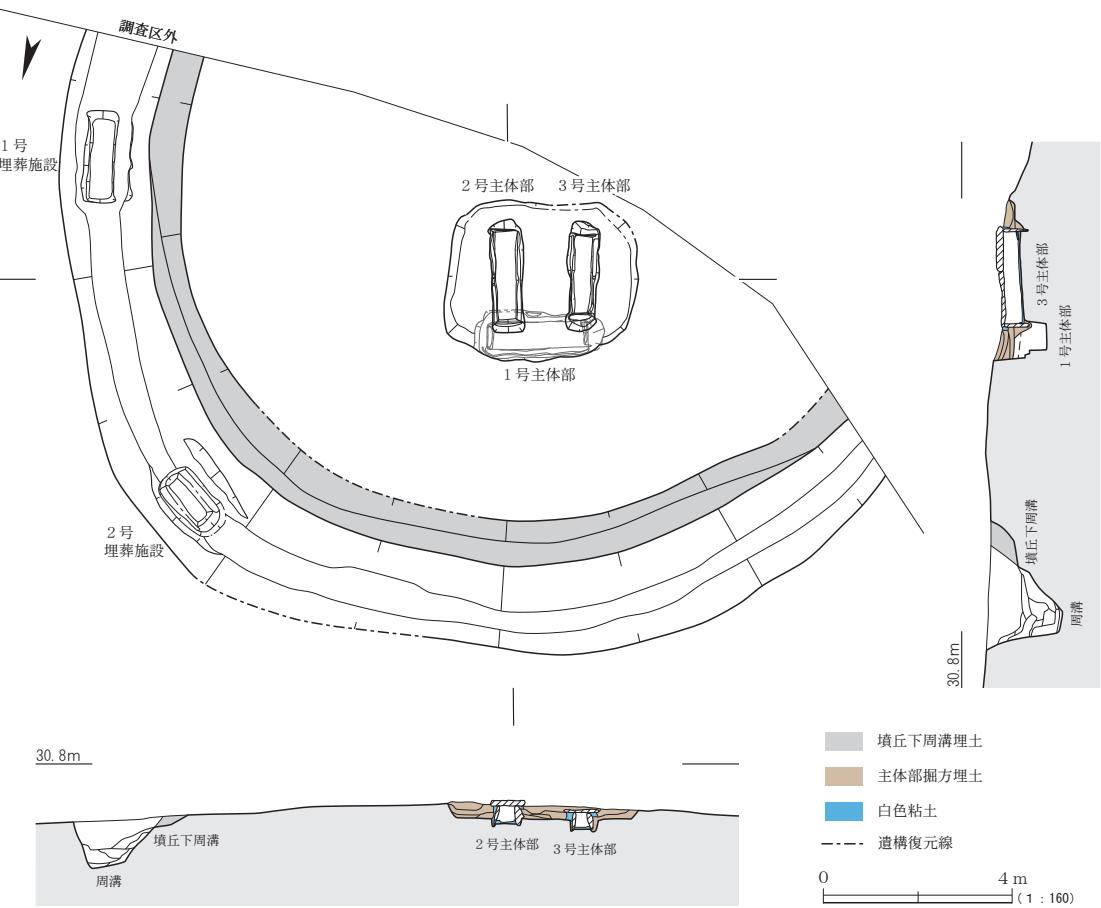
第 61 図 22 号墳 1 号埋葬施設遺構図及び 23 号墳遺構図



第62図 22号墳2号埋葬施設遺構図



第63図 24号墳遺構図及び1号埋葬施設遺構図



第64図 25号墳遺構図

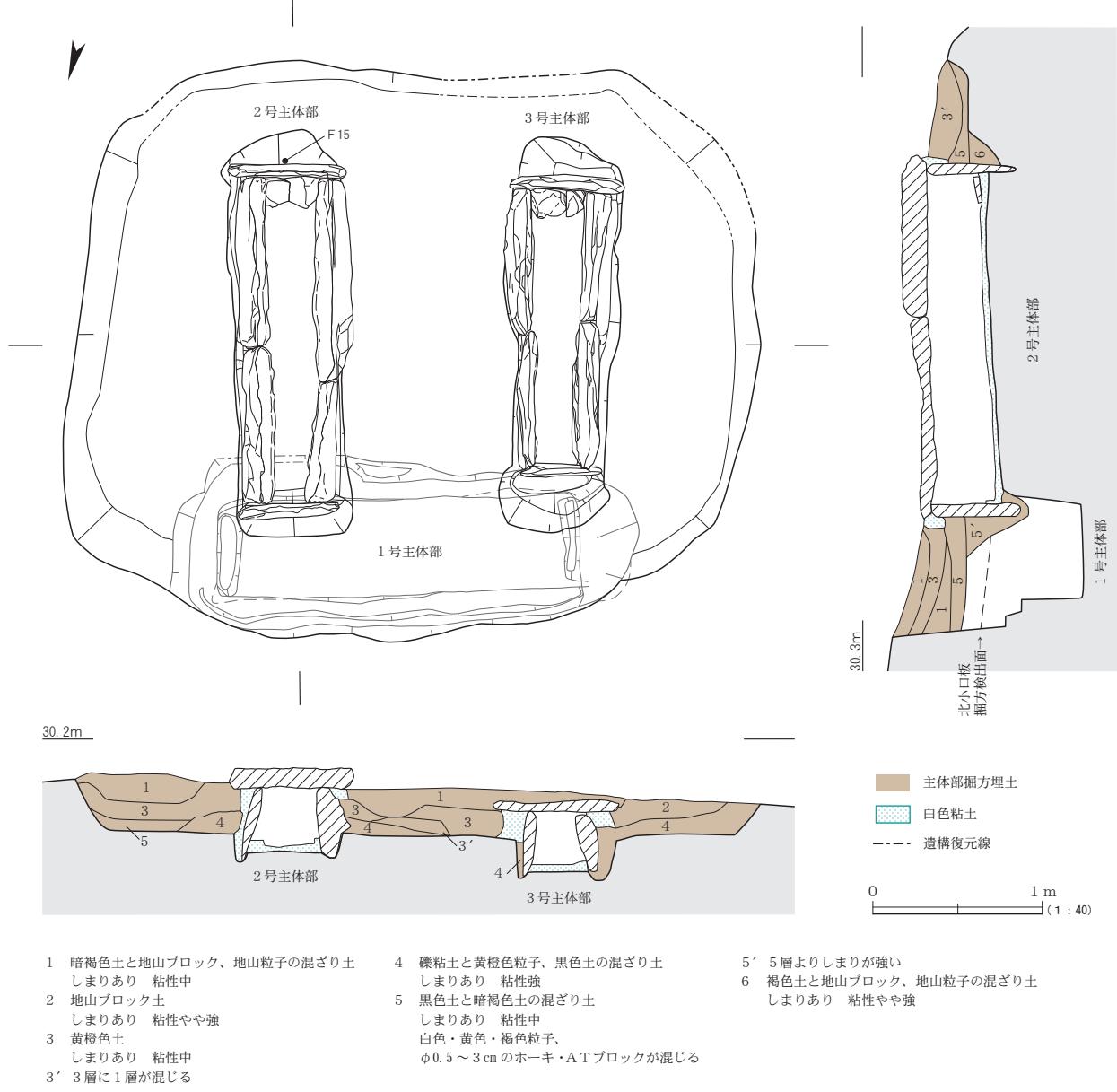
25号墳

調査区南西端、丘陵尾根上の標高29～30m付近に位置する円墳で、南側約1/3が調査区外である。墳丘は削平されているが、規模は直径16.2m、周溝を含めて直径19.8mを測る。墳丘頂部の中央では、コ字状に配置された主体部を3基確認した。このうち2号・3号主体部（箱式石棺墓）では、同一の墓壙内にほぼ同形同大の石棺2基が東西に並列して直葬され、墓壙の下層に2号・3号主体部と主軸を直交する1号主体部（木棺墓）が直葬されていた。また、周溝内縁に沿って墳丘下周溝と考えられる溝が巡り、規模は最大幅0.9m、深さ0.65mを測る。

周溝は、調査区内では全周する。断面形は逆台形で、幅1.3～2.4m、検出面からの深さは最大1.6mを測る。周溝内の東側と北東側で埋葬施設を1基ずつ確認した。また、周溝東側の埋土下層から土師器甕（142）が外側の壁際で横倒しになった状態で出土し、北東側の埋土下層から磨製石斧（S16）、北西側の埋土中層から須恵器壺蓋、壺身、北西側の埋土から玉髓製石刃（S4）が出土した。

1号主体部 墳丘頂部の中央やや北側に位置する木棺墓で、2号・3号主体部に切られる。主軸はN-73.5°-Wで、等高線にはほぼ平行する。墓壙は二段掘りで、平面形は長方形を呈する。規模は上段が長さ2.65m、幅1.06m、検出面からの深さ0.24m、下段が長さ2.14m、幅は東側で0.56m、西側で0.54mと東側がわずかに広く、深さ0.4mを測る。頭位は東側と推定される。床面の両小口側で小口板の痕跡を確認し、断面観察より木棺痕跡（断面図の6層）を確認した。木棺の規模は、内法で長さ2.00m、幅0.38m、深さ0.32mを測る。墓壙埋土から淡青色のガラス管玉を転用したガラス製品（J22）が出土した。また、墓壙埋土から弥生土器片、土師器片が出土した。

2号主体部 墳丘頂部の中央やや南東側に位置する箱式石棺墓で、1号主体部を切る。主軸はN-164°-Eで、等高線にはほぼ直交する。墓壙は二段掘りで、平面形は上段が隅丸方形、下段が長方形を呈する。規模は上段が長さ3.38m、幅4.05m、検出面からの深さ0.35m、下段が長さ2.38m、幅は南側で0.70m、北側で0.65

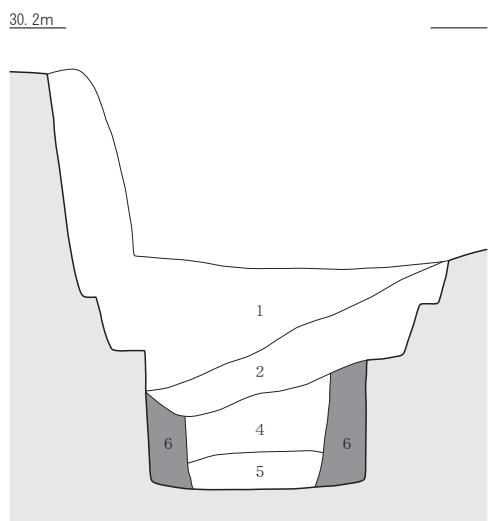
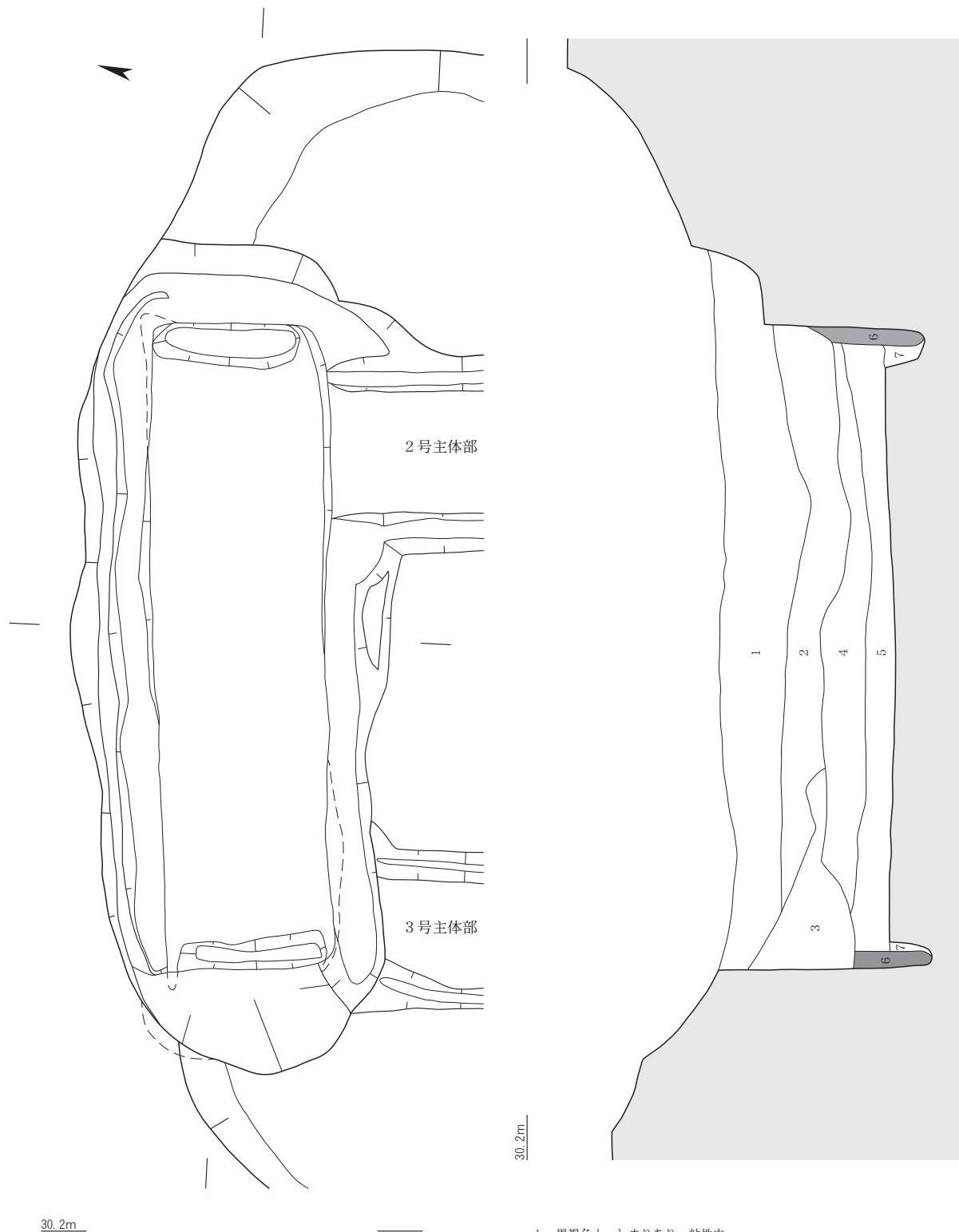


第 65 図 25 号墳主体部掘方遺構図

mと南側が広く、深さ 0.12 m を測る。さらに床面の両小口側と両側石側には石棺材の据付穴が掘られている。主体部南側の掘方上段の埋土から鉄刀子 (F15) が出土した。

石棺は大型の安山岩板石を用いて構築され、蓋石 2 枚¹⁾、側石各 2 枚、小口石各 1 枚の計 8 枚からなる。棺蓋の規模は長さ 1.50 m、幅 0.71 m を測り、最大規模の石棺材である南側の蓋石は、長さ 0.95 m、幅 0.89 m、厚さ 0.15 m を測る。棺身の規模は、内法で長さ 1.92 m、幅は南小口側で 0.35 m、北小口側で 0.27 m と南小口側が広く、側石上面から棺床までの深さは 0.34 m を測る。棺身は、両小口石が両側石を挟み込むように組み合せられる。そして、棺蓋と棺身、小口石と側石の接する部分には白色粘土を用いて丁寧に目張りが施されていた²⁾。さらに、棺蓋及び棺身の内面全体に赤色顔料が塗布されていた。

棺床には厚さ 3 ~ 4 cm の白色粘土が敷かれ、両側石と北小口石に沿って幅 2 ~ 6 cm、高さ 3 ~ 5 cm の段がつく。南小口側には 2 枚の安山岩板石を V 字状に組んだ枕が置かれており、頭位は南側と推定される。石枕の両面に赤色顔料が塗布され、表面の合わせ目付近（枕が遺体の後頭部と接する部分）には白色物質が付着していた。さらに、石枕の北側、後述する人骨の遺存範囲でも棺床に赤色顔料が認められた。自然科学分析の結果、棺蓋と棺身、石

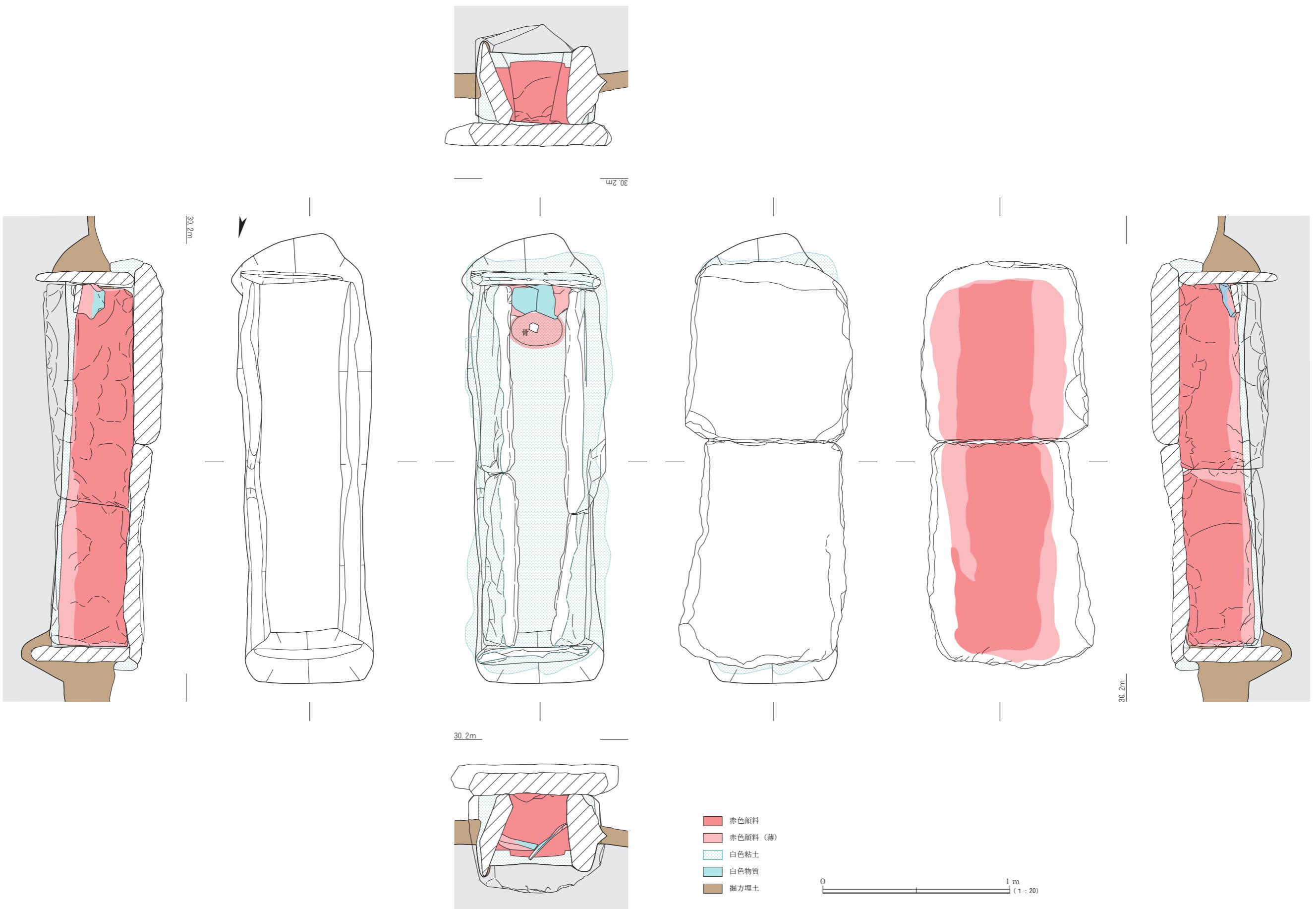


- 1 黒褐色土 しまりあり 粘性中
橙色粒子、 ϕ 1 cm 以上のホーキ・礫粘土・D. K. P. ブロックが混じる
- 2 黒褐色土 (1層より暗い) しまりあり 粘性中
橙色粒子、 ϕ 1 cm 以上のホーキ・礫粘土・D. K. P. ブロックが混じる
- 3 暗褐色土 しまりあり 粘性中
橙色粒子が多く混じる
- 4 黒褐色土 しまりあり (弱) 粘性中
 ϕ 1 ~ 3 cm のホーキ・礫粘土・D. K. P. ブロックが混じる
- 5 黑褐色土 しまりあり (強) 粘性中
- 6 暗褐色土 しまりあり 粘性中 →棺痕跡
- 7 灰褐色土 しまりあり 粘性中
ホーキブロックが混じる

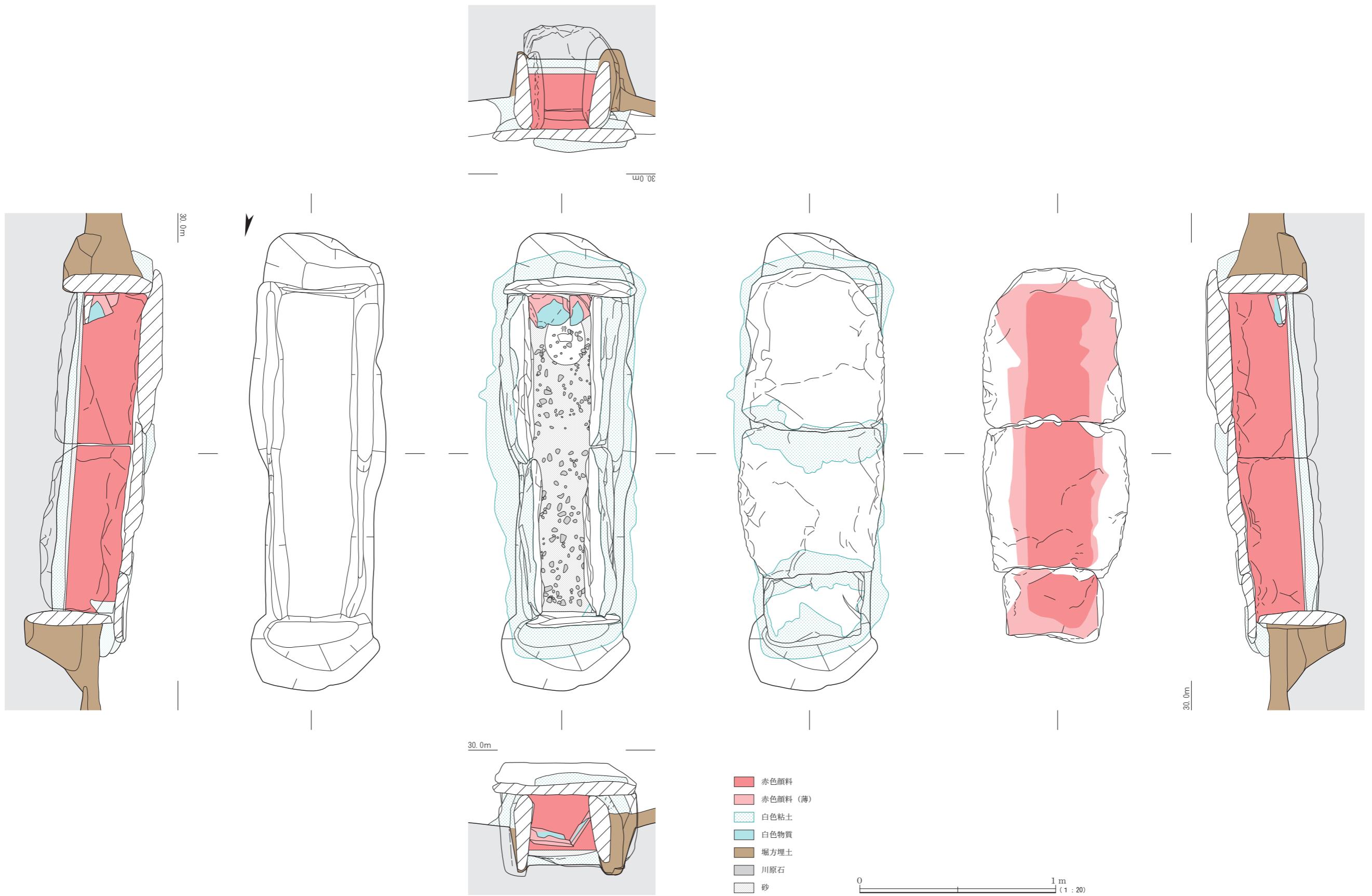
■ 棺痕跡

0 1 m (1 : 20)

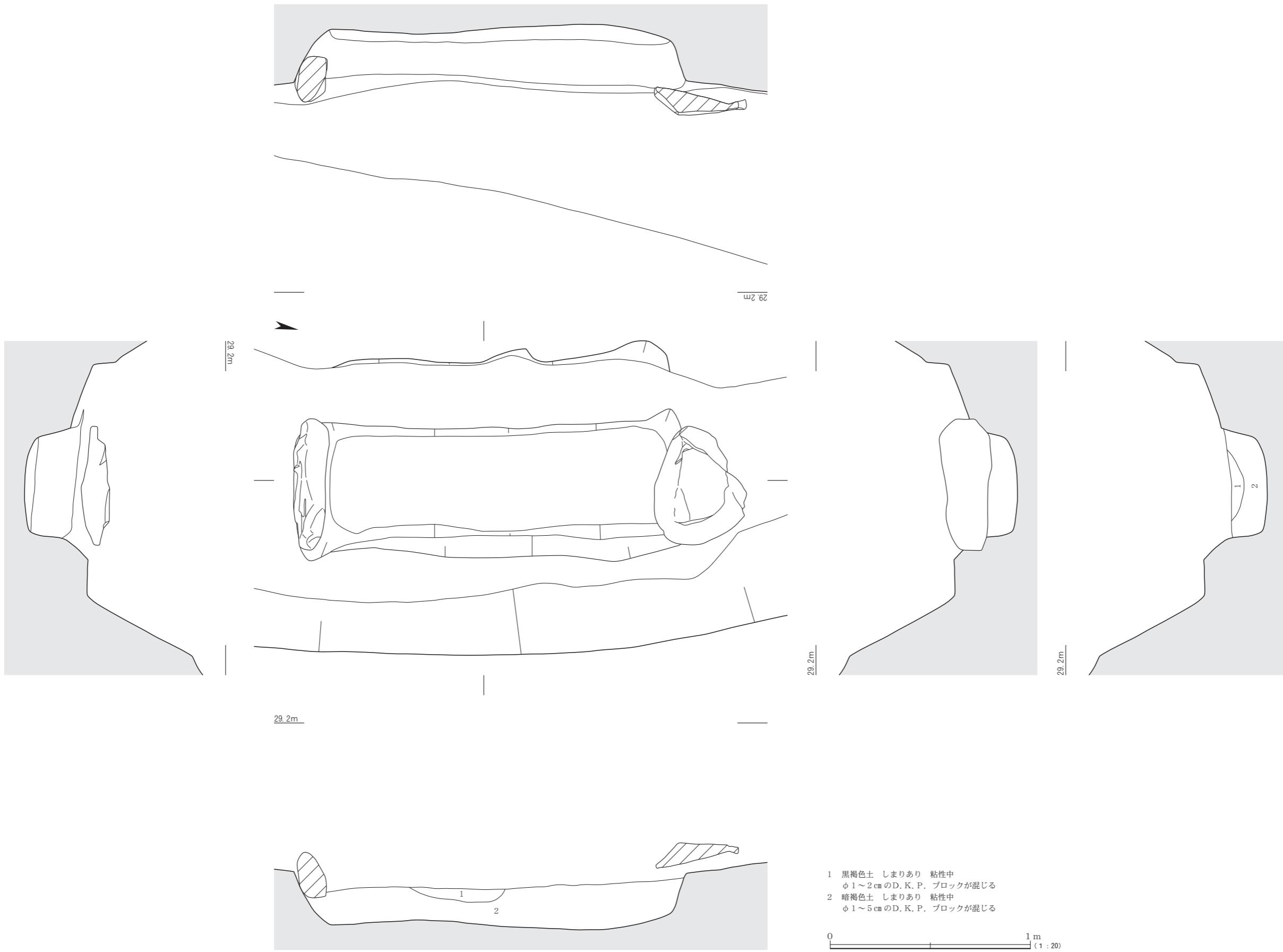
第 66 図 25 号墳 1号主体部遺構図



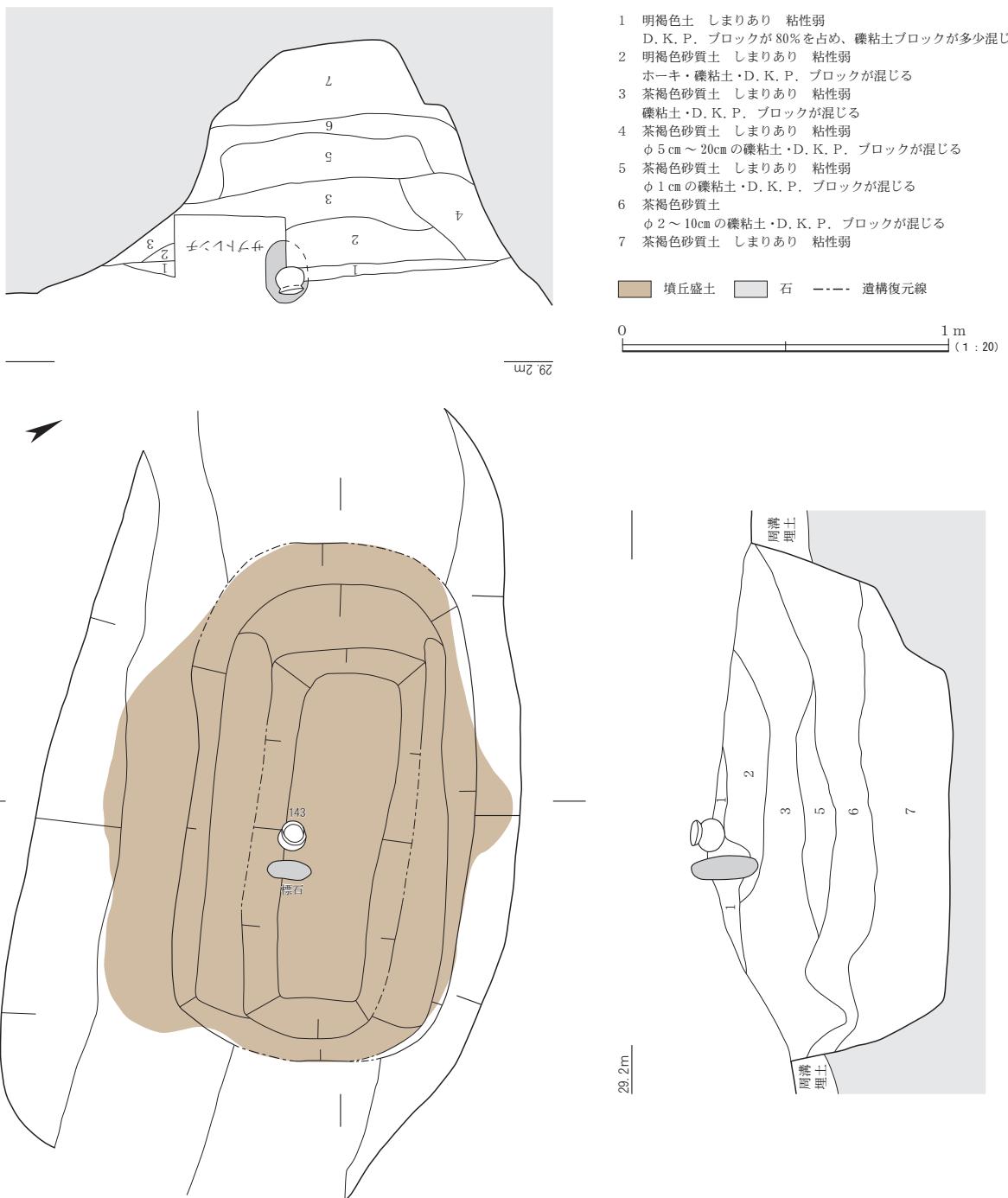
第67図 25号墳2号主体部遺構図



第68図 25号墳3号主体部遺構図



第69図 25号墳1号埋葬施設遺構図



第70図 25号墳2号埋葬施設遺構図

枕に塗布された赤色顔料はベンガラと判定され、石枕に付着した白色物質は漆喰の可能性が指摘された（本書IV章3節参照）。また、石枕の北側に人骨がわずかに遺存したが、パウダー状と化していて、遺存状態は不良であった。人骨鑑定の結果、被葬者の性別や年齢は不明であった（本書IV章2節参照）。棺内から副葬品は出土しなかった。

3号主体部 墳丘の中央やや南西側に位置する箱式石棺墓で、1号主体部を切る。主軸はN-169°-Eで、等高線にほぼ直交する。墓壙は二段掘りで、平面形は長方形を呈する。規模は上段が長さ3.38m、幅4.05m、検出面からの深さ0.35m、下段が長さ2.22m、幅は南側で0.64m、北側で0.54mと南側が広く、深さ0.19mを測る。さらに床面の両小口側と両側石側には石棺材の据付穴が掘られている。墓壙内から遺物は出土しなかった。

石棺は大型の安山岩板石を用いて構築され、蓋石3枚、側石各2枚、小口石各1枚の計9枚からなる。棺蓋の規模は長さ1.90m、幅0.74mを測り、最大規模の石棺材である南端の蓋石は、長さ0.83m、幅0.72m、厚さ0.13mを測る。棺身の規模は、内法で長さ1.62m、幅は南小口側で0.35m、北小口側で0.20mと南小口側が広く、側石上面から棺床までの深さは0.31mを測る。棺身は、両小口石が両側石を挟み込むように組み合わせられる。そして、棺蓋と棺身、蓋石と蓋石、小口石と側石の接する部分には白色粘土を用いて丁寧に目張りが施されていた。さらに、棺蓋及び棺身の内面全体に赤色顔料が塗布されていた。

棺床には厚さ4~6cmの白色粘土が敷かれ、その上面に砂と直径5cm以下の川原石が薄く敷かれていた。南小口側には2枚の安山岩板石をV字状に組んだ枕が置かれており、頭位は南側と推定される。石枕の両面に赤色顔料が塗布され、表面の合わせ目付近（枕が遺体の後頭部と接する部分）には白色物質が付着していた。自然科学分析の結果、棺蓋と棺身、石枕に塗布された赤色顔料はベンガラと判定され、石枕に付着した白色物質は漆喰の可能性が指摘された（本書IV章3節参照）。また、石枕の北側に人骨と歯牙がわずかに遺存したが、パウダー状と化していて、遺存状態は不良であった。人骨鑑定の結果、被葬者が成人であると推定された（本書IV章2節参照）。棺内から副葬品は出土しなかった。

1号埋葬施設 周溝東側の底面に位置し、周溝の壁を掘りこんで造られた石蓋土壙墓である。主軸はN-166.5°-Eで、2号・3号主体部の主軸とほぼ一致し、周溝に平行する。蓋石は最大厚さ0.17mの安山岩板石であり、両小口側で各1枚を確認したが、南西小口側の板石は墓壙内に落ち込んだ状態であった。墓壙の平面形は長方形を呈し、規模は長さ1.96m、幅は南西側で0.71m、北東側で0.69mと南西側がわずかに広く、検出面からの深さは0.31mを測る。頭位は南西側と推定される。墓壙埋土から土器片が出土した。

2号埋葬施設 周溝北東側の底面に位置し、周溝の壁を掘りこんで造られた土壙墓である。墓壙の長軸に沿って設定したベルト断面の観察から、墓壙は周溝埋土を切っており、周溝が0.1~0.18m埋まった段階で埋葬施設が構築されている。また、周溝内墳丘が遺存し、平面形は不整形で、規模は長軸1.58m、短軸1.25m、墓壙検出面から墳丘頂部までの高さは0.25mを測る。墳丘頂部の中央に土師器小型丸底壺（143）と、標石と考えられる川原石が据えられていた。

埋葬施設の主軸はN-58.5°-Wで、周溝に平行する。墓壙は二段掘りで、平面形は長方形を呈する。規模は上段が長さ1.58m、幅0.86m、検出面からの深さ0.30m、下段が長さ1.19m、幅は北西側で0.47m、南東側で0.45mと北西側がわずかに広く、深さ0.32mを測る。頭位は北西側と推定される。墓壙埋土から土器片が出土した。

（小田）

註

- 1) 重機による表土除去の際に、25号墳2号主体部の蓋石2枚と3号主体部の蓋石1枚が誤って取り外され、それらが混在した状態であったため、蓋石の規模や内面の赤色顔料の塗布範囲をもとに、蓋石の組み合わせと配置を復元した。
- 2) 25号墳2号主体部の棺内に流入土がほとんど認められなかつたことと、3号主体部では蓋石と蓋石の隙間にも白色粘土を用いて目張りが施されていたことから、2号主体部でも同様の目張りが施されていた可能性が高い。

第5表 古墳一覧

法量：() 推定値 [] 現存値

遺構名	位置・立地	墳丘		墳丘下周溝			周溝			主体部 (基)	埋葬施設 (基)	出土遺物			備考			
		形状	規模 (m)	有無	幅 (m)	深さ (m)	断面形	肩部幅 (m)	底部幅 (m)	深さ (m)		周溝内	周溝外	供獻土器				
1号墳	調査区の東部、丘陵尾根上の標高29~29.5m付近	円墳	18.2	○	1.8~2.5	0.9	外周溝：逆台形	1.7~4.1	0.7~2.9	1.2			0	10	4	外周溝底面：須恵器集中箇所：須恵器坏蓋(53)、坏身(54)、甕外周溝底面付近：土師器塊(50) 外周溝表土：土玉(D3)、内周溝埋土下層：須恵器坏身(55)、内周溝埋土上層：赤色塗彩の土師器塊(51) 墳丘下周溝埋土：黒曜石剥片(S5) 墳丘上：管玉未成品(J23)、安山岩製石礫(S11)	3号・5号堅穴建物を切る。	
2号墳	調査区の東部、丘陵南肩部の標高27~28.5m付近	円墳	10.6	×	—	—	U字形	2.8~3.2	0.8~1.9	1.2	0	0	0	0	0	土師器塊(58)	周溝埋土下層：土師器甕、須恵器坏蓋(59)、坏身(60)	5号墳と2号土壙を切る。
3号墳	調査区の東部、丘陵南肩部の標高28.75~29.5m付近	円墳	11.1	×	—	—	U字形	2.1~3.3	0.8~1.9	1.2	0	0	0	0	0	土師器直口壺(61)、甕(62)、脚付塊(63~71)	なし	
4号墳	調査区の東部、丘陵南肩部の標高28.5~29.5m付近	円墳	(11.2)	○	0.9~1.3	0.5	逆台形	1.1~2.2	0.8~1.0	0.8	0	1	1	1	1	土師器甕(72)、高坏(74)、鐵鏹(F7)、不明鉄製品(F8・F9)	周溝埋土：須恵器坏身(76)、周溝埋土及び墳丘下周溝埋土：須恵器坏蓋(75) 墳丘下周溝埋土：土師器甕(73) 周溝検出面：鞍金具(F10)	
5号墳	調査区の南東部、丘陵南斜面の標高27.5~28m付近	円墳	9.0	×	—	—	U字形	2.0	0.7	0.9	0	0	0	0	0	土師器坏蓋形土器(77)、有蓋高环形土器(78)		2号墳に切られる。
6号墳	調査区の南東部、丘陵南斜面の標高26~27m付近	円墳	10.0	×	—	—	U字形	4.2	1.0	1.4	1	0	0	0	0	なし		7号墳と9号墳を切る。
7号墳	調査区の南東部、丘陵南斜面の標高25.5~28m付近	円墳	8.4	×	—	—	U字形	2.0	1.0	[0.3]	0	1	0	0	0	なし		6号墳・9号墳・10号墳に切られる。8号墳と切り合う。
8号墳	調査区の南東部、丘陵南斜面の標高26~27.5m付近	円墳	11.0	×	—	—	U字形	1.9~3.6	1.1~1.6	2.0	2	1	0	0	0	土師器甕(79)、須恵器甕(80)	周溝埋土：土師器片	7号墳と切り合う。
9号墳	調査区の南東部、丘陵南斜面の標高23~26m付近	不明	—	×	—	—	U字形	1.7~3.3	2.0~2.4	1.1	0	0	0	0	0	なし	周溝埋土：土師器片	6号墳を切り、7号墳に切られる。
10号墳	調査区の南東部、丘陵南斜面の標高24~25m付近	円墳	9.0	×	—	—	U字形	3.0	1.2	1.76	0	1	0	0	0	土師器甕(81)		7号墳を切る。
11号墳	調査区の南東部、丘陵南斜面の標高24~25.5m付近	方墳	[南北[3.4]×東西[13.0]]	×	—	—	逆台形	0.9~5.2	0.1~2.4	5.2	0	0	1	1	1	土師器甕(82)		南側が調査区外。
12号墳	調査区の東部、丘陵南斜面の標高25.5~26m付近	円墳	—	×	—	—	逆台形	2.3	1.3	0.8	0	0	0	0	0	なし		東側の1/2以上が調査区外。
13号墳	調査区の東部、丘陵尾根上の標高30m付近	円墳	9.6	×	—	—	U字形	0.4~2.2	0.3~1.6	1.7	0	0	3	3	3	土師器甕(99)、壺(100)、甕形土器(102)、須恵器坏蓋(103~104)、坏身(105~108)	周溝埋土：土師器塊(101)、土師器片	
14号墳	調査区の東部、丘陵尾根上の標高28m付近	不明	—	×	—	—	U字形	[1.8]	[1.2]	0.2	0	2	0	0	0	なし	周溝埋土：須恵器高坏(109)	東側1/2以上が調査区外。
15号墳	調査区の南東部、丘陵南斜面の標高23m付近	不明	—	×	—	—	U字形	[3.8]	[1.1]	3.2	0	1	0	0	0	なし	周溝埋土：土師器片	南側1/2以上が調査区外。
16号墳	調査区の中央付近、丘陵尾根上の標高29~30.5m付近	円墳	20.7	○	1.8~2.5	0.3	U字形	1.0~3.8	0.8~1.9	0.6	0	2	0	0	0	土師器塊(111)、須恵器坏蓋(112)、坏身(113~114)	周溝埋土下層：須恵器坏身(115)、有蓋高坏(116)、周溝埋土中層：須恵器甕(117)	7号土壙と切り合う。
17号墳	調査区の中央付近、丘陵尾根上の標高30.5m付近	円墳	(10.0)	×	—	—	逆台形	1.0~1.9	0.6~1.7	0.2	0	1	1	1	1	土師器直口壺(118~119)、甕(120)、高坏(121)、甕(122)	なし	
18号墳	調査区の中央部、丘陵尾根上の標高30m付近	円墳	15.4	×	—	—	逆台形	1.9	0.6	0.2	0	0	0	0	0	土師器甕	埋土中層：土師器片	
19号墳	調査区の中央部、丘陵南肩部の標高29.5~30.5m付近	円墳	14.0	×	—	—	逆台形	1.9	0.6	0.4	0	0	0	0	0	土師器直口壺(123)、甕(125~127)	周溝底面：小型丸底壺(124)、周溝埋土上層：瓦質土器片	20号墳・9号堅穴建物を切る。
20号墳	調査区の中央部、丘陵南肩部の標高29.5~30.5m付近	円墳	13.0	×	—	—	U字形	1.6	0.5	0.4	0	0	0	0	0	土師器甕(128)	周溝埋土中層～下層：土師器小片	19号墳に切られる。
21号墳	調査区の南西部、丘陵南肩部の標高29~29.5m付近	円墳	15.0	×	—	—	U字形	3.4	0.6~1.1	0.9	0	1	0	0	0	土師器甕(130)、高坏(131~135)	埋土下層：土師器直口壺(129)、埋土中層：土師器小片、須恵器甕埋土上層：須恵器小片、丹塗り土師器小片	11号堅穴建物を切り、8号溝に切られる。
22号墳	調査区の南部、丘陵南斜面の標高28~29m付近	円墳	14.0	×	—	—	逆台形	2.2	0.4~0.7	1.1	0	2	0	0	0	土師器直口壺(136)、甕須恵器坏身(138)	周溝埋土上層：土師器甕(137)	
23号墳	調査区の南部、丘陵南斜面の標高28~28.5m付近	円墳	(14.5)	×	—	—	U字形	2.8	0.7~1.3	0.7	0	0	0	0	0	土師器直口壺(139)、甕(140)	埋土中層～下層：土師器小片	
24号墳	調査区の南部、丘陵南斜面の標高25.5~26.5m付近	円墳	15.0	×	—	—	U字形	1.5	0.4~0.5	0.7	1	0	0	0	0	土師器直口壺(141)		
25号墳	調査区南西端、丘陵尾根上の標高29~30m付近	円墳	16.2	○	0.9	0.65	逆台形	1.3~2.4	0.4~1.3	1.6	3	2	0	0	0	なし	周溝埋土下層：土師器甕(142)、磨製石斧(S16)、周溝埋土中層：須恵器坏蓋、坏身、周溝埋土：玉髓製石刃(S4)	南側1/3が調査区外。

第6表 古墳主体部・埋葬施設一覧

遺構名	位置・立地	形式	主軸	墓壙			棺(石棺・木棺の場合) 内法			石蓋(石蓋土壙の場合)			出土遺物						
				頭位	平面形	幅(m)	長さ(m)	深さ(m)	構造	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	構造	長さ(m)	幅(m)	枕	人骨	副葬品	供献土器
1号墳 1号埋葬施設	外周溝内の西側	土壙墓	N-10°-W	北	隅丸長方形	0.87	0.30	0.19	-	-	-	-	-	-	-	なし	なし	なし	なし
2号埋葬施設	外周溝内の西側	土壙墓	N-21°-E	北東	長方形	0.91	~0.21	0.32	-	-	-	-	-	-	-	なし	なし	なし	なし
1号墳 3号埋葬施設	外周溝内の西側	土壙墓	N-34°-W	北西	長椭円形	1.20	~0.24	0.36	-	-	-	-	-	-	-	なし	なし	なし	なし
1号墳 4号埋葬施設	外周溝内の西側	土壙墓	N-13.5°-W	北	長方形	1.94	~0.37	0.42	-	-	-	-	-	-	-	なし	なし	なし	なし
1号墳 5号埋葬施設	周溝外の西側	土壙墓	N-22.5°-W	北西	隅丸長方形	1.76	1.34	0.36	-	-	-	-	-	-	-	なし	なし	なし	なし
1号墳 6号埋葬施設	外周溝内の北西側	土壙墓	N-52°-E	北東	長方形	1.00	~0.36	0.31	-	-	-	-	-	-	-	なし	なし	なし	なし
1号墳 7号埋葬施設	外周溝内の北側	土壙墓	N-54°-E	南	長方形	1.76	~0.44	0.08	-	-	-	-	-	-	-	なし	なし	なし	なし
1号墳 8号埋葬施設	外周溝内の北側	土壙墓	N-86°-E	東	隅丸長方形	1.61	~0.26	0.44	-	-	-	-	-	-	-	なし	なし	なし	なし
1号墳 9号埋葬施設	外周溝内の北東側	土壙墓	N-115°-E	南東	隅丸長方形	1.75	0.31	0.24	-	-	-	-	-	-	-	なし	なし	なし	なし
1号墳 10号埋葬施設	外周溝内の北西側	土壙墓	N-125°-W	北西	隅丸長方形	1.54	~0.66	0.05	-	-	-	-	-	-	-	なし	なし	なし	なし
1号墳 11号埋葬施設	周溝外の北東側	土壙墓	N-34°-E	北東	長椭円形	1.91	~0.62	0.30	-	-	-	-	-	-	-	なし	なし	なし	なし
1号墳 12号埋葬施設	周溝外の東側	土壙墓	N-129°-W	南西	隅丸長方形	1.16	~0.29	0.27	-	-	-	-	-	-	-	なし	なし	なし	なし
1号墳 13号埋葬施設	外周溝外の南側	土壙墓	N-86°-W	西	長椭円形	1.60	~0.41	0.15	-	-	-	-	-	-	-	なし	なし	なし	なし
1号墳 14号埋葬施設	周溝外の南西側	土壙墓	N-124.5°-E	南東	隅丸長方形	1.92	0.35	0.14	-	-	-	-	-	-	-	なし	なし	なし	なし
4号墳 1号埋葬施設	周溝外の北東側	石蓋土壙墓	N-107.5°-E	南東	隅丸長方形	1.60	~0.46	0.15	-	-	-	-	-	-	-	なし	なし	なし	なし
4号墳 2号埋葬施設	周溝外の南西側	石蓋土壙墓	N-135°-E	南東	隅丸長方形	1.63	1.04	0.10	-	-	-	-	-	-	-	なし	なし	なし	なし
6号墳 1号主体部	墳丘頂部北西寄り	木棺墓	N-61°-E	西	隅丸長方形	0.79	~0.23	0.21	-	-	-	-	-	-	-	なし	なし	なし	なし
7号墳 1号埋葬施設	周溝内の南西側	土壙墓	N-15°-E	北	隅丸長方形	1.10	0.4	0.24	-	-	-	-	-	-	-	なし	なし	なし	なし
8号墳 1号主体部	墳丘頂部の東側	土壙墓	N-19°-W	北西	隅丸長方形	1.94	~1.22	0.72	-	-	-	-	-	-	-	なし	なし	なし	なし
8号墳 2号主体部	墳丘頂部の東側	土壙墓	N-23°-W	北西	隅丸長方形	2.34	1.24	0.5	-	-	-	-	-	-	-	なし	なし	なし	なし
8号墳 1号埋葬施設	周溝内の東側	石蓋土壙墓	N-29°-W	北西	隅丸長方形	0.9	~0.29	0.3	-	-	-	-	-	-	-	なし	なし	なし	なし
10号墳 1号埋葬施設	周溝内の南西側	土壙墓	N-5°-W	北	隅丸長方形	1.09	0.30	0.10	-	-	-	-	-	-	-	なし	なし	なし	なし

法量:()推定値 []現存値

遺構名	位置・立地	形式	主軸	頭位	墓壙			棺(石棺・木棺の場合)			石蓋(石蓋土壙の場合)			出土遺物			備考
					平面形	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	構造	長さ(m)	幅(m)	人骨	副葬品	供獻土器	その他		
11号墳 1号埋葬施設	周溝外の北側	土壙墓	N-69°-E	西	隅丸長方形	上段：3.0 下段：2.26	0.94 ~0.96	0.38	—	—	—	なし	鉄鋤先(F11)、 鉄鍬(F12)、 鉄鏟(F13)、 鉄鑿(F14)	須恵器灰蓋 (86~90cm) 环身(94~98cm)	なし	墓壙は二段掘り。	
13号墳 1号埋葬施設	周溝外の南東側	土壙墓	N-33°-E	北西	隅丸長方形	0.7	0.21 ~0.22	0.2	—	—	—	なし	なし	なし	なし	なし	
13号墳 2号埋葬施設	墳丘の南東側	木棺墓	N-10°-E	北西	隅丸長方形	1.6	~0.80	0.4	両小口で 木棺痕跡	1.2	—	なし	なし	なし	なし	なし	
13号墳 3号埋葬施設	墳丘の南東側	木棺墓	N-111°-E	北東	隅丸長方形	1.26	~0.60	0.34	両小口で 木棺痕跡	1.0	—	なし	なし	なし	なし	なし	
14号墳 1号埋葬施設	周溝内の西側	土壙墓	N-20°-E	北東	隅丸長方形	[0.75]	0.17 ~0.20	0.34	—	—	—	なし	なし	なし	なし	なし	
14号墳 2号埋葬施設	周溝内の西側	土壙墓	N-14°-W	北西	楕円形	1.36	~0.40	0.10	—	—	—	なし	なし	なし	なし	なし	
15号墳 1号埋葬施設	周溝内の西側	土壙墓	N-36°-E	不明	隅丸長方形	[1.1]	[0.40]	0.2	—	—	—	なし	なし	なし	なし	なし	
16号墳 1号埋葬施設	周溝内の南東側	土壙墓	N-51°-E	北東	隅丸長方形	1.98	0.70	0.11	—	—	—	なし	なし	なし	なし	なし	
16号墳 2号埋葬施設	周溝内の南東側の 周溝拡張部	石蓋土壙墓	N-129°-W	南西	長方形	1.14	0.52	0.09	—	—	—	なし	ガラス小玉 (J21)	なし	なし	なし	
17号墳 1号埋葬施設	周溝内の北西側	土壙墓	N-75°-E	北東	隅丸長方形	1.40	~0.22	0.24	—	—	—	なし	板石2	0.92	0.58	なし	
17号墳 2号埋葬施設	周溝外の西側	石蓋土壙墓	N-77.5°-W	北西	長方形	上段： 1.64 下段： 0.95	0.73 ~0.32	0.07 0.26	—	—	—	なし	板石5、 塊石1	1.50	0.71	石枕 (V字状)	なし
21号墳 1号埋葬施設	周溝内の北東側	土壙墓	N-20°-W	西	隅丸長方形	1.30	~0.44	0.3	—	—	—	なし	なし	なし	なし	なし	
22号墳 1号埋葬施設	周溝内の北西側	土壙墓	N-60°-W	北東	長方形	2.20	~0.40	0.30	—	—	—	なし	なし	なし	なし	なし	
22号墳 2号埋葬施設	周溝内の北西側	箱式石棺墓	N-10°-W	東	隅丸長方形	0.90	0.50	0.30	小口石各 1、各2	0.80	~0.20 ~0.22	0.19	板石5	1.10	0.58	石枕 (V字状)	なし
24号墳 1号主体部	墳丘頂部の北寄り	土壙墓	N-90°-E	西	隅丸長方形	1.40	(0.86) ~0.88	0.20	—	—	—	なし	なし	なし	なし	なし	
25号墳 1号主体部	墳丘頂部の中央、 やや北側	木棺墓	N-73.5°-W	東	長方形	上段： 2.65 下段： 2.14	1.06 ~0.54	0.24 0.4	両小口及 び断面で 木棺痕跡	2.00	0.38	0.32	なし	ガラス製品 (J22)	なし	なし	なし
25号墳 2号主体部	墳丘頂部の中央、 やや南側	箱式石棺墓	N-164°-E	南	隅丸長方形	上段： 3.38 下段： 2.38	4.05 ~0.65	0.35 0.12	小口石各 1、各2	1.92 ~0.35	0.27 0.34	板石2	1.50	0.71	石枕 (V字状)	○	なし
25号墳 3号主体部	墳丘頂部の中央、 やや南側	石蓋土壙墓	N-169°-E	南	長方形	上段： 3.38 下段： 2.22	4.05 ~0.54	0.35 0.19	小口石各 1、各2	1.62 ~0.35	0.31	板石3	1.90	0.74	石枕 (V字状)	○	なし
25号墳 1号埋葬施設	周溝内の東側	石蓋土壙墓	N-166.5°-E	南西	長方形	1.96	~0.71	0.31	—	—	—	なし	なし	なし	なし	なし	
25号墳 2号埋葬施設	周溝内の北東側	土壙墓	N-58.5°-W	北西	長方形	上段： 1.58 下段： 1.19	0.86 ~0.47	0.30 0.32	—	—	—	なし	なし	なし	なし	なし	

(8) 木棺墓

丘陵南肩部と北肩部で5基を確認した。その詳細は第7表に一括し、以下、各遺構について述べる。

1号木棺墓 調査区の北西部、丘陵北肩部の標高28.5m付近に位置する。墓壙の主軸はN-15°-Eで、平面形は隅丸長方形を呈する。墓壙は長さ1.04m、幅は北側で0.47m、南側で0.51m、検出面からの深さ0.23mを測る。底面の南北端で小口板の痕跡を確認し、木棺は内法で長さ0.60mを測る。墓壙の幅から頭位は南側と推定される。墓壙内から遺物は出土しなかった。

2号木棺墓 調査区の北西部、丘陵北肩部の標高28~28.5m付近に位置する。墓壙の主軸はN-10°-Eで、平面形は隅丸長方形を呈する。墓壙は長さ1.19m、幅は北側で0.75m、南側で0.78m、検出面からの深さ0.19mを測る。底面の東側で木棺痕跡（両小口板の痕跡）を確認し、木棺痕跡の南・西側に接して逆L字形の平坦面を確認した。木棺は内法で長さ0.74m、幅0.18mを測る。墓壙の幅から頭位は南側と推定される。墓壙内から遺物は出土しなかった。

3号木棺墓 調査区の南西部、丘陵南肩部の標高29m付近に位置する。墓壙の主軸はN-15°-Eで、平面形は長方形を呈する。墓壙は長さ1.97m、幅は北側で0.69m、南側で0.67m、検出面からの深さ0.38mを測る。底面の南北端で小口板の痕跡を確認し、木棺は内法で長さ1.69mを測る。墓壙の幅から頭位は北側と推定される。墓壙埋土上層から土師器細片が出土した。

4号木棺墓 調査区の南西部、丘陵南肩部の標高29~29.5m付近に位置する。主軸はN-10°-Eで、墓壙の平面形は長方形を呈する。墓壙は長さ2.24m、幅は北側で0.61m、南側で0.50m、検出面からの深さ0.41mを測る。底面の南北端で小口板の痕跡を確認し、木棺は内法で長さ1.93mを測る。墓壙の幅から頭位は北側と推定される。墓壙埋土から土師器細片が出土した。

5号木棺墓 調査区の南西部、丘陵南肩部の標高29m付近に位置し、北側を11号溝に切られる。墓壙の主軸はN-14°-Eで、平面形は長方形を呈する。墓壙は長さ2.24m、幅は北側で0.75m、南側で0.65m、検出面からの深さ0.22mを測る。底面の南北端で小口板の痕跡を確認し、木棺は内法で長さ1.82mを測る。墓壙の幅から頭位は北側と推定される。墓壙埋土上層から土師器細片、墓壙埋土からナイフ形石器（S1）が出土した。

(橋本)

(9) 土壙墓

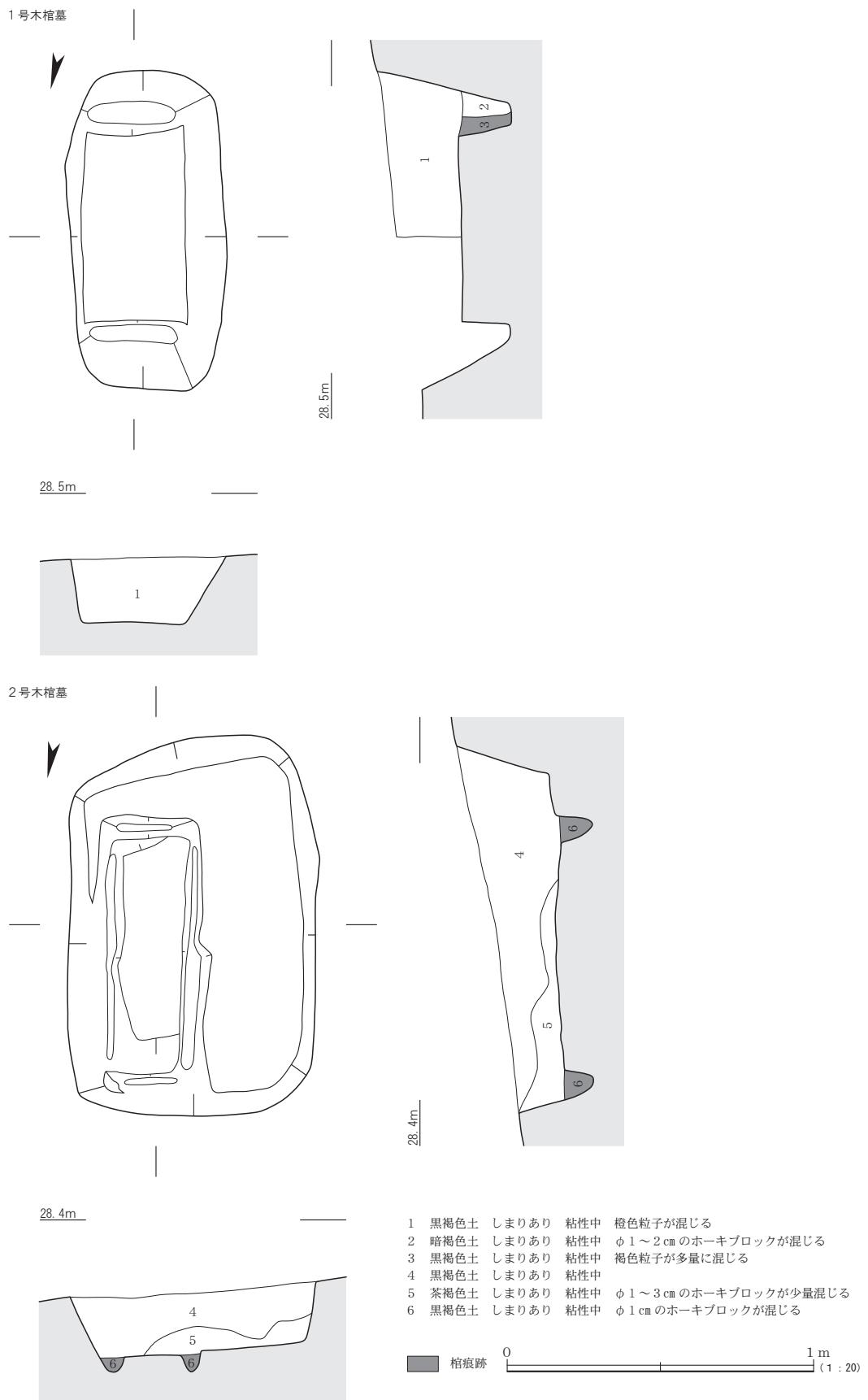
丘陵南肩部と北肩部で3基を確認した。その詳細は第8表に一括し、以下、各遺構について述べる。

1号土壙墓 調査区の北西部、丘陵北肩部の標高28~28.5m付近に位置する。墓壙の主軸はN-10°-Wで、平面形は隅丸長方形を呈する。規模は検出面では長さ1.07m、幅は南側で0.51m、北側で0.39m、底面では長さ0.89m、幅は北側で0.35m、南側で0.39m、検出面からの深さは0.24mを測る。墓壙の幅から頭位は南側と推定される。墓壙内から遺物は出土しなかった。

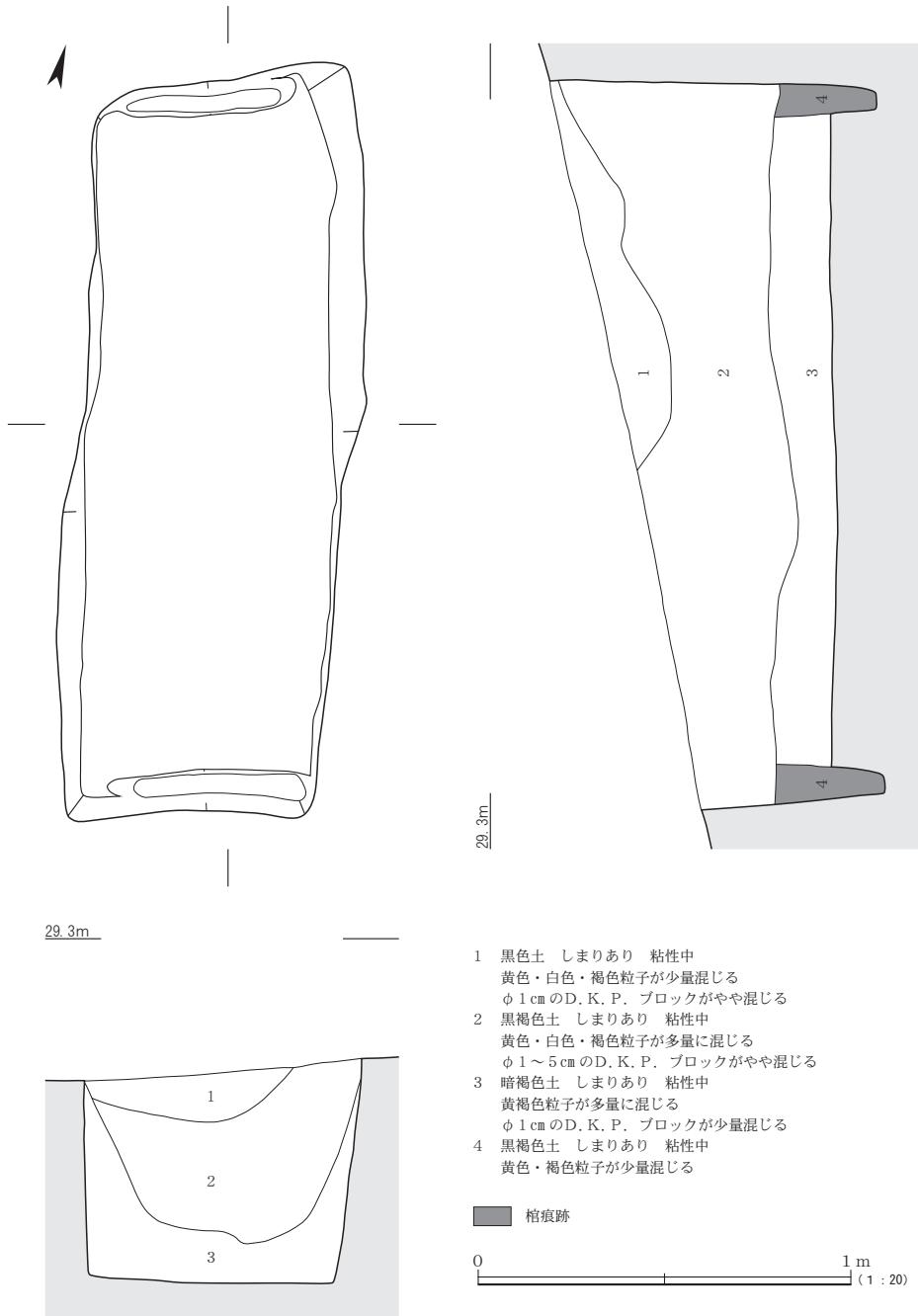
2号土壙墓 調査区の南西部、丘陵南肩部の標高29m付近に位置する。墓壙の主軸はN-30°-Wで、平面形は隅丸長方形を呈する。規模は検出面では長さ1.30m、幅は北西側で0.46m、南東側で0.74m、底面では長さ1.17m、幅は北西側で0.44m、南東側で0.55m、検出面からの深さは0.33mを測る。底面は地形の傾斜と同様に南東へ傾斜していることから、頭位は北西側と推定される。墓壙埋土から土師器細片が出土した。

3号土壙墓 調査区の南西部、丘陵南肩部の標高29m付近に位置する。墓壙の主軸はN-15°-Wで、平面形は隅丸長方形を呈する。規模は検出面では長さ1.43m、幅は北西側で0.61m、南東側で0.60m、底面では長さ1.41m、幅は北西側で0.53m、南東側で0.50mと北西側が広く、検出面から床面までの深さは0.33mを測る。墓壙の幅から頭位は北西側と推定される。墓壙内から遺物は出土しなかった。

(橋本)



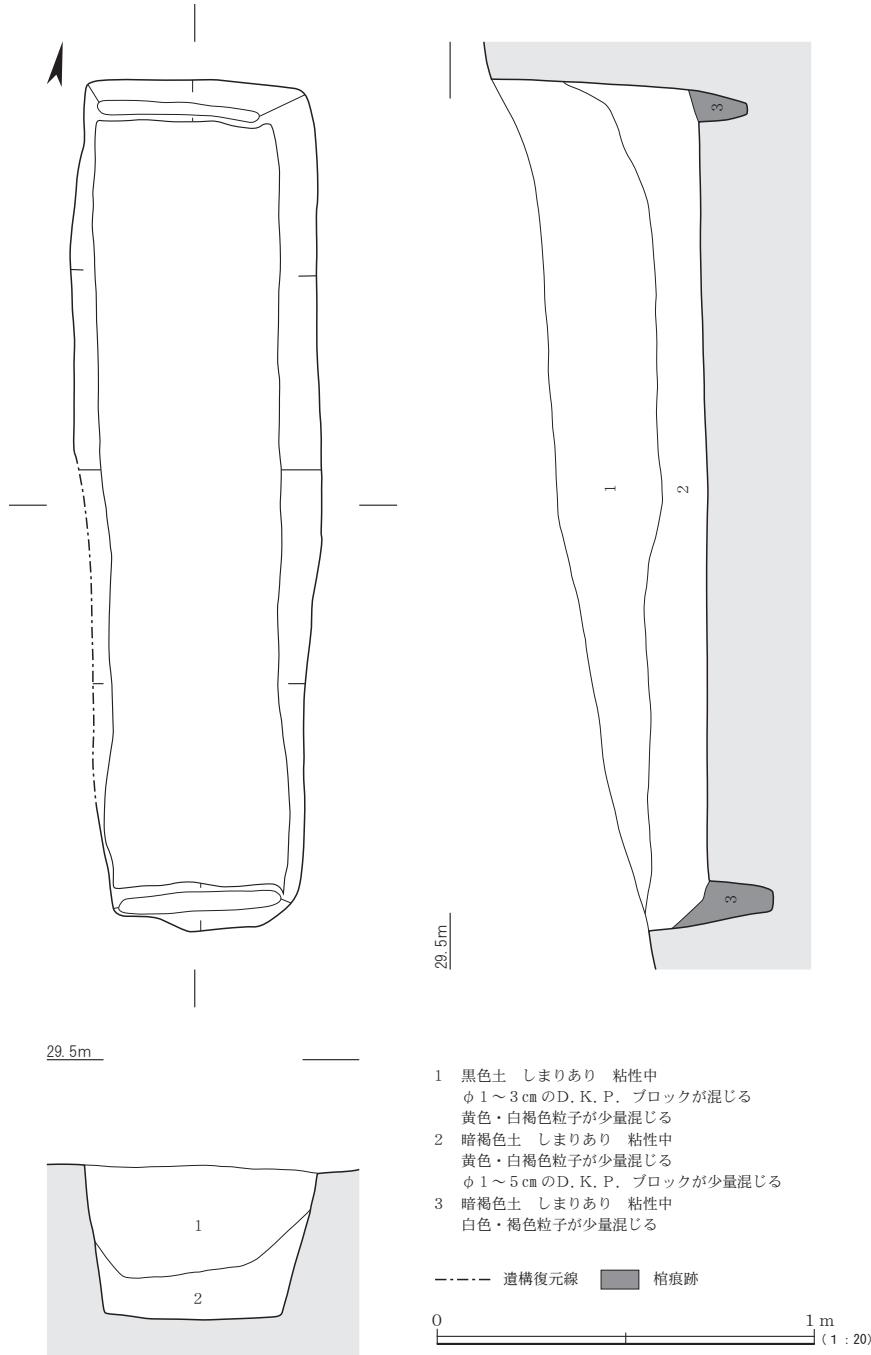
第 71 図 1 号・2 号木棺墓遺構図



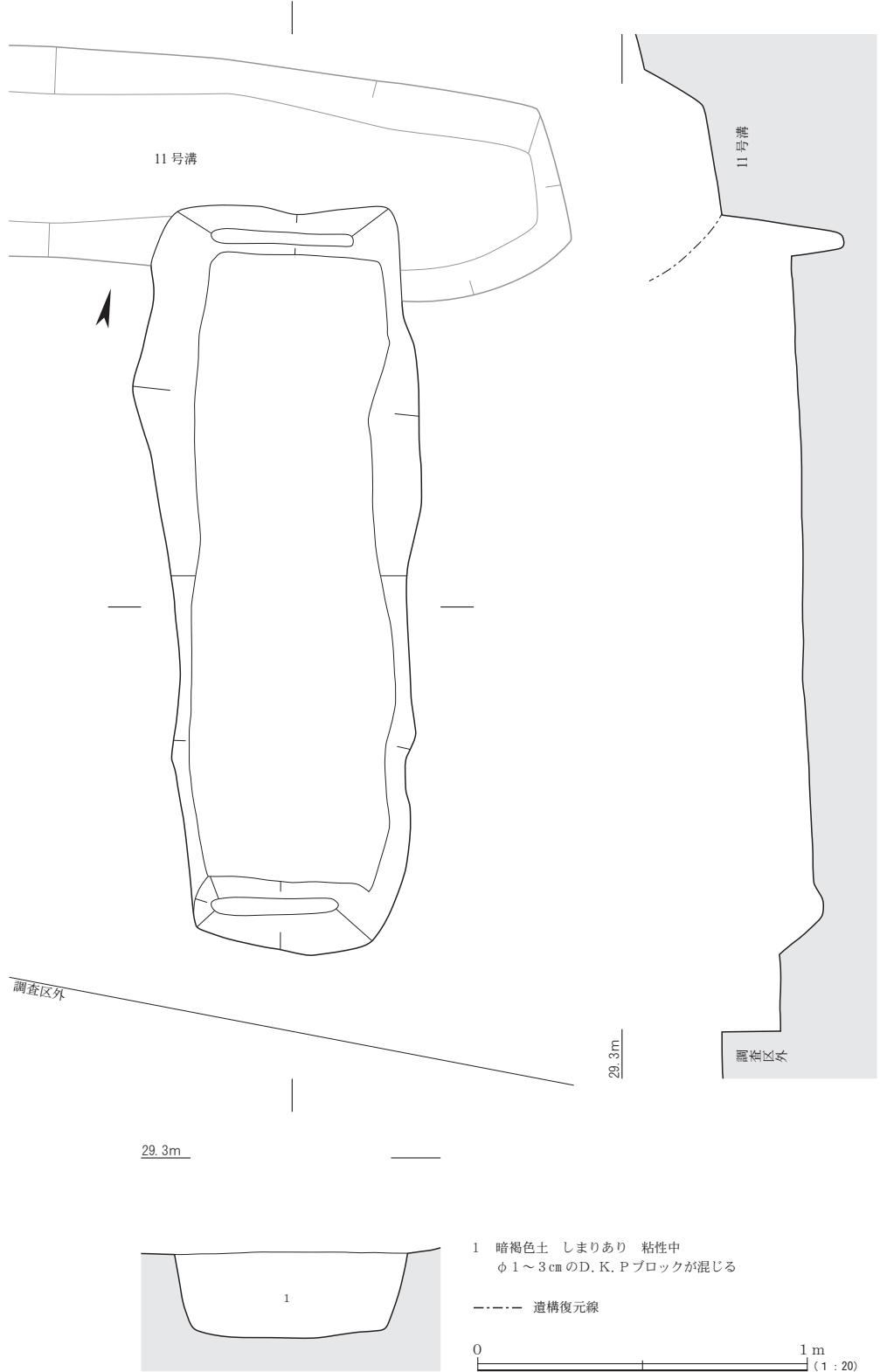
第 72 図 3 号木棺墓遺構図

第 7 表 木棺墓一覧

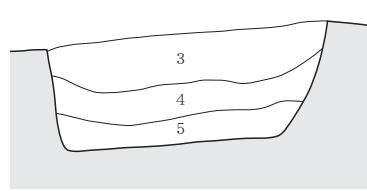
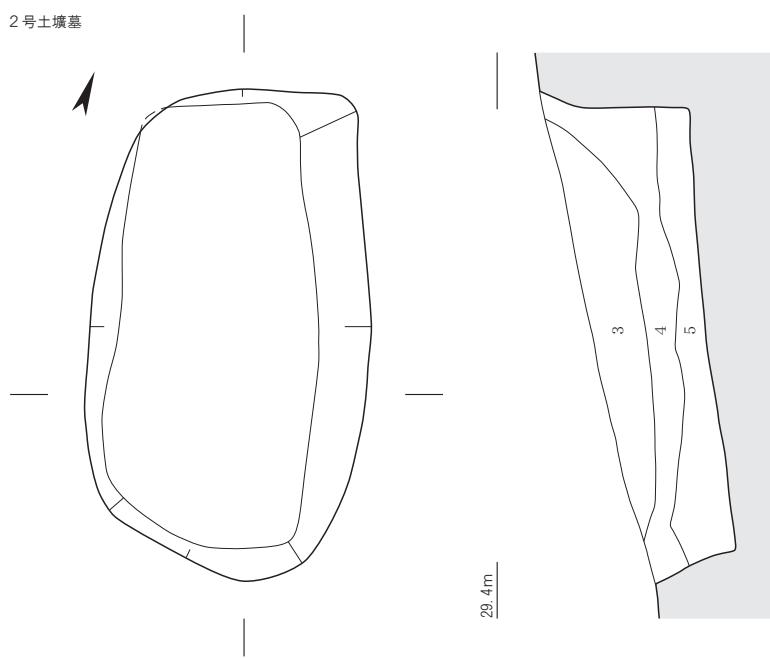
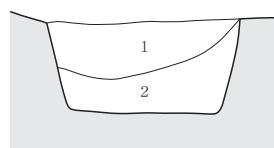
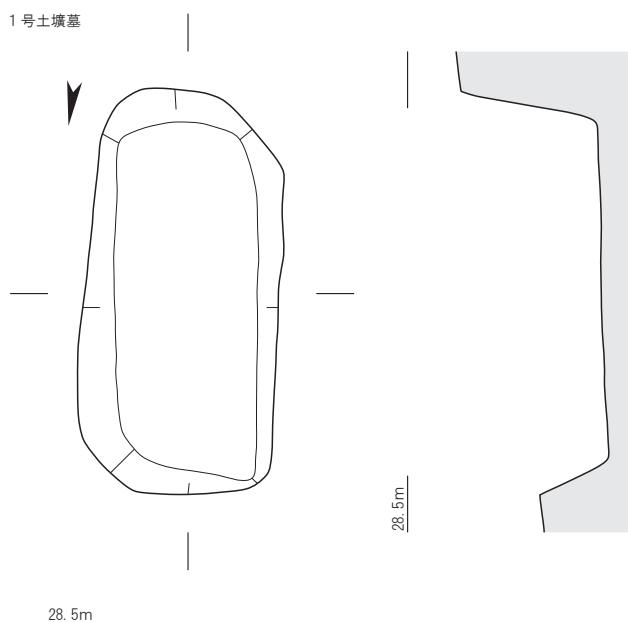
遺構名	位置・立地	主軸	頭位	墓壙				木棺			出土遺物	備考
				平面形	長さ (m)	幅 (m)	深さ (m)	形式	長さ (m)	幅 (m)		
1号木棺墓	調査区の北西部、丘陵北肩部の標高28.5 m付近	N - 15° - E	南	隅丸長方形	1.04	0.47 ~ 0.51	0.23	組合せ式	0.60	—	なし	
2号木棺墓	調査区の北西部、丘陵北肩部の標高28 ~ 28.5 m付近	N - 10° - E	南	隅丸長方形	1.19	0.75 ~ 0.78	0.19	組合せ式	0.74	0.18	なし	
3号木棺墓	調査区の南西部、丘陵南肩部の標高29 m付近	N - 15° - E	北	長方形	1.97	0.67 ~ 0.69	0.38	組合せ式	1.69	—	埋土上層：土師器細片	
4号木棺墓	調査区の南西部、丘陵南肩部の標高29 ~ 29.5 m付近	N - 10° - E	北	長方形	2.24	0.50 ~ 0.61	0.41	組合せ式	1.93	—	埋土：土師器細片	
5号木棺墓	調査区の南西部、丘陵南肩部の標高29 m付近	N - 14° - E	北	長方形	2.24	0.65 ~ 0.75	0.22	組合せ式	1.82	—	埋土上層：土師器細片 埋土：ナイフ形石器(S 1) 11号溝に切られる。	



第 73 図 4 号木棺墓遺構図



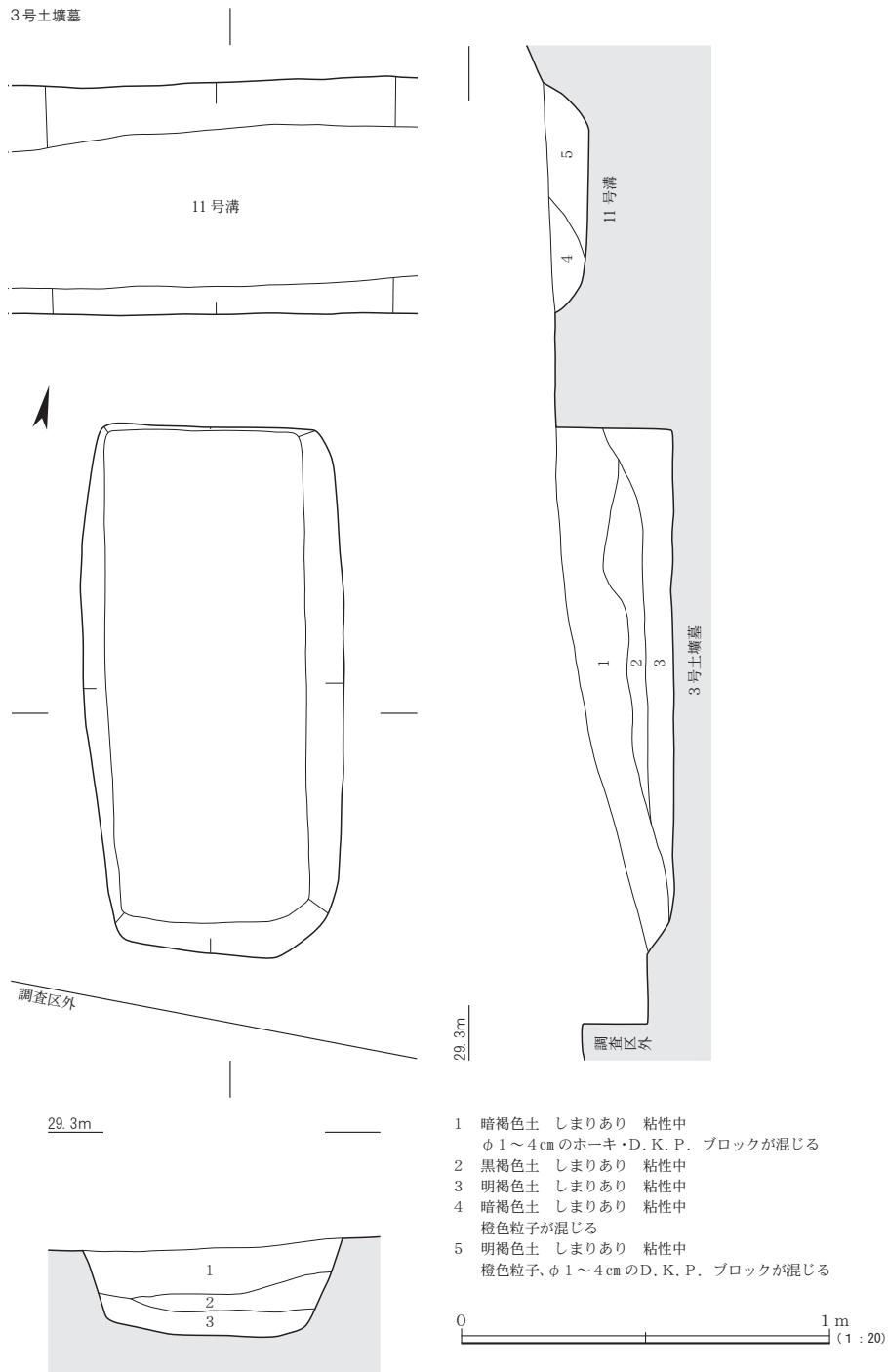
第74図 5号木棺墓遺構図



- 1 黒褐色土 しまりあり 粘性中
 ϕ 1 ~ 2 cm のホーキブロックが混じる
- 2 明褐色土 しまりあり 粘性中
 ϕ 3 ~ 5 cm のホーキブロックが混じる
- 3 黒色土 しまりあり 粘性中
黄・白・褐色粒子が少量混じる
- 4 黒褐色土 しまりあり 粘性中
白・褐色粒子がやや混じる
- 5 暗褐色土 しまりあり 粘性中
黄・褐色粒子が少量混じる

0 1 m (1 : 20)

第 75 図 1号・2号土壙墓遺構図



第 76 図 3号土壙墓遺構図

第 8 表 土壙墓一覧

遺構名	位置・立地	主軸	頭位	墓壙				出土遺物	備考
				平面形	長さ (m)	幅 (m)	深さ (m)		
1号土壙墓	調査区の北西部、丘陵北肩部の標高28 ~ 28.5 m付近	N - 10° - W	南	隅丸長方形	1.07	0.39 ~ 0.51	0.24	なし	
2号土壙墓	調査区の南西部、丘陵南肩部の標高29 m付近	N - 30° - W	北西	隅丸長方形	1.30	0.46 ~ 0.74	0.33	埋土：土師器細片	
3号土壙墓	調査区の南西部、丘陵南肩部の標高29 m付近	N - 15° - W	北西	隅丸長方形	1.43	0.60 ~ 0.61	0.33	なし	

(10) 溝

丘陵尾根から南斜面で11条を確認した。その詳細は第9表に一括し、以下、各遺構について述べる。

1号溝 調査区の中央部、丘陵尾根上の標高29.5～30m付近に位置する。やや円弧を描きながら西から東へ伸びる。規模は、長さ5.23m、幅0.6m～0.82m、深さ0.23mを測る。掘方の断面形は逆台形を呈する。遺物は、埋土中層から土師器小片が少量出土した。

2号溝 調査区の南部、丘陵南斜面の標高25～25.5m付近に位置し、24号墳1号主体部を切り、11号墳と切り合う。円弧状に1箇所の緩い屈曲を描きながら西から北東へ伸びる。規模は、長さ7.26m、幅0.72～1.02m、深さ0.42mを測る。掘方の断面形はU字形を呈する。遺物は、埋土中層から土師器小片、須恵器小片、磁器小片が出土した。

3号溝 調査区の南部、丘陵南斜面の標高28～28.5m付近に位置する。やや円弧を描きながら北東から南西へ伸びる。規模は、長さ5.06m、幅0.59m、深さ0.18mを測る。掘方の断面形は逆台形を呈する。遺物は、埋土下層から土師器壺片、鉄鏃（F16）が出土した。

4号溝 調査区の南部、丘陵南斜面の標高27.5～28m付近に位置する。やや円弧を描きながら北西から東へ伸びる。規模は、長さ4.79m、幅0.32～0.60m、深さ0.17mを測る。掘方の断面形はU字形を呈する。遺物は、埋土中層から土師器小片が少量出土した。

5号溝 4号溝の南東隣、丘陵南斜面の標高26.5～27.5m付近に位置する。やや円弧を描きながら北西から東へ伸びる。規模は、長さ5.56m、幅0.32～1.22m、深さ0.29mを測る。掘方の断面形はU字形を呈する。遺物は、埋土中層から土師器小片、須恵器小片が出土した。

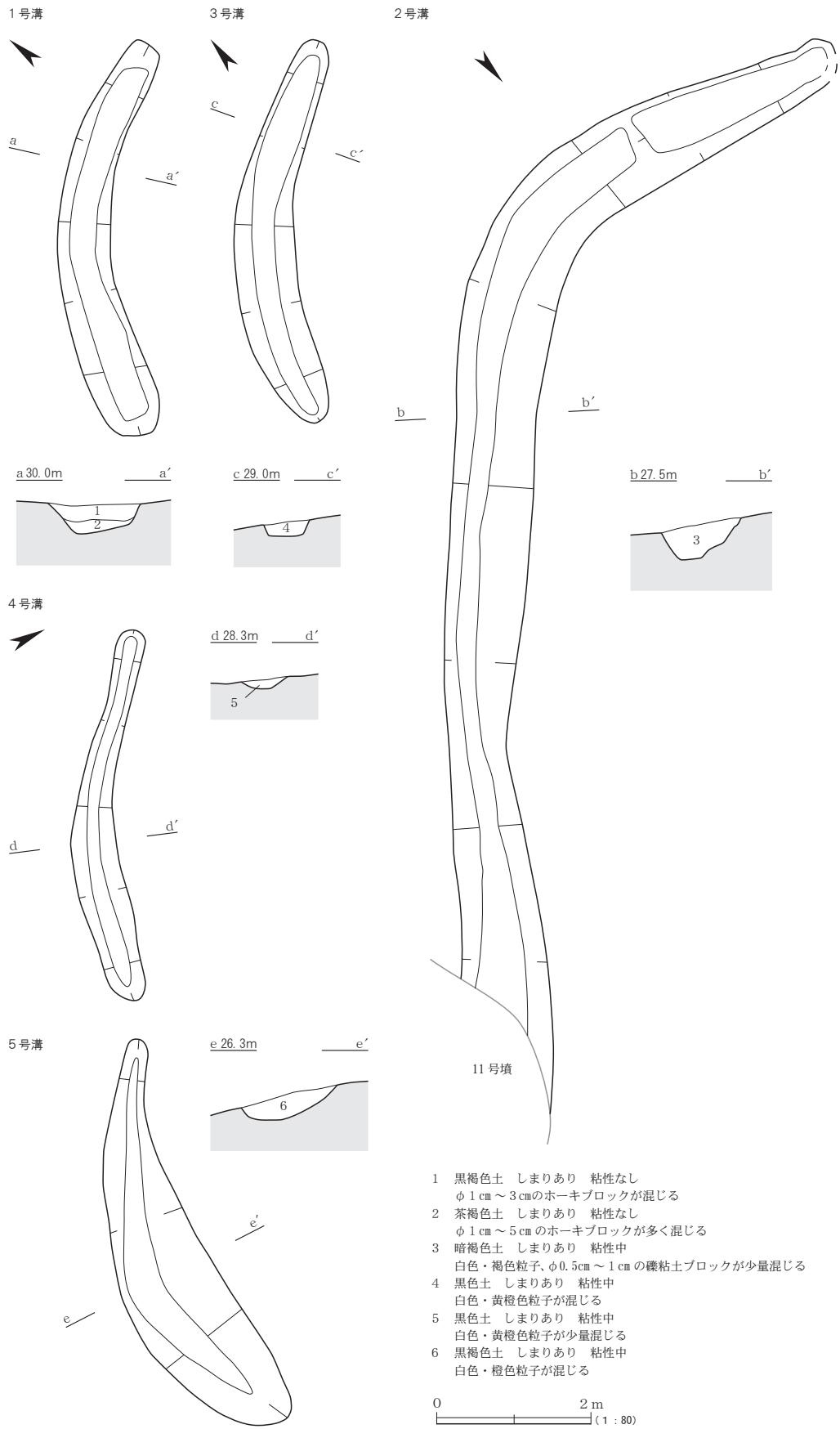
6号溝 調査区の南部、丘陵南斜面の標高29m付近に位置する。直線的に東から西へ伸びる。規模は、長さ4.84m、幅0.32～0.56m、深さ0.30mを測る。掘方の断面形は逆台形を呈する。埋土中層から下層で土師器壺、甕、器台の破片がまとまって出土した。

7号溝 調査区の南部、丘陵南斜面の標高28m付近に位置する。やや円弧を描きながら東から西へ伸びる。規模は、長さ4.63m、幅0.40～0.56m、深さ0.14mを測る。掘方の断面形は逆台形を呈する。遺物は埋土中層から土師器小片が少量出土した。

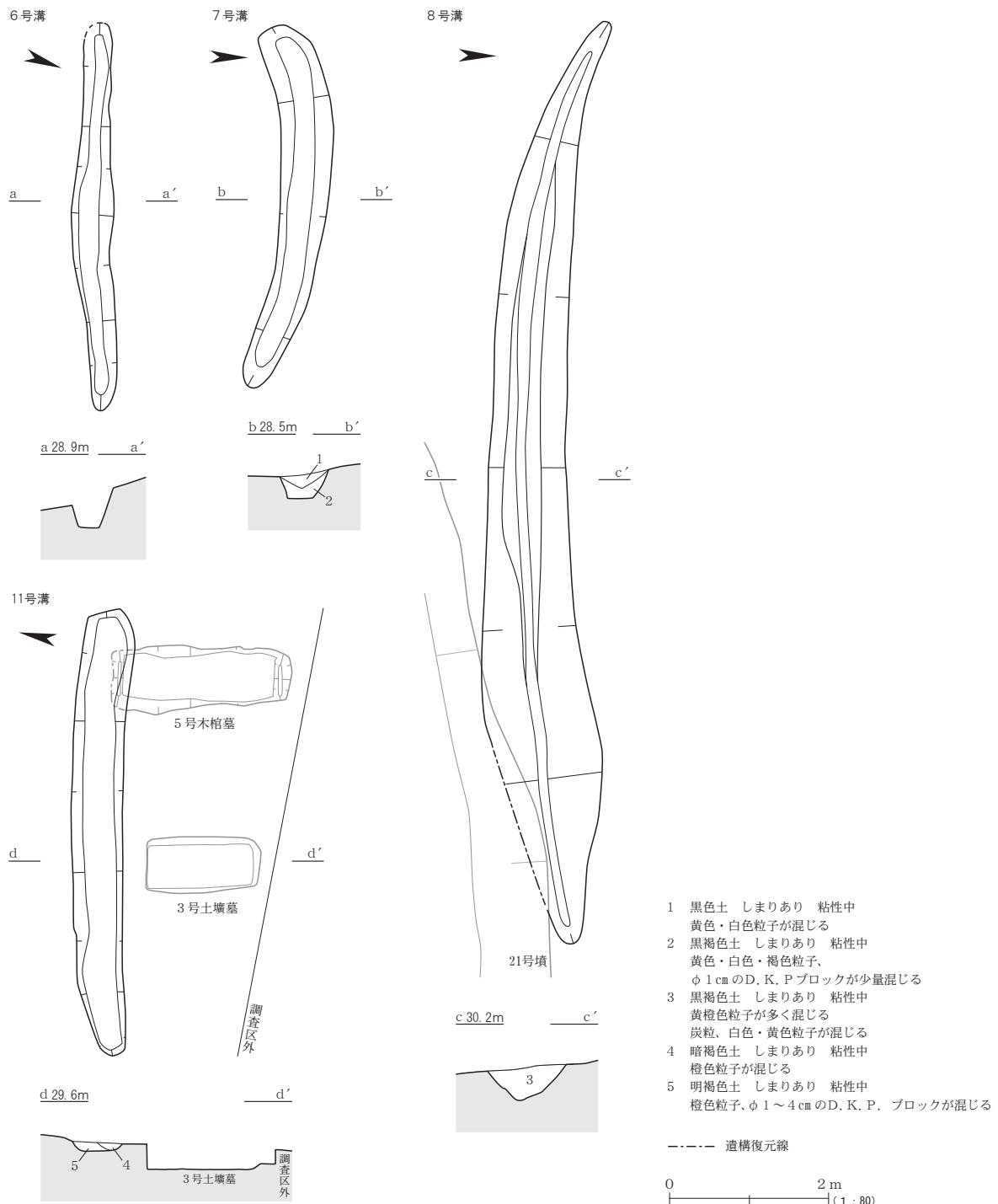
8号溝 調査区の南西部、丘陵南肩部の標高29.5m付近に位置し、南側で21号墳周溝を切る。やや円弧を描きながら西から東へ伸びる。規模は、長さ5.55m、幅0.82～1.36m、深さ0.66mを測る。掘方の断面形はU

第9表 溝一覧

遺構名	位置・立地	長さ (m)	検出面幅 (m)	底部幅 (m)	深さ (m)	断面形	出土遺物	備考
1号溝	調査区の中央部、丘陵尾根上の標高29.5～30m付近	5.23	0.6 ～0.82	0.50	0.23	逆台形	土師器小片	
2号溝	調査区の南部、丘陵南斜面の標高25～25.5m付近	7.26	0.72 ～1.02	0.21	0.42	U字形	土師器小片、須恵器小片、磁器小片	11号墳と切り合う。 24号墳1号主体部を切る。
3号溝	調査区の南部、丘陵南斜面の標高28～28.5m付近	5.06	0.59	0.40	0.18	逆台形	土師器壺片、鉄鏃（F16）	
4号溝	調査区の南部、丘陵南斜面の標高27.5～28m付近	4.79	0.32 ～0.6	0.38	0.17	U字形	土師器小片	5号溝と一連の可能性あり。
5号溝	調査区の南部、丘陵南斜面の標高26.5～27.5m付近	5.56	0.32 ～1.22	0.44	0.29	U字形	土師器小片、須恵器小片	4号溝と一連の可能性あり。
6号溝	調査区の南部、丘陵南斜面の標高29m付近	4.84	0.32 ～0.56	0.13	0.30	逆台形	土師器壺片、甕片、器台片	
7号溝	調査区の南部、丘陵南斜面の標高28m付近	4.63	0.4 ～0.56	0.32	0.14	逆台形	土師器小片	
8号溝	調査区の南部、丘陵南肩部の標高29.5m付近	5.55	0.82 ～1.36	0.26	0.66	U字形	土師器小片	21号墳周溝を切る。
9号溝	調査区の南西部、丘陵尾根上の標高30.5m付近	4.68	0.24 ～0.44	0.24	0.08 ～0.12	U字形	なし	10号溝と一連の可能性あり。
10号溝	調査区の南西部、丘陵尾根上の標高30.5m付近	7.40	0.36 ～0.52	0.24	0.12	U字形	なし	9号溝と一連の可能性あり。
11号溝	調査区の南西部、丘陵南肩部の標高29m付近	5.64	0.44 ～0.68	0.44	0.08	U字形	土師器小片	5号木棺墓を切る。



第 77 図 1 号～5 号溝遺構図

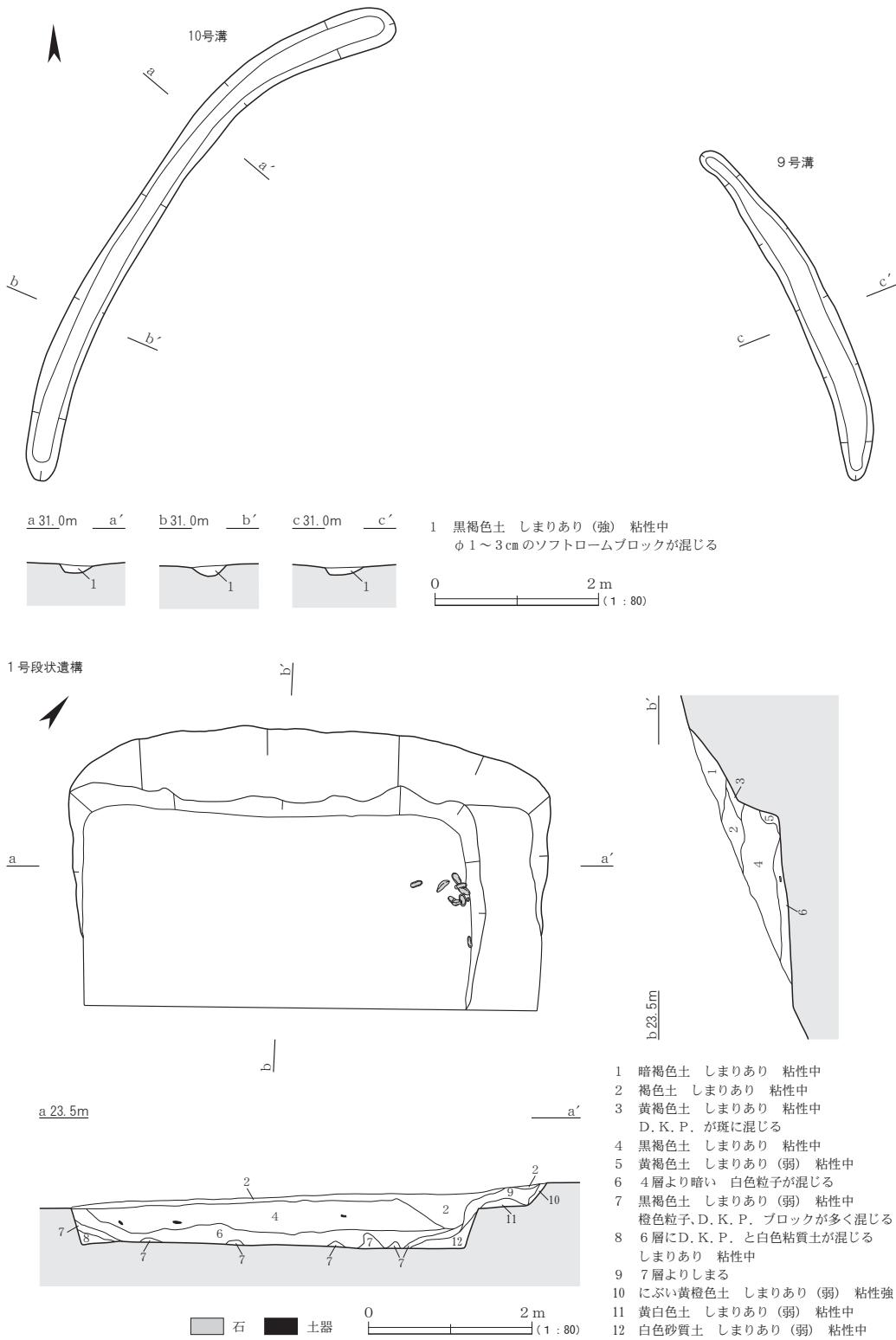


第 78 図 6 号～8 号・11 号溝遺構図

字形を呈する。遺物は、埋土中層から土師器小片が少量出土した。

9号溝 調査区の南西部、丘陵尾根上の標高 30.5 m 付近に位置する。やや円弧を描きながら南から北西へ伸びる。規模は、長さ 4.68 m、幅 0.24 ~ 0.44 m、深さ 0.08 ~ 0.12 m を測る。掘方の断面形はU字形を呈する。遺物は出土しなかった。溝の西端を円弧状に延長すると 10 号溝の東端にあたることから一連の可能性がある。

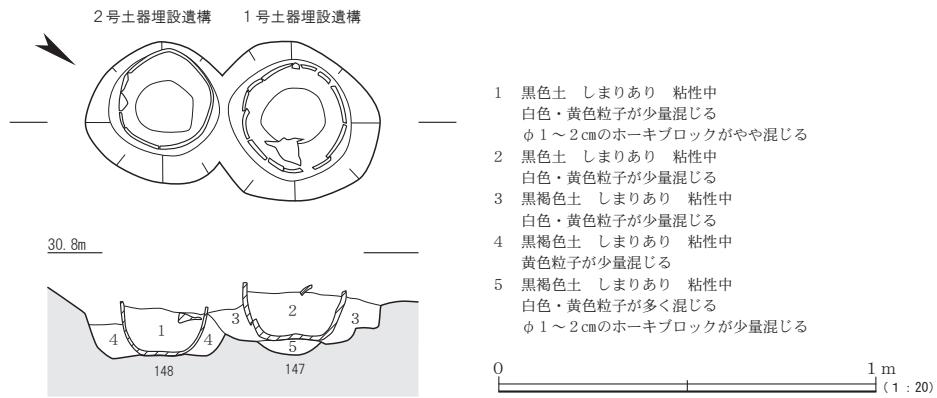
10号溝 9 号溝から西に約 3 m 離れた丘陵尾根上の標高 30.5 m 付近に位置する。やや円弧を描きながら南から北西へ伸びる。規模は、長さ 7.40 m、幅 0.36 ~ 0.52 m、深さ 0.12 m を測る。掘方の断面形はU字形を呈する。遺物は出土しなかった。溝の東端を円弧状に延長すると 9 号溝の西端にあたることから一連の可能性がある。



第79図 9号～10号溝遺構図及び1号段状遺構遺構図

11号溝 調査区の南西部、丘陵南肩部の標高29m付近に位置し、5号木棺墓を切る。直線的に東から西へ伸びる。規模は、長さ5.64m、幅0.44～0.68m、深さ0.08mを測る。掘方の断面形はU字形を呈する。遺物は、埋土中層から土師器小片が少量出土した。

(橋本)



第 80 図 1号・2号土器埋設遺構遺構図

(11) 段状遺構

1号段状遺構 調査区北東部の丘陵南斜面の標高 22.5 ~ 23.5 m付近に位置する。床面の平面形は方形を呈し、規模は北東 - 南西 4.7 m、北西 - 南東 2.3 m以上を測る。南東側は削平されている。北東側が幅約 75 cmのテラス状に張り出し、床面より 50 cm高い。検出面から床面までの深さは最大 72 cmを測る。床面にピットや周壁溝、貼床、焼土面は見られない。床面北東壁付近で円礫を 14 個確認した。円礫は楕円形を呈し、長軸約 30 cmを測るものが多い。

遺物は、床面付近で土師器甕 (144)、高坏 (145)、埋土から土師器壺、甕、高坏、鼓形器台などがまとまって出土した。
(片岡)

(12) 土器埋設遺構

1号土器埋設遺構 調査区の中央部、丘陵尾根上の標高 30.5 m付近に位置し、南で 2号土器埋設遺構を切る。掘方の平面形は円形で、規模は直径 0.42 m、深さ 0.3 mを測る。底面に土師質の短頸壺 (146・147) を正位で据えている。壺の内部から遺物は出土しなかったが、掘方周辺から土師質の蓋片が出土した。

2号土器埋設遺構 調査区の中央部、丘陵尾根上の標高 30.5 m付近に位置し、北で 1号土器埋設遺構に切られる。掘方の平面形は円形で、規模は直径 0.37 m、深さ 0.24 mを測る。底面に土師質の短頸壺 (148) を正位で据えている。壺の内部から遺物は出土しなかったが、掘方周辺から土師質の蓋片が出土した。

なお、1号・2号土器埋設遺構の周辺は旧大谷村の後産場として利用されていたことから、本遺構は胞衣壺の可能性がある。
(橋本)

2 遺物

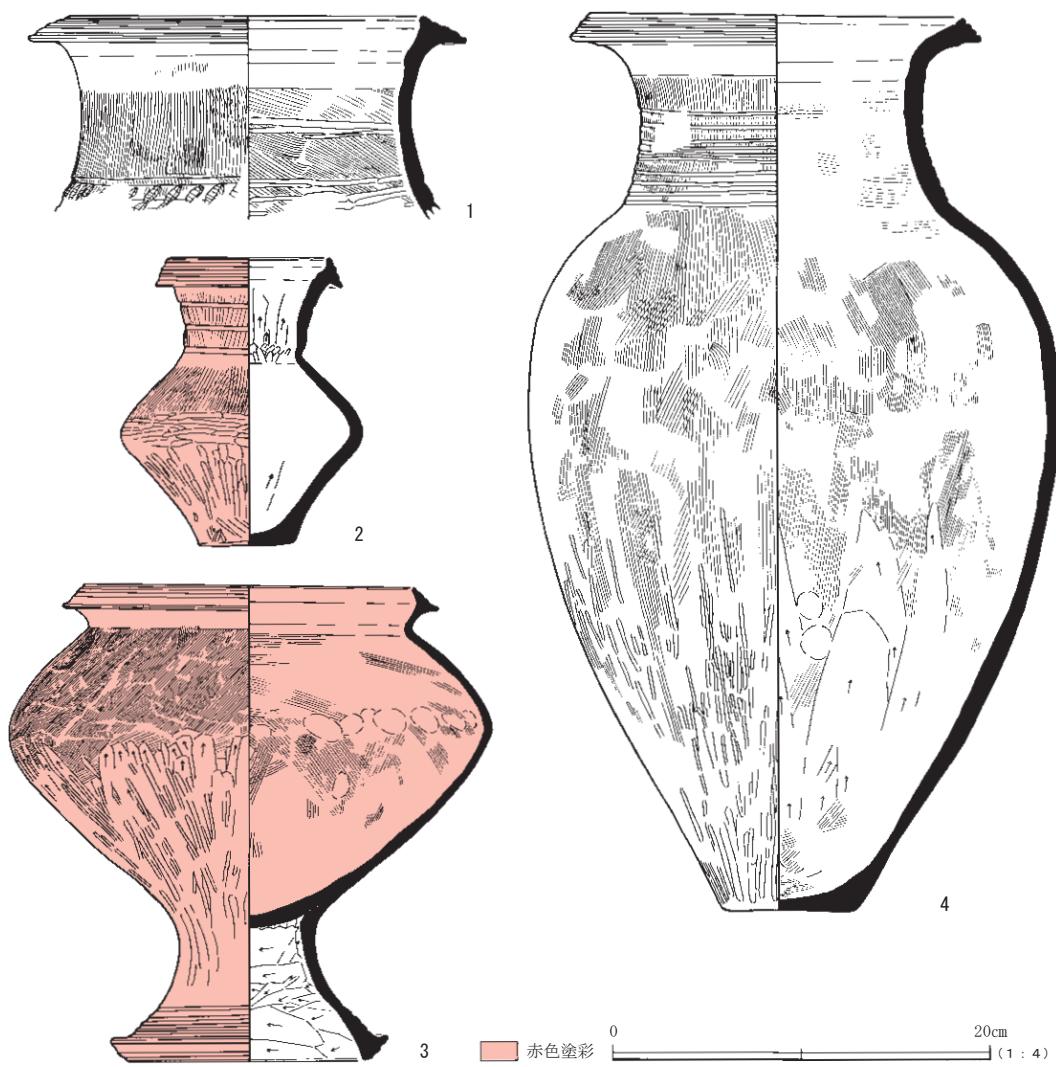
縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、丹塗り土師器、土師質土器、土製品、鉄器、玉類、玉作関係遺物、石器などが出土した。このうち、遺構に伴う遺物を中心に図化し、説明は第10表に一括した。

第10表 出土遺物一覧

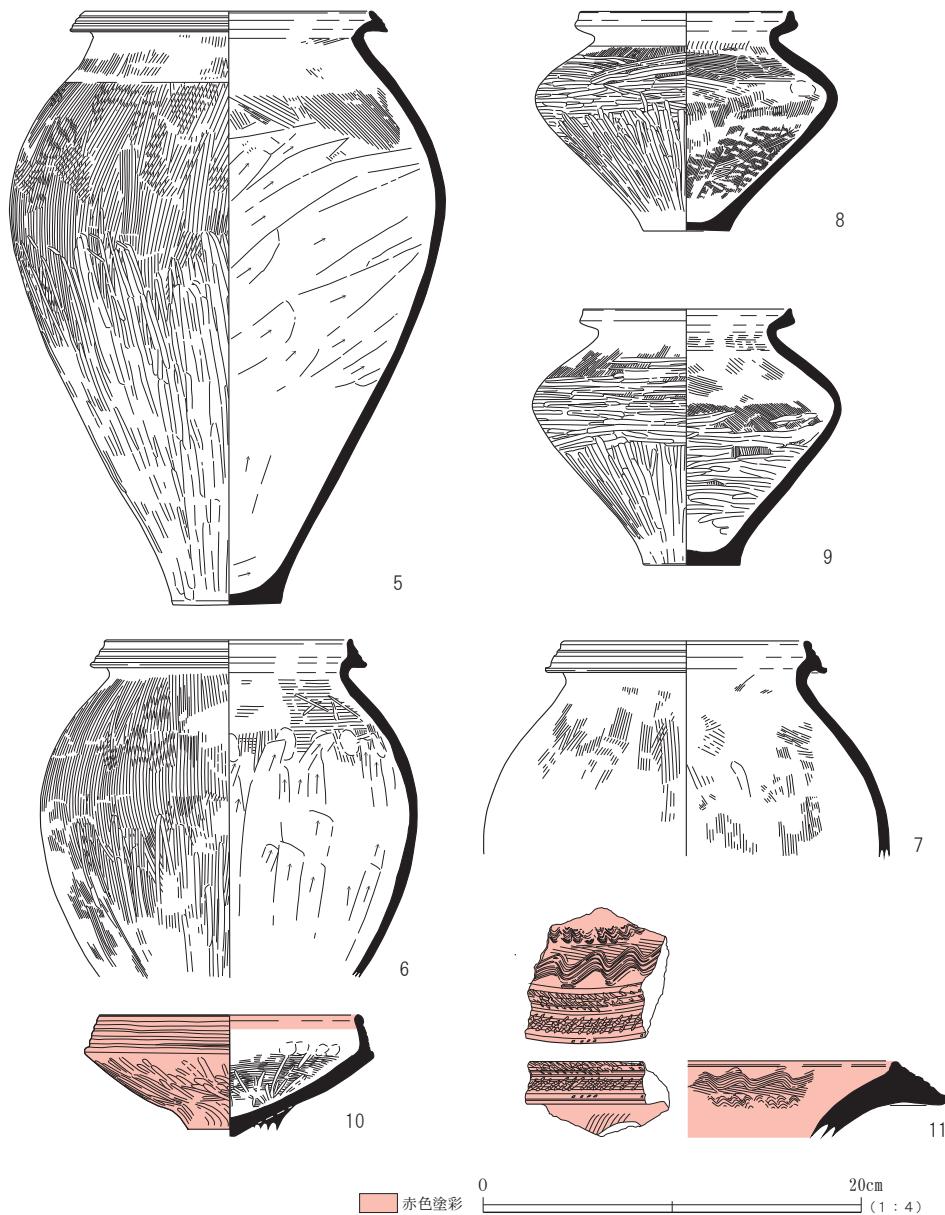
1号竪穴建物 土器

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形態	手 法	法量:()推定値 []現存値 胎土・焼成・色調・遺存度
床面	1	弥生土器 広口壺	器高 [10.2] 口径 18.5	口縁部はね上げ口縁で内傾し、端部上下に拡張し、下端は大きく外側に張り出す。口縁端面に4条の凹線文を施す。頸部下位に貼付突帯後、2条の凹線文、二枚貝による刺突文を施す。外面とも黒斑あり。	外面口縁部ヨコナデ、頸部上位ヨコナデ後、タテハケ。頸部中～下位タテハケ。面部斜め方向のハケメ後ヨコナデ、頸部下位斜め方向のハケメ後ヨコミガキ。	胎土やや密。1～3mmの石英・長石、1mm程の角閃石を含む。1mm以下の金雲母を少し含む。焼成良好。内面にぶい黄橙色・橙色、外面にぶい黄橙色。口縁部～頸部完存。
床面	2	弥生土器 長頸壺	器高 15.2 口径 8.4 胴部最大径 12.7 底径 5.0	口縁部はね上げ口縁で、端部上下に拡張する。口縁端面に3条の凹線文、頸部に3条の凹線文を施す。胴部は算盤玉状に張り出す。外面赤色塗彩よく残る。内外面とも黒斑、煤付着。	外面頸部タテハケ後ヨコナデ。肩部交差するハケメ。最大胴径部ヨコミガキ。体部下半～底部タテミガキ。底面ナデ。内面口縁部ヨコナデ、頸部タテケズリ後ヨコナデ。頸部下位、粘土繋ぎを仕上げる為のヘラミガキ。肩部～最大胴径部下位ヨコナデ。体部下半～底部不明瞭なヘラケズリ。	胎土密。1～2mmの石英・長石を含む。1mm程の角閃石、1mm以下の金雲母を僅かに含む。焼成良好。内面にぶい黄橙色、外面赤褐色（赤色塗彩）・褐色。完形。
床面	3	弥生土器 脚付壺	器高 25.2 口径 17.3 胴部最大径 25.5 底径 12.2	口縁部はね上げ口縁で内傾し、端部上下に拡張し、3条の凹線文を施す。胴部は算盤玉状に張り出す。脚部はハの字状に広がり、脚裾部に4条、裾端面に浅い2条の凹線文をめぐらせる。外面全域、内面口縁部～胴部底面赤色塗彩。内外面ともに黒斑あり。	外面頸部ヨコナデ、肩部～最大胴径部ハケス。最大胴径部ハケメ後、タテケズリ、タテミガキ。胴部下半タテケズリ後ヨコナデ。胴部下位～脚部ヨコナデ後、タテミガキ。脚裾部ヨコナデ。内面口縁部ヨコナデ～頸部ヨコナデ、肩部ヨコハケ。最大胴径部ユビオサエ。胴部下半交差するハケメ、底部剥離により不明瞭。脚部最上位シボリ、上位～裾ヨコケズリ。端部ヨコナデ。	胎土やや密。1～2mmの石英・長石、茶色砂粒を含む。1mm程の角閃石を少し含む。1mm以下の金雲母を含む。焼成良好。内面浅黄橙色、外面赤褐色（赤色塗彩）。ほぼ完形、口縁部のみ5/6。
床面、炭化材上	4	弥生土器 壺	器高 47.2 口径 19.5 胴部最大径 28.1 底径 6.9	口縁部はね上げ口縁で、端部僅かに上下に拡張する。口縁端面に3条の凹線文、頸部に9～10条の凹線文を施す。体部は倒卵形。内外面とも被熱による剥離、黒斑あり。口縁部は第2次調査1号竪穴建物出土弥生土器壺（5）と接合。	外面口縁部ヨコナデ、頸部タテハケ、肩部～最大胴径部交差するタテハケ。胴部下半タテハケ後、タテミガキ。底部タテミガキ、底面ナデ。内面口縁部ヨコナデ、頸部ハケメ後、ヨコナデ。肩部斜め上方へのヘラケズリ後、ハケメ。最大胴径部～体部下半斜め上方向へラケズリ。底部不明瞭なハフケズリ。	胎土やや疎。1～4mmの石英・長石を多く含む。1～3mmの茶色砂粒を含む。1～2mm程の角閃石、1mm以下の金雲母を含む。焼成やや不良。内面にぶい赤褐色、底部・被熱部分黒褐色。外面にぶい赤褐色・灰褐色、底部黒褐色。口縁部は完存。体部3/4。
床面	5	弥生土器 壺	器高 31.2 口径 (15.0) 胴部最大径 22.9 底径 6.2	口縁部はね上げ口縁で内傾し、端部上下に拡張し、3条の凹線文を施す。体部は倒卵形。内外面とも広範囲に黒斑、煤付着。内面頸部以外に黒斑。	外面頸部タテハケ後、一部ヨコナデ後ナデ消し。肩部～最大胴径部交差するタテハケ。最大胴径部タテハケ後、タテミガキ。体部下半～底部タテミガキ。底面ナデ。内面口縁部ヨコナデ、頸部ハケメ後、ヨコナデ。肩部斜め上方へのヘラケズリ後、ハケメ。最大胴径部～体部下半斜め上方向へラケズリ。底部不明瞭なハフケズリ。	胎土やや密。1～3mmの長石・石英、1mm程の角閃石、1mm以下の金雲母を含む。1mm程の茶色砂粒を僅かに含む。焼成良好。内面にぶい黄褐色・灰黃褐色、外面上方にぶい橙色・明黃褐色。口縁部1/2、体部完存。
P 4 埋土	6	弥生土器 壺	器高 [17.8] 口径 (12.8) 胴部最大径 19.8	口縁部はね上げ口縁で内傾し、端部上下に拡張し、3条の凹線文を施す。外面黒斑、煤付着。内面黒斑。	外面口縁部～頸部ヨコナデ。頸部下位～最大胴径部タテハケ。最大胴径部～体部下半タテハケ後、タテミガキ。内面口縁部～頸部ヨコナデ、頸部下ヨコハケ。肩部ユビオサエ後、タテハケ、ヨコハケ、タテケズリ。最大胴径部～体部下位タテケズリ。	胎土やや密。1～2mmの石英・長石を少し含む。1mm程の角閃石を含む。1mm以下の金雲母を僅かに含む。焼成やや不良。内面橙色・灰褐色、外面上方にぶい黄橙色。口縁部1/2、体部1/3。
床面	7	弥生土器 壺	器高 [11.3] 口径 (12.8) 胴部最大径 21.3	口縁部はね上げ口縁で内傾し、端部上下に拡張し、3条の凹線文を施す。内外面とも黒斑部分多く、外面煤付着。	外面口縁部～頸部ヨコナデ。頸部下～最大胴径部タテハケ。内面口縁部ヨコナデ。頸部～最大胴径部ハケメ。	胎土やや密。1～2mmの石英・長石を含む。1mm以下の角閃石を少し含む。1mm程の金雲母を僅かに含む。焼成良好。内外面とも浅黄橙色・黒褐色。口縁部1/6、体部1/6。
床面、P 26 埋土	8	弥生土器 小型壺	器高 11.6 口径 (11.0) 胴部最大径 (15.9) 底径 (4.5)	頸部から外側にくの字に折れた口縁で、口縁端部は上側に拡張し、胴部は算盤玉状に張り出す。内外面ともほぼ全域に黒斑。	外面口縁部～頸部ヨコナデ、頸部下タテハケ後、ヨコミガキ。最大胴径部ヨコミガキ。底部ヨコナデ、底面ナデ。内面口縁部～頸部ヨコナデ、頸部下タテハケ、肩部ヨコナデ。最大胴径部交差するハケメ、ユビオサエ。体部下位交差するハケメ、底部ナデ。	胎土密。1～2mmの石英・長石、1mm程の角閃石を少し含む。1mm程の金雲母を僅かに含む。焼成良好。内面黒褐色・黒色、外面上方に暗赤褐色。口縁部1/8以下、体部1/2。
床面	9	弥生土器 小型壺	器高 13.5 口径 (10.8) 胴部最大径 16.2 底径 5.0	頸部から外側にくの字に折れた口縁で、口縁端部は上下に少し拡張し、胴部は算盤玉状に張り出す。外顔頸部以下、内面最大胴径部以下に黒斑。	外面口縁部～頸部ヨコナデ、頸部下タテハケ後ヨコナデ、肩部タテハケ後、ヨコミガキ。最大胴径部ヨコミガキ。体部下半タテミガキ。底部近くミガキ後ヨコナデ。底面ナデ。内面口縁部ヨコナデ、頸部ハケメ後、ハラミガキ。最大胴径部ハケメ後、ヨコミガキ、底部ナデ。	胎土密。1mm程の石英・長石を少し含む。1mm以下の角閃石を僅かに含む。焼成良好。内面にぶい黄褐色・灰褐色、外面上方にぶい黄橙色。口縁部1/4、体部3/4。
P 4・P 5・P 9 埋土	10	弥生土器 高杯	器高 [6.4] 口径 13.5 杯部最大径 15.2	外傾する杯部は屈曲して内傾する口縁部につづき、口縁部外面に4～5条の凹線文を施す。外面全域と内面口縁部に赤色塗彩。内外面ともに黒斑あり。	外面杯部上部ヨコナデ後、タテミガキ。杯部下半強いタテミガキ。内面口縁部ヨコナデ、屈曲部ユビオサエ。杯部ヨコハケ後、タテミガキ。杯底部調整不明瞭。	胎土やや疎。1～3mmの石英・長石を含む。1～5mmの茶色砂粒、1mm以下の金雲母を少し含む。焼成良好。内面橙色、外面上面明赤褐色。杯部・口縁部7/8。
埋土	11	弥生土器 器台	器高 [3.9] 口径 (14.3) 最大幅 [7.6]	口縁部はねあげ口縁で、端部が下垂、外側に拡張する。口縁端面に6条の凹線文後、ヘラ状工具による連続刺突文を施す。内面口縁端部近くに1条の凹線文、屈曲幅の違う3～8条の波状文を上下2列に施す。内外面とも赤色塗彩。	外面口縁部ヨコナデ、頸部ハケメ。内面、口縁部ヨコナデ、端部下ヨコハケ、頸部上位ヨコナデ。	胎土やや密。1～2mmの長石を含む。1mm程の石英、角閃石を僅かに含む。焼成良好。内面赤褐色、外面上赤褐色。口縁部1/8以下。
埋土上層	12	土師質土器 皿	器高 2.4 口径 8.4	クロコ整形で口縁部の外傾度は低く、大きく上外方へ開く。底部は小さく平坦。外面に墨書き「天上」、内外面とも煤付着。	ロクロ整形後、外面ヨコナデ。内面仕上げナデ。底面回転糸切。	胎土密。1mm以下の長石・金雲母を僅かに含む。焼成良好。内外面とも浅黄橙色。ほぼ完形。
埋土上層	13	土師質土器 皿	器高 2.4 口径 8.3	クロコ整形で口縁部の外傾度は低く、大きく上外方へ開く。底部は小さく平坦。外面に墨書き、内外面とも煤付着。	ロクロ整形後、外面ヨコナデ。内面仕上げナデ。底面回転糸切。	胎土密。1mm以下の長石を僅かに含む。焼成良好。内外面とも浅黄橙色。ほぼ完形。

1号竪穴建物



第81図 1号竪穴建物出土土器（1）

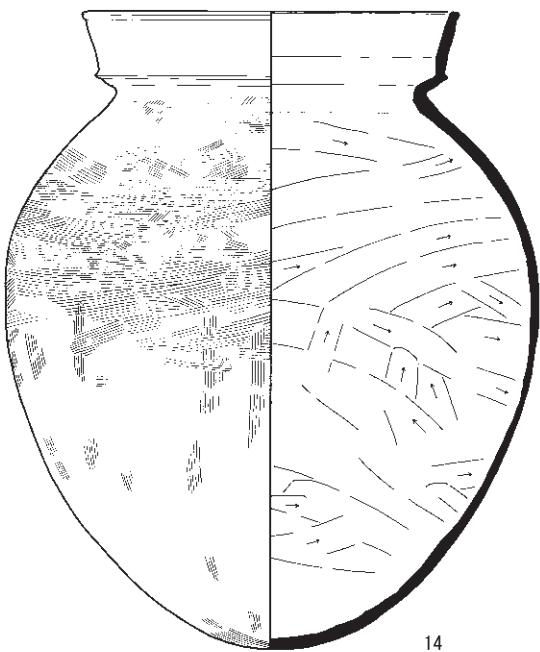


第82図 1号堅穴建物出土土器 (2)

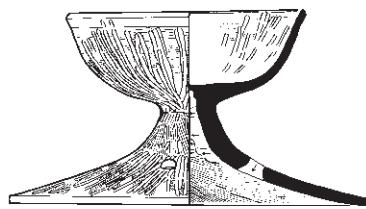
2号堅穴建物 土器

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形態	手法	法量: () 推定値 [] 現存値	
						胎土・焼成・色調・遺存度	
床面	14	土師器 甕	器高 33.7 口径 19.1 胴部最大径 28.2	外反する複合口縁で、口縁端部は外傾して面を持ち、ごく浅い1条の凹線を施す。口縁下端は外側につまみ出され鋸い稜を持つ。内外面黒斑、煤付着。	外面口縁へ頸部上位ヨコナデ、頸部下位ヨコハケ、タテハケ。体部上位交差するヨコハケ、中位タテハケ後、ヨコハケ。下位タテハケ、内面口縁へ頸部ヨコナデ、体部上位ヨコケズリ、中位ヨコケズリ後、一部タテケズリ、下位ヨコケズリ、底部不明瞭。	胎土やや密。1~3mmの石英・長石を含む。1mm程の角閃石、1mm以下の金雲母を少し含む。焼成やや不良。内外面ともにぶい黄橙色。口縁部5/6、体部5/6。	
床面	15	土師器 高环	器高 10.3 口径 12.2 底径 18.8	深い塊状の坏部で、内溝気味に立ち上がり、口縁端部はやや外反し、外傾した面を持つ。裾部は短い筒部から広がり広がり、3方向の円形透かし穴を施す。裾部内外面に薄い黒斑。布留式。	外面口縁部ヨコナデ、坏部ヨコハケ後、タテミガキ。裾部タテハケ後、タテミガキ。内面坏部ヨコハケ後、タテミガキ。筒部ヨコケズリ、裾部反時計回り放射状のハケメ、裾端部ヨコナデ。	胎土やや密。1~2mmの石英・長石、1mm程の角閃石を少し含む。1~3mmの茶色砂粒を僅かに含む。焼成良好。内面にぶい橙色・灰褐色、外面上にぶい褐色。坏部3/4、裾部ほぼ完存。	
床面	16	土師器 高环	器高 11.3 口径 16.8 底径 11.4	やや平坦な底部から緩やかに立ち上がる坏部で、口縁端部は外反し、外傾した面を持つ。裾部は短い筒部から広がり、裾端部は外傾した面を持つ。内外面に薄い黒斑。	外面口縁部ヨコナデ、坏部上位ヨコミガキ、下位ヨコミガキ後、タテハケ。筒部~裾部タテハケ後、ヨコミガキ。内面坏部ヨコナデ後、ヨコミガキ。筒部ヨコケズリ。裾部ヨコハケ、裾端部ヨコナデ。	胎土やや密。1~3mmの石英・長石、1mm程の角閃石、1mm以下の金雲母を少し含む。焼成良好。内外面ともにぶい橙色。坏部7/8、裾部1/4。	
P5埋土	17	土師器 低脚坏	器高 6.8 口径 15.2 底径 (5.2)	塊状の坏部で内溝して立ち上がる。裾部は小さい。	外面坏部ヨコナデ後にミガキと思われるが不明瞭。裾部ヨコナデ。内面坏部ヨコナデ後、タテミガキ。裾部ヨコナデ。	胎土やや疎。1~3mmの石英・長石を含む。1mm程の角閃石、1mm以下の金雲母を少し含む。1~2mmの茶色砂粒を僅かに含む。焼成不良。内外面とも浅黄橙色。坏部7/8、裾部1/4。	

2号竪穴建物

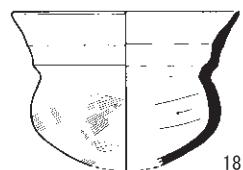


14



15

3号竪穴建物

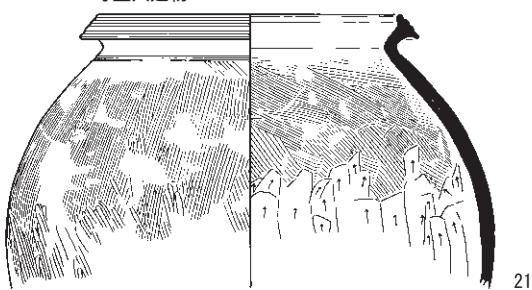


18

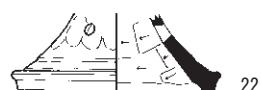


19

5号竪穴建物

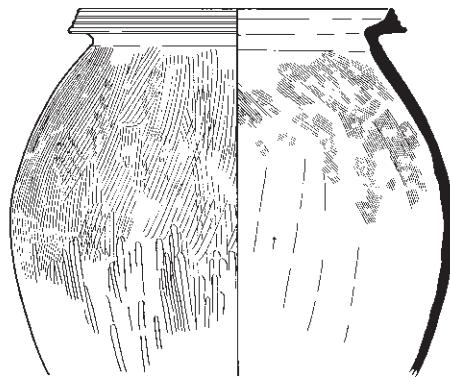


21

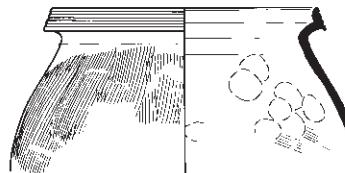


22

6号竪穴建物



23



24



第83図 2号～6号竪穴建物出土土器

3号堅穴建物 土器

法量: () 推定値 [] 現存値

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土・焼成・色調・遺存度
埋土	18	土師器 小型丸底壺	器高 [8.1] 口径 (11.8) 胸部最大径 (10.0)	外反する複合口縁で、端面は薄く、口縁下端は下垂しない。	外面口縁部～頸部ヨコナデ、体部ヨコハケ。内面口縁部～頸部不眞瞭だがヨコナデと思われる。体部上半ヨコケズリ、体部下半調整不明瞭。	胎土やや密。1～2mmの石英・長石を少し含む。1～2mm程の茶色砂粒を僅かに含む。焼成やや不良。内外面とも灰白色。口縁部1/4、体部1/3。
埋土	19	土師器 甕	器高 [5.0] 最大幅 [5.8]	外反する複合口縁で口縁下端は下垂せず外側に突き出る。	内外面とも口縁部～頸部ヨコナデ。	胎土やや密。1～2mmの石英・長石、1mm程の茶色砂粒、1mm程の角閃石を少し含む。焼成良好。内外面とも浅黄褐色。口縁部破片1/8以下。

4号堅穴建物 土器

法量: () 推定値 [] 現存値

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土・焼成・色調・遺存度
検出面	20	弥生土器 甕	器高 [5.5] 口径 (7.2)	口縁部はね上げ口縁で内傾し、端部上下に拡張し、3条の凹線文を施す。内外面黒斑。	外面頸部ヨコナデ、肩部タテハケ。内面口縁～頸部ヨコナデ、肩部斜め方向のハケメ。最大胴径部タテケズリ。	胎土やや密。1～2mmの石英・長石を含む。1mm程の角閃石、1mm以下の金雲母を少し含む。1～2mmの茶色砂粒を僅かに含む。焼成良好。内外面にぶい橙、外面にぶい黄褐色。口縁部1/4。

5号堅穴建物 土器

法量: () 推定値 [] 現存値

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土・焼成・色調・遺存度
床面	21	弥生土器 甕	器高 [14.5] 口径 15.8 胸部最大径 (25.7)	口縁部はね上げ口縁で内傾し、端部上下に拡張し、3条の凹線文を施す。頸部下に2条の凹線文。外面黒斑、煤付着。内外面黒斑。	外面頸部ヨコナデ、肩部～体部上半タテハケ。最大胴径部タテハケ後、タテミガキ。内面口縁部～頸部ヨコナデ、肩部斜め方向のハケメ。最大胴径部タテケズリ。	胎土やや疎。1～2mmの石英・長石、1mm以下の金雲母を含む。1～2mmの茶色砂粒を少し含む。1mm程の角閃石を僅かに含む。焼成良好。内外面とも橙色。口縁部1/4、体部1/4。
埋土	22	弥生土器 高坏	器高 [4.2] 底径 (9.8) 最大径 (11.0)	広くハの字状に外反する脚裾部で、外面に1条の凹線文、外側から押し込んだ円形の透かし穴を施す。裾部内外面に黒斑。	外面脚部上半ユビオサエ、裾部ヨコナデ。内面ヨコケズリ、裾部ヨコナデ。	胎土やや疎。1～3mmの長石・石英を含む。1mm以下の金雲母を少し含む。1mm以下の角閃石を僅かに含む。焼成良好。内外面にぶい黄褐色、外面橙色。脚部1/4。

6号堅穴建物 土器

法量: () 推定値 [] 現存値

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土・焼成・色調・遺存度
床面	23	弥生土器 甕	器高 [19.4] 口径 16.4 胸部最大径 (23.4)	口縁部はね上げ口縁で内傾し、端部上下に拡張し、3条の凹線文を施す。外面黒斑、煤付着。内外面上半に黒斑。	外面頸部ヨコナデ、頸部下～最大胴径部単位の太いタテハケ。最大胴径部タテハケ後、タテミガキ。体部下半タテミガキ。内面口縁部～頸部ヨコナデ。肩部～最大胴径部タテハケ。最大胴径部～体部下半不明瞭なハラケズリ。	胎土やや疎。1～3mmの石英・長石、1～2mmの角閃石を含む。1～3mmの茶色砂粒、1mm以下の金雲母を僅かに含む。焼成良好。内外面ともにぶい黄褐色、口縁部橙色。口縁部3/4、体部1/4。
P 9 埋土	24	弥生土器 甕	器高 [8.6] 口径 (13.9)	口縁部はね上げ口縁で内傾し、端部上下に拡張し、3条の凹線文を施す。外面頸部以外に黒斑、煤付着。内外面頸部以外に黒斑。	外面頸部ヨコナデ、肩部～最大胴径部タテハケ。内面口縁～頸部ヨコナデ。肩部ヨコナデ後、ユビオサエ。最大胴径部ヨコナデ後一部ハケメ。	胎土やや疎。1～2mmの石英・長石、1mm以下の金雲母を少し含む。焼成良好。内外面ともにぶい黄褐色。口縁部1/4、体部1/4。

7号堅穴建物 土器

法量: [] 現存値

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土・焼成・色調・遺存度
P 5 埋土	25	土師器 高坏	器高 [12.3] 坏部最大径 22.2	外傾する坏部は屈曲して口縁部につづくが口縁部は欠損。脚部中位に3方向の円形透かし穴を外側から、その下側に1条の凹線文を施す。内外面ともに屈曲部に黒斑。	外面坏部ヨコミガキ、脚接合部ユビオサエ。脚部板状工具による紙のミガキ後、ナデ。内面坏部、タテハケ後、ヨコミガキ。脚部天井ナデ、脚部上位シボリ、中位ヨコケズリ。	胎土やや密。1～3mmの石英・長石、1mm程の角閃石を少し含む。1mm以下の金雲母を含む。1mm程の茶色砂粒を僅かに含む。焼成良好。内外面にぶい赤褐色・橙色、外面橙色。坏部口縁無し3/4、脚部中位以下屈部欠損。

9号堅穴建物 土器

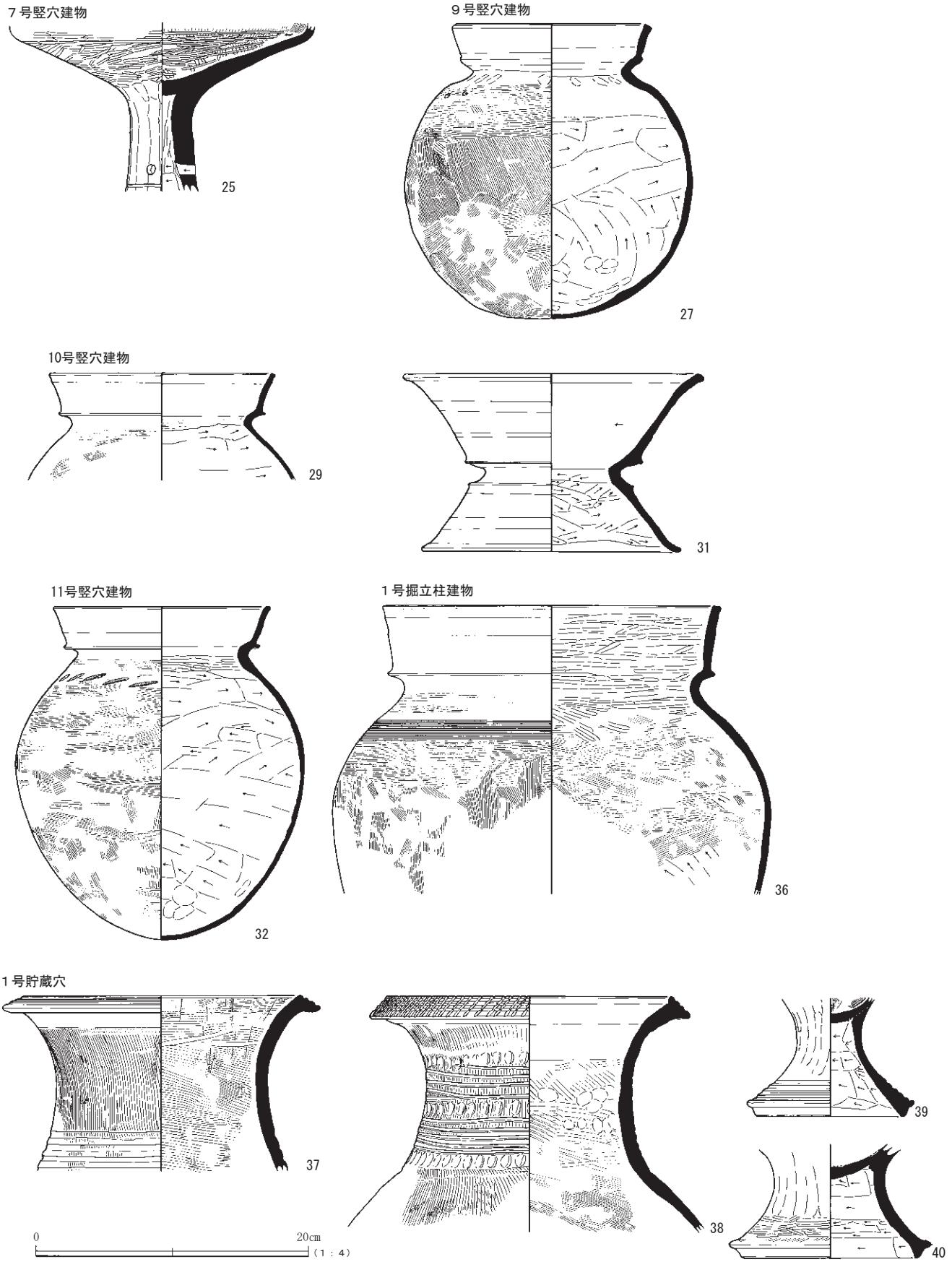
法量: () 推定値 [] 現存値

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土・焼成・色調・遺存度
床面	26	土師器 壺	器高 [16.5] 口径 (10.5)	広く外反する複合口縁で、口縁端部はやや肥大、外傾して面を持つ。口縁下端はやや下垂し、外側につまみ出され鏡い襷を持ち、襷の上に凹線文を施す。肩部に連続刺突文。外面口縁、体部肩部以下に黒斑。	外面口縁部～頸部ヨコナデ、頸部下位～肩部タテハケ。肩部以下ヨコハケ、ナナメハケ。内面口縁～頸部ヨコナデ、肩部以下ヨコケズリ。	胎土やや密。1～2mmの石英・長石、1mm程の角閃石を含む。1mm程の茶色砂粒、1mm以下の金雲母を少し含む。焼成良好。内外面ともにぶい黄褐色。口縁部1/8以下、体部1/3、器高1/2。
床面	27	土師器 甕	器高 21.6 口径 13.7 胸部最大径 21.0	外反する複合口縁で、口縁端部はやや肥大、外傾して面を持つ。口縁下端は少し外側に突出する。体部は緩やかな肩を持つ球形で、肩部に2つの刺突文を施す。外面体部肩部以下に黒斑、中位以下煤付着。内外面剥離あり。	外面口縁部～頸部ヨコナデ、頸部下位ヨコナデ後、ユビオサエ。肩部ヨコハケ、ヨコハケ、V字状に折り返すハケメ。内面口縁部～肩部ヨコナデ。頸部下位一部ユビオサエ。体部中位ヨコケズリ、下位タテケズリ後、一部ユビオサエ。	胎土やや密。1～4mmの石英を多く含む。1～3mmの長石、1mm程の角閃石、1mm以下の金雲母を少し含む。7mm程の穂を1つ含む。1mm程の茶色砂粒を僅かに含む。焼成良好。内面浅黄褐色・橙色、外表面浅黄褐色・明赤褐色。口縁部3/4、頸部完存、体部3/4。
床面	28	土師器 高坏	器高 [7.2] 最大幅 [22.3]	平坦な底部から屈曲して広く立ち上がる坏部。口縁・脚部欠損。屈曲部に粘土繊維による明瞭な稜があり。	外面坏部ヘラケズリ後(反時計回り)、ヨコナデ。坏底部ハケメ。内面ハケメ後、ミガキ。	胎土やや密。1～2mmの石英・長石、1mm程の角閃石、1mm以下の金雲母を含む。1～2mm程の茶色砂粒を少し含む。焼成良好。内外面とも橙色。坏部口縁無し1/4。

10号堅穴建物 土器

法量: () 推定値 [] 現存値

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土・焼成・色調・遺存度
床面	29	土師器 甕	器高 [7.8] 口径 (16.0)	外反する複合口縁で、口縁端部は外傾して面を持つ。口縁下端は外側につまみ出され鏡い襷を持つ。外面体部肩部以下に黒斑、全周に煤付着。	外面口縁部～頸部ヨコナデ、体部上位ヨコハケ。内面口縁～頸部上位ヨコナデ、頸部中位ヨコハケ後、ヨコナデ。頸部下位～体部上位ヨコケズリ。	胎土やや密。1～3mmの石英・長石、1mm以下の金雲母を少し含む。1mm程の角閃石を含む。焼成良好。内外面とも橙色。口縁部1/4、肩部1/8以下。
床面	30	土師器 高坏	器高 [6.0] 最大幅 [14.2]	脚裾部は短い筒部から大きく広がるが、裾部端は欠損。	外面脚部ハケメ。内面坏部底面ナデ、脚部上位ヘラケズリ、下位ハケメ。	胎土やや密。1～3mmの石英・長石、茶色砂粒を含む。1mm程の角閃石、1mm以下の金雲母を少し含む。焼成やや不良。内外面とも浅黄褐色。脚部(裾部端部無し)3/4。
床面	31	土師器 鼓形器台	器高 13.0 口径 21.0 底径 18.4	大きく逆ハの字形に外反する坏部は外傾する口縁端面にやや面を持つ。坏部下端は外側につまみ出され鏡い襷を持つ。外面体部肩部上位につまみ出しそれぞれ鏡い襷を持つ、ハの字型に外反して広がる裾部は上位につまみ出しそれぞれ鏡い襷を持つ。	外面口縁部～裾部ヨコナデ。内面口縁部ヨコナデ、坏部ヘラケズリ後、ヨコナデ。裾部不定方向のヨコケズリ、裾部端部ヨコナデ。	胎土やや密。1～4mmの石英、1mm程の角閃石・金雲母を含む。1～3mmの長石、1～2mmの茶色砂粒を少し含む。焼成やや不良。内外面とも浅黄褐色。ほぼ完形。



第84図 7号・9号～11号竪穴建物、1号掘立柱建物、1号貯蔵穴出土土器

11号堅穴建物 土器

法量：() 推定値 [] 現存値

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土・焼成・色調・遺存度
床面	32	土師器 甕	器高 23.4 口径 15.4 胴部最大径 21.1	外反する複合口縁で、口縁下端はやや下垂し外側に大きくつまみ出される。体部は球形で、体部上位にヘラ状工具による連続刺突文を施す。外面口縁部被熱朱変色。頸部以下黒斑、全域に煤付着。内面体部に黒斑、煤付着。	外面口縁へ頸部ヨコナデ、体部上位ヨコハケ、中位以下タテハケ後、ヨコハケ。内面口縁へ頸部上位ヨコナデ、頸部下位ヨコミガキ。体部上位ヨコケズリ、中位～下位ヨコ、ナナメのケズリ、底部ケズリ後、ユビオサエ。	胎土やや密。1～3mmの石英・長石、1mm以下の金雲母を含む。1mm程の角閃石を少し含む。焼成良好。内面にぶい橙色・灰褐色・橙色、外面上にぶい橙・橙色。ほぼ完形。
床面	33	土師器 甕	器高 [13.7] 口径 15.2	外反する複合口縁で、口縁下端は外側に少しつまみ出される。肩部上部に浅い7条の平行沈線文、下部に8条の波状文を施す。外面肩部以下に黒斑、煤付着。	外面口縁へ肩部ヨコナデ、肩部以下交差するナナメハケ。内面口縁へ頸部ヨコナデ、頸部下位以下ヨコケズリ。	胎土やや密。1～4mmの石英・長石を含む。1～6mmの茶色砂粒、1mm程の角閃石、1mm以下の金雲母を少し含む。焼成やや不良。内外面とも浅黄橙色。口縁へ頸部完存、体部7/8(器高1/2)。
床面	34	土師器 高坏	器高 [7.1] 口径 22.6	坏部は広く平坦な底面から緩やかに立ち上がり、口縁端部は僅かに外反し、外傾した面を持つ。坏部内部底部剥離あり。内外面に薄い黒斑、僅かに煤付着。	外面坏部全域ヨコミガキ。内面放射状のミガキ、一部ハケメが残る。	胎土やや密。1～5mmの石英・長石、1～2mmの茶色砂粒、1mm程の角閃石、1mm以下の金雲母を少し含む。焼成良好。内外面とも浅黄橙色。坏部3/4。
床面	35	土師器 低脚坏	器高 [5.8] 底径 (13.0)	坏部は緩やかな丸底。脚裾部は外反してハの字状に広がる。	外面坏部下位ヨコナデ後、タテハケ。脚部ヨコナデ。内面坏部剥離の為不明瞭。脚部ヨコナデ。	胎土やや密。1～3mmの石英・長石、1mm程の角閃石を少し含む。1mm以下の金雲母を僅かに含む。焼成良好。内外面とも浅黄橙色。坏部底部1/4、脚部1/2(裾端部1/8)。

1号掘立柱建物 土器

法量：() 推定値 [] 現存値

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土・焼成・色調・遺存度
P 4 埋土	36	土師器 甕	器高 [21.1] 口径 (23.6) 胴部最大径 (32.0)	外反する複合口縁で、口縁端部は僅かに外傾して面を持ち、ごく浅い凹線文を施す。口縁下端は外側につまみ出され大きく突出し、肩部に貝殻腹縁による9条の平行沈線文を施す。外面肩部僅かに煤付着。	外面口縁部へ頸部ヨコナデ、頸部下位ヨコハケ、肩部ヨコハケ後、タテハケ。最大胴径部以下タテハケ。内面口縁端部ヨコナデ、口縁部へ頸部下位ヨコミガキ。肩部ヨコハケ、最大胴径部以下交差するヨコハケ、ナナメハケ後、一部ナナメケズリ。	胎土やや密。1～4mmの石英・長石を含む。1～2mmの茶色砂粒、1mm程の角閃石、1mm以下の金雲母を少し含む。焼成やや不良。内面にぶい橙色。外面上にぶい橙色・淡橙色。口縁部1/3、体部1/4。

1号貯蔵穴 土器

法量：() 推定値 [] 現存値

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土・焼成・色調・遺存度
埋土	37	弥生土器 壺	器高 [12.9] 口径 (20.1)	口縁部はね上げ口縁で、屈曲部が外側に拡張し、口縁端面に3条の凹線文、板状工具による刻み目を施す。頸部は3～4条、5条の2つの凹線文とその上下間に工具押しつけによる精円溝みの文様をめぐらす。	外面口縁部ヨコナデ、頸部タテハケ。内面口縁部へ頸部ヨコハケ、一部ヘラ状工具跡。	胎土やや疎。1～3mmの石英・長石、1mm程の角閃石を含む。1mm以下の金雲母を僅かに含む。焼成良好。内外面ともにぶい黄橙色。口縁部ほぼ完存、頸部3/4。
埋土	38	弥生土器 壺	器高 [17.3] 口径 22.7	口縁部はね上げ口縁で、端部上下に拡張し、口縁端面に3条の凹線文、板状工具による刻み目を施す。頸部は3～4条、5条の2つの凹線文とその上下間に工具押しつけによる精円溝みの文様をめぐらす。	外面口縁部ヨコナデ、頸部～肩部タテハケ。内面口縁部ヨコナデ、頸部ヨコハケ後、ユビオサエ。肩部ヨコハケ。	胎土やや密。1～3mmの石英・長石を少し含む。1mm程の角閃石を含む。1mm以下の金雲母を少し含む。焼成良好。内面上にぶい黄橙色・外面上にぶい黄橙色・橙色。口縁部・頸部3/4、肩部1/8。
埋土	39	弥生土器 台付壺 (脚部)	器高 [8.7] 底径 10.5	ハの字状に外反する脚裾部で、裾部に5条の凹線文を施す。外面凹線や裾端部の屈折部、脚部内面に赤色塗彩が僅かに残る。	外面胴部底部雑なハケメ。脚部不明瞭な綫ナナデ。裾最大径部、粘土貼り付け後ヨコナデ。裾端部ヨコナデ。内面天井ナナデ、脚部上位へ接合部ヨコケズリ、裾端部ヨコナデ。	胎土やや疎。1～3mmの石英・長石を含む。1mm程の茶色砂粒・角閃石を少し含む。1mm以下の金雲母を含む。焼成良好。内外面とも橙色。残存赤彩は赤褐色。脚部のみ完存。
埋土	40	弥生土器 台付壺 (脚部)	器高 [8.3] 底径 12.4	ハの字状に外反する脚裾部で、外面裾部に黒斑。	外面胴部底部ナナデ。脚部不明瞭な綫ナナデ。裾部上位ヨコミガキ、裾部下位ヨコハケ後、ヨコナデ。裾端部ヨコナデ。内面天井ナナデ。脚部上位接合部シボリ、脚部～裾部ヨコケズリ。	胎土やや疎。1～2mmの石英・長石を多く含む。1mm以下の金雲母を含む。焼成良好。内面胴部橙色、脚部明黄褐色。外面上に橙色。脚部のみ完存。

1号土壤 土器

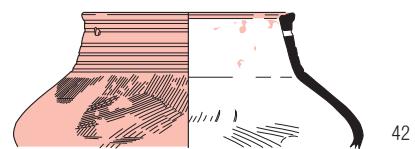
法量：() 推定値 [] 現存値

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土・焼成・色調・遺存度
埋土	41	弥生土器 壺	器高 [36.8] 口径 (14.7) 胴部最大径 (27.8)	口縁部はね上げ口縁で内傾し、端部上下に拡張し、口縁端面に3条の凹線文後、刺突文、凹線文の下に押引文を施す。体部は倒卵形を呈す。	外面頸部上位ヨコナデ、凹線文は稜線をナナデ。肩部交差するタテハケ、ナナメハケ、一部ヨコミガキ。最大胴径部タテハケ後、ヨコミガキ。最大胴径部ナナメハケ後、ヨコミガキ。その後タテミガキ。体部下タテハケ、ナナメハケ後タテミガキ。内面下部タテミガキ。頸部下位～肩部ナナメハケ後、ユビオサエ。最大胴径部ナナメハケ後タテケズリ。体部下半タテケズリ。	胎土やや密。1～5mmの長石、1～3mmの石英を含む。1mm程の角閃石、1mm以下の金雲母を少し含む。焼成良好。内面上にぶい黄橙色・外面上にぶい黄橙色・オレンジ色。口縁部の一部橙色。口縁部1/2、体部1/3。
埋土	42	弥生土器 無頸壺	器高 [7.1] 口径 (11.0) 胴部最大径 (18.3)	口縁部は内傾し、端部は平らにおさまる。頸部に6条の凹線文を施した後、口縁近くに外から中へ穿孔を施す。肩部は大きく張り出す。外面全域、内面短頸部にはまだに赤色塗彩が残る。	外面頸部ヨコナデ、肩部～最大胴径部交差するタテハケ・ナナメハケ。内面短頸部～肩部ヨコナデ。最大胴径部ユビオサエ、荒いヨコハケ。	胎土やや疎。1～2mmの石英・長石を含む。1～5mmのにぶい黄橙色の穂、1mm程の角閃石を少し含む。1mm程の茶色砂粒を僅かに含む。焼成やや不良。内外面ともにぶい橙色。赤彩は明赤褐色。口縁部1/2、肩部1/4。
埋土	43	弥生土器 脚付壺	器高 [24.9] 口径 (12.2) 胴部最大径 (17.9) 底径 (13.0)	口縁部はね上げ口縁で、端部上下に拡張し、口縁端面上方に欠損。脚部上位に10条、中位に8条、裾部に7条の凹線文、中位と裾部の凹線文の一番上に鋭利な工具による連続刺突文を施す。外面全域に赤色塗彩がよく残る。	外面頸部、肩部各々ヨコナデ、ヨコミガキと思われるが不明瞭。最大胴径部～胴部下半ヨコミガキ。脚部との接合部ヨコナデ。脚部中位タテナナデ、裾部～端部ヨコナデ。内面口縁～最大胴径部ヨコナデ。脚部下半刺離が多く調整不明瞭。脚部天井ナナデ、上位～裾までヨコケズリ。	胎土やや密。1～3mmの石英・長石を含む。1～3mmの黒色砂粒を僅かに含む。1mm程の角閃石を少し含む。焼成良好。内面胴部にぶい黄橙色・脚部灰黃褐色。外面上に赤褐色。口縁部1/8以下、胴部1/3、脚部ほぼ完存。
埋土	44	弥生土器 壺	器高 [26.9] 胴部最大径 (33.2) 底径 (5.6)	平底。底部から直線的に立ち上がり、緩やかな曲線で最大胴径部に達する。外面体部下半はつきりとした強い黒斑。	外面最大胴径部ヨコナデ、最大胴径部～底部タテミガキ。底部近く～底面ナナデ。内面最大胴径部ユビオサエ後、ヨコハケ。体部下半上からナナデ、ユビオサエ、ハケメ後ナナメハケ消し。ナナメハケ後ユビオサエ、底部ヨコハケ後ヘラケズリ。	胎土やや密。1～3mmの石英・長石を含む。1～5mmの浅黄橙色・淡赤橙色の穂、1mm以下にぶい金雲母を少し含む。1mm程の角閃石を僅かに含む。焼成良好。内面橙色、外面上にぶい褐色。体部1/2、底部1/4。

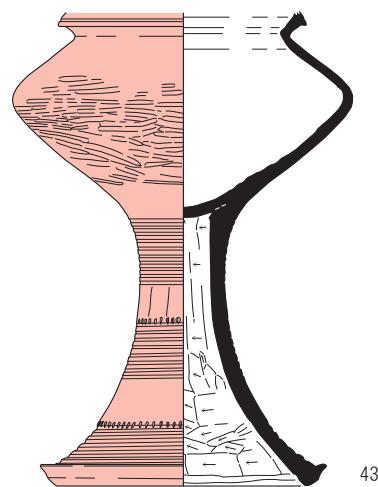
1号土壤



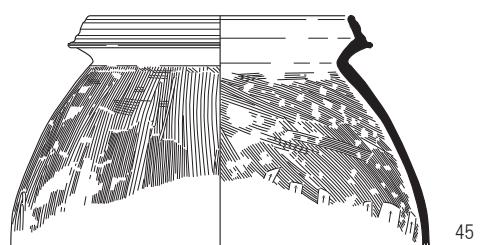
41



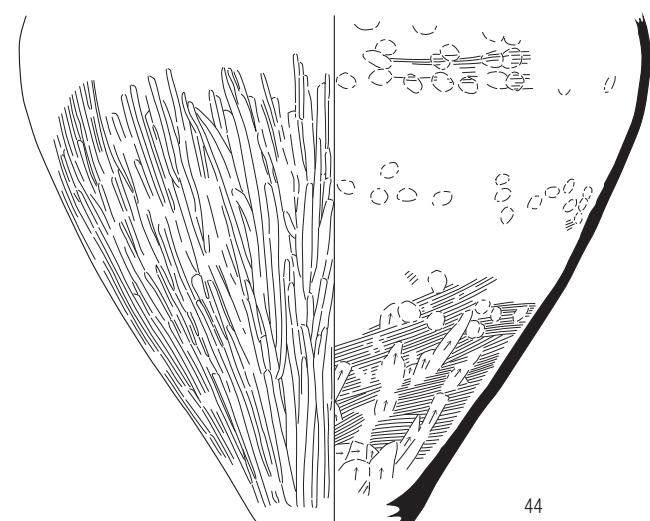
42



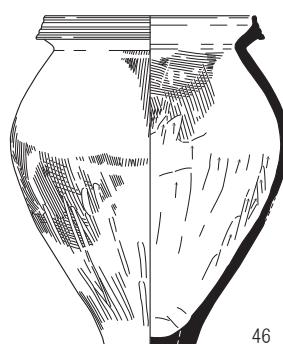
43



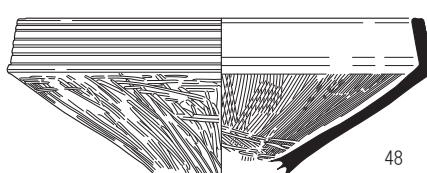
45



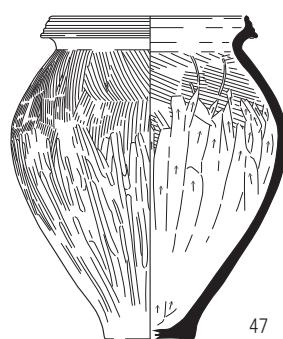
44



46

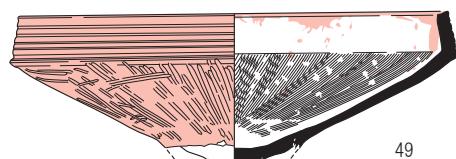


48



47

2号土壤



49

赤色塗彩 0 20cm (1:4)

第85図 1号・2号土壤出土土器

1号土壤 土器（続き）

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土・焼成・色調・遺存度
埋土	45	弥生土器 甕	器高 [12.2] 口径 (13.7) 胸部最大径 (22.0)	口縁部はね上げ口縁で内傾し、端部上方に拡張し、3条の凹線文を施す。外面黒斑、煤付着。内面口縁～肩部黒斑。	外面頸部ヨコナデ、頸部下位ヨコハケ後、タテハケ、肩部～最大胴径部タテハケ後、一部タテミガキ。内面口縁部～頸部ヨコナデ。頸部下位ヨコハケ、肩部ナナメハケ。最大胴径部ナナメハケ後タテケズリ。	胎土やや密。1～2mmの石英・長石、1mm程の角閃石を少し含む。1～4mm程の茶色砂粒、1mm以下の金雲母を僅かに含む。焼成良好。内外面ともにぶい黄橙色。口縁部・体部1/4。
埋土	46	弥生土器 小型甕	器高 17.5 口径 (11.0) 胸部最大径 (14.7) 底径 (4.6)	口縁部はね上げ口縁で僅かに内傾し、端部上下に拡張し、口縁端面に3条の凹線文を施す。外面黒斑、煤付着。内面黒斑。底部に粘土繋ぎ痕。	外面頸部ヨコナデ、肩部～最大胴径部タテハケ。体部下半ヨコハケ後タテハケ、タテミガキ。底部近くヨコナデ、底面ナデ。内面口縁部～頸部ヨコナデ、肩部ヨコハケ後タテハケ。最大胴径部タテハケ後タテケズリ。体部下半タテケズリ、底部不明瞭。	胎土やや密。1～2mmの石英・長石、1mm程の角閃石を含む。1～6mmのぶい黄橙色の礫を少し含む。焼成やや不良。内面にぶい黄褐色・にぶい黄橙色、外面にぶい橙色、灰褐色。口縁部・体部1/2。
埋土	47	弥生土器 小型甕	器高 17.1 口径 (10.2) 胸部最大径 (14.5) 底径 (4.5)	口縁部はね上げ口縁で内傾し、端部上下に拡張し、3条の凹線文を施す。外面黒斑、煤付着。内面黒斑。	外面頸部ヨコナデ、肩部タテハケ。最大胴径部タテハケ後タテミガキ。体部下半タテミガキ。底部近くヨコナデ。底面ナデ。内面口縁部～頸部ヨコナデ、肩部ヨコハケ。最大胴径部ナナメハケ後タテケズリ。体部下半～底部タテケズリ。	胎土やや密。1～2mmの石英・長石・茶色砂粒を含む。1mm程の角閃石、1mm以下～2mmの金雲母を少し含む。焼成良好。内面灰黃褐色・にぶい黄橙色、外面黒褐色・灰黃褐色・にぶい黄橙色。口縁部・体部1/2。
埋土	48	弥生土器 高坏	器高 [8.5] 口径 (20.4)	外傾する坏部は屈曲して内傾する口縁部につづき、口縁部外面に6条の凹線文を施す。外面黒斑。	外面坏部上半タテミガキ後、ヨコミガキ。内面坏部口縁～屈曲部ヨコナデ、坏部上半タテハケ、下半タテハケ後ヨコハケ、ヨコミガキ。	胎土やや疎。1～2mmの石英、1～5mmの長石、1mm以下の金雲母を少し含む。1mm程の角閃石を含む。焼成良好。内面橙色・外側橙色・にぶい橙色。口縁部・坏部1/2。

2号土壤 土器

法量：() 推定値 [] 現存値

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土・焼成・色調・遺存度
埋土	49	弥生土器 高坏	器高 [8.0] 口径 (22.4) 坏部最大径 (23.5)	外傾する坏部は屈曲して内傾する口縁部につづき、口縁部外面に5条の凹線文を施す。口縁端面に1条の浅い凹線文。外面赤色塗彩がよく残る。内面赤色塗彩の付着あり。	外面坏部タテミガキ、一部交差するヨコミガキ。内面口縁部ヨコナデ、坏部交差するタテハケ。坏部底部剥離あり調整不明瞭。脚天井部へラ状工具による円弧状の刻み込み、ナデ。	胎土やや疎。1～5mmの石英、1～3mmの長石を含む。1～2mmの茶色砂粒、1mm程の角閃石を少し含む。1mm以下の金雲母を僅かに含む。焼成良好。内面にぶい橙色。外面赤褐色・にぶい黄橙色。残存赤彩は赤褐色。口縁部・坏部7/8。

1号墳 土器

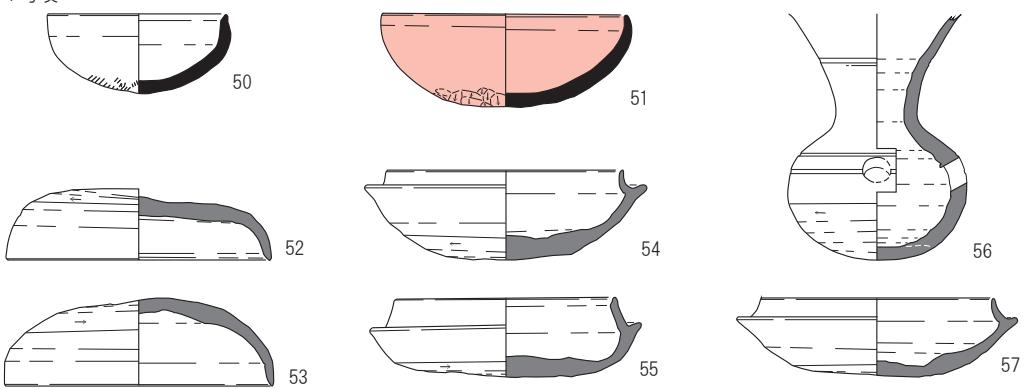
法量：[] 現存値

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土・焼成・色調・遺存度
外周溝底付近	50	土師器 壇	器高 4.2 口径 9.2 最大径 9.6	底部から緩やかに内湾して立ち上がる口縁で、端部は内傾している。	外面口縁部～体部ヨコナデ、底部ヨコナデ後、ハケメ。内面全域ヨコナデ後、ナデ。	胎土やや密。1～4mmの石英を含む。1～3mmの長石、1mm以下の金雲母を少し含む。焼成良好。内面明黄褐色・外側明黄褐色・橙色。ほぼ完形。
内周溝埋土	51	土師器 壇	器高 4.9 口径 12.7 最大径 13.2	底部から緩やかに内湾して立ち上がる口縁で、端部はやや薄く丸く収まる。内外面とも僅かに赤色塗彩が残る。	外面口縁部～体部ヨコナデ、底部荒いヘラケズリ後、ナデ。内面全域ヨコナデ後、ナデ。	胎土密。1～2mmの石英・長石、1mm程の角閃石、1mm以下の金雲母を少し含む。焼成良好。内面とも橙色。残存赤彩は明赤褐色。ほぼ完形。
外周溝底	52	須恵器 坏蓋	器高 4.8 口径 13.6 最大径 13.9	平坦な天井部から、口縁部は開き気味に下りる。外面天井部と口縁部の境界に浅い錐み。口縁端面は内傾し、内面口縁端近くに浅い凹線あり。焼歪あり。	外面口縁部～体部ヨコナデ、天井部回転ヘラケズリ（時計回り）。内面口縁部～天井部ヨコナデ、天井部中央ヨコナデ後、ナデ。	胎土密。1～6mmの石英・長石を少し含む。焼成良好。内面とも青灰色。外面は暗青灰色。ほぼ完形。
外周溝底 (須恵器集中箇所)	53	須恵器 坏蓋	器高 4.6 口径 13.8 最大径 14.1	丸みを帯びた天井から口縁部はやや開き気味に下りる。外面天井部と口縁部の境界は不明瞭。口縁端面は内傾し、内面口縁から少し離れた所に1条の凹線文をめぐらせる。	外面口縁部～体部ヨコナデ、天井部回転ヘラケズリ（反時計回り）。内面口縁部～天井部ヨコナデ、天井部中央反時計回りのヨコナデ後、ナデ。	胎土密。1～3mmの石英・長石を少し含む。焼成良好。内面灰黄色、外面灰色。口縁部1/2、坏部2/3。
外周溝底 (須恵器集中箇所)	54	須恵器 坏身	器高 4.7 口径 12.3 受部径 14.8	体部、受部は外上方に伸び、立ち上がりは小さい。受部・立ち上がり端部は丸く収まり、やや平坦な底部を持つ。外面坏部、薄く灰がかかる。	外面立ち上がり～体部ヨコナデ、底部回転ヘラケズリ（反時計回り）。内面全体ヨコナデ。	胎土密。1～4mmの長石、1～2mmの石英を少し含む。焼成良好。内面灰黄色、外側灰黄色。口縁部・坏部2/3。
内周溝埋土	55	須恵器 坏身	器高 4.2 口径 11.4 受部径 14.2	体部、受部は外上方に伸び、立ち上がりはやや大きい。立ち上がり端部は内傾し緩やかに凹む。受部端部は丸く収まる。平坦な底部を持つ。	外面立ち上がり～体部ヨコナデ、底部回転ヘラケズリ（時計回り）。内面全体ヨコナデ、見込み部中央一部ナデ。	胎土密。1～6mmの長石を含む。1～2mmの石英を僅かに含む。焼成良好。内外面とも灰色。口縁部・坏部7/8。
外周溝底	56	須恵器 壺	器高 [13.0] 胸部最大径 9.4	頸部は細く、口縁部は逆ハの字状に開く。体部は球形に近く、頸部上位に1～2条の凹線文をめぐらせる。体部中央に外側から内面に押し込んだ透かし穴あり。内外面とも自然釉付着。	外面口縁部～最大胴径部ヨコナデ。体部下半回転ヘラケズリ（反時計回り）。内面全域ヨコナデ。	胎土密。1～3mmの長石を少し含む。1～2mm石英を僅かに含む。焼成良好。内面灰黄色、外側灰白色、外面焼斑黄灰色。体部3/4、頸部下半完存、頸部上半1/8以下。口縁部欠損。
11号埋葬施設 底面	57	須恵器 坏身	器高 4.1 口径 12.2 受部径 14.7	体部、受部は外上方に伸び、立ち上がりはやや小さい。受部・立ち上がり端部は丸く収まり、やや平坦な底部を持つ。外面坏部、一部薄く灰がかかる。	外面立ち上がり～体部ヨコナデ、底部回転ヘラケズリ（反時計回り）。内面全体ヨコナデ（反時計回りの螺旋状）、見込み部中央ヘラ状工具による反時計回りの痕跡あり。	胎土密。1～3mmの長石・石英、1～2mmの黒色砂粒を少し含む。焼成良好。内面黄灰色、外側黄灰色・灰黄色・にぶい黄橙色。口縁部1/2、坏部7/8。

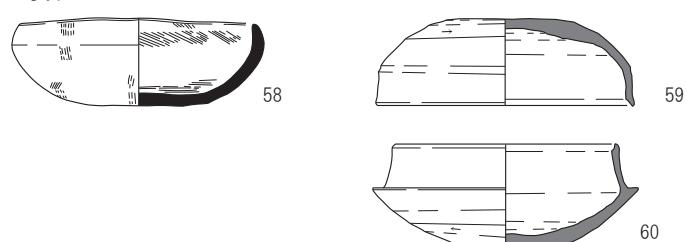
2号墳 土器

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土・焼成・色調・遺存度
周溝底	58	土師器 壇	器高 4.6 口径 12.4 最大径 13.2	平底から緩やかに内湾して立ち上がる口縁で、端部は内傾している。	外面全域ヨコナデ。雑なヘラ状工具跡あり。内面口縁部下ナナメハケ後ヨコナデ。体部中位ヨコナデ、底部ヨコナデ後、水平方向のナデ。	胎土やや密。1～3mmの石英・長石を含む。1mm以下の角閃石・金雲母を僅かに含む。焼成やや不良。内外面とも橙色。口縁部7/8、体部完存。
周溝底付近	59	須恵器 坏蓋	器高 4.6 口径 13.4	平坦な天井部から、口縁部は垂直に下りる。外面天井部と口縁部の境界に1条の凹線文をめぐらせる。口縁端面は内傾する。	外面口縁部～体部ヨコナデ、天井部回転ヘラケズリ（反時計回り）。内面口縁部～天井部ヨコナデ、天井部中央ヨコナデ後、仕上げナデ。	胎土密。1～4mmの石英、1～8mmの長石、1～4mmの茶色砂粒を少し含む。1mm以下の金雲母を僅かに含む。焼成良好。内面にぶい褐色、外面にぶい橙色・灰黄色。焼斑にぶい赤褐色。ほぼ完形。
周溝底付近	60	須恵器 坏身	器高 5.4 口径 11.6 受部径 14.0	体部、受部は外上方に伸び、立ち上がりは大きく、端部は内傾し凹む。受部端部はやや尖り、やや平坦な底部を持つ。	外面立ち上がり～体部ヨコナデ、底部粗い回転ヘラケズリ（反時計回り）。内面全体ヨコナデ。見込み部中央ヨコナデ後、仕上げナデ。	胎土密。1～3mmの長石、1mm以下の金雲母を少し含む。1mm程の石英、3mm程の灰色礫を僅かに含む。焼成良好。内面灰黃褐色、外側灰褐色・灰黃褐色。ほぼ完形。

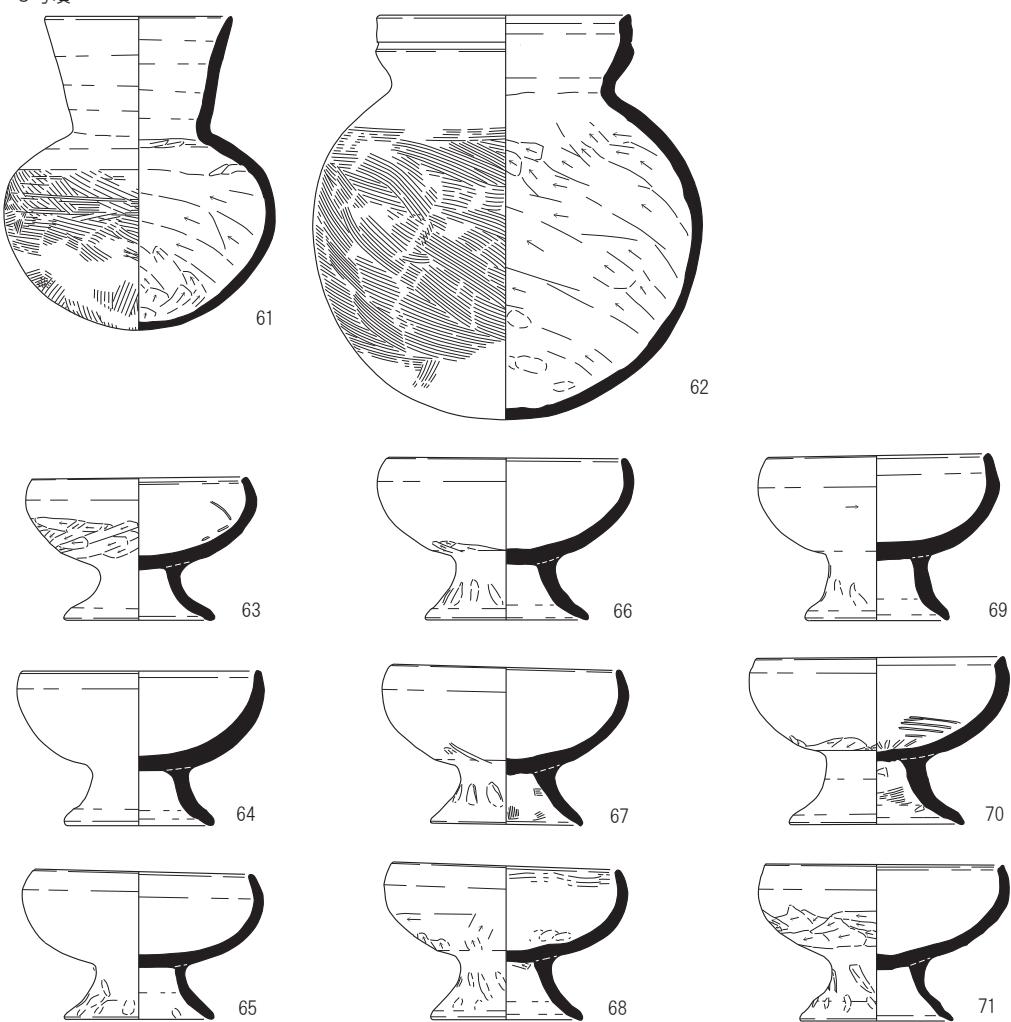
1号墳



2号墳



3号墳



赤色塗彩 0 20cm (1 : 4)

第 86 図 1号～3号墳出土土器

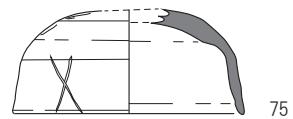
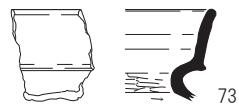
3号墳 土器

出土位置	No.	器種	法量 (cm)	形 態	手 法	胎土・焼成・色調・遺存度
周溝底	61	土師器 直口壺	器高 16.6 口径 9.6 胸部最大径 14.2	口縁部はなだらかに外反しながら長く伸び、口縁と頸部を接合した際の粘土繋ぎ跡が外面に残る。体部はやや肩が張った球形。外面薄い焼斑あり。	外面口縁部～頸部下位ヨコナデ、体部肩部ナナメハケ後、ヨコハケ。体部最大胴径部～体部下位ナナメハケ一部ナデ消し、底部不定方向の交差するハケメ。内面口縁部～頸部ヨコナデ、頸部下位ヨコケズリ後ナデ。肩部～体部下位ナナメケズリ、底部タテケズリ。	胎土やや密。1～3mmの石英、1～5mmの長石を含む。1mm程の角閃石、1mm以下の金雲母を少し含む。焼成良好。内面口縁部・頸部橙色、体部浅黄橙色。外面橙色。ほぼ完形。
周溝底	62	土師器 壺	器高 21.3 口径 13.0 胸部最大径 20.5	垂直に立ち上がる複合口縁で、口縁端部は内傾して面を持つ。口縁下端は少し外側に突出し、屈曲部の上に1条の凹線文を施す。体部は球形。外面頸部以外に黒斑、煤付着、内面底部下半に煤付着。外形部分的に凹凸みあり。	外面口縁部～頸部下位ヨコナデ、体部上位ヨコハケ、以下ヨコハケ、交差するナナメハケ。底部不明瞭。内面口縁部～頸部ヨコナデ、頸部下位ケズリ後ナデ、体部上位～中位ナナメケズリ。底部、ケズリ後ユビオサエ。	胎土やや密。1～4mmの石英・長石、1mm以下の金雲母を含む。1mm程の角閃石を少し含む。焼成良好。内面にぶい黄橙色・灰黃褐色。外面にぶい黄橙色。口縁部2/3、体部完存。
周溝底	63	土師器 脚付壺	器高 7.5 口径 11.2 坏部最大径 12.1 底径 7.5	口縁部は底部から緩やかに内湾して立ち上がり、口縁端は内傾してやや平坦な面を持ち、ハの字状に外反する脚が付く。口縁端の下内側に凹んだ稜、脚部裾内面に凹んだ稜あり。	外面口縁～坏部上半ヨコナデ、下半ヨコケズリ。脚部ヨコナデ。内面坏部全域ヨコナデ、脚部ヨコナデ後、一部ナデ。	胎土やや密。1～4mmの石英・長石を多く含む。1～2mmの茶色砂粒を少し含む。1mm以下の角閃石・金雲母を僅かに含む。焼成良好。内面橙色、外面にぶい橙色・橙色、明赤褐色。被熱部分は褐灰色。完形。
周溝底	64	土師器 脚付壺	器高 8.1 口径 12.3 坏部最大径 13.0 底径 7.5	口縁部は底部から緩やかに内湾して比較的の垂直に立ち上がり、ハの字状に外反する脚が付く。坏部、脚部とも厚め。脚部裾内面に凹んだ稜あり。	外面全域ヨコナデ、坏部下半ヨコナデの仕上げが雑で工具跡、指跡が残る。内面坏部ヨコナデ、脚部ヨコナデ後、一部ナデ。	胎土やや密。1～3mmの石英・長石を含む。1mm程の角閃石、1mm以下の金雲母を少し含む。1mm程の茶色砂粒を僅かに含む。焼成良好。内外面とも橙色。完形。
周溝底	65	土師器 脚付壺	器高 8.0 口径 11.2 坏部最大径 12.5 底径 7.5	口縁部は底部から緩やかに内湾して立ち上がり、ハの字状に外反する脚が付く。脚部外面、内面裾部にヨコナデ後、縱方向の軽い凹みを施す。坏部、脚部とも薄め。	外面坏部口縁部ヨコナデ、坏部中位～下半ヨコナデ、一部ナデ。内面坏部、脚部ともヨコナデ後、一部ナデ。	胎土やや密。1～3mmの石英・長石、1～2mmの茶色砂粒、1mm以下～2mmの金雲母を少し含む。1mm程の角閃石を僅かに含む。焼成やや不良。内面橙色・外面橙色・にぶい橙色。完形。
周溝底	66	土師器 脚付壺	器高 8.6 口径 12.3 坏部最大径 13.4 底径 8.3	口縁部は底部から緩やかに内湾して立ち上がり、ハの字状に外反する脚が付き、脚部外面に縱方向の軽い凹みを施す。脚部裾内面に僅かに凹んだ稜あり。	外面坏部口縁部～下半ヨコナデ、底部ヨコケズリ、坏部下半ヨコナデの仕上げが雑で工具跡、ケズリが残る。脚部ヨコナデ。内面坏部ヨコナデ後、一部ナデ。脚部天井ナデ、上半～裾ヨコナデ後、ナデ。	胎土やや密。1～3mmの石英・長石、1～4mmの赤褐砂粒、1mm程の角閃石を少し含む。1mm以下の金雲母を含む。焼成良好。内外面とも橙色。完形。
周溝底	67	土師器 脚付壺	器高 8.4 口径 11.7 坏部最大径 12.4 底径 7.8	口縁部は底部から緩やかに内湾して立ち上がり、ハの字状に外反する脚が付き、脚部外面に深く明瞭な刺突文を施す。脚部裾内面に僅かに凹んだ稜あり。	外面坏部口縁部～下半ヨコナデ、坏部下半ヨコナデの仕上げが雑で工具跡、ケズリが残る。脚部ヨコナデ。内面坏部ヨコナデ後、一部ナデ。脚部天井ナデ、上半～裾ヨコナデ後、一部ナデ。	胎土やや密。1～3mmの石英・長石、1～2mmの赤褐砂粒、1mm以下の金雲母を少し含む。1mm以下の角閃石を僅かに含む。焼成良好。内面橙色。外面橙色、一部にぶい黄橙。完形。
周溝底	68	土師器 脚付壺	器高 8.8 口径 11.7 坏部最大径 12.8 底径 7.7	口縁部は底部から緩やかに内湾して立ち上がり、ハの字状に外反する脚が付き、脚部外面に縦方向の軽い凹みを施す。	外面坏部口縁部～下半ヨコナデ、坏部下半ヨコナデの仕上げが雑で工具跡、ケズリが残る。脚部ヨコナデ。内面坏部ヨコナデ後、一部ナデ。底部ユビオサエ。脚部天井ナデ、上半付け根ヨコケズリ、上半～裾ヨコナデ後、ナデ。	胎土やや密。1～3mmの石英・長石を多く含む。1～2mmの長石、1～3mmの赤褐砂粒、1mm以下の金雲母を含む。1mm以下の角閃石を少し含む。焼成やや不良。内面坏部明赤褐色、脚部橙色、外面橙色。完形。
周溝底	69	土師器 脚付壺	器高 8.5 口径 11.5 坏部最大径 12.7 底径 7.2	口縁部は底部から緩やかに内湾して立ち上がり、口縁端は内傾してやや平坦な面を持ち、ハの字状に外反する脚が付く。脚部外面に縦方向の僅かな凹みを施す。	外面坏部口縁部～下半ヨコナデ、坏部下半ヨコナデの仕上げが雑で工具跡、ケズリが残る。脚部ヨコナデ。内面坏部ヨコナデ、一部工具跡。脚部ヨコナデ。	胎土やや密。1～3mmの石英・長石を多く含む。1～3mmの赤褐砂粒、1mm以下の金雲母を少し含む。焼成良好。内面黄橙色・橙色、外面橙色。完形。
周溝底	70	土師器 脚付壺	器高 8.9 口径 12.9 坏部最大径 13.7 底径 8.9	口縁部は底部から緩やかに内湾して立ち上がり、口縁端は内傾してやや平坦な面を持ち、ハの字状に外反する脚が付く。	外面坏部口縁部～下半ヨコナデ、坏部下半ヨコナデの仕上げが雑で工具跡が残る。底部ヨコナデ後粗いヘラケズリ。脚部ヨコナデ。内面坏部上半ヨコナデ。底部ヨコミガキ。底部ヨコナデ後へラ形状工具による凹み。脚部天井ナデ、上半～中位ヨコナデ後ヨコハケ、工具跡、ナデ。裾部ヨコナデ。	胎土やや密。1～3mmの石英・長石を多く含む。1～4mmの赤褐砂粒、1mm以下の角閃石・金雲母を少し含む。焼成良好。内外面とも橙色。完形。
周溝底	71	土師器 脚付壺	器高 8.3 口径 12.4 坏部最大径 13.2 底径 7.9	口縁部は底部から緩やかに内湾して立ち上がり、口縁端は内傾してやや平坦な面を持ち、ハの字状に外反する脚が付く。脚部外面の上半、裾部の稜に2列の縦方向の凹みを施す。	外面坏部口縁部～上半ヨコナデ、下半ヨコケズリ。脚部ヨコナデ。内面坏部口縁部～底部ヨコナデ後、ナデ。脚部天井ヨコナデ、上半～裾部ヨコナデ後、ナデ。	胎土密。1～3mmの石英・長石を含む。1～4mmの赤褐砂粒、1mm以下の角閃石・金雲母を少し含む。焼成良好。内外面とも橙色。完形。

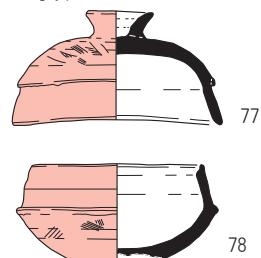
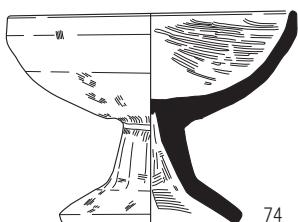
4号墳 土器

出土位置	No.	器種	法量 (cm)	形 態	手 法	法量: () 推定値 [] 現存値
周溝底	72	土師器 壺	器高 30.3 口径 15.8 胸部最大径 27.7	内湾する複合口縁で、口縁端部は肥大、内傾して面を持つ。口縁下端は外側に突出し、体部は球形。体部上位に2つのみ刺突文。外面部中位～底部に黒斑、煤付着。内面頸部以下に黒斑、煤付着。74と入れ子。	外面口縁部～頸部下位ヨコナデ、体部上位ヨコハケ、中位～下位タテ、ナナメハケ。底部不明瞭。内面口縁部～頸部下位ヨコナデ、体部上位ヨコケズリ、中位ヨコ、ナナメケズリ、底部ケズリ後、ユビオサエ。	胎土やや疎。1～4mmの石英・長石をふくむ。1～3mmの茶色砂粒、1mm程の角閃石、1mm以下の金雲母を少し含む。焼成やや不良。内外面ともにぶい黄橙色。完形。
周溝底	73	土師器 壺	器高 [4.8] 最大幅 [4.3]	外反する複合口縁で口縁下端は外側につまみ出される。内外面とも口縁端部に黒斑あり。	外面口縁部～頸部ヨコナデ。内面口縁部～頸部上位ヨコナデ、頸部中位ヨコミガキ、下位ヨコケズリ。	胎土やや密。1～2mmの石英・長石を含む。1mm程の角閃石、1mm以下の金雲母を少し含む。焼成良好。内面橙色、外面にぶい黄橙色。口縁部1/8以下。
周溝底	74	土師器 高坏	器高 11.2 口径 14.8 坏部最大径 15.3 底径 8.9	やや平坦な底部から緩やかに立ち上がる坏部で、脚部は屈曲して大きく外に広がる。坏部と脚部の繋ぎ目をハケメで整形し、下部に1条の凹線を施す。坏部内部虫喰い状の表面剥離。72と入れ子。	外面坏部口縁部～上半ヨコナデ、下半ヨコナデ後、ナデ、ハケメ。脚部上半板状工具で整形後、ハケメ。裾部ヨコナデ後、ハケメ。裾部ヨコナデ、以下ヨコミガキ。脚部上位シボリ後、ハケメ。裾部ヨコナデ後、ヨコハケ。	胎土やや密。1～4mmの石英・長石をふくむ。1mm程の角閃石、1mm以下の金雲母を少し含む。焼成良好。内面坏部橙色、脚部にぶい黄褐色・橙色、外面赤褐色・にぶい黄褐色。ほぼ完形。
周溝底	75	須恵器 坏蓋	器高 [5.6] 口径 11.9 最大径 12.2	丸みを帯びた天井部から口縁部はやや開き気味に下りる。天井部と口縁部を分ける稜はにぶく、突出しない。口縁部～稜にかけてX字状のヘラ記号を2対刻む。	外面立ち上がり～体部ヨコナデ。天井部下位ヨコナデ後、軽くヘラケズリ。天井部上位ヨコナデ後、一部ケズリ。内面口縁ヨコナデ、屈曲部ヨコナデ後、一部ナデ。天井部中心ナデ。	胎土密。1～2mmの石英・長石を少し含む。1mm程の角閃石、1mm以下の金雲母を僅かに含む。焼成良好。内外面ともにぶい黄橙色。口縁部3/4。
周溝底	76	須恵器 坏蓋	器高 4.8 口径 (10.0)	丸みを帯びた天井部から内湾して、口縁部はやや外反して下りる。外面天井部と口縁部の境界下に凹線文を持つ。外面焼斑あり。	外面口縁部ヨコナデ、天井部回転ヘラケズリ(方向不明)後、ナデ。内面口縁部ヨコナデ、天井部ナデ。	胎土密。1～2mmの石英・長石を少し含む。焼成良好。内外面ともにぶい赤褐色。口縁部1/4、体部3/4。

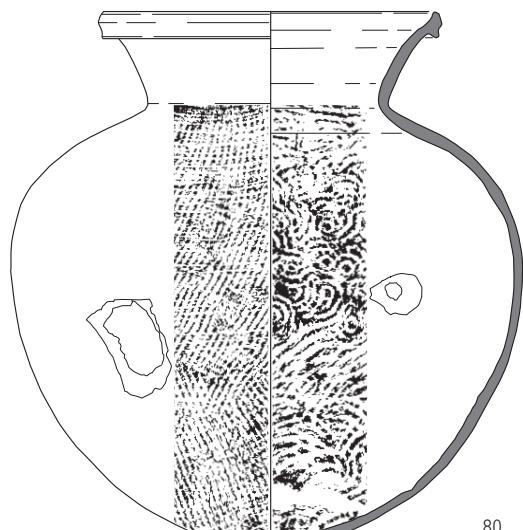
4号墳



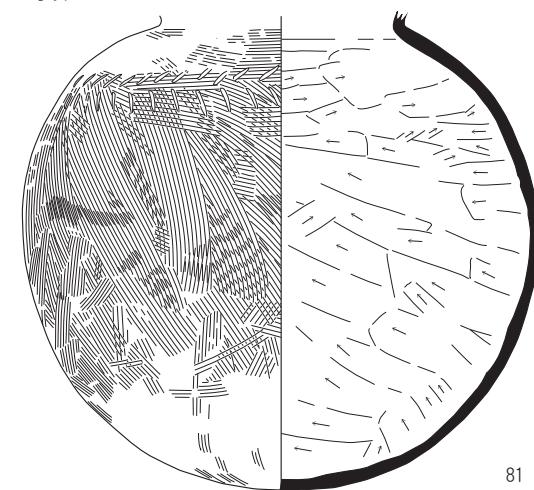
5号墳



8号墳



10号墳



赤色塗彩

0 20cm (1 : 4)

第87図 4号・5号・8号・10号墳出土土器

5号墳 土器

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土・焼成・色調・遺存度
周溝底	77	土師器 壺蓋形 土器	器高 6.0 口径 10.8 つまみ部最大径 3.5	丸みを帯びた天井部から口縁部は開き気味に下りる。口縁端部は内傾して、やや面を持ち、天井部と口縁部の境に粘土継ぎを行い外側に突出させる。天井部中央につまみが付き、つまみは中央が凹む。外面全域に赤色塗彩。須恵器模倣。78と合わせて出土。	外面口縁部ヨコナデ後、一部ナデ。天井部反時計回りの回転ヘラケズリ後、回転ナデとナデ。つまみ部内外面ともヨコナデ。内面口縁部～天井部ヨコナデ後一部ナデ、天井部中心ナデ。	胎土やや密。1～3mmの石英・長石を含む。1mm程の角閃石を少し含む。1mm程の茶色砂粒を僅かに含む。焼成良好。内面橙色、外面橙色・浅黄橙色。完形。
周溝底	78	土師器 有蓋 高環形 土器	器高 [4.9] 口径 8.8 环部受部径 10.6	外傾する环部は屈曲して内傾する口縁部につづき、屈曲部の稜を外側につまみ出す。口縁端面は内傾して中央が凹み明確な稜が付く。脚部が剥離。外面全域に赤色塗彩。須恵器模倣。77と合わせて出土。	外面口縁部ヨコナデ、屈曲部～底部板状工具整形後、ヨコナデ。内面ヨコナデ後、一部ナデ、見込み部中央ナデ。	胎土やや密。1～3mmの石英・長石を含む。1mm以下の角閃石を1つ含む。焼成良好。内面橙色、外面橙色・明赤褐色。环部は完存。

8号墳 土器

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土・焼成・色調・遺存度
周溝底	79	土師器 壺	器高 32.2 口径 17.6 胴部最大径 29.1	垂直に立ち上がる複合口縁で、口縁端部は内傾し平坦面を持つ。口縁下端は粘土継ぎが行われ外側に突出する。体部は緩やかな肩を持つ球形。外面黒斑、頸部以外に煤付着。内面頸部のみ煤付着。	外面口縁部～頸部ヨコナデ、頸部下位ヨコハケ。肩部～底部、不定方向に交差するハケ。体部下半一部不明瞭。内面口縁部ヨコナデ、頸部ヨコナデ後一部ヨコハケ。肩部ヨコケズリ後、一部ユビオサエ。体部上位～中位ヨコケズリ、下位ケズリ後、ユビオサエ。	胎土やや密。1～3mmの石英・長石、1mm以下の金雲母を含む。1～3mmの茶色砂粒、1mm程の角閃石を少し含む。焼成良好。内面明黄褐色・明褐色、外面にぶい橙色・橙色。ほぼ完形。
周溝底	80	須恵器 壺	器高 28.1 口径 17.3 胴部最大径 26.8	頸部は逆ハの字状に外反し、口縁端部で内溝して直立する。口縁下端は下垂して頸部との境界は段をなす。体部はやや肩の張った球形で、体部中位に大小2つの内側からの穿孔。内面底部粘土つなぎ痕。	外面口縁部ヨコナデ、頸部カキ目後、ヨコナデ。体部タタキ後、カキ目。内面口縁部～頸部ヨコナデ、体部同心円状の当て具によるタタキ。	胎土密。1～5mmの石英・長石を含む。1～2mmの灰色砂粒、1mm程の角閃石を少し含む。7mm程の灰色礫を1つ含む。焼成良好。内面灰白色、外面灰白色・黄灰色・灰色。口縁部2/3、頸部・体部ほぼ完存。

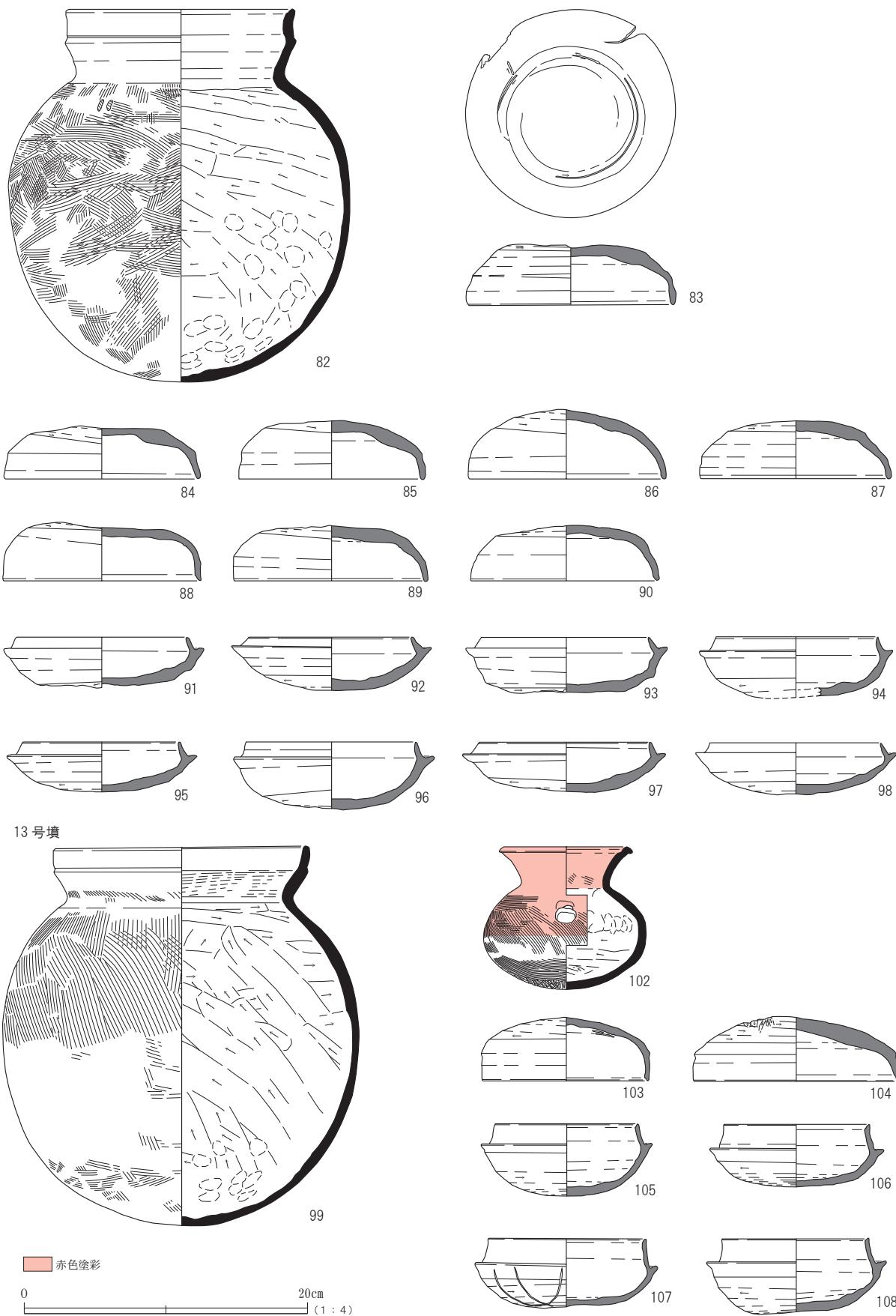
10号墳 土器

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土・焼成・色調・遺存度
周溝底	81	土師器 壺	器高 [25.3] 頸部径 (12.7) 胴部最大径 27.1	体部は緩やかな肩を持つ球体で、肩部に2列の連続刺突文を施す。外面中位～底部に黒斑、煤付着。	外面頸部ヨコナデ、頸部下位～肩部ヨコハケ、肩部タテハケ後、ヨコハケ。肩部以下交差するタテハケ、ヨコハケ。底部丁寧なナデ、内側頸部ヨコナデ、頸部下位ケズリ後ナデ。肩部ヨコケズリ、肩部以下ナナメのケズリ。	胎土やや密。1～4mmの石英・長石を含む。1mm程の角閃石、1mm以下の金雲母を少し含む。焼成やや不良。内面にぶい黄橙色、外面にぶい黄橙色・にぶい橙色。体部ほぼ完存。

11号墳 土器

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土・焼成・色調・遺存度
周溝埋土	82	土師器 壺	器高 26.2 口径 15.7 胴部最大径 24.0	僅かに外反する複合口縁で、口縁端部は内傾して僅かに僅み、やや面を持つ。口縁下端は少し外側に突出し、屈曲部の上に1条の凹線文を施す。体部は緩やかな肩を持つ球形で、肩部に2箇所のみ押印文。外面黒斑、顕著な煤の付着あり。内面薄い黒斑、煤付着。	外面口縁部～頸部ヨコナデ、頸部下位～肩部ヨコハケ後タテハケ。体部中位～底部、不定方向の交差するハケ。内面口縁部ヨコナデ、体部上位ヨコケズリ、中位～下位ナナメ、ヨコケズリ後ユビオサエ、底部ケズリ後ユビオサエ。	胎土やや密。1～3mmの石英・長石、1mm以下の金雲母を含む。1mm程の角閃石を少し含む。焼成良好。内面ともにぶい黄褐色・橙色。完形。
1号埋葬施設 埋土	83	須恵器 环蓋	器高 4.3 口径 14.3 最大径 14.8	平坦な天井部から、口縁部は開き気味に下りる。外面天井部と口縁部の境界下に浅く広い僅みを持つ。外面天井部にヘラ記号4つ(3つは円弧状)を刻む。焼壙、焼斑あり。	外面口縁部～体部ヨコナデ、天井部回転ヘラケズリ(反時計回り)、天井部中央雑なナデ。内面口縁部ヨコナデ、天井部回転ヨコナデ(時計・反時計回り方向に復復)、天井部中央回転ヨコナデ後、仕上げナデ。	胎土密。1～6mmの石英、1～3mmの長石を含む。焼成良好。内面とも灰黄色。ほぼ完形。
1号埋葬施設 埋土	84	須恵器 环蓋	器高 3.7 口径 13.5 最大径 13.7	平坦な天井部から、口縁部は開き気味に下りる。外面天井部と口縁部の境界下に浅く広い僅みを持つ。外面灰がかかる。ボロ付着。	外面口縁部～体部ヨコナデ、天井部回転ヘラケズリ(反時計回り)。内面口縁部～天井部ヨコナデ、天井部中心ナデ。	胎土密。1～5mmの石英・長石を多く含む。1mm程の角閃石を僅かに含む。焼成普通。内面黄灰色、外面黄灰色・灰白色。完形。
1号埋葬施設 埋土	85	須恵器 环蓋	器高 4.1 口径 12.9 最大径 13.2	緩やかに丸みを帯びた天井部から、口縁部は開き気味に下りる。外面天井部と口縁部の境界の稜はにぶい。	外面口縁部～体部ヨコナデ、天井部回転ヘラケズリ(反時計回り)。内面口縁部～天井部ヨコナデ、天井部中心ナデ。	胎土密。1～5mmの石英・長石を含む。焼成良好。内面とも灰白色。完形。
1号埋葬施設 埋土	86	須恵器 环蓋	器高 4.9 口径 13.7 最大径 13.9	丸みを帯びた天井部から、口縁部に向けて内溝して下りる。外面天井部と口縁部の境界は不明瞭。口縁端部は内傾する。焼歪、焼斑あり。内外面とも灰がかかる。	外面口縁部～体部ヨコナデ、天井部回転ヘラケズリ(時計回り)。内面口縁部～天井部ヨコナデ、天井部中心ユビオサエ。	胎土密。2～4mmの長石を少し含む。焼成良好。内面黄灰色、外面灰色、外一部が灰白色。残存3/4。
1号埋葬施設 埋土	87	須恵器 环蓋	器高 4.1 口径 13.2 最大径 13.4	緩やかに丸みを帯びた天井部から、口縁部は開き気味に下りる。外面天井部と口縁部の境界の稜はにぶい。	外面口縁部～体部ヨコナデ、天井部回転ヘラケズリ(反時計回り)。内面口縁部～天井部ヨコナデ、天井部中心内タタキ後、仕上げナデ。	胎土密。1～5mmの石英・長石を多く含む。1cm程の長石を1つ含む。焼成良好。内面とも灰白色。ほぼ完形。
1号埋葬施設 埋土	88	須恵器 环蓋	器高 3.8 口径 13.7 最大径 13.8	平坦な天井部から、口縁部は垂直に下りる。口縁端部は外面天井部と口縁部の境界の稜は不明瞭。口縁端面は内傾して凹み、稜を持つ。外面灰がかかる。	外面口縁部～体部ヨコナデ、天井部回転ヘラケズリ(反時計回り)。内面口縁部～天井部ヨコナデ、天井部中心ナデ。	胎土密。1～4mmの石英・長石を含む。焼成良好。内面とも灰色。ほぼ完形。
1号埋葬施設 埋土	89	須恵器 环蓋	器高 3.9 口径 13.3 最大径 13.7	平坦な天井部から、口縁部は開き気味に下りる。外面天井部と口縁部の境界の稜はにぶい。	外面口縁部～体部ヨコナデ、天井部回転ヘラケズリ(反時計回り)。内面口縁部～天井部ヨコナデ、天井部中心ナデ。	胎土密。1～7mmの石英・長石を含む。焼成良好。内面とも灰白色。完形。
1号埋葬施設 埋土	90	須恵器 环蓋	器高 3.9 口径 13.1 最大径 13.3	やや平坦な天井部から、口縁部は開き気味に下りる。外面天井部と口縁部の境界の稜はにぶい。外面焼斑あり。	外面口縁部～体部ヨコナデ、天井部回転ヘラケズリ(反時計回り)。内面口縁部～天井部ヨコナデ、天井部中心同心内タタキ後、仕上げナデ。	胎土密。1～5mmの石英・長石を多く含む。9mm程の石英を1つ含む。焼成良好。内面とも灰色。完形。
1号埋葬施設 埋土	91	須恵器 环身	器高 3.6 口径 11.8 受部径 14.0	体部、受部は外上方に伸び、立ち上がりは小さく、端部は丸く取まる。受部端部はやや尖り、平坦な底部を持つ。外面环部薄くがかかる。	外面立ち上がり～体部ヨコナデ、底部回転ヘラケズリ(反時計回り)。内面口縁部～天井部ヨコナデ、見込み部中央同心内タタキ後、仕上げナデ。	胎土密。1～5mmの石英・長石、1mm程の黒色粒子を含む。焼成良好。内面灰白色、外側黄灰色。完形。
1号埋葬施設 埋土	92	須恵器 环身	器高 3.7 口径 11.4 受部径 14.0	体部、受部は外上方に伸び、立ち上がりは小さく内傾の度合いが大きい。端部は丸く取まる。受部端部はやや尖り、緩やかな丸底。	外面立ち上がり～体部ヨコナデ、底部回転ヘラケズリ(反時計回り)。内面口縁部～天井部ヨコナデ、見込み部中央ナデ。	胎土密。1～10mmの石英・長石を含む。焼成良好。内面とも灰白色。完形。

11号墳



第88図 11号・13号墳出土土器

11号墳 土器（続き）

法量：（ ）推定値 [] 現存値

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土・焼成・色調・遺存度
1号埋葬施設 埋土	93	須恵器 环身	器高 3.9 口径 11.7 受部径 14.2	体部、受部は外上方に伸び、立ち上がりは小さく内傾の度合いが大きい。端部は丸く取まる。受部端部はやや尖り、平坦な底部を持つ。外面焼斑あり。	外面立ち上がり～体部ヨコナデ、底部回転ヘラケズリ（時計回り）。内面立ち上がり～底部ヨコナデ、見込み部中央同心円タタキ。	胎土密。1～5mmの石英・長石を含む。5mm程の黒色粒子を1つ含む。1mm以下の金雲母を僅かに含む。焼成良好。内面灰白色、外側灰黄色。完形。
1号埋葬施設 埋土	94	須恵器 环身	器高 [4.3] 口径 11.3 受部径 13.6	体部、受部は外上方に伸び、立ち上がりは小さく、端部はぼく欠損。受部端部はやや尖り、緩やかな丸底。外面受部以下に顯著な自然釉付着、ボロ付着。	外面立ち上がり～体部ヨコナデ、底部回転ヘラケズリ（反時計回り）。内面立ち上がり～底部ヨコナデ、見込み部中央ユビオサエ。	胎土密。1～2mmの石英・長石を少し含む。1mm程の黒色粒子を含む。焼成良好。内外面とも灰白色。残存1/2。
1号埋葬施設 埋土	95	須恵器 环身	器高 3.5 口径 (10.9) 受部径 (13.3)	体部、受部は外上方に伸び、立ち上がりは小さく、端部は丸く取まる。受部端部はやや尖り、緩やかな丸底。外面端部に灰がかかる。	外面立ち上がり～体部ヨコナデ、底部回転ヘラケズリ（時計回り）。内面立ち上がり～底部ヨコナデ、見込み部中央ユビオサエ。	胎土密。1～5mmの石英・長石、1～2mmの黒色粒子を含む。焼成良好。内面灰白色、外側灰黄色。残存3/8。
1号埋葬施設 埋土	96	須恵器 环身	器高 4.8 口径 12.0 受部径 14.1	体部、受部は外上方に伸び、立ち上がりは小さく、端部はぼく欠損。受部端部は尖り気味で、やや平坦な底部を持つ。外面自然釉、ボロ付着。	外面立ち上がり～体部ヨコナデ、底部回転ヘラケズリ（反時計回り）。内面立ち上がり～底部ヨコナデ、見込み部中央ユビオサエ。	胎土密。1～2mmの石英・長石を少し含む。1mm程の黒色粒子を含む。焼成良好。内面灰色、外側灰黄色。ほぼ完形。
1号埋葬施設 埋土	97	須恵器 环身	器高 3.5 口径 12.0 受部径 14.3	体部、受部は外上方に伸び、立ち上がりは小さく、端部は丸く取まる。受部端部尖り、やや平坦な底部を持つ。	外面立ち上がり～体部ヨコナデ、底部回転ヘラケズリ（反時計回り）。内面口縁部～底部ヨコナデ、見込み部中央ナデ。	胎土密。1～5mmの石英・長石を含む。焼成良好。内外面とも灰白色。ほぼ完形。
1号埋葬施設 埋土	98	須恵器 环身	器高 3.7 口径 11.9 受部径 14.1	体部、受部は外上方に伸び、立ち上がりは小さく、端部は丸く取まる。受部端部はやや尖り、緩やかな丸底。	外面立ち上がり～体部ヨコナデ、底部回転ヘラケズリ（反時計回り）。内面立ち上がり～底部ヨコナデ、見込み部中央同心円タタキ後、仕上げナデ。	胎土密。1～6mmの石英・長石、1mm程の黒色砂粒を含む。1mm以下の金雲母を少し含む。焼成良好。外側も灰白色。完形。

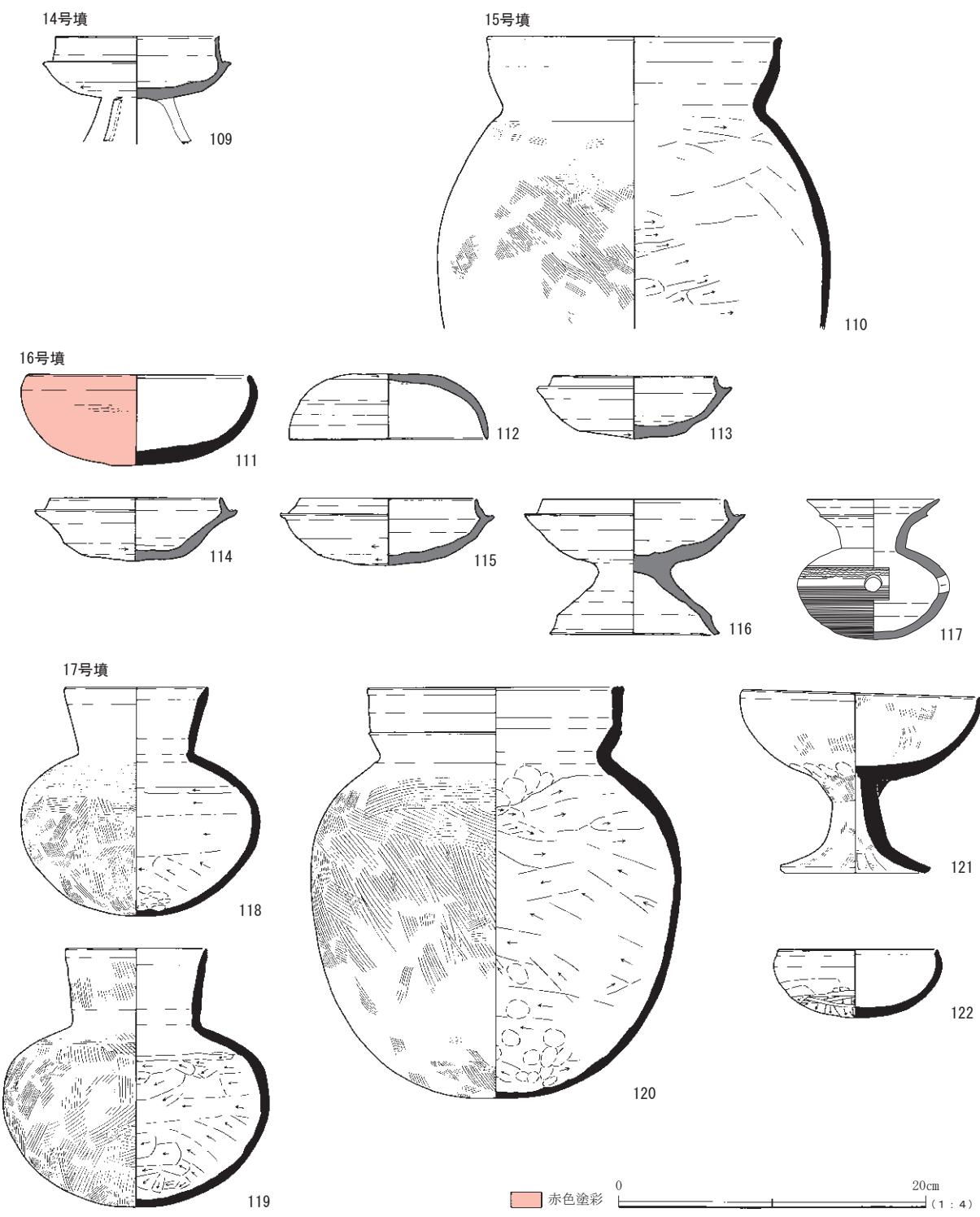
13号墳 土器

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土・焼成・色調・遺存度
周溝底	99	土師器 甕	器高 26.7 口径 17.5 胴部最大径 24.9	僅かに外反する複合口縁で、口縁下端に粘土を継ぎ足して整形、口縁下端に曲部の上に1条の凹線文を施す。体部は緩やかな肩を持つ球形で、外面体部に薄い黒斑、全域に煤付着。内面体部下半に薄い黒斑。谷70と入れ子。	外面口縁部～頸部上位ヨコナデ、頸部中位タテハケ後、ヨコナデ。頸部下位～体部中位タテハケ、中位以下タテハケ、ヨコハケが混在するが煤と摩耗で大半が不明瞭。内面口縁部ヨコナデ、頸部上位ヨコハケ後ナデ、中位ヨコナデ後ナデ、下位ヨコケズリ。体部上位ヨコケズリ後ナナメケズリ、中位ナナメケズリ、下位ケズリ後ユビオサエ。	胎土やや疎。1～4mmの石英・長石を含む。1～3mmの茶色砂粒、1mm程の角閃石、1mm以下の金雲母を少し含む。焼成良好。内面明黄橙色、外側黄橙色・にぶい橙色、橙色・にぶい褐色。口縁部3/4、頸部7/8、頸部以下完存。
周溝底	100	土師器 壺	器高 [5.4] 最大径 (10.0)	底部から内湾して立ち上がる口縁を持つ。口縁端部は欠損。外面に黒斑。	外面ヨコナデ後、ハケメ。内面口縁部ヨコナデ。体部ヨコケズリ後、最大径部ユビオサエ。	胎土やや密。1～3mmの石英・長石を含む。焼成良好。内外面とも浅黄橙色。口縁部1/4、体部3/4。
周溝埋土	101	土師器 壺	器高 5.3 口径 11.5 最大径 12.9	底部から緩やかに内湾して立ち上がる口縁で、外面端部下にごく浅い凹線文。	外面ヨコナデ、一部ミガキ。内面ヨコナデ。見込み部中央ナデ。	胎土やや密。1～4mmの石英・長石を多く含む。焼成良好。内面橙色、外側浅黄橙色。口縁部1/2、体部7/8。
周溝底	102	土師器 甕形土器	器高 10.0 口径 8.6 胴部最大径 11.4	頸部から口縁部は逆ハの字状に開き、口縁端部は外傾し、やや面を持つ。内面口縁部近くに凹みあり。体部はやや扁平な球形で、体部中央よりやや上に外側から内側に押し込んだ穿孔があり。須恵器模様。	外面口縁部～頸部ヨコナデ、体部上位ヨコハケ。体部中位ナナメのハケメ、下位ヨコハケ。底部ヨコハケ後、工具による雑な刻み目。内面口縁部ヨコナデ、頸部ヨコナデ後、一部ハケメ。体部上位ヨコナデ、体部中位ユビオサエ。下位ヨコケズリ。	胎土やや密。1～3mmの石英・長石を含む。1mm程の角閃石、1mm以下の金雲母を少し含む。焼成良好。内面黄橙色、外側黄橙色。完形。
周溝底	103	須恵器 环蓋	器高 4.5 口径 11.5 最大径 11.8	緩やかに丸みを帯びた天井から口縁部は垂直に下りる。天井部と口縁部の境界の後は短く鋭く。口縁端面は内傾して凹み、棱を持つ。	外面口縁部～体部ヨコナデ、天井部回転ヘラケズリ（時計回り）。内面口縁部～天井部ヨコナデ、天井部中心ヨコナデ後、一部ハラ状工具跡。	胎土密。1～3mmの石英を少し含む。1～5mmの長石を含む。5mm程の灰褐色を1つ含む。焼成良好。内外面とも灰色。ほぼ完形。
周溝底	104	須恵器 环蓋	器高 4.5 口径 14.2 最大径 14.4	やや丸みを帯びた天井部から口縁部はやや開き気味に下りる。天井部と口縁部を分ける稜はにぶく、ほとんど突出しない。稜の下に僅み、口縁端面は内傾する。内面屈曲部下にボロ付着。谷69と入れ子。	外面口縁部～体部ヨコナデ、天井部粗い回転ヘラケズリ（反時計回り）、回転ヘラケズリ後、直交する荒い工具跡。内面口縁部～天井部回転ヨコナデ後、一部ハラ状工具跡。	胎土やや疎。1～8mmの石英・長石を多く含む。1～4mmの褐色砂粒、1～2mmの黒色砂粒を少し含む。焼成良好。内面褐色、外側褐色、天井部褐色。ほぼ完形。
周溝底	105	須恵器 环身	器高 5.1 口径 10.0 受部径 12.0	体部、受部は外上方に伸び、立ち上がりはやや大きく、端部は内傾しやや段を持つ。受部端部は尖り気味で丸底。外面受部以下に焼斑、僅かに自然釉付着。	外面立ち上がり～体部ヨコナデ、底部回転ヘラケズリ（時計回り）。内面立ち上がり～体部ヨコナデ、底部回転ヨコナデ。	胎土密。1mm程の石英を僅かに含む。1～5mmの長石を多く含む。1mm以下の金雲母を少し含む。焼成良好。内面灰色、外側灰黄色・褐色。立ち上がり3/4、体部完存。
周溝底	106	須恵器 环身	器高 4.4 口径 10.1 受部径 12.2	体部、受部は外上方に伸び、立ち上がりは大きく、端部は内傾しやや段を持つ。受部端部は丸く取まり、緩やかな丸底。受部下薄い焼斑あり。	外面立ち上がり～体部ヨコナデ、底部回転ヘラケズリ（反時計回り）。内面ヨコナデ、底部回転ヨコナデ、一部ナデ。	胎土密。1～3mmの長石、1mm以下の金雲母を少し含む。1～2mmの石英、1mm程の角閃石を僅かに含む。焼成良好。内面灰白色、外側灰白色。立ち上がり3/4、体部完存。
周溝底	107	須恵器 环身	器高 4.9 口径 10.9 受部径 12.8	体部、受部は外上方に伸び、立ち上がりは大きく、端部は内傾しやや段を持つ。受部端部は丸く取まり、平坦な底部を持つ。八の字状に広がる脚部が付き、3方向に透かし穴を施すが、脚1つのみ途中まで残存。	外面立ち上がり～体部ヨコナデ、底部回転ヘラケズリ（時計回り）。内面ヨコナデ、底部回転ヨコナデ。	胎土密。1～4mmの長石、1～2mmの黒色ガラス質粒、1mm以下の金雲母を含む。1～3mmの石英を少し含む。1mm程の角閃石を僅かに含む。焼成良好。内外面とも灰色。完形。
周溝底	108	須恵器 环身	器高 5.4 口径 10.2 受部径 12.6	体部、受部は外上方に伸び、立ち上がりは大きく、端部は内傾する。受部端部は丸く取まり、平坦な底部を持つ。外面受部以下半分以上に焼斑。	外面立ち上がり～体部ヨコナデ、底部回転ヘラケズリ（反時計回り）。内面ヨコナデ、底部回転ヨコナデ。	胎土密。1～4mmの長石を含む。1～4mmの石英、1mm以下の角閃石を僅かに含む。1mm以下の金雲母を少し含む。焼成良好。内面灰色、外側黄灰色。完形。

14号墳 土器

法量：（ ）推定値 [] 現存値

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土・焼成・色調・遺存度
周溝埋土	109	須恵器 有蓋高坏	器高 [7.0] 口径 (10.6) 最大径 (12.2)	体部、受部は外上方に伸び、立ち上がりは大きく、端部は内傾する。受部端部はやや尖り、平坦な底部を持つ。八の字状に広がる脚部が付き、3方向に透かし穴を施すが、脚1つのみ途中まで残存。	外面立ち上がり～坏部上半ヨコナデ、底部回転ヘラケズリ（反時計回り）。脚部ヨコナデ。内面坏部立ち上がりヨコナデ、底部回転ヨコナデ後ナデ。脚部天井ナデ（反時計回り）脚部ヨコナデ。	胎土密。1～2mmの石英・長石を少し含む。焼成良好。内外面とも褐色。立ち上がり1/6、坏部1/3、脚部1/3。



第89図 14号～17号墳出土土器

15号墳 土器

法量：() 推定値 [] 現存値

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形 態	手 法	胎土・焼成・色調・遺存度
1号埋葬施設 墓土	110	土師器 裂	器高 [19.0] 口径 (18.8) 胸部最大径 (25.4)	口縁端部は外方にやや肥大し、内傾した面を持つ。口縁下端の稜はなだらかで殆ど突出しない。外面頸部以下強い黒斑。内外面とも摩滅が激しく調整不明瞭な部位あり。	外面口縁～頸部ヨコナデ、頸部下位ヨコハケ、体部上位～中位ナナメハケ。内面口縁～頸部ヨコナデ、頸部下位ヨコケズリ、上位ヨコ、ナナメケズリ、中位ヨコケズリ。	胎土やや疎。1～8mmの石英、1～3mmの長石、1～7mmの黄橙色の穢を含む。1mm以下の角閃石、金雲母を僅かに含む。焼成不良。内面浅黄橙色、外面深黄橙色・にぶい黄橙色。口縁部1/4、体部1/4。

16号墳 土器

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形 態	手 法	胎土・焼成・色調・遺存度
周溝底	111	土師器 塙	器高 5.9 口径 14.2 最大径 15.3	底部から緩やかに内湾して立ち上がる口縁で、端部は丸く收まる。外面赤色塗彩が残る。内外面とも虫喰い状の剥離あり。	外面ヨコミガキ。内面口縁部～体部下位ヨコナデ、底部ナナデ。	胎土密。焼成良好。1mm以下の橙色砂粒を多く含む。1～2mmの石英・長石を含む。1mm以下の金雲母を含む。1～2mm程の茶色砂粒、1mm程の角閃石を少し含む。内外面とも橙色。完形。
周溝底	112	須恵器 壺蓋	器高 4.3 口径 12.8 最大径 13.0	平坦な天井部から、口縁部は開き気味に下りる。外面天井部と口縁部の境界は不明瞭。	外面口縁部～体部ヨコナデ、天井部回転ヘラケズリ(反時計回り)。内面口縁部～天井部ヨコナデ、天井部中心仕上げナデ。	胎土密。焼成良好。2mm以下の長石を含む。内外面とも灰黄色。残存3/4。
周溝底	113	須恵器 壺身	器高 4.1 口径 10.5 受部径 12.6	体部、受部は外方に伸び、立ち上がりは小さく、受部・立ち上がり端部は丸く收まり、緩やかな丸底を持つ。	外面立ち上がり～体部ヨコナデ、底部回転ヘラケズリ(時計回り)。内面立ち上がり～底部ヨコナデ、見込み部中央仕上げナデ。	胎土密。焼成良好。1mm以下の金雲母を僅かに含む。内面灰黄色、外面黄灰色。完形。
周溝底	114	須恵器 壺身	器高 4.1 口径 11.0 受部径 13.2	体部、受部は外方に伸び、立ち上がりは小さく、受部・立ち上がり端部は丸く收まり、緩やかな丸底を持つ。	外面立ち上がり～体部ヨコナデ、底部回転ヘラケズリ(時計回り)。内面立ち上がり～底部ヨコナデ、見込み部中央仕上げナデ。	胎土密。焼成良好。1mm以下の長石を含む。内面にぶい黄橙色、外面灰黄色・灰褐色。完形。
周溝埋土 下層	115	須恵器 壺身	器高 4.4 口径 11.3 受部径 13.9	体部、受部は外方に伸び、立ち上がりは小さく、内傾の度合いが大きい。端部は丸く收まる。受部端部はやや尖り、緩やかな丸底を持つ。	外面立ち上がり～体部ヨコナデ、底部回転ヘラケズリ(反時計回り)。内面立ち上がり～底部ヨコナデ、見込み部中央仕上げナデ。	胎土密。焼成良好。5mm以下の長石、1～2mmの黑色砂粒を含む。内面黄灰色、外面灰黄色。ほぼ完形。
周溝埋土 下層	116	須恵器 有蓋壺	器高 8.8 口径 11.7 受部径 14.2 底径 10.4	体部、受部は外方に伸び、立ち上がりは小さく、端部は丸く收まる。受部端部はやや尖り、平坦な底部を持つ。脚部は短い筒部からへの字状に広がり、裾屈曲部に明瞭な稜を持つ。外面底部受部～底部に自然釉付着。脚部に灰がかかる。内面脚部に自然釉、ボロ付着。	外面立ち上がり～壺部上半ヨコナデ、底部回転ヘラケズリ(反時計回り)。脚部ヨコナデ。内面壺部立ち上がりヨコナデ、底部回転ヨコナデ。脚部全域ヨコナデ。	胎土密。焼成良好。2mm以下の長石を含む。1mm程の石英を僅かに含む。内面灰色、外面黄灰色。立ち上がり1/8、壺部1/2、裾部5/8。
周溝埋土 中層	117	須恵器 壺	器高 9.1 口径 8.5 胸部最大径 9.9	頸部から口縁部は逆八の字状に開き、口縁下端に外側につまみ出された鋭い稜を持つ。体部は肩の張った扁平な球形で、肩部に4条の横描波状文をめぐらせる。体部中央に外側から内面に押し込んだ穿孔があり。外面頸部～体部中位、内面口縁～頸部に灰がかかる。外顔著な焼斑。	外面口縁部～最大胴径部ヨコナデ、最大胴径部～底部カキ目。内面口縁部～底部ヨコナデ。	胎土密。焼成良好。1mm以下～2mmの長石を含む。内外面灰色。口縁部1/2、頸部・体部完存。

17号墳 土器

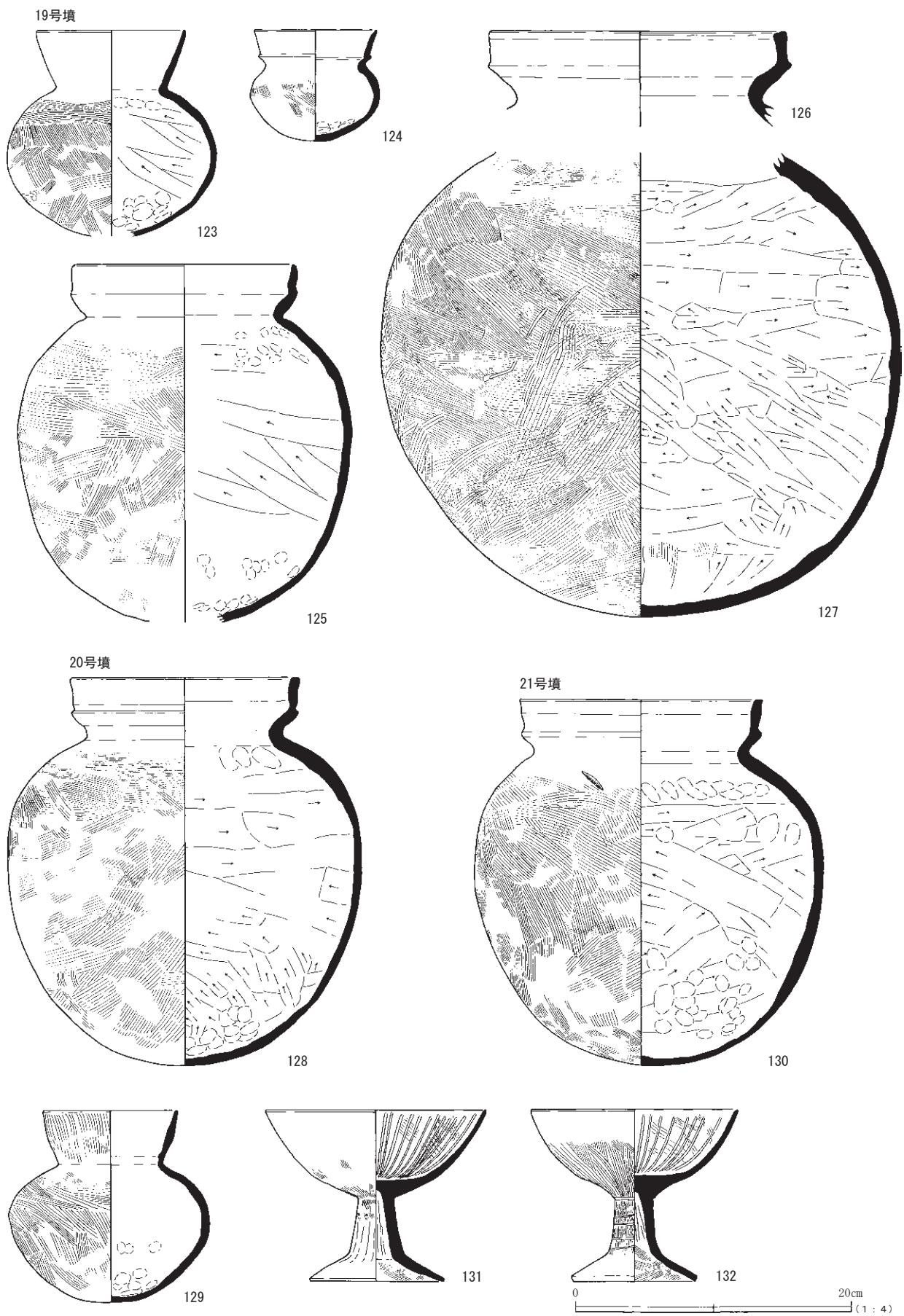
法量：() 推定値

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形 態	手 法	胎土・焼成・色調・遺存度
周溝底	118	土師器 直口壺	器高 14.8 口径 9.1 胸部最大径 15.6	口縁部はなだらかに外反しながら長く伸び、口縁部と頸部を接合するため頸部つけ根内面を強くまで、強い棱が付く。体部はやや肩が張った球形。外面黒斑、煤付着。	外面口縁部～頸部ヨコナデ、肩部ヨコハケ。最大胴径部ヨコハケ後タテハケ、体部下半交差するタテハケ。内面口縁部ヨコナデ後、ナデ、頸部上強いヨコナデ。頸部屈曲部～肩部ヨコナデ、肩部下～体部下半ヨコケズリ。底部ケズリ後ユビオサエ。	胎土やや密。1～3mmの石英を含む。1～4mmの長石、1mm程の角閃石、1mm以下の金雲母を少し含む。焼成良好。内外面とも橙色。口縁7/8、体部ほぼ完存。
周溝底	119	土師器 直口壺	器高 16.8 口径 (9.0) 胸部最大径 17.2	口縁部はなだらかに外反しながら長く伸び、口縁部と頸部を接合するため頸部つけ根内外面をなでて、外面とも緩やかな稜がある。体部はやや肩が張った球形。外面黒斑、煤付着、内面薄い黒斑。	外面口縁部ハケメ後ヨコナデ、頸部ヨコナデ。肩部ヨコハケ後タテハケ。肩部下～底部不定方向の交差するハケメ。内面口縁部～肩部ヨコナデ。肩部下～体部下半ヨコケズリ、底部ケズリ。	胎土やや密。1～3mmの石英を含む。1～2mmの長石・茶色砂粒、1mm程の角閃石、1mm以下の金雲母を少し含む。焼成良好。内外面とも橙色。口縁部1/4、体部1/2。
周溝底	120	土師器 裂	器高 26.6 口径 (15.4) 胸部最大径 (24.0)	口縁部はほぼ垂直に立ち上がり僅かに内湾する。口縁下部に鋭利な工具による切り込み加工あり。口縁端面は平坦で一条の凹線文を施す。体部は緩やかに肩が張った球形。外面黒斑、煤付着。	外面口縁部～頸部ヨコナデ、肩部～底部交差する横、縱、斜めのハケメ。体部下半は一部不明瞭。内面口縁部～頸部ヨコナデ、肩部ユビオサエ。肩部～体部下半ヨコケズリ、下半～底部ケズリ後ユビオサエ。	胎土やや密。1～3mmの石英を含む。1～3mmの長石、1mm以下の金雲母を少し含む。1～7mmの浅黄橙色の穢、1mm程の角閃石を僅かに含む。焼成良好。内面にぶい黄橙色、外面上にぶい橙色。口縁部1/4、体部上半1/2、下半7/8。
周溝底	121	土師器 高壺	器高 11.9 口径 (15.2) 壺部最大径 (15.6) 底径 (9.0)	平坦な底部から緩やかに立ち上がる壺部で、脚部は屈曲して大きく外に広がる。壺部と脚部の繋ぎ目をユビオサエで整形。	外面壺部口縁部～上半ヨコナデ、下半ハケメ後ヨコナデ。接合部上ユビオサエ。脚部ハケメ後ヨコナデ、壺部ヨコナデ。内面壺部ヨコナデ、脚部上半棒状工具による仕上げ、下半ヨコハケ。	胎土やや密。1～3mmの石英・長石を少し含む。1mm程の角閃石、1mm以下の金雲母を含む。焼成良好。内外面とも橙色。壺部1/2、脚部上半完存、脚部壺1/2。
周溝底	122	土師器 塙	器高 4.5 口径 (10.2) 最大径 (10.9)	底部から緩やかに内湾して立ち上がる口縁で、端部は内傾する。口縁端外側は僅かに凹む。外面強くはつきりした黒斑、僅かに煤の付着あり。	外面口縁部～体部上半ヨコナデ、下半～底部粗いタテケズリ。内面ヨコナデ、見込み部中央ナナデ。	胎土やや密。1～2mmの石英・長石、1～3mmの茶色砂粒、1mm程の角閃石、1mm以下の金雲母を少し含む。焼成良好。内外面とも橙色、外面一部明褐色。口縁部・体部3/4。

19号墳 土器

法量：() 推定値 [] 現存値

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形 態	手 法	胎土・焼成・色調・遺存度
周溝底	123	土師器 直口壺	器高 [15.0] 口径 (10.5) 胸部最大径 (15.2)	口縁部はなだらかに外傾しながら伸び、口縁と頸部を接合した際の粘土繋ぎ跡が外面に残る。頸部は太く、体部はなで肩の偏球形。外面全域に煤付着。	外面口縁部～頸部ヨコナデ、肩部ヨコハケ、最大胴径部ナナメハケ、体部下位～底部不定方向の交差するハケメ。内面口縁部～頸部ヨコナデ、肩部ヨコケズリ後、ユビオサエ。肩部下～体部下半ヨコケズリ。底部ユビオサエ。	胎土やや密。1～2mmの石英・長石を少し含む。1mm程の角閃石、1mm以下の金雲母を含む。焼成良好。内外面とも橙色。口縁部1/3、頸部1/2、体部2/3。
周溝底	124	土師器 小型丸底壺	器高 8.1 口径 8.7 胸部最大径 9.4	外反する複合口縁で口縁下端は外側につまみ出される。体部はやや肩の張った球形。	外面口縁部～肩部ヨコナデ、最大胴径部タテハケ、体部下半ナナメハケ。内面口縁部～体部下半ヨコナデ、底部ユビオサエ。	胎土やや密。1～2mmの石英・長石を含む。1mm程の角閃石、1mm以下の金雲母を少し含む。焼成やや不良。内外面とも浅黄橙色。口縁部1/2、頸部・体部ほぼ完存。



第90図 19号～21号墳出土土器

19号墳 土器（続き）

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形 態	手 法	法量：() 推定値 [] 現存値 胎土・焼成・色調・遺存度
周溝底	125	土師器 甕	器高 26.0 口径 15.8 胴部最大径 24.2	ほぼ直立する複合口縁で、口縁端部はやや外傾して面を持ち、浅い凹線文を施す。口縁下端は少し外側に突出し、体部は緩やかな肩を持つ球形。外面全域に黒斑、肩部以下に煤付着。	外面口縁部～頸部ヨコナデ。肩部ヨコハケ、最大胴径部ヨコハケ後、ナナメハケ。体部下半～底部不定方向の交差するハケメ。内面口縁部～頸部ヨコナデ、肩部ヨコケズリ後、ユビオサエ。最大胴径部～体部下半ヨコ、ナナメケズリ、底部ユビオサエ。	胎土やや密。1～6mmの石英・長石、1mm程の角閃石、1mm以下の金雲母を少し含む。焼成良好。内面黄橙色、外面橙色。口縁部・頸部1/2、体部ほぼ完存。
周溝底	126	土師器 甕 口縁部	器高 [7.1] 口径 (20.9)	僅かに内傾する複合口縁で口縁端部はやや肥大、僅かに内傾し、僅みを持つ。口縁下端は外側にこまみ出される。127と同一個体の可能性あり。	外面口縁部～頸部ヨコナデ。内面口縁部～頸部ヨコナデ、頸部下位残存少なく調整不明。	胎土やや密。1～3mmの石英・長石を含む。1～2mmの茶色砂粒を少し含む。1mm以下の金雲母を僅かに含む。焼成良好。内面にぶい橙色、外面にぶい黄橙色。口縁部・頸部3/4。
周溝底	127	土師器 甕 体部	器高 [33.6] 胴部最大径 (37.6)	体部はほぼ球形で外面上半に強い黒斑、下半は黒斑、煤付着。126と同一個体の可能性あり。	外面頸部下位ヨコハケ、体部上半～底部様々な方向のハケメ、途中で折り返すハケメを混在。内面体部上半ヨコケズリ、中位～下位ヨコ、ナナメのケズリ、底部タケズリ、一部強く荒いタテハケ。	胎土やや密。1～4mmの石英・長石を含む。1～2mmの茶色砂粒、1mm程の角閃石、1mm以下の金雲母を少し含む。焼成良好。内面にぶい黄橙色、外面にぶい黄橙色・橙色。体部3/4。

20号墳 土器

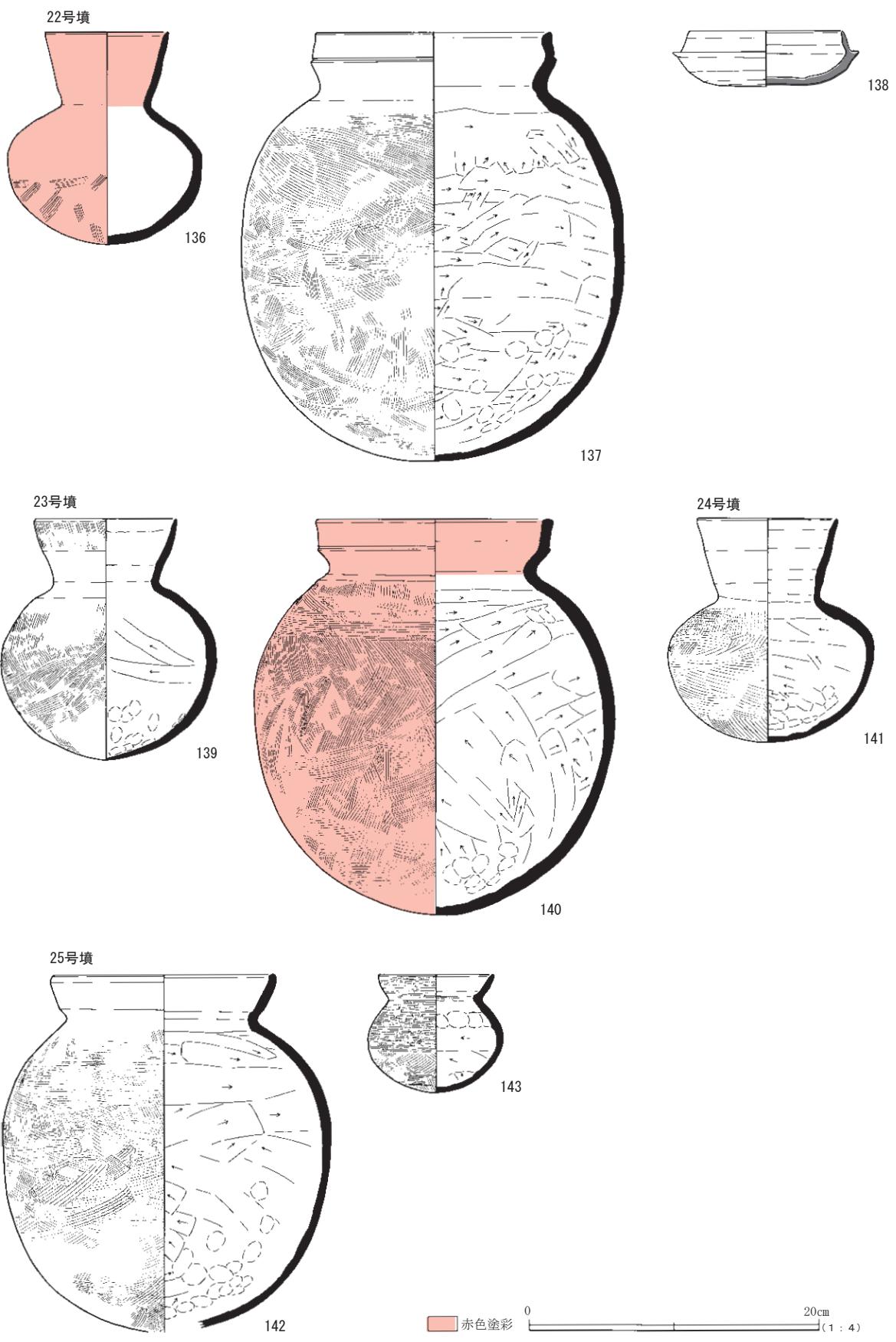
出土位置	No.	器種	法量(cm)	形 態	手 法	法量：() 推定値 [] 現存値 胎土・焼成・色調・遺存度
周溝底	128	土師器 甕	器高 28.2 口径 (16.3) 胴部最大径 25.6	僅かに外反する複合口縁で、口縁端部はほぼ水平で平坦面を持つ。口縁下端は外側に突出する。体部はやや肩が張った球形。外面頸部以外に黒斑、煤付着。外面全域薄い黒斑、薄く煤付着。	外面口縁部～頸部ヨコナデ、頸部下位ヨコハケ。肩部ヨコハケ後タテハケ。最大胴径部～底部、不定方向の交差するハケメ。内面口縁部～頸部下位ヨコナデ、肩部ユビオサエ。体部中位ヨコケズリ、下位タケズリ後ユビオサエ。	胎土やや密。1～4mmの石英・長石を含む。1～4mmの茶色・黑色砂粒を僅かに含む。1mm程の角閃石、1mm以下の金雲母を少し含む。焼成良好。内面灰黄褐色、外面にぶい橙色・褐色。口縁部1/3、体部2/3。

21号墳 土器

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形 態	手 法	法量：() 推定値 [] 現存値 胎土・焼成・色調・遺存度
周溝底付近	129	土師器 直口壺	器高 13.9 口径 9.6 胴部最大径 14.6	口縁部はなだらかに外傾しながら伸び、口縁と頸部を接合した際の粘土繋ぎ跡が外面に残る。頸部は太く、体部はやや肩が張った偏球形。	外面口縁部タテハケ、頸部ヨコナデ。肩部ヨコハケ、最大胴径部ナナメハケ。体部下半～底部不定方向の交差するハケメ。内面口縁部～体部下半ヨコナデ、底部ユビオサエ。	胎土やや密。1～3mmの石英・長石を少し含む。1mm程の角閃石、1mm以下の金雲母を含む。焼成良好。内面とも橙色。口縁部・頸部・体部7/8。
周溝底	130	土師器 甕	器高 26.5 口径 17.3 胴部最大径 25.3	僅かに外反する複合口縁で、口縁端部は水平で平坦面を持つ。口縁下端は外側に突出する。体部はやや肩が張った球形。肩部に一か所のみ二枚貝による刺突文。外面下半～底部薄い黒斑、煤付着。	外面口縁部～頸部ヨコナデ。肩部～底部、不定方向に交差するハケメ。内面口縁部～頸部ヨコナデ、肩部ヨコナデ後、ユビオサエ。体部上位ヨコケズリ後ユビオサエ、中位ヨコケズリ、下位ケズリ後、ユビオサエ。	胎土やや密。1～6mmの石英、1～3mmの長石を含む。1～6mmの褐色砂粒を少し含む。1mm程の角閃石、1mm以下の金雲母を僅かに含む。焼成やや不良。内面にぶい黄橙色、外面にぶい黄橙色・にぶい橙色。(ほぼ完形)。
周溝底	131	土師器 高坏	器高 12.4 口径 15.8 底径 9.7	深い塊状の坏部で、平坦な底部から緩やかに内湾して立ち上がる。裾部は細長い筒部から屈曲して広がり、裾端部は外傾した面を持つ。	外面坏部口縁部～上半ヨコナデ、坏部下半～脚部上半タテハケ後、ナデ消し。脚部下半～裾部ヨコナデ。内面坏部放射状のヘラミガキ、一部ヨコハケが残る。脚筒部シボリ、裾部ヨコハケ後ナデ。	胎土密。1mm以下の石英・長石を少し含む。1mm程の角閃石、1mm以下の金雲母を含む。焼成良好。内外面とも橙色。(ほぼ完形)。
周溝底	132	土師器 高坏	器高 12.5 口径 14.9 底径 8.7	深い塊状の坏部で、平坦な底部から緩やかに内湾して立ち上がる。裾部はやや細長い筒部から屈曲して広がり、裾端部は外傾した面を持つ。坏部、裾部とも歪みあり。	外面坏部口縁部ヨコナデ、以下タテハケ。脚筒部タテハケ後、ヨコミガキ。裾部ヨコナデ。内面坏部放射状のヘラミガキ、一部ヨコハケが残る。底部ナデ。脚筒部シボリ、裾部ヨコハケ後ナデ。	胎土密。1～3mmの石英・長石を少し含む。1mm程の角閃石、1mm以下の金雲母を含む。焼成良好。内外面とも橙色。完形。
周溝底	133	土師器 高坏	器高 12.7 口径 15.1 底径 9.5	平坦な底部から緩やかに内湾して立ち上がる坏部で、口縁端部は外傾して面を持つ。脚裾部は屈曲して広がり、裾端部は外傾した面を持つ。脚筒部内面に黒斑。	外面坏部口縁～底部ヨコナデ。接合部ヨコミガキ。脚筒部タテハケ後、ナデ消し。脚裾部ヨコナデ。内面坏部交差するヨコミガキ。底部は放射状のミガキ。脚筒部シボリ、脚裾部ヨコハケ。	胎土密。1～3mmの石英・長石、1mm程の角閃石、1mm以下の金雲母を少し含む。焼成良好。内外面とも橙色。坏部3/4、脚部完存。
周溝底	134	土師器 高坏	器高 18.9 口径 16.3 底径 10.0	かなり深い塊状の坏部で、やや平坦な底部から急な角度で屈曲して内湾しながら立ち上がり、口縁端部は外反する。屈曲部粘土繋ぎ箇所で明瞭な稜りあり。裾部は緩やかに屈曲して広がり、裾端部は外傾した面を持つ。内外面とも黒斑。	外面坏部口縁～屈曲部ヨコナデ、一部ナメハケ。屈曲部粘土繋ぎ箇所整形の為の強いナナメハケ。底部タテハケ。脚筒部接合部タテハケ後、ヨコミガキ。脚筒部タテハケ後、ナデ消し。脚裾部ヨコナデ。内面坏部ヨコナデ後、ヨコミガキ。底部ナデ後ミガキ。脚筒部シボリ、脚裾部ヨコハケ。	胎土密。1～2mmの石英・長石・茶色砂粒、1mm程の角閃石、1mm以下の金雲母を少し含む。焼成良好。内外面とも橙色。(ほぼ完形)。
周溝底	135	土師器 高坏	器高 12.9 口径 16.9 底径 10.2	深い塊状の坏部で、平坦な底部から緩やかに内湾して立ち上がり、口縁端部がぐく僅かに外反する。裾部は屈曲して広がり、裾端部は外傾した面を持つ。	外面坏部口縁～坏部下位タテハケ、一部ナデ消し。坏部下位タテハケ後、ヨコミガキ。脚筒部接合部タテハケ後ヨコミガキ。脚筒部～裾部ヨコナデ後、一部ヨコミガキ。内面坏部交差するヨコミガキ後、放射状のタテミガキ。一部ヨコハケが残る。脚筒部シボリ、脚裾部ヨコハケ。	胎土密。1mm程の石英・長石・角閃石、1mm以下の金雲母を少し含む。焼成良好。内外面とも橙色。坏部ほぼ完形、脚部3/4。

22号墳 土器

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形 態	手 法	法量：() 推定値 [] 現存値 胎土・焼成・色調・遺存度
周溝底	136	土師器 直口壺	器高 14.7 口径 8.4 胴部最大径 13.4	口縁部はなだらかに外傾しながら長く伸び、口縁と頸部を接合した際の粘土繋ぎ跡が外面に残る。体部は肩が張った偏球形。外面全域と内面口縁～頸部に赤色塗彩がよく残る(底部は僅か)。	外面口縁部～最大胴径部ヨコナデ、体部下半～底部不定方向の交差するハケメ。内面口縁部～頸部ヨコナデ、肩部～底部ケズリ(単位、方向不明瞭)。	胎土密。1～2mmの石英・長石・茶色砂粒、1mm程の角閃石、1mm以下の金雲母を含む。焼成良好。内外面とも橙色。(ほぼ完形)。
周溝埋土	137	土師器 甕	器高 29.5 口径 16.0 胴部最大径 26.4	僅かに内湾する複合口縁で、口縁端部は内傾して面を持つ。口縁下端は少し外側に突出し、屈曲部の上に1条の凹線文を施す。体部はやや肩を持つ球形。外面体部肩部～下位に黒斑、煤付着。	外面口縁部～頸部ヨコナデ、頸部下位ヨコハケ。体部上位～中位交差するヨコハケ、ナナメハケ。中位以下タテハケ後、ヨコハケ。内面口縁部～頸部ヨコナデ、頸部下位ヨコケズリ後、ナデ。肩部タテケズリ。体部中位ヨコケズリ、下位ケズリ後ユビオサエ。	胎土やや疎。1～9mmの石英、1～3mmの長石を含む。1～2mmの茶色砂粒、1mm程の角閃石、1mm以下の金雲母を少し含む。焼成やや不良。内面浅黄橙・橙色、外見浅黄橙色・明褐色。口縁部2/3、肩部3/4、脚部以下完存。
周溝底	138	須恵器 坏身	器高 3.8 口径 10.4 受部径 12.8	体部、受部は外方に伸び、立ち上がりはやや大きく、端部は尖る。受部端部はやや尖り、平坦な底部を持つ。底部回転～脚部に黒斑、煤付着。	外面立ち上がり～体部ヨコナデ、底部回転～ハラケズリ(時計回り)。内面立ち上がり～体部ヨコナデ、底部回転ヨコナデ後、仕上げナデ。	胎土密。3mm以下の石英・長石を含む。3～6mmの灰色砂、1mm程の角閃石、1mm以下の金雲母を僅かに含む。焼成良好。内外面とも灰色。完形。



第91図 22号～25号墳出土土器

23号墳 土器

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形 態	手 法	胎土・焼成・色調・遺存度
周溝底	139	土師器 直口壺	器高 16.6 口径 9.6 胴部最大径 14.9	口縁部はなだらかに外傾しながら伸び、口縁部と頸部を接合した際の外面の整形が難。頸部はやや太く、体部は頸部下にやや肩がある球形。外面全域に煤付着。	外面口縁部タテハケ、頸部ヨコナデ。肩部タテハケ、最大胴径部～底部不定方向の交差するハケメ。内面口縁部～頸部ヨコナデ、肩部～体部下半ヨコケズリ。底部ユビオサエ。	胎土やや密。1～4mmの石英・長石、1mm程の角閃石、1mm以下の金雲母を少し含む。焼成良好。内外面とも橙色。ほぼ完形。
周溝底	140	土師器 壺	器高 27.3 口径 15.9 胴部最大径 24.9	僅かに外反する複合口縁で、口縁下端部はやや外側に突出し、屈曲部の上に1条の回線文を施す。体部は緩やかな肩を持つ球形で、肩部に箇所のみ押引文。外面全域、内面口縁部～頸部に赤色塗彩が残る。外面体部肩部以下に強い黒斑、煤付着。	外面口縁部～頸部ヨコナデ、頸部下位タテハケ。肩部周回するヨコハケ、交差するナナメハケ。体部中位交差するタテハケ、ナナメハケ、V字形に折り返すハケメ。中位～底部不定方向の交差するハケメ。内面口縁部～頸部ヨコナデ、頸部下位ヨコケズリ、肩部ヨコケズリ一部ユビオサエ。体部上位ナナメのケズリ、中位ナナメ、タテケズリ。下位タテケズリ後、ユビオサエ。	胎土やや密。1～3mmの石英・長石、1mm程の角閃石、1mm以下の金雲母を含む。1～2mmの茶色砂粒を僅かに含む。焼成やや不良。内外面ともにぶい黄橙色。ほぼ完形。

24号墳 土器

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形 態	手 法	胎土・焼成・色調・遺存度
周溝底	141	土師器 直口壺	器高 15.4 口径 9.4 胴部最大径 14.1	口縁部はなだらかに外傾しながら長く伸び、口縁と頸部を接合した際の粘土繋ぎ跡が外面に残る。体部はやや肩が張った球形。外面煤付着、体部下半は頸著に残る。	外面口縁部～頸部ヨコナデ、体部肩部タテハケ後、ヨコハケ。体部最大胴径部～底部不定方向の交差するハケメ。内面口縁部～頸部ヨコナデ、頸部下位ナナメ。肩部～体部下位ヨコケズリ、底部ケズリ後、ユビオサエ。	胎土やや密。1～2mmの石英・長石、茶色砂粒、1mm程の角閃石、1mm以下の金雲母を少し含む。焼成良好。内面口縁部～頸部黄橙色、体部明褐色。外面橙色。ほぼ完形。

25号墳 土器

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形 態	手 法	胎土・焼成・色調・遺存度
周溝埋土	142	土師器 壺	器高 24.6 口径 15.0 胴部最大径 22.6	口縁部は逆八の字状に広がり、外形は僅かに内湾、口縁端部は内側に屈曲し平坦面を持つ。口縁下部は突出が殆ど無く、体部は球形を呈す。外面黒斑、煤付着、内面下半に薄い黒斑、僅かに煤付着があり。	外面口縁部～頸部ヨコナデ、頸部下～最大胴径部タテハケ後、ヨコハケ。最大胴径部～底部、ナナメハケ後、V字形に折り返すハケメ。内面口縁部～頸部ヨコナデ、頸部下位ナナメ。肩部～体部下位ヨコケズリ、底部ケズリ後、ユビオサエ。	胎土密。1～3mmの石英・長石、1～2mmの茶色砂粒、1mm程の角閃石、1mm以下の金雲母を少し含む。焼成良好。内面口縁部～頸部黄橙色、体部明褐色。外面橙色。ほぼ完形、口縁部、底部に欠損あり。
2号埋葬施設 墳丘上	143	土師器 小型丸底壺	器高 8.2 口径 7.8 胴部最大径 9.3	口縁部は逆八の字状に広がり、体部は球形。外面頸部以下に黒斑、煤付着、内面頸部以下に黒斑。	外面口縁部～最大胴径部単位の細いヨコミガキ。体部下半ヨコハケ後、ナナメハケ、タテハケ後、ヨコミガキ。内面口縁部ヨコナデ、頸部ヨコミガキ、頸部下位ヨコナデ、肩部ユビオサエ。最大胴径部～底部ヨコ、ナナメのヘラケズリ。	胎土密。1～2mmの石英・長石を少し含む。1mm程の角閃石、1mm以下の金雲母を含む。焼成良好。内外面とも橙色。口縁・体部完存、底部2/3。

1号段状遺構 土器

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形 態	手 法	胎土・焼成・色調・遺存度	法量：() 推定値 [] 現存値
埋土	144	土師器 壺	器高 [9.1] 口径 (16.0)	外反する複合口縁で、屈曲部の稜はやや鈍い。口縁端部は丸く収まる。肩部はあまり張らずなだらか。内外面とも黒斑あり。	外面口縁部～頸部上位ヨコナデ、頸部下位タテハケ後、ヨコナデ。肩部ヨコハケ後、短いナナメハケ。内面口縁部ヨコナデ、頸部以下ナナメ上方向へのハケズリ後、ナデ。	胎土密。0.5～3mmの石英・長石を僅かに含む。1mm程の角閃石、1mm以下の金雲母を含む。焼成良好。内面にぶい黄橙色、外面褐灰色。口縁部・頸部3/4、肩部1/2。	
ほぼ床面	145	土師器 高杯	器高 [5.9] 口径 (16.8)	深い塊状の坏部で、口縁部に向けて緩やかに内湾しながら立ち上がり、端部が外反する。	外面口縁部ヨコナデ、体部ヨコナデ後、一部不定方向のハケメ、脚接合部ユビオサエ。内面口縁部ヨコハケ後、ヨコナデ、体部ヨコナデ後、ヘラミガキ(摩耗して不明瞭)。	胎土密。1～3mmの石英を多く含む。1mm以下の角閃石・金雲母を含む。焼成良好。内外面ともにぶい黄橙色。坏部1/8。	

1号土器埋設遺構 土器

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形 態	手 法	胎土・焼成・色調・遺存度	法量：() 推定値 [] 現存値
床面	146	土師質土器 短頸壺 口縁部	器高 [5.3] 口径 (15.6)	口縁部は内傾して、口縁端部は肥大し、水平な面を持つ。頸部下に明瞭な稜があり。147と同一個体の可能性あり。	外面口縁ケズリ後、ヨコナデ。肩部ヨコナデ。内面口縁～肩部ヨコナデ。	胎土密。1mm以下の石英・長石を少し含む。1mm程の角閃石、1mm以下の金雲母を含む。焼成良好。内外面とも橙色。口縁部1/2(接合しないものも含む)。	
床面	147	土師質土器 短頸壺 体部	器高 [18.7] 胴部最大径 (28.2) 底径 (18.7)	倒卵型の体部で、器壁は厚く底部は平底。146と同一個体の可能性あり。	外面最大胴径部～体部下半ヨコナデ、底部ケズリ後ヨコナデ。底面ケズリ後、ハケメ。内面最大胴径部～体部下半ヨコナデ、部分的に強く指の跡が残る。底部近くヨコハケ後、ヨコナデ。底部ナデ。	胎土密。2mm以下の石英・長石を少し含む。1mm程の角閃石、1mm以下の金雲母を含む。焼成良好。内外面とも橙色。体部3/4。	

2号土器埋設遺構 土器

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形 態	手 法	胎土・焼成・色調・遺存度	
床面	148	土師質土器 短頸壺	器高 26.6 口径 16.3 胴部最大径 26.6 底径 15.0	口縁部は内傾して、口縁端部にやや面を持ち、細い凹線文を施す。頸部下位近くに緩やかな肩を持つ倒卵型の体部で、肩部に2条の凹線文をめぐらせる。体部中位に2対の耳を貼り付け、器壁は厚い。底部は平底。	外面全域ヨコナデ。内面口縁部～頸部ヨコナデ、頸部～底部強いヨコナデ、底面回転ヨコナデ。	胎土やや密。2mm以下の石英・長石、1mm程の角閃石、1mm以下の金雲母を少し含む。焼成良好。内外面とも橙色。口縁部1/4、体部7/8。	

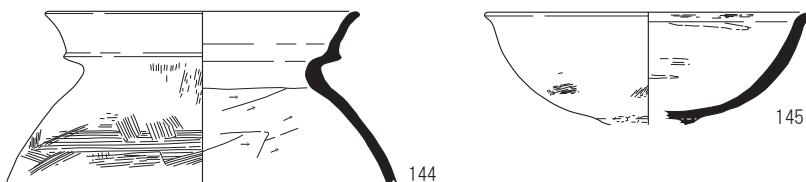
遺構外 土器

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形 態	手 法	胎土・焼成・色調・遺存度	
遺構外 (2号堅穴建物の北側辺り)	149	須恵器 壺蓋	器高 4.1 口径 13.1 最大径 13.4	平坦な天井から、口縁部は開き気味に下りる。天井部と口縁部の境界は不明瞭。口縁端面は内傾する。鞍金具(F18)に被さった状態で出土。馬具から染み出た鉄分付着。	外面口縁部～体部ヨコナデ、天井部回転ヘラケズリ(時計回り)。天井部中央回転ヘラケズリ後、雑なナデ、工具跡。内面口縁部～天井部ヨコナデ、天井部中央不定方向のナデ。	胎土密。1～3mmの石英・長石を含む。焼成良好。内外面とも灰黄色。ほぼ完形。	
遺構外 (1号墳周辺)	150	須恵器 壺身	器高 3.4 口径 9.7 受部径 12.4	体部、受部は外上方に伸び、立ち上がりは小さく内傾し、端部は薄く尖り気味。受部端部は丸く收まる。緩やかな丸底。	外面立ち上がり～体部ヨコナデ、底部雑なナデ、一部工具跡あり。内面全体ヨコナデ。	胎土密。1～4mmの長石・灰褐色砂粒を少し含む。1～2mmの石英を僅かに含む。焼成良好。内外面とも褐灰色。口縁部・壺部1/2。	

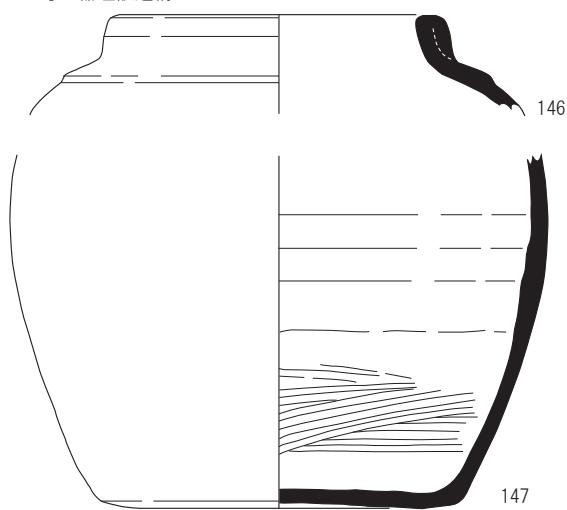
土製品

No.	出土位置	種類	最大径 (cm)	最大長 (cm)	最大厚 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	備考
D 1	5号堅穴建物 埋土	紡錘車	4.1	—	0.6	0.6	9.6	完形
D 2	7号堅穴建物 埋土	紡錘車	3.9	—	0.6	0.4	8.5	完形
D 3	1号墳 周溝 表土	土玉	3.1	3.5	—	0.5	14.6	遺存度 1/2

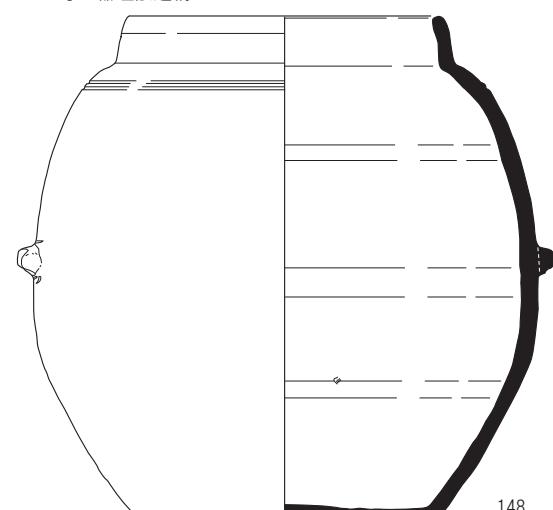
1号段状遺構



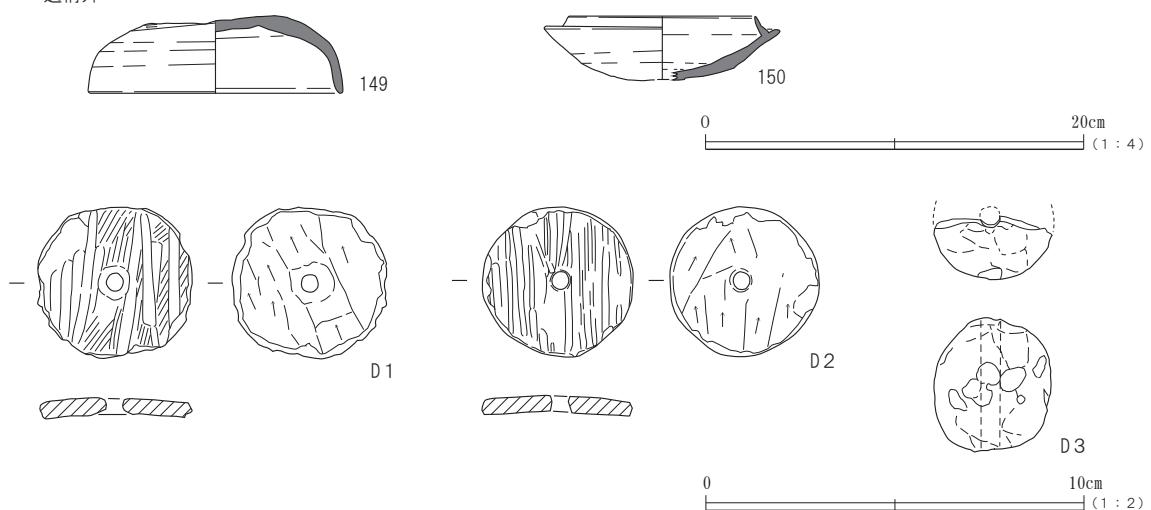
1号土器埋設遺構



2号土器埋設遺構



遺構外



第92図 1号段状遺構、1号・2号土器埋設遺構、遺構外出土土器、土製品

鉄器

法量：[] 現存値

No.	出土位置	種類	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	備考
F 1	1号堅穴建物 P 7 挖方埋土直上	鉄矛	54.6	5.4	3.0	
F 2	1号堅穴建物 P 7 柱痕跡と掘方埋土の間	板状鉄斧	27.4	7.1	0.7	
F 3	1号堅穴建物 床面	鋳造鉄斧	11	8.9	3.0	
F 4	1号墳 4号埋葬施設 埋土下層	鉄滓	8.5	6.7	2.1	椀形。105 g
F 5	1号墳 11号埋葬施設 埋土	鉄鎌	[4.6]	1.0	0.3	ふるい中。
F 6	1号墳 14号埋葬施設 檢出面	鉄刀子	[4.5]	1.5	0.4	木質・漆付着。
F 7	4号墳 周溝底	鉄鎌	9.9	1.3	0.6	F 7～F 9が鍛着。
F 8	4号墳 周溝底	不明鉄製品	8.5	1.3	0.7	F 7～F 9が鍛着。
F 9	4号墳 周溝底	不明鉄製品	8.9	0.8	1.0	F 7～F 9が鍛着。
F 10	4号墳 周溝検出面	馬具(鞍金具)	[2.6]	[3.0]	0.6	木質付着。
F 11	11号墳 1号埋葬施設 上段掘方平坦面	鉄鍔鋒先	15.8	16.7	1.7	U字形。
F 12	11号墳 1号埋葬施設 上段掘方平坦面	鉄鎌	12.8	4.2	0.6	曲刃鎌。
F 13	11号墳 1号埋葬施設 上段掘方平坦面	鉄鎚	[11.4]	1.7	0.9	木質付着。
F 14	11号墳 1号埋葬施設 上段掘方平坦面	鉄鑿	20.8	1.9	1.3	平鑿。
F 15	25号墳 2号・3号主体部 上段掘方埋土	鉄刀子	[9.0]	1.1	0.4	
F 16	3号溝 埋土	鉄鎌	[14.0]	[0.7]	0.4	長茎鎌。
F 17	1号段状遺構 埋土	鉄鎌	[7.2]	3.5	0.4	
F 18	遺構外(2号堅穴建物の北側辺り)	馬具(鞍金具)	6.6	4.8	0.6	須恵器壺蓋(149)下より出土。
F 19	遺構外(2号堅穴建物の北側辺り)	馬具(鞍金具)	6.3	4.4	0.5	

1号堅穴建物の床面で出土した舶載品の鉄器 F 1～F 3について述べる。

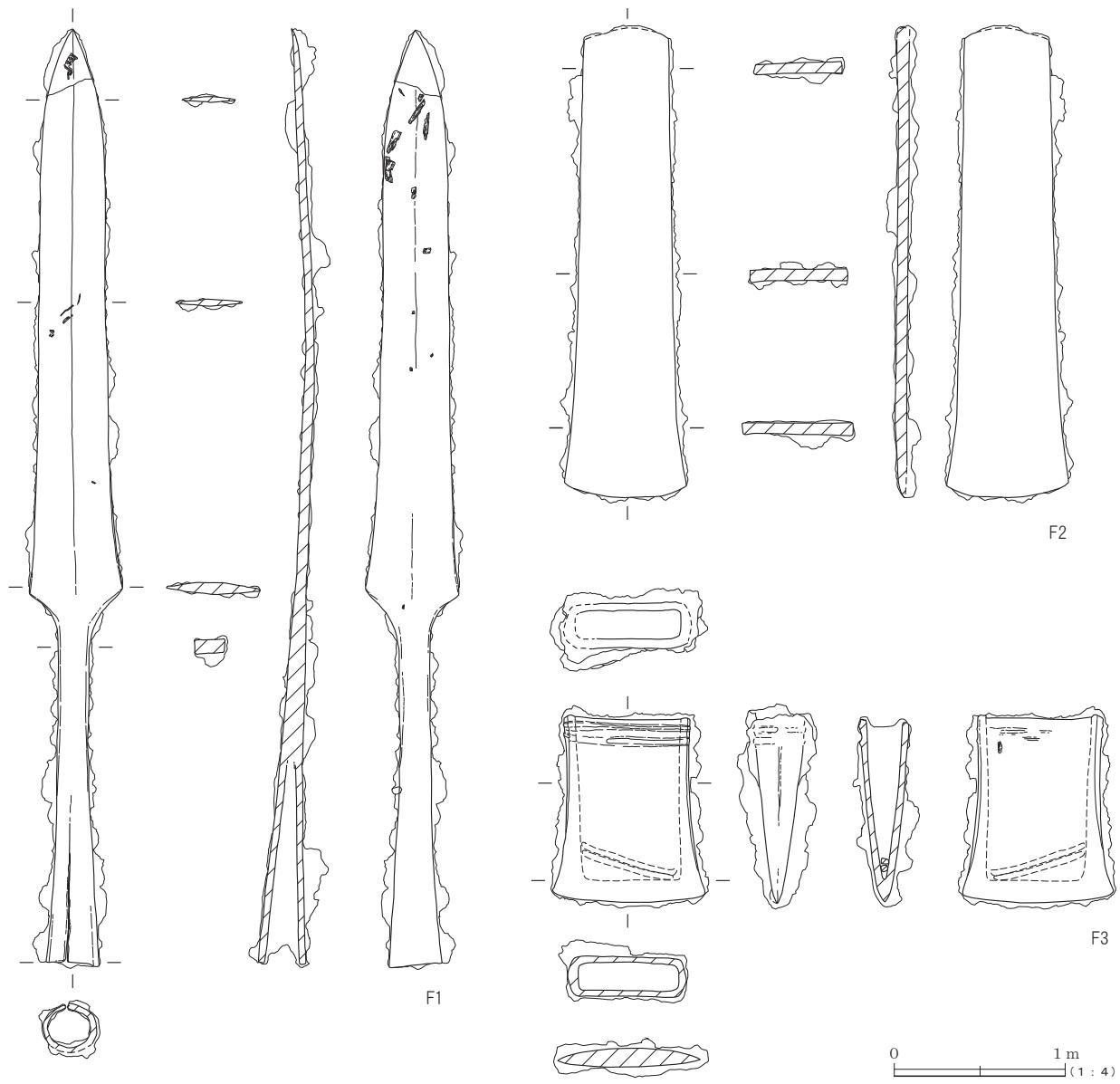
鉄矛 (F 1) 全長 54.6cm、関幅 5.4cm、袋幅 3.1cm、袋部の厚さ 3.0cmを測る。刃部先端から関部にかけて次第に広がる。刃部中心にわずかに鎬が見られる。断面形は刃部が菱形、基部が長方形、袋部は円形に近いが、鍛打した後の鉄板を折り曲げ整形して作られたため鈍い稜ができる多角形を呈す。完形であるが刃部先端から 3.0cm の位置で破損している。また、1号堅穴建物の焼失の際の比熱によるものか、刃部中央でやや折れ曲がる。刃部先端から中央にかけて両面とも炭化材の細片が付着している。

板状鉄斧 (F 2) 全長 27.4cm、刃幅 7.1cm、最大厚 0.7cmを測る。基部から刃部へと緩やかに広がり平面梯形を呈す。刃部がわずかに湾曲して広がる。各面が丁寧に鍛打成形され稜線も鋭い。両側面の鍛打によって横断面がやや凹レンズ状を呈し、両側縁部に最大厚をもつ、朝鮮半島の板状鉄斧に見られる特徴を有している。刃部の研磨は鏽のため観察ができないが、両刃で、刃部及び基部端辺は弧状を呈す。

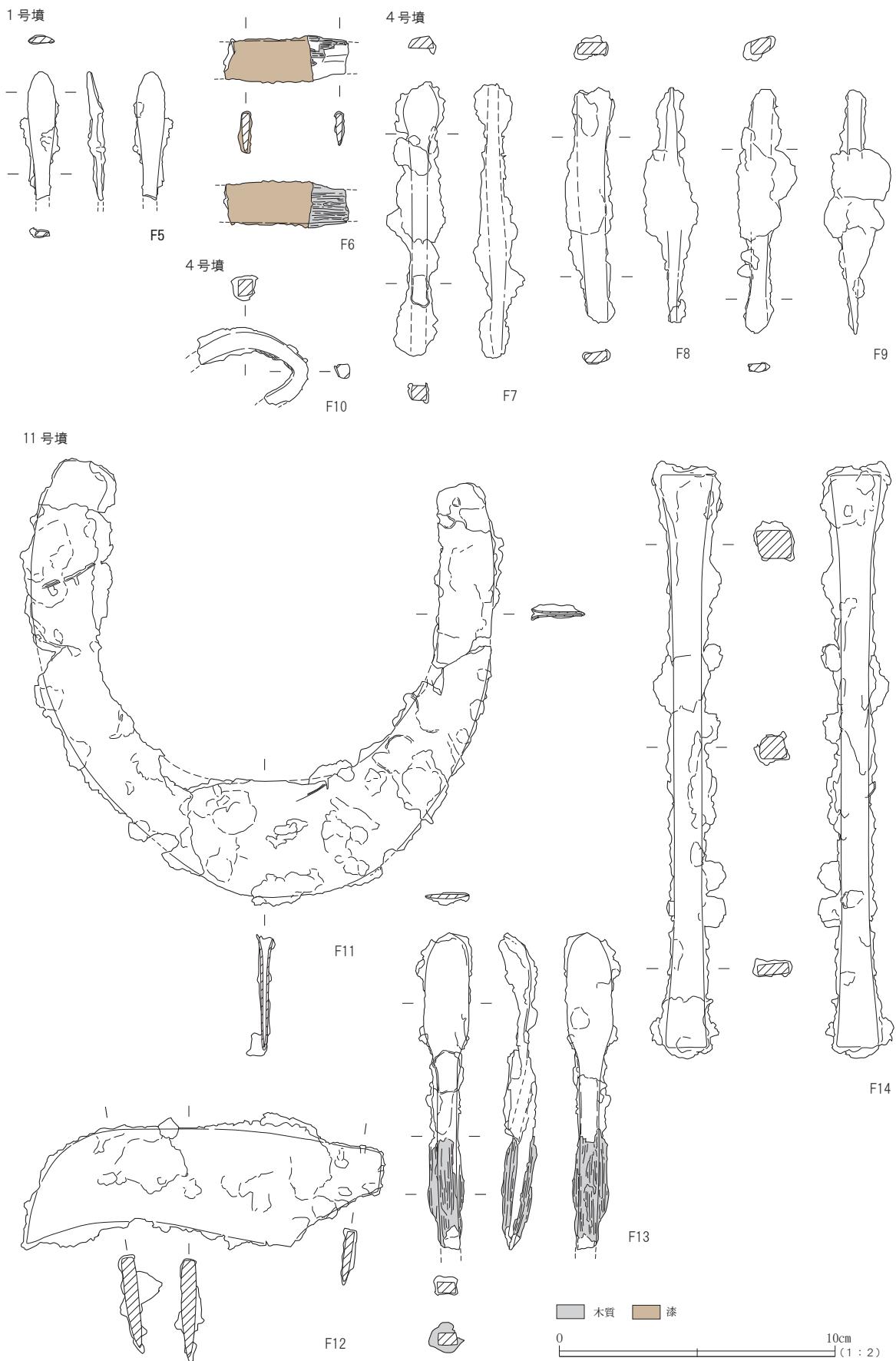
鋳造鉄斧 (F 3) 全長 11.0cm、袋幅 7.3cm、刃幅 8.9cm、最大厚 3.0cmを測る。袋部から刃部にかけて湾曲して刃部が鉄状に広がる。袋部直下に 2条の突帯を有する。袋部側面に双合范の合わせ目が稜線状に残り、横断面は長六角形を呈す。X線 CT 調査により、袋部内で長さ約 5.5cm の 2本の棒状鉄製品が確認された。袋部横断面と平面形の特徴から、村上恭通氏が 3分類した 2条突帯斧のⅢ式に分類される¹⁾。 (片岡)

註

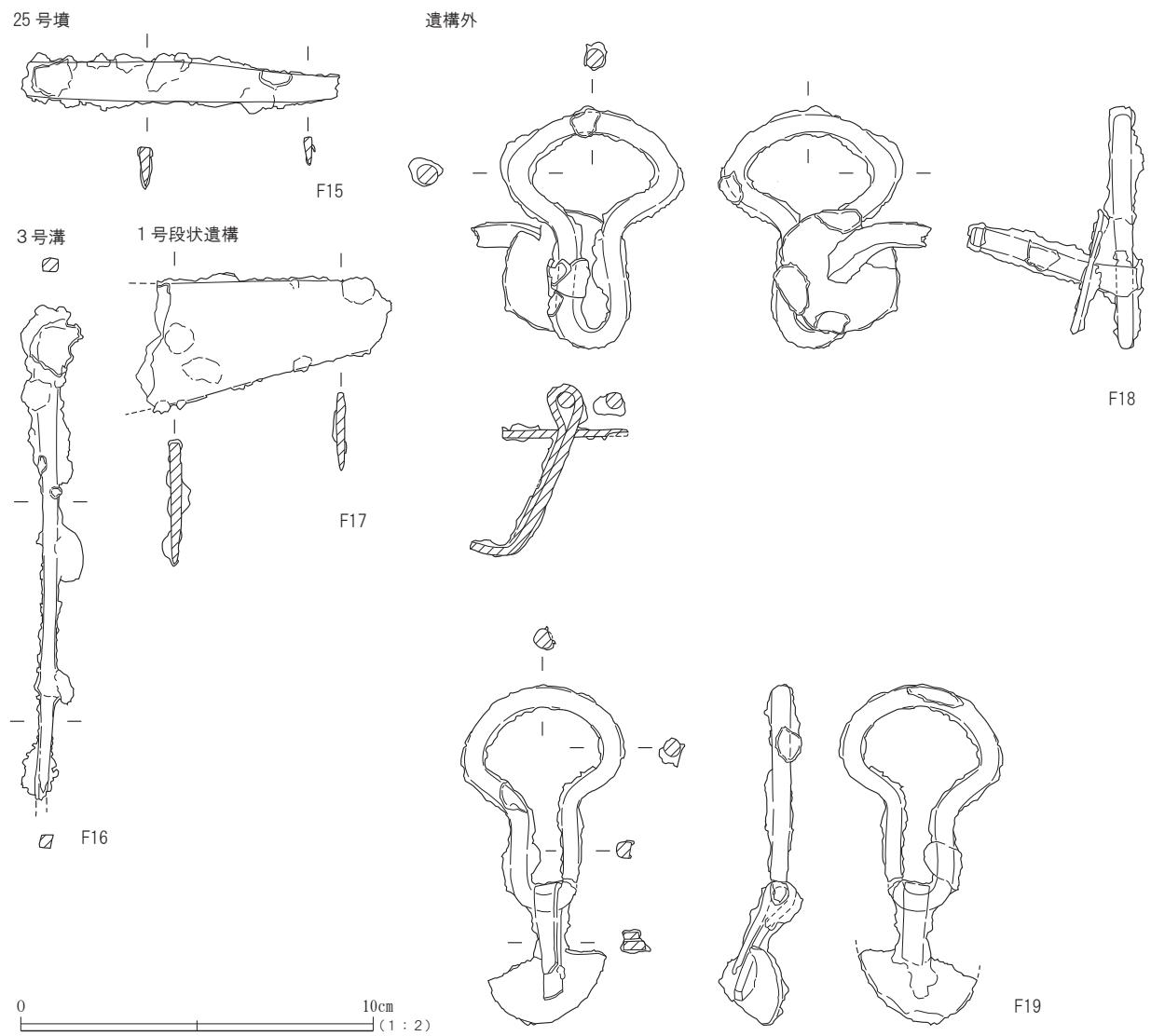
1) 村上恭通「東アジアの二種の鋳造鉄斧をめぐって」『たらら研究』29、たらら研究会、1988年



第93図 1号竪穴建物出土鉄器



第94図 1号・4号・11号墳出土鉄器



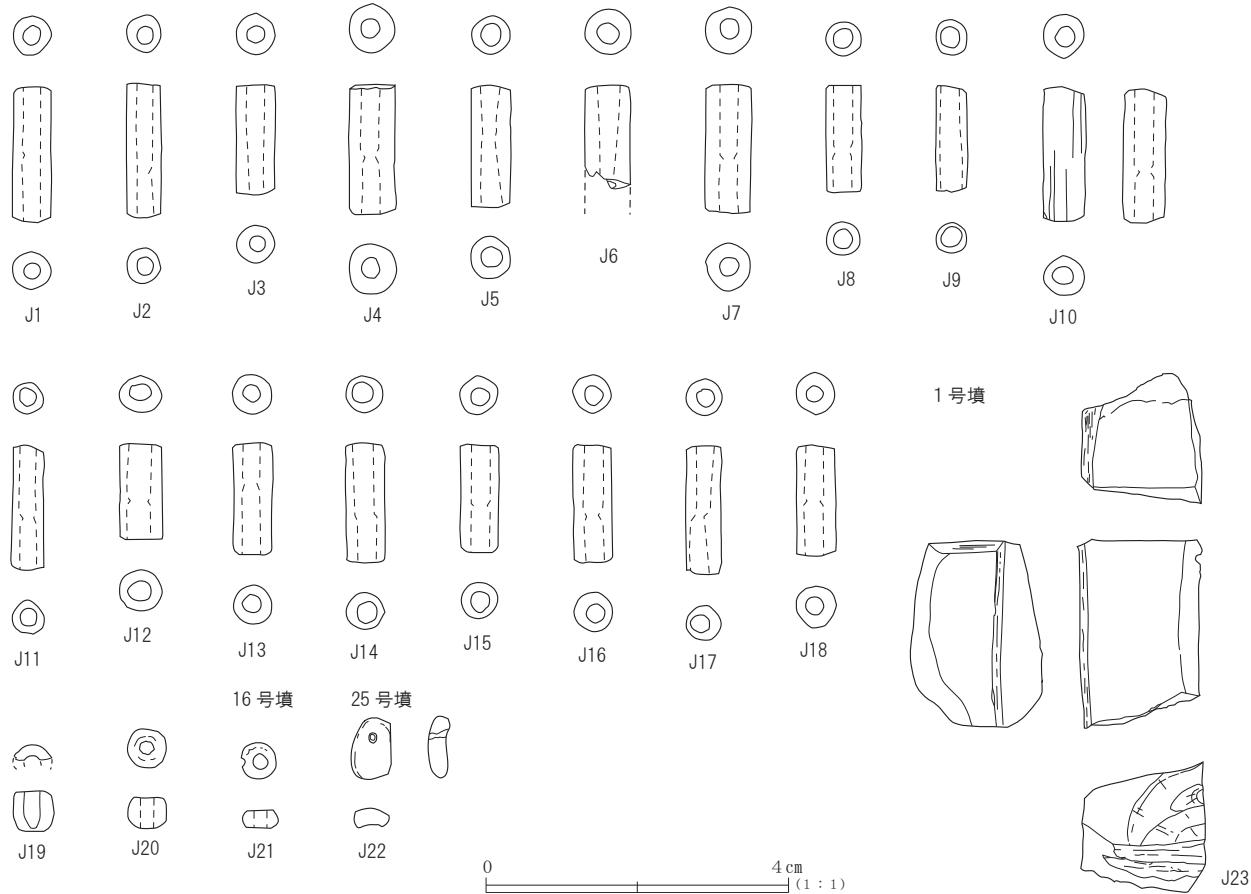
第95図 25号墳、3号溝、1号段状遺構、遺構外出土鉄器

玉類・玉作關係遺物

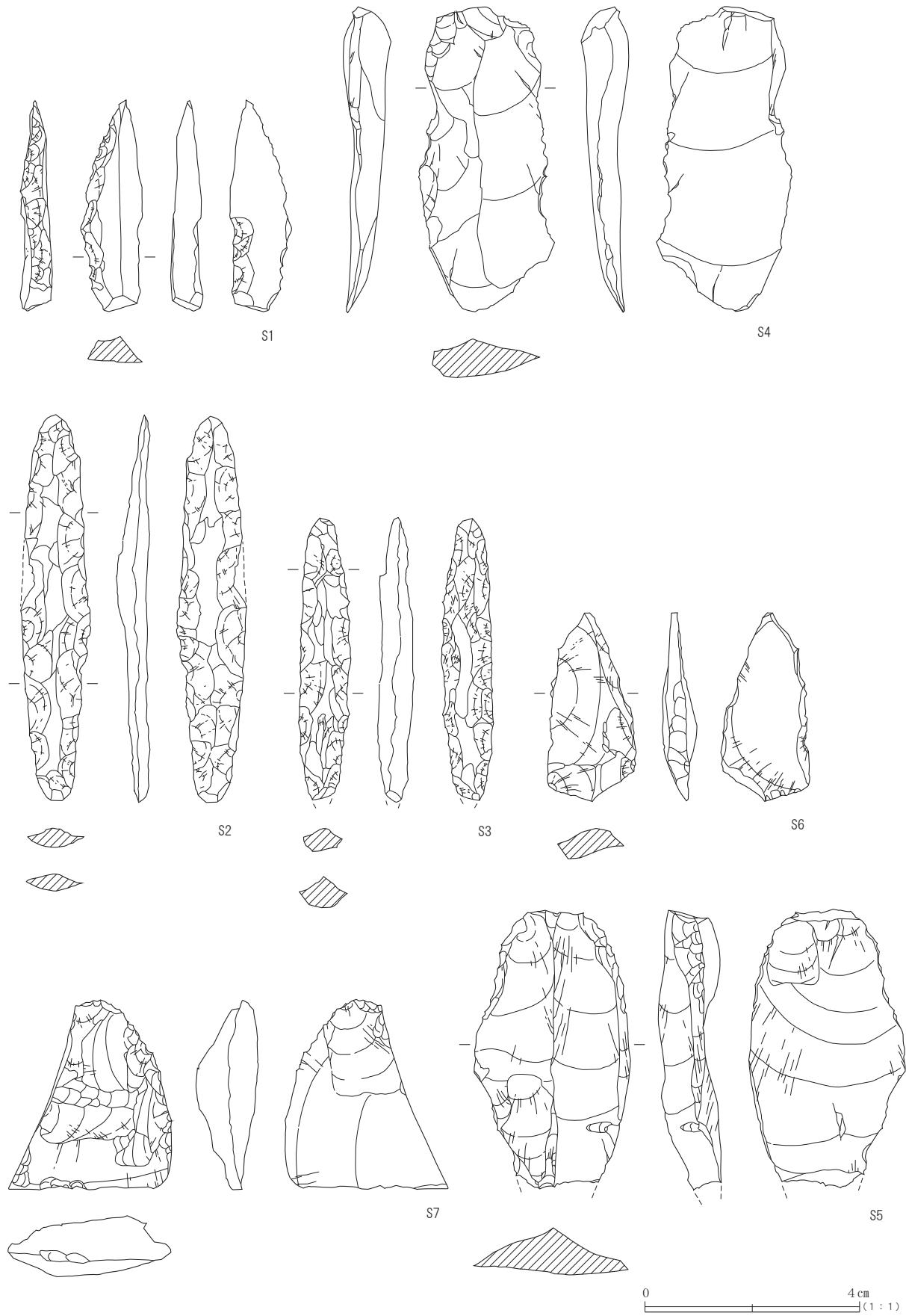
法量：[] 現存値

No.	出土位置	種類	石材	色調	最大長(cm)	最大幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)	備考
J 1	1号堅穴建物 埋土	管玉	緑色凝灰岩	灰白色	1.8	0.5	0.2	0.6	
J 2	1号堅穴建物 埋土	管玉	緑色凝灰岩	浅黄色	1.75	0.45	0.2	0.5	
J 3	1号堅穴建物 埋土	管玉	碧玉	オリーブ黒色	1.45	0.5	0.3	0.6	鉄針による穿孔。
J 4	1号堅穴建物 炭化材C 23 下	管玉	緑色凝灰岩	灰黄色	1.7	0.6	0.3	0.95	
J 5	1号堅穴建物 炭化材C 136 下	管玉	緑色凝灰岩	浅黄色	1.6	0.5	0.25	0.5	ふるい中。
J 6	1号堅穴建物 床面	管玉	緑色凝灰岩	浅黄色	[1.35]	0.6	0.25	0.5	
J 7	1号堅穴建物 床面	管玉	緑色凝灰岩	浅黄色	1.7	0.6	0.25	0.95	
J 8	1号堅穴建物 床面	管玉	緑色凝灰岩	浅黄色	1.4	0.45	0.25	0.3	
J 9	1号堅穴建物 床面	管玉	緑色凝灰岩	灰オリーブ色	1.4	0.4	0.3	0.35	
J 10	1号堅穴建物 床面	管玉	緑色凝灰岩	浅黄色	1.75	0.55	0.25	0.55	
J 11	1号堅穴建物 床面	管玉	緑色凝灰岩	灰黄色	1.65	0.4	0.2	0.35	被熱。
J 12	1号堅穴建物 床面	管玉	緑色凝灰岩	浅黄色	1.25	0.55	0.3	0.45	
J 13	1号堅穴建物 床面	管玉	緑色凝灰岩	浅黄色	1.45	0.5	0.25	0.45	
J 14	1号堅穴建物 床面	管玉	緑色凝灰岩	浅黄色	1.55	0.5	0.25	0.4	
J 15	1号堅穴建物 床面	管玉	緑色凝灰岩	浅黄色	1.4	0.5	0.25	0.45	
J 16	1号堅穴建物 床面	管玉	緑色凝灰岩	灰白色	1.55	0.5	0.25	0.5	
J 17	1号堅穴建物 床面	管玉	緑色凝灰岩	灰黄色	1.7	0.45	0.25	0.45	
J 18	1号堅穴建物 弥生土器(4)下	管玉	緑色凝灰岩	灰黄色	1.45	0.5	0.25	0.5	ふるい中。
J 19	1号堅穴建物 床面	ガラス管玉	—	淡青色	0.5	0.5	0.2	0.05	ふるい中。
J 20	1号堅穴建物 床面	ガラス小玉	—	紺色	0.4	0.5	0.2	0.15	ふるい中。
J 21	16号墳2号埋葬施設 埋土	ガラス小玉	—	淡青色	0.25	0.5	0.2	0.05	ふるい中。
J 22	25号墳1号主体部 埋土	ガラス製品	—	淡青色	0.8	0.5	0.1	0.2	ガラス管玉の転用。鉛直方向に分割された管玉に穿孔を施したもの。風化。
J 23	1号墳 墳丘上	管玉未成品	碧玉	暗緑灰色	2.45	1.6	1.7	10.05	形割素材。石鋸による擦切溝がみられる。
J 24	5号堅穴建物 P 32 埋土	剥片	水晶	透明	0.4 ~ 1.3	0.1 ~ 0.9	—	0.01 ~ 0.45	計 91 点、3.65 g
J 25	5号堅穴建物 P 32 埋土	剥片	緑色凝灰岩	緑灰色	0.4 ~ 0.8	0.3 ~ 0.5	—	0.01 ~ 0.05	計 6 点、0.1 g

1号堅穴建物



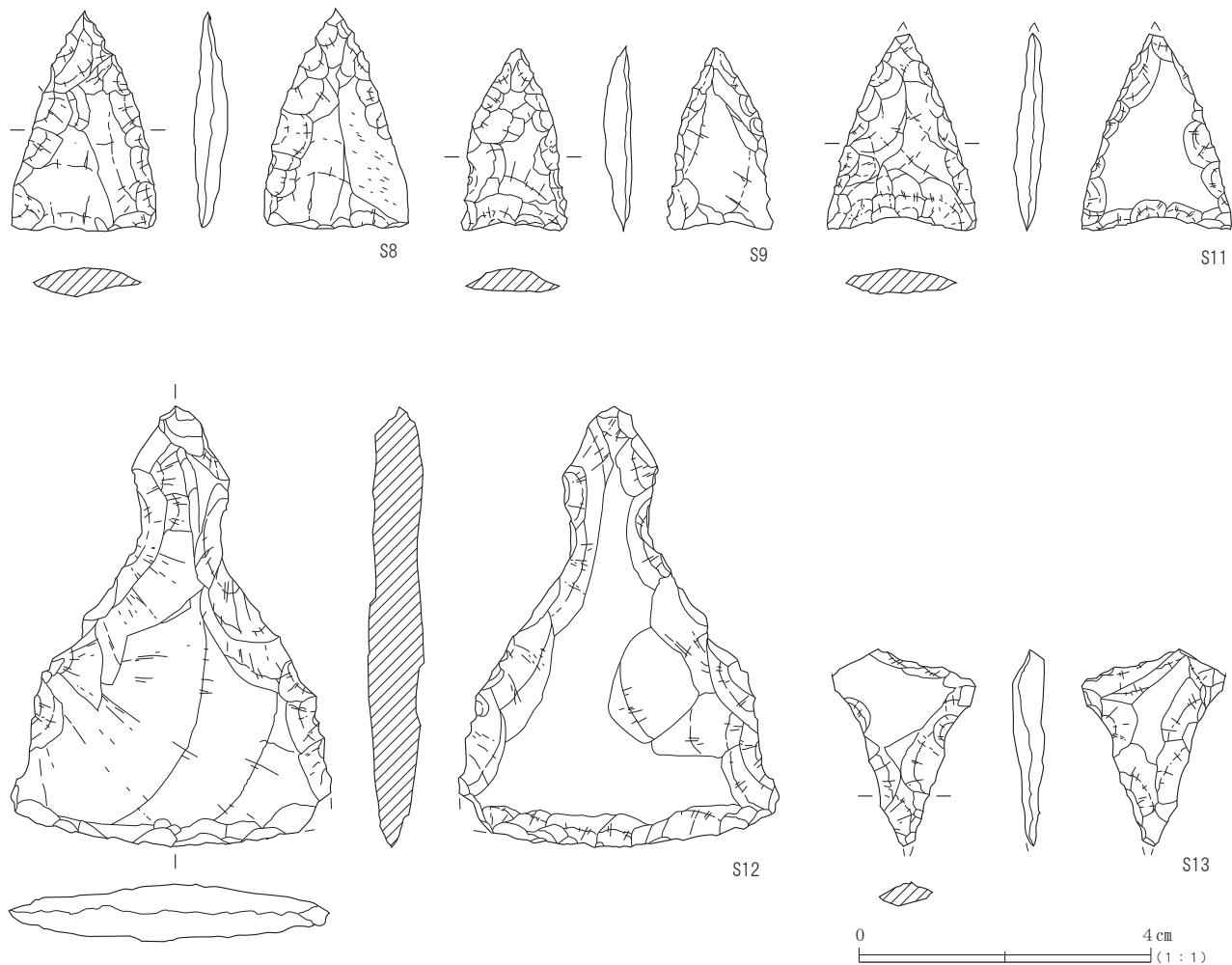
第96図 1号堅穴建物、16号・25号墳出土玉類、5号堅穴建物、1号墳出土玉作関係遺物



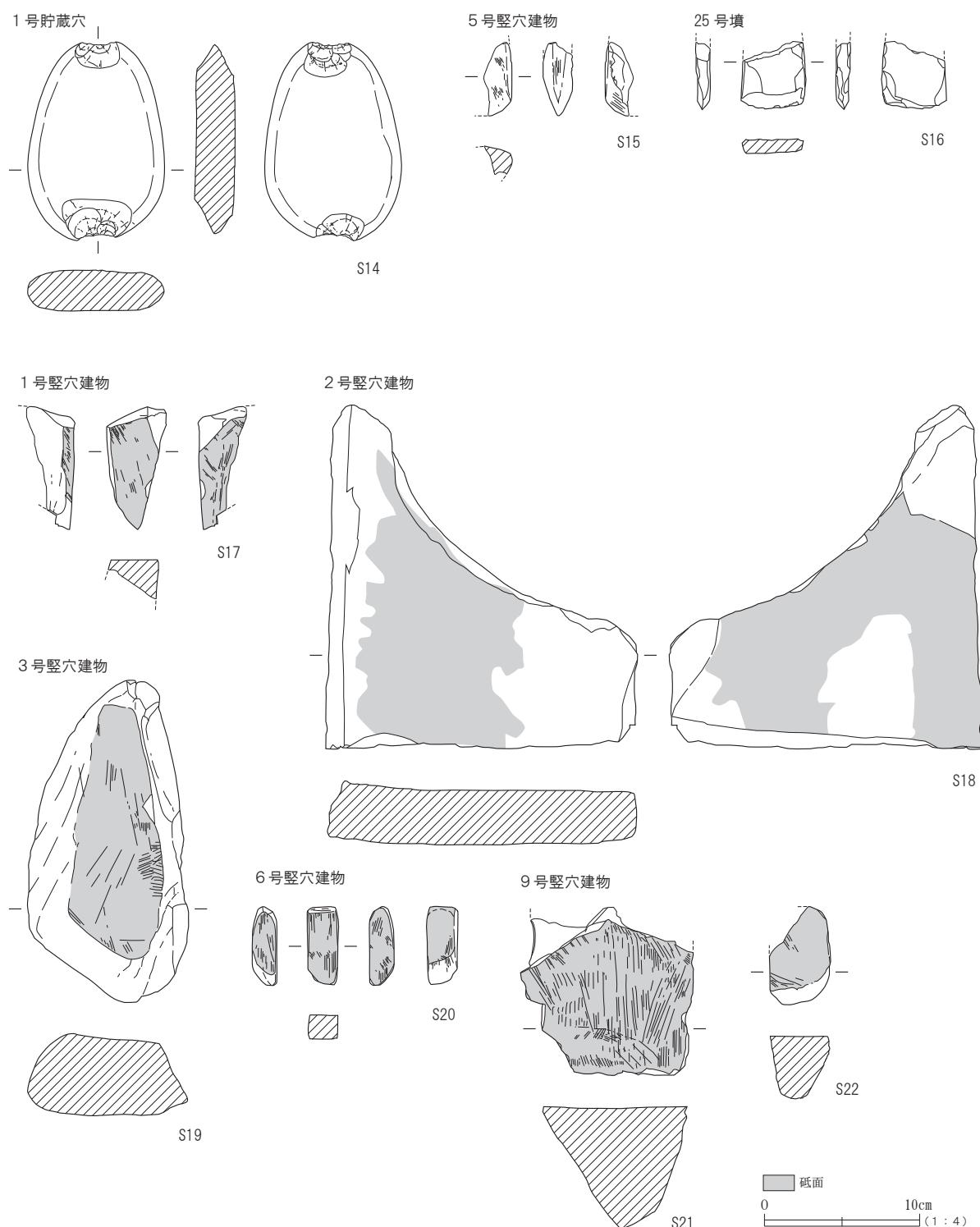
第97図 ナイフ形石器、尖頭器、石刃、剥片

石器

No.	出土位置	種類	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
S 1	3号木棺墓 埋土	ナイフ形石器	安山岩	3.9	1.2	0.6	2.54	
S 2	遺構外(4号竪穴建物と6号竪穴建物の中間) 暗褐色土下層	尖頭器	サヌカイト	7.2	1.3	0.6	4.33	本ノ木型。
S 3	遺構外(4号墳の東側) 橙褐色粘質土上面	尖頭器	安山岩	5.3	1.0	0.7	3.67	本ノ木型。
S 4	25号墳 周溝 北西側埋土	石刃	玉髓	6.7	2.5	0.9	8.3	
S 5	1号墳 墳丘下周溝 北西側埋土	剥片	黒曜石	5.2	2.9	1.1	14.74	2次加工あり。
S 6	遺構外(2号竪穴建物の北側辺り) 黒色土～褐色土上面	剥片	黒曜石	3.5	1.6	0.6	3.14	2次加工あり。瀬戸内風。
S 7	遺構外(4号墳墳丘上) 褐色土上面	剥片	黒曜石	3.5	3.0	1.15	8.23	バルバースカー多方面から。
S 8	1号竪穴建物 床面	石鏸	サヌカイト	3.1	2.0	0.45	2.04	
S 9	1号竪穴建物 埋土	石鏸	安山岩	2.5	1.4	0.35	1.09	
S 10	1号竪穴建物 埋土	石鏸	安山岩	2.0	1.2	0.4	0.8	
S 11	1号墳 墳丘上 北東側	石鏸	安山岩	2.7	2.0	0.4	1.72	
S 12	4号墳 墳丘下周溝 埋土	石匙	安山岩	6.0	4.4	0.8	17.52	
S 13	1号竪穴建物 埋土	石錐	安山岩	2.7	2.0	0.45	1.35	

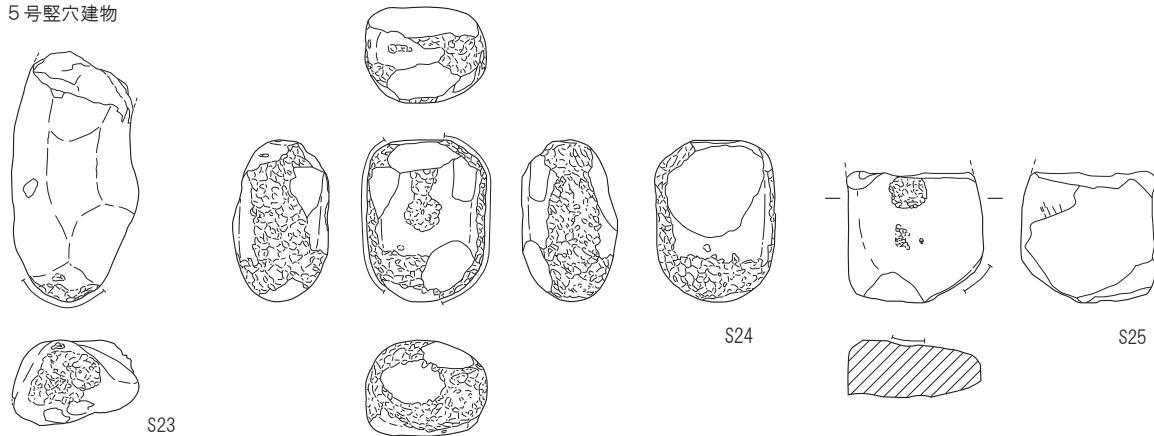


第98図 石鏸、石匙、石錐



第99図 1号貯蔵穴出土石錐、5号竪穴建物等出土磨製石斧、1号竪穴建物等出土砥石

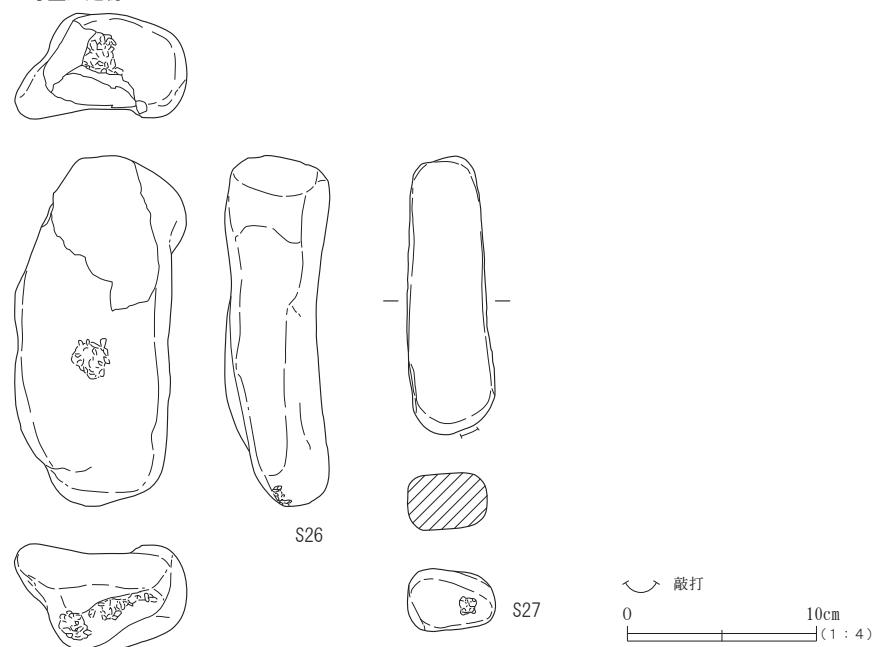
5号竪穴建物



S24

S25

9号竪穴建物

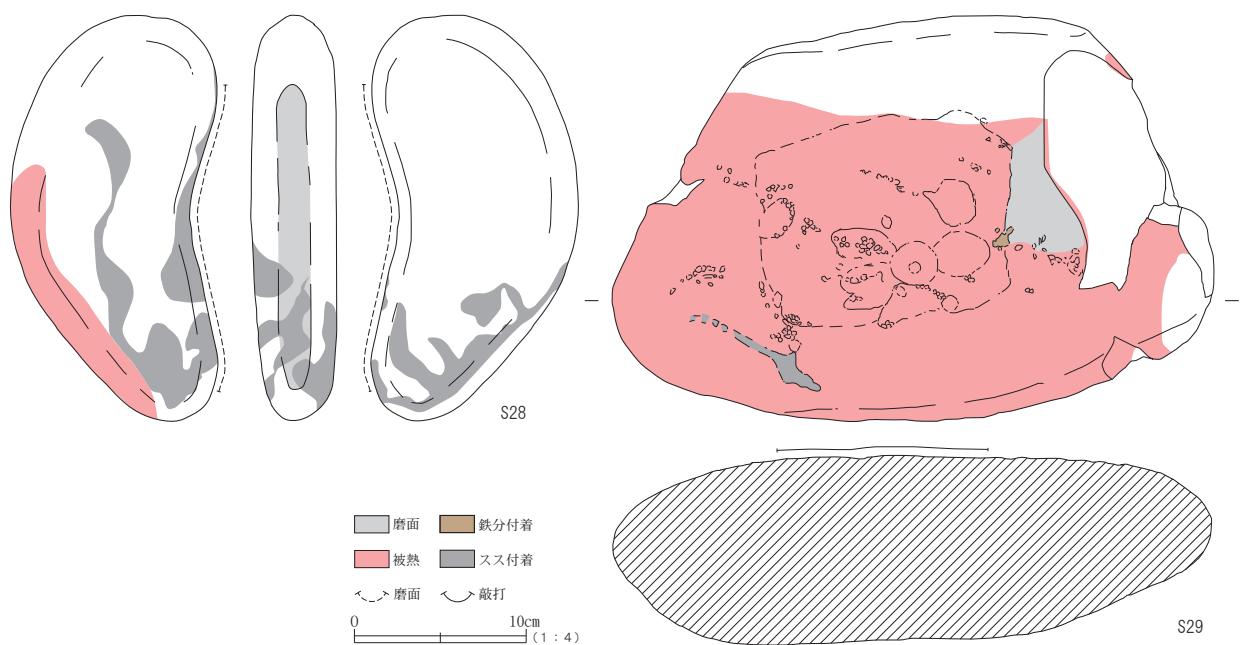


敲打
0 10cm
(1 : 4)

第100図 5号・9号竪穴建物出土敲石

石器（続き）

No.	出土位置	種類	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
S 14	1号貯蔵穴 埋土	石錐	12.7	8.7	2.6	430	
S 15	5号堅穴建物 埋土	磨製石斧	4.7	1.8	1.9	15	
S 16	25号墳 周溝 埋土	磨製石斧	4.35	4.05	0.9	30	扁平片刃石斧。
S 17	1号堅穴建物 床面	砥石	7.85	3.8	2.5	60	
S 18	2号堅穴建物 床面	砥石	22.0	19.9	3.7	2050	
S 19	3号堅穴建物 床面	砥石	20.6	10.25	5.2	1620	
S 20	6号堅穴建物 床面付近	砥石	5.05	2.0	1.55	30	
S 21	9号堅穴建物 床面	砥石	10.8	11.05	7.8	940	
S 22	9号堅穴建物 床面	砥石	6.3	3.25	3.95	100	
S 23	5号堅穴建物 埋土	敲石	13.1	6.7	4.5	385	
S 24	5号堅穴建物 床面	敲石	8.5	6.3	5.0	456	磨製石斧を転用。
S 25	5号堅穴建物 P 19 底面	敲石	6.9	7.05	3.0	275	磨製石斧を転用。
S 26	9号堅穴建物 床面	敲石	18.4	9.0	5.5	1046	
S 27	9号堅穴建物 床面	敲石	14.6	4.6	3.3	350	
S 28	1号堅穴建物 床面	台石	23.4	10.5	4.9	1750	
S 29	1号堅穴建物 床面	台石	23.5	34.8	10.8	10450	鉄床石の可能性あり。



第101図 1号堅穴建物出土台石

IV 鑑定

1 中尾遺跡第3次調査に伴う自然科学分析

渡辺 正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）

はじめに

中尾遺跡は鳥取県中央部、倉吉市大谷字中尾に位置する旧石器時代～古代にかけての複合遺跡である。3次にわたる発掘調査により、縄文時代の落し穴、弥生時代の竪穴建物、掘立柱建物、貯蔵穴、古墳時代の竪穴建物、古墳などが確認されている。

本報は、文化財調査コンサルタント株式会社が中尾遺跡第3次発掘調査に伴い検出された1号竪穴建物の時期、建築部材の用材、1号竪穴建物より出土した種実の種類、25号墳2号・3号主体部に用いられた赤色顔料の種類を明らかにする目的で、倉吉市より委託を受け実施・報告した¹⁴C年代測定(AMS年代測定)、樹種同定、種実同定、顔料分析(EDS分析)についての報告書を再編したものである。

分析試料について

倉吉市教育委員会によって採取、保管されていた試料から、第11表に示す延べ18試料の提供を受けた(放射性炭素年代測定：¹⁴C年代測定試料は、樹種同定試料を兼ねる。)。

第102図(遺構配置図)に分析試料が採取された1号竪穴建物、25号墳の位置を、第103図(1号竪穴建物平面図)に、分析(測定)試料の採取位置を示した。また、第102・103図とも、倉吉市教育委員会より提供を受けた原図をもとに作成した。

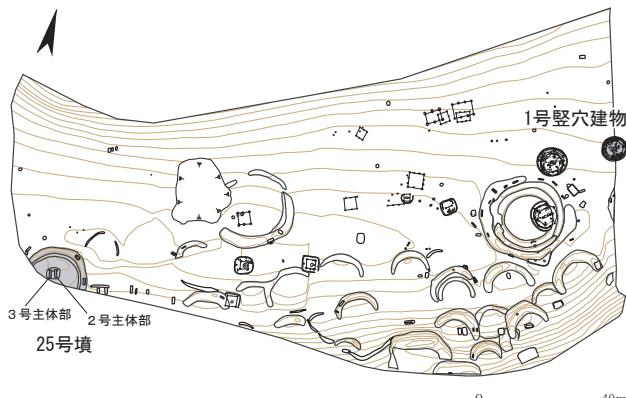
分析方法及び分析結果

(1) 樹種同定

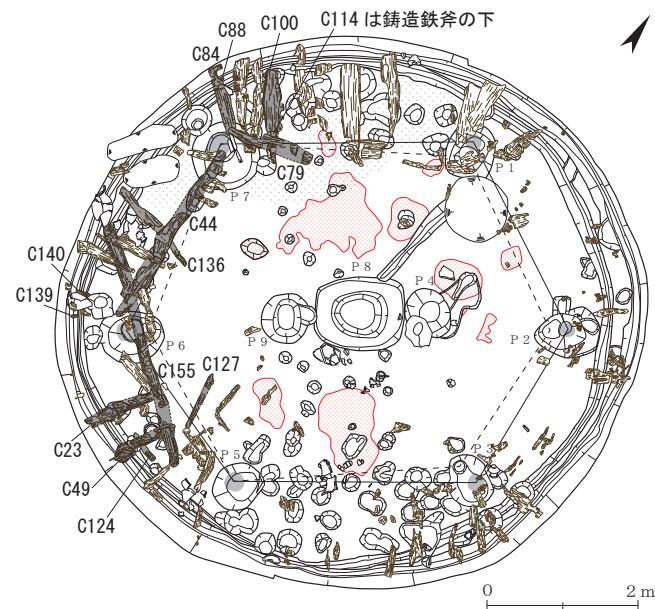
1) 樹種同定方法

渡辺(2020)に従って観察資料の調整を行い、走査型電子顕微鏡下で観察・同定を行った。

また、同定した分類群ごとに最も特徴的な試料について、顕微鏡写真撮影を行うとともに、島地ほか(1985)の用語に基本的に従い、記載を行った。



第102図 遺構配置図



第103図 1号竪穴建物平面図(試料採取地点)

2) 樹種同定結果

樹種同定結果を第1表に示す。以下に、記載を行うとともに、代表的な試料（下線）の電子顕微鏡写真を第104・105図（樹種写真図版1・2）に示す。

①コナラ属・コナラ亜属・コナラ節 *Quercus (sect. Prinus) sp.*

試料No. : C23

記載：大きい円形ないし楕円形の道管が単独で1列に配列する環孔材である。孔圈外では非常に小さい道管が、単独で放射状に配列する。小道管は薄壁で、やや角ばっている。道管にはチロースがよく発達し、道管せん孔は単せん孔である。また、孔圈道管の周りには周囲仮道管が存在している。放射組織は同性ですべて平伏細胞からなり、多数の極めて低い単列放射組織と極めて幅の広い広放射組織からなる、典型的な複合型である。軸方向柔細胞は1ないし2細胞幅の単接線状柔組織を形成している。以上の組織上の特徴から、コナラ属コナラ亜属コナラ節と同定した。

種と分布：本邦産は3種。モンゴリナラ（北海道～本州（丹波以北））、ミズナラ：モンゴリナラの亜種（北海道～九州、適潤～弱湿性の土壤を好み、緩斜面の中・下部で成長が良い）、コナラ（北海道～九州、山地のやや乾いた場所）、ナラガシワ（本州（北陸及び近畿以西）～九州、山地の谷筋、丘陵地の水辺）

②クリ *Castanea crenata Sieb. et Zucc.*

試料No. : C49

記載：年輪幅は広い。環孔材で大きい円形ないし楕円形の道管が単独で多列（2～5列）に配列する。孔圈外の 小道管は放射状ないし火炎状に配列する。道管せん孔は単せん孔。また、道管内腔にはチロースが認められる。孔圈道管の周りには周囲仮道管が存在する。軸方向柔細胞は1ないし2細胞幅の単接線状柔組織を形成している。放射組織は平伏細胞からなる単列同性型である。以上の組織上の特徴からクリと同定した。

種と分布：本邦産は1属1種。北海道（南西部）、本州、四国、九州

第11表 樹種同定結果

試料No.	遺構名	取上No.	備考	同時出土遺物の時期	樹種同定結果
C23	1号竪穴建物	5	垂木・板	弥生時代中期後葉	コナラ亜属
C44	1号竪穴建物	29	梁・丸太	弥生時代中期後葉	ケヤキ
C49	1号竪穴建物	4	垂木・丸太	弥生時代中期後葉	クリ
C79	1号竪穴建物	44	梁・丸太	弥生時代中期後葉	ケヤキ
C84	1号竪穴建物	11	垂木・板	弥生時代中期後葉	ケヤキ
C88	1号竪穴建物	45	木舞？・丸太	弥生時代中期後葉	ケヤキ
C100	1号竪穴建物	14	垂木・板	弥生時代中期後葉	ケヤキ
C114	1号竪穴建物		鋳造鉄斧下	弥生時代中期後葉	ケヤキ
C124	1号竪穴建物	54	母屋・角	弥生時代中期後葉	ケヤキ
C127	1号竪穴建物	56	母屋？・角	弥生時代中期後葉	サクランボ属
C136	1号竪穴建物	9	垂木・板	弥生時代中期後葉	サンショウ属
C139	1号竪穴建物	64	叔首？・丸太	弥生時代中期後葉	シノキ属
C140	1号竪穴建物	65	叔首？・丸太	弥生時代中期後葉	シノキ属
C155	1号竪穴建物	70	梁・丸太	弥生時代中期後葉	ケヤキ

③シイノキ属 *Castanopsis* sp.

(スダジイ類似 cf. *Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii* (Makino) Nakai)

試料No. : C139、C140

記載：年輪幅は広い。環孔性の放射孔材である。孔圈の道管は疎で、大きい楕円形の道管が単独で放射方向に点在し、接線方向の配列は明らかに断絶している。孔圈外の道管は急激に小さくなり、火炎状ないし放射状に配列する。道管せん孔は单せん孔で道管内腔にはチロースが認められる。孔圈道管の周りには周囲仮道管が存在する。軸方向柔細胞は多く、散在状ないし单接線状に分布する。放射組織は平伏細胞からなる単列同性である。道管放射組織壁孔は典型的な柵状を示す。以上の組織上の特徴からシイノキ属と同定した。また広放射組織が認められないことから、スダジイの可能性が指摘できる。

種と分布：本邦産は1属1種。スダジイはツブラジイの亜種。本州（関東以西）、四国、九州

④ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino

試料No. : C44、C79、C84、C88、C100、C114、C124、C155

記載：環孔材で、孔圈部では大きくほぼ円形の道管が単独でおおむね1列に配列する。孔圈外には小道管が多数房状に集合し、接線状～斜線状に配列する。道管せん孔は单せん孔で、小道管にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性で、5～6細胞幅の紡錘型放射組織が目立つ。また、上下の縁辺に結晶細胞が存在するものもある。以上の組織上の特徴からケヤキと同定した。

種と分布：本邦産は1属1種。ケヤキ（本州～九州（渓谷沿、水分条件の良い平野））

⑤サクラ属 *Prunus* sp.

試料No. : C127

記載：小さい道管が、単独ないし2～3個放射方向に複合して年輪内に散在状に非常に多く分布する散孔材である。道管せん孔は单せん孔、道管の側壁は交互状である。放射組織は同性で、1～4細胞幅、高さ1mm程度まで非常に低い。軸方向柔組織は目立たない。以上の組織上の特徴から、サクラ属と同定した。

種と分布：本邦産は1種。本州（西南部）～九州、沖縄

⑥サンショウ属 *Zanthoxylum* sp.

試料No. : C136

記載：小さい道管が、単独ないし2～3個放射方向に複合して年輪内に散在状に非常に多く分布する散孔材である。道管せん孔は单せん孔、道管の側壁は交互状で、個々が繋がる傾向にある。放射組織は同性で、1～4細胞幅、高さ1mm程度まで非常に低い。軸方向柔組織は目立たない。以上の組織上の特徴から、サンショウ属と同定した。

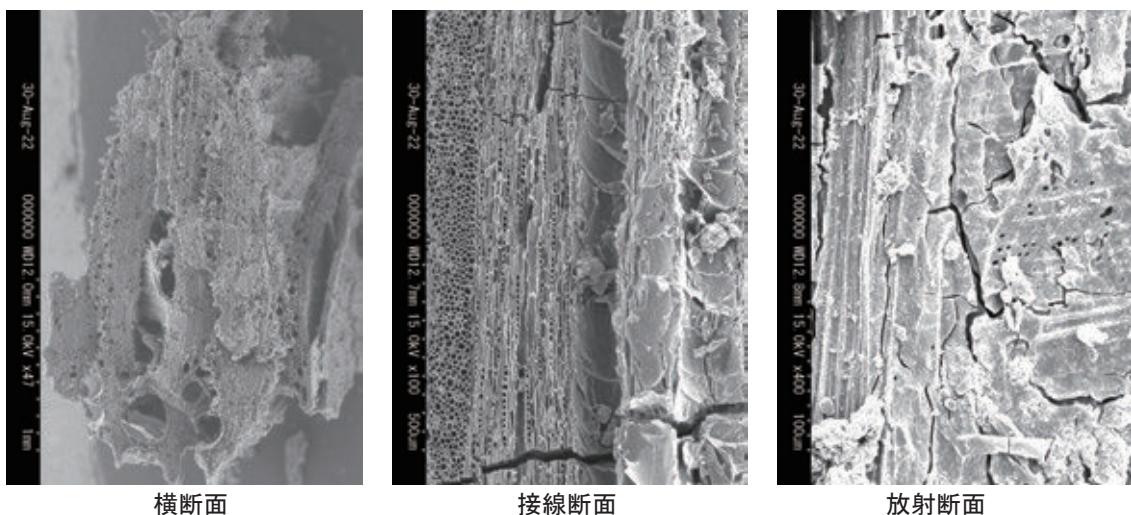
種と分布：本邦産は主に5種。サンショウ（北海道～九州（丘陵、山地））、イヌサンショウ（本州～九州（原野、河原、林縁））、カラスサンショウ（本州～九州、沖縄（河原、山地、崩壊・伐採地））

（2）種実同定

1) 種実処理方法

個別に取り出し乾燥状態の試料を提供いただいた。表面に土が付着し、表面の観察ができなかったことから、

コナラ属・コナラ亜属・コナラ節 *Quercus* (sect. *Prinus*) sp. : C23

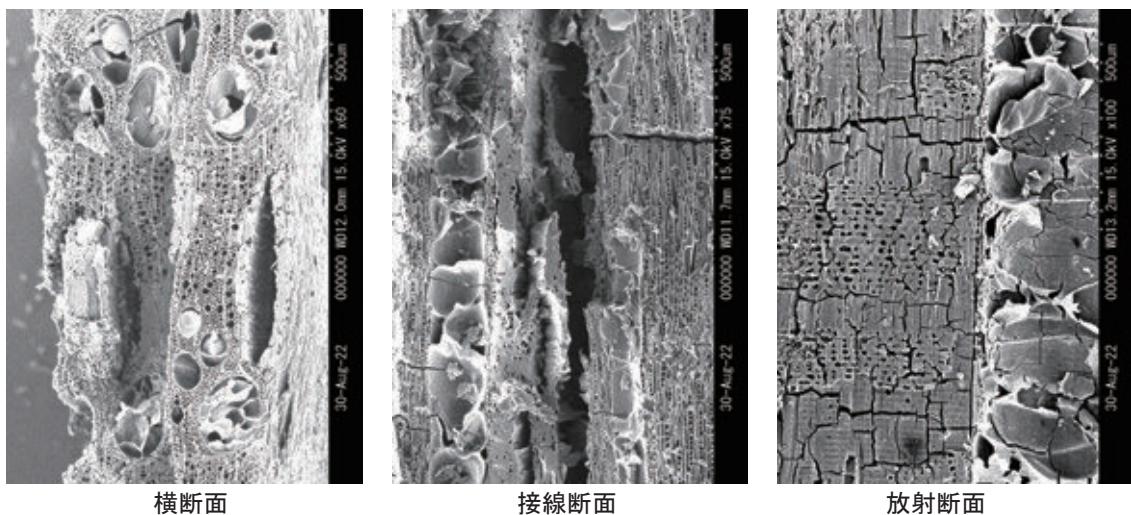


横断面

接線断面

放射断面

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. : C49

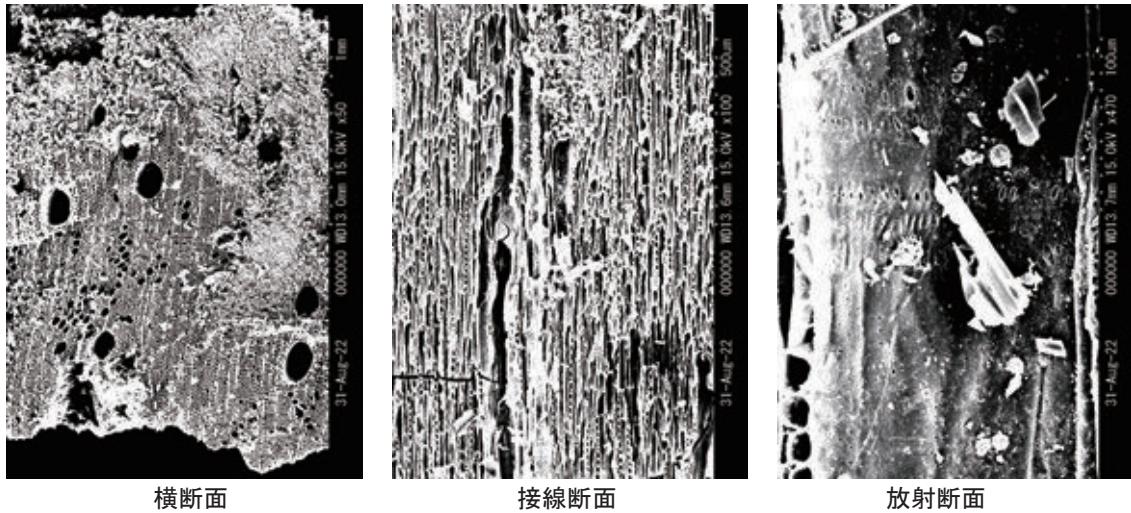


横断面

接線断面

放射断面

シイノキ属 *Castanopsis* sp. : C139



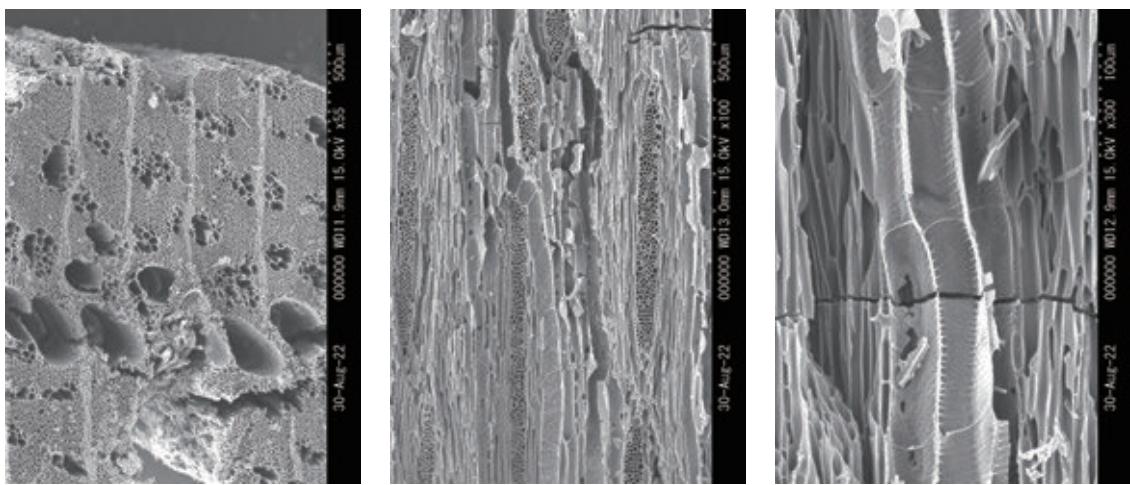
横断面

接線断面

放射断面

第 104 図 樹種写真図版 1

ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino : C44

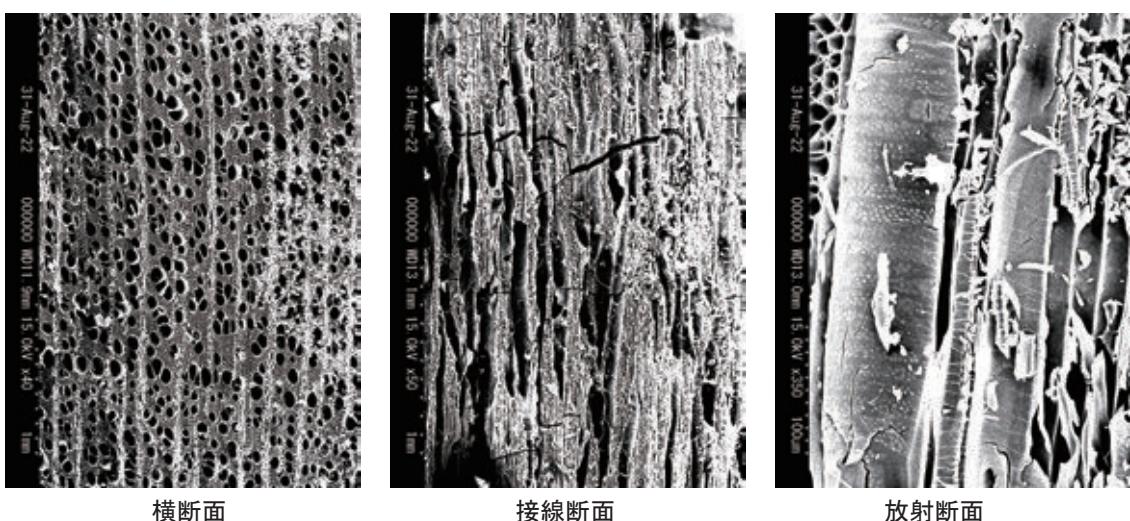


横断面

接線断面

放射断面

サクラ属 *Prunus* sp. : C127

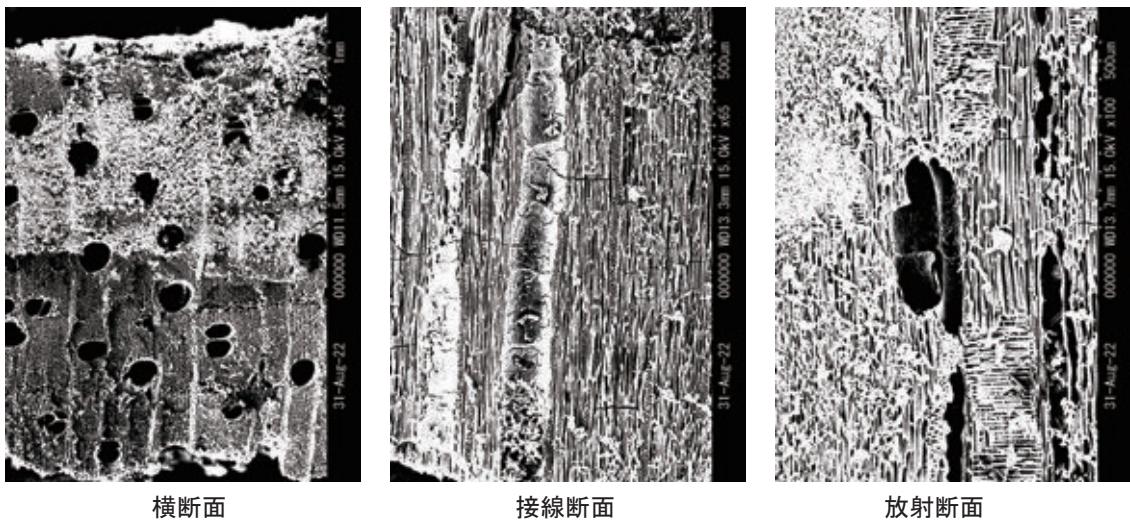


横断面

接線断面

放射断面

サンショウウ属 *Zanthoxylum* sp. : C136



横断面

接線断面

放射断面

第 105 図 樹種写真図版 2

第12表 種実同定結果

試料No.	遺構名	取上No.	備考	同時出土遺物の時期	種実同定結果
C92	1号竪穴建物	炭化種子	取上No.10(垂木)下	弥生時代中期後葉	モモ(核:食痕あり)
C167	1号竪穴建物	炭化種子	北区掘り下げ中		モモ(核:小片5個)

水漬けにして超音波洗浄を行った。洗浄後、肉眼及び実体顕微鏡にて、現生標本及び図鑑類との対比により同定を行い、試料ごとに、分類群別、部位別に計数し、50%アルコールによる液浸標本とした。また、同定・計数結果を表形式にまとめた。



2) 種実同定結果

種実同定結果を第12表に示す。以下に、記載を行うとともに、代表的な試料の写真を第106図(種実写真図版)に示す。

①モモ(核:食痕あり) *Amygdalus persica* L.

記載: やや扁平な広楕円形。頂部はとがり、基部中央に湾入した臍がある。1本の明瞭な縫合線が発達し、背面正中線上に細い縦隆条、腹面正中線には浅い縦溝とその両側に幅の狭い帶状部がある。また、側面に深い溝がある。食痕が認められた。

②モモ(核:破片) *Amygdalus persica* L.

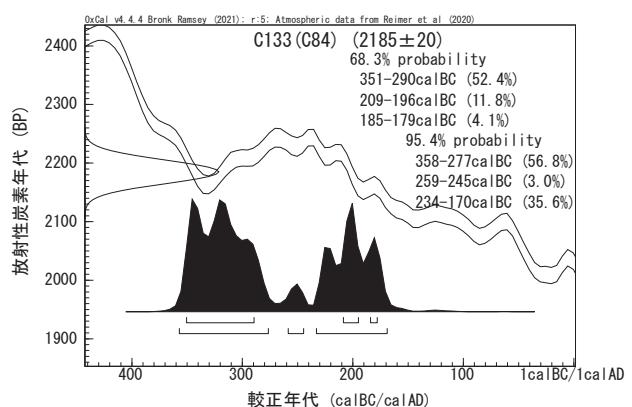
記載: 縫合線に沿って一方の側面1/2が剥離する。側面に深い溝が認められた。

③モモ(核:小片) *Amygdalus persica* L.

記載: 4片は縫合線に沿って割れた上、更に小片となる。1片は頂部を含む上半1/4片。いずれも側面に深い溝が認められた。



第106図 種実写真図版



第107図 曆年較正結果

第13表 AMS 年代測定結果

試 料					前処理	測定番号
試料No.	出土地点 (遺構ほか)	状況	重量(g)	推定時期		
C133 (C84)	1号竪穴建物	炭化材: ケヤキ (垂木・板)	0.9142	—	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塗酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N)	PLD-46633
試料No.	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正無年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	曆年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を曆年代に較正した年代範囲	
					1σ 曆年代範囲	2σ 曆年代範囲
C133 (C84)	-26.43 ± 0.19	2209 ± 20	2185 ± 20	2185 ± 20	351-290 cal BC (52.4%) 209-196 cal BC (11.8%) 185-179 cal BC (4.1%)	358-277 cal BC (56.8%) 259-245 cal BC (3.0%) 234-170 cal BC (35.6%)

(3) AMS 年代測定

1) AMS 年代測定方法

塩酸による酸洗浄の後に水酸化ナトリウムによるアルカリ処理、更に再度酸洗浄を行った。この後、二酸化炭素を生成、精製し、グラファイトに調整した。¹⁴C濃度の測定にはタンデム型イオン加速器を用い、半減期：5568年で年代計算を行った。暦年代較正には OxCal ver. 4.4 (Bronk Ramsey, 2009) を利用し、INTCAL20 (Reymer et al., 2020) を用いた。

2) AMS 年代測定結果

第13表には、試料の詳細、前処理方法、 $\delta^{13}\text{C}$ 値と4種類の測定年代を示している。第107図にはINTCAL20 (Reymer et al., 2020) を用いた暦年較正結果を示した。また、確率分布と σ 、 2σ の構成範囲を示している。

(4) 顔料分析

1) 顔料分析 (μ EDS：微小部蛍光X線分析) 法

赤色顔料の基となる元素を特定するために微小部蛍光X線分析を行った。分析仕様は、下記の通りである。

分析装置：微小部蛍光X線分析装置 (M4 Tornade (ブルカージャパン社))

分析条件：X線源：Rh 対陰極 管電圧：50kV 管電流： $200\ \mu\text{A}$

測定時間：120s Al 12.5 フィルター使用 照射X線径 $\phi\ 25\ \mu\text{m}$ 減圧雰囲気

定量方法：FP (ファンダメンタルパラメーター) 法

2) 顔料分析 (μ EDS：微小部蛍光X線分析) 結果

分析結果を第14表及び、第108・109図に示す。両試料ともFe(鉄)が高濃度で検出され、Pb(鉛)は検出されなかった。一方、R2956(2号主体部)ではHg(水銀)が僅かに検出されたが、微量であることからバックグラウンドを拾った可能性が高いと考えた。したがって、両試料とも用いられた赤色顔料はベンガラであったと考えられる。

用材について

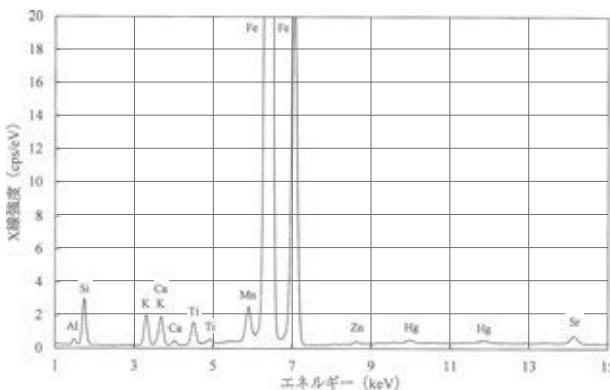
伊藤・山田 (2012) によれば、建築部材の樹種同定は全国で、53678試料を対象に行われ、柱がその1/5を占めている。続いて「礎盤・根がらみ」、「垂木」と続くが、いずれも5%未満である。一方、建築部材全体を樹種で分けるとクリの使用頻度が多く(17%)、クヌギ節(11%)、コナラ節(11%)、トネリコ属(7%)、スギ(5%)、ヒノキ(2.1%)と続く。

倉吉市内では弥生時代(～古墳時代)の226試料を対象に樹種同定が行われており、33分類群(「広葉樹」、「針葉樹」との分類を除く)が報告されている(内部資料：～2012の鳥取県下報告書からの集成。中尾遺跡第2次

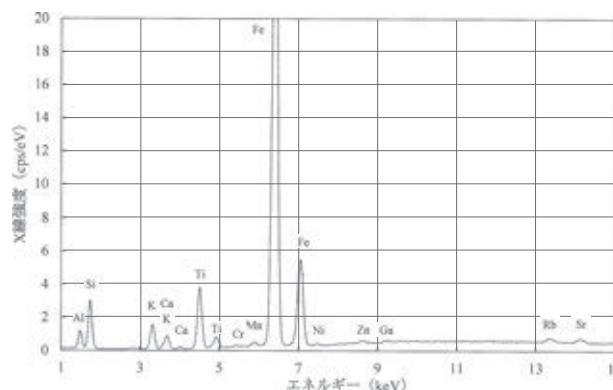
第14表 顔料分析結果

試料No.	R2956	R1861
遺構名	25号墳 2号主体部	25号墳 3号主体部
取上No.	赤色顔料	赤色顔料
備 考	石棺内面 に塗布	石棺内面 に塗布
出土遺物 の時期	古墳時代	古墳時代
Al	8.80	27.25
Si	36.00	55.64
K	2.90	3.58
Ca	1.83	1.20
Ti	0.71	2.66
Cr	-	0.03
Mn	0.66	0.06
Fe	48.60	9.43
Ni	-	0.01
Cu	0.01	-
Zn	0.04	0.03
Ga	-	0.02
Rb	-	0.04
Sr	0.22	0.06
Hg	0.17	-

単位%



第108図 微小部蛍光X線による定性分析
(スペクトル) : R2956



第109図 微小部蛍光X線による定性分析
(スペクトル) : R1861

発掘調査は含まず。)。同定数の多い分類群は、シイノキ属 80 試料 (36%)、クリ 24 試料 (10%)、アカガシ亜属 16 試料 (7%)、アサダ 16 試料 (7%)、クワ属 12 試料 (5%)、コナラ節 11 試料 (5%) と続き、シイノキ属の検出が圧倒的に多かった (ただし、59 試料は下張坪遺跡の 8 号住居で検出されている (パリノ・サーヴェイ (株), 1997)。)。また、ウツギ属、エノキ属、カヤ、クスノキ科、クマシデ属、サカキ、シャシャンボ、トチノキ、トネリコ属、ニガキ、ハイノキ属、マタタビ属、ミズキ属の 13 分類群は、1 試料の検出のみであった。

中尾遺跡での弥生時代中期～後期の建築部材に絞り込むと、第1・2次調査で 64 試料の樹種同定が行われ、16 分類群が報告されている。樹種別にはクリ、クワ属が 17% と多く、コナラ節 14%、シイノキ属 9%、ヒノキ属 8% と続いている。さらに、今回対象とした 1 号竪穴建物東部の建築部材に絞ると、10 試料の樹種同定によって 6 分類群が報告されている。ここではコナラ節 3 試料、クワ属 3 試料、スギ、アカガシ亜属、サクラ属、クスノキ科各 1 試料が報告されている。一方今回の分析では 14 試料から 6 分類群が同定され、ケヤキ 7 試料、シイノキ属 2 試料、コナラ亜属、クリ、サクラ属、サンショウ属各 1 試料が検出された。

以上の結果から、倉吉市域において検出数の多いシイノキ属やクリなどには、建築部材に適しているとして選択的に用いられた可能性が指摘できる。一方で遺跡 (あるいは住居) ごとに樹種の偏りが認められていることも事実である。したがって、近辺に生育していた樹木に対して、用途によって太さと長さの選択を加えた可能性はあるものの、樹種としての選択を行っていなかったように考えられる。

従来の建築部材試料には部材名 (用途) の記載がないことから、詳細な比較検討ができない状態にある。今後、部材名や焼失前の推定される大きさなどが明らかになれば、異なる見解が得られる可能性もある。

年代測定値について

得られた年代値は 2185 ± 20 yrBP (358 ~ 170 cal BC : 2σ) : 弥生時代中期前半～中期中葉であった。一方、第2次調査では 1 号竪穴建物 P 3 から検出された炭化材 (サクラ材) から、 2125 ± 20 yrBP (204 ~ 59 cal BC : 2σ) : 弥生時代中期中葉～中期後葉の年代値が得られていた (土器形式の年代観について、藤尾 (2005) の九州北部の年代観に従った)。これらの年代値は 2σ の範囲で 34 年間 (弥生時代中期前半) の重なりを持ち、誤差範囲で一致する。一方、測定試料は炭化木であり、得られた年代値と伐採年の間に 100 年以上の差も生じる。

遺構 (1 号竪穴建物) からは弥生時代中期後葉 (150 ~ 1 cal BC 頃) の土器が出土しており、これらのことを見ると、測定年代値と矛盾のない結果と言える。

まとめ

中尾遺跡第3次発掘調査に伴い各種分析を行った結果、以下の事柄が明らかになった。

- 1) 1号竪穴建物内から検出された建物部材と考えられる試料を対象とした樹種同定の結果、従来のケヤキが最も多く、コナラ節、シイノキ属、クリ、サクラ属、サンショウ属の樹木が使われていた。ケヤキの用例が全国的にも、県内、市内の用例に比べ極めて多いことから、選別した用材ではなく、調査地近辺に分布していた樹木を利用した可能性が高い。今後分析数を増やし、更に詳細な用途を検討する必要がある。
- 2) 種実同定の結果、モモの核（破片）が同定できた。
- 3) 1号竪穴建物内出土建築部材の年代測定値として、358～170 cal BC (2 σ)：弥生時代中期前半～中期中葉の年代値が得られた。1号竪穴建物内からは弥生時代中期後葉の遺物が出土しており、やや古い年代値であった。一方、炭化材の年代値は伐採年との差が100年以上に及ぶこともあり、矛盾ない結果と言える。
- 4) 25号墳2号・3号主体部に用いられた赤色顔料について、鉄が高率で検出されたことから、ベンガラと推定できた。

引用文献

- 伊東隆夫・山田昌久 (2012) 木の考古学－出土木製品用材データベース－. 449p, 海青社, 滋賀。
- 小林克也 (2017) 中尾遺跡第2次発掘調査出土炭化材の樹種同定. 中尾遺跡第2次発掘調査報告書－倉吉市文化財調査報告書－, 150, 99-101. 倉吉教育委員会.
- 島地 謙・佐伯 浩・原田 浩・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司 (1985) 木材の構造. 276p., 文永堂, 東京.
- パリノ・サーヴェイ (株) (1997) 炭化植物の同定と炭化材のC14年代. 中尾遺跡発掘調査報告書－倉吉市文化財調査報告書－, 69, 130-138. 倉吉市教育委員会.
- パリノ・サーヴェイ (株) (1997) 下張坪遺跡C地区から出土した炭化材の樹種, 下帳坪遺跡発掘調査報告書－倉吉市文化財調査報告書－, 88, 113-118, 写真1-5. 倉吉市教育委員会.
- パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ (2017) 放射性年代測定. 中尾遺跡第2次発掘調査報告書－倉吉市文化財調査報告書－, 150, 95-98. 倉吉教育委員会.
- 藤尾慎一郎 (2005) 時代区分と弥生文化の範囲. 文部科学省・科学研究費補助金学術創成研究 弥生農耕の起源と東アジア NEWS LETTER, 3, 4-7.
- Bronk Ramsey, C. (2009). Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.
- Reimer, P., Austin, W., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R., Friedrich, M., Grootes, P., Guilderson, T., Hajdas, I., Heaton, T., Hogg, A., Hughen, K., Kromer, B., Manning, S., Muscheler, R., Palmer, J., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R., Richards, D., Scott, E., Southon, J., Turney, C., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A., & Talamo, S. (2020). The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). Radiocarbon, 62.
- 渡辺正巳 (2020) 自然科学分析. 城山公園整備事業に伴う県史跡 浜田城跡発掘調査報告書, 90-94., 浜田市教育委員会, 島根.

2 中尾遺跡第3次調査出土の古墳人骨

岡崎 健治（鳥取大学 医学部 解剖学講座）

はじめに

中尾遺跡から東北東に25kmほど向かった先に弥生時代の人骨および木製品等の遺物が大量に出土している青谷上寺地遺跡がある。青谷上寺地遺跡の弥生時代後期人骨を用いたゲノム解析が国立科学博物館によって進められており、彼らの遺伝的背景は、現代日本人にみられる多様性の範疇に収まるものの、個体同士の違いは大きく充分な混血が進んでいなかった可能性が示唆されている（篠田ほか 2020；神澤ほか 2021）。したがって、日本史の画期である弥生時代から古墳時代にかけて山陰地方にいかに集団形成が為されたのかを明らかにすることは、日本人の成り立ちを考える上で重要となり、その基盤づくりのためにも当地域から出土する人骨を報告することが求められる。中尾遺跡は倉吉市教育委員会によって断続的に調査されており、2014～2016年度の第2次調査につづき、今回、2019～2021年度に実施された第3次調査においても古墳時代人骨が出土した。これらの古墳時代人骨を精査する機会に恵まれたので、以下に報告する。

人骨所見

25号墳2号主体部（箱式石棺）

石枕周辺の棺底より頭蓋冠の破片が多数出土している。これらの中で最も大きいものとして、石枕の北側から出土した約3×5cmの骨片（B1・第110図）がある。表面の腐食が外板と内板ともに著しく詳細な部位同定は難しかったものの、頭蓋冠にみられる板間層の構造が確認できた。

25号墳3号主体部（箱式石棺）

2号主体部と同様に、石枕周辺の棺底より頭蓋冠の破片が多数出土している。最大で約4×6cmの骨片（B1・第111図）が石枕の北側から出土しているものの、やはり腐食が著しく詳細な部位同定は難しかった。また、棺底から歯冠が数点出土しており、大臼歯（B2・第112図、B3・第113図）と犬歯（B4・第114図）が確認された。これらの歯冠は、エナメル質の破損が著しく、詳細な歯種同定と咬耗度の判定は難しかったものの、象牙質の露出は点状から面状まで歯種によって異なった。したがって、被葬者の年齢は、少なくとも成人であり、老年には達していなかったものと考えられる。

おわりに

第3次調査出土人骨は、前回の第2次調査のものよりもさらに保存状態は不良であった（岡崎 2017）。したがって、得られた形態学的情報は非常に限られており何らかの形で考察を行うことは難しかったものの、第2次調査と同様に棺内における部位の重複は見受けられなかった。古墳時代の埋葬において一般的にみられる追葬や複数埋葬の痕跡が本遺跡にてこれまで認められていない要因として、1) 人骨の保存不良、2) 追葬時の行為による、3) 本遺跡では単体一次埋葬が主流であった可能性などが挙げられる。今後もこの点に留意して当地域から出土した古墳人骨の鑑定を行いたい。

謝辞

倉吉市教育委員会文化財課には、本出土人骨を調査する機会をえていただきました。とりわけ、小田芳弘主任学芸員には、出土人骨と発掘情報の照合の際にお世話になりました。また、本講座の海藤俊行教授には、古人骨整理に必要な作業環境を整備していただきました。記して御礼申し上げます。

引用文献

岡崎健治（2017）中尾遺跡第2次調査出土の古墳時代人骨。倉吉市教育委員会編，中尾遺跡第2次発掘調査報告書。倉吉，pp. 88-94.

神澤秀明・角田恒雄・安達登・篠田謙一（2021）鳥取県鳥取市青谷上寺地遺跡出土弥生後期人骨の核DNA分析。国立歴史民俗博物館研究報告，228：295-307.

篠田謙一・神澤秀明・角田恒雄・安達登（2020）鳥取県鳥取市青谷上寺地遺跡出土弥生後期人骨のDNA分析。国立歴史民俗博物館研究報告，219：163-177.



第110図 25号墳2号主体部から出土した頭蓋冠の破片（B1）



第112図 25号墳3号主体部から出土した
大臼歯の歯冠（B2）



第113図 25号墳3号主体部から出土した
上顎左大臼歯の歯冠（B3）



第111図 25号墳3号主体部から出土した頭蓋冠の破片（B1）



第114図 25号墳3号主体部から出土した
犬歯の歯冠（B4）

3 中尾遺跡第3次調査 25号墳2号・3号主体部石枕を対象としたPCN分析

渡辺 正巳（島根大学エスチュアリー研究センター・文化財調査コンサルタント株式会社）

はじめに

中尾遺跡は鳥取県中部の倉吉市大谷字中尾地内に位置し、一級河川天神川水系国府川の左岸丘陵上に立地する。2019～2022年に行われた第3次調査では、丘陵尾根上～南斜面において25基の古墳が確認され、うち16基の古墳で埋葬施設が調査されている。

埋葬施設には、遺体由来の諸元素が残存している可能性が高い。土壤を構成する主要元素と人間（動物）を構成する主要元素を比較した場合、遺体の影響を示しやすい元素としてP（リン）が挙げられる。また、人間（動物）と植物を分けるためにTOC（有機炭素濃度）/TN（全窒素濃度）値が有効と考えられる（渡辺、2012）。

本報は、埋葬されていた遺体の痕跡を求めるため、中尾遺跡第3次調査25号墳2号・3号主体部の石枕表面のTP（全リン濃度）、TOC、TNの濃度分析（PCN分析）についてまとめたものである。

試料について

25号墳は調査区南西端に位置する直径16.2mの円墳である。墳丘上で3基の主体部が検出され、1号主体部（木棺墓）と直交するように2号・3号主体部（いずれも箱式石棺墓）が東西に並び、それぞれの石棺内部、南小口側には2個の安山岩板石からなる石枕が置かれていた。さらに、石棺内にはそれぞれ5cm×5cm程度の骨片が残り、骨片の周囲が白くなっていたほか、石枕の表面も白色を呈していた。また、それぞれの石棺の石蓋は、白色粘土で目張りがされていた。

なお、分析対象の石枕（東西に配置された2個の板石）のうち、東側の板石を石枕①、西側の板石を石枕②と呼称する。

分析方法

以下の手法で、TP及びTOC、TNを測定した。

1) TP分析方法

以下の手順で堆積物中のTPを測定した。

- ①試料を60°Cで1日乾燥後、メノウ乳鉢で200メッシュ程度に粉碎する。
- ②フッ化水素酸分解法（土壤環境分析法編集委員会編、1997）による試料調整。
- ③モリブデン酸による定量（日本薬学会編、2010）に従い、紫外可視分光光度計（島津社製UV-1600PC）による濃度測定。

2) TOC・TN分析方法

以下の手順で堆積物中のTOC、TNを測定した。

- ①試料を60°Cで1日乾燥後、メノウ乳鉢で200メッシュ程度に粉碎する。
- ②約15mgをひょう量し、銀コンテナに入れる。貝殻起源等の無機炭素を取り除くために、1M-HCl添加後100°Cで加熱乾燥する。その後、全体を錫コンテナで包む。

第 15 表 分析結果一覧

遺構	試料No.	TP (mg/Kg)	TN (%)	TC (%)	TOC (%)	TS (%)	TIC (%)	CaCO ₃ (%)	TOC/TN	TOC/TS
25号墳	2号主体部(東) 石枕①	455.0	0.025	5.299	0.565	0.086	4.734	39.453	22.882	6.573
	石枕②	792.2	0.013	3.076	0.385	0.044	2.691	22.424	29.090	8.704
	3号主体部(西) 石枕①	670.5	0.012	3.184	0.386	0.073	2.798	23.318	31.265	5.289
		706.5	0.026	4.434	0.490	0.057	3.944	32.868	18.544	8.660

TIC、CaCO₃は計算値、TS、TOC/TSは参考値

③元素分析機 EA-1108 により測定する。標準試料には BBOT を用いる。

④乾燥試料に対する重量百分率で TOC と TN を測定し、TOC/TN 値を算出する。

今回、1M-HCl 添加時に激しい発泡が認められ、分析試料に多量の炭酸塩が含まれていることが予想された。骨の主成分であるリン酸カルシウム:Ca₃(PO₄)₂ も HCl に反応するが、C が含まれないことから TC への影響はない。一方、骨には不純物として若干の CaCO₃ が含まれるが、CO₃ としては P の 15%程度である。今回検出された TP が 0.1% (1000mg/Kg) に満たないことから、骨由来の C:CO₃ は TC の実測値に対し無視できる程度に低い。このことから、別途 HCl を添加しない試料の TC (全炭素濃度) を測定し、TIC (無機炭素濃度)、CaCO₃ 濃度を算出した。

分析結果

分析結果を第 115 図、第 15 表に示す。第 115 図では、各地点の平面図に重ね合わせて、TP 分布、TOC/TN 分布をバブルグラフで示した。第 15 表には、TP、TN、TC、TOC の実測値に加え、TIC、CaCO₃、TOC/TN の算出値を示した。また、元素分析機 EA-1108 では、同時に TS (全イオウ濃度) が測定できることから、参考値として TS、TOC/TS も示している。以下に、主な分析値、算出値について概要を記す。

1) TP

455.0mg/Kg (2号主体部石枕①) ~ 792.2mg/Kg (2号主体部石枕②) の値を示した。

2) TOC/TN

18.544 ~ 31.265 の値を示した。

3) TIC (CaCO₃ 濃度)

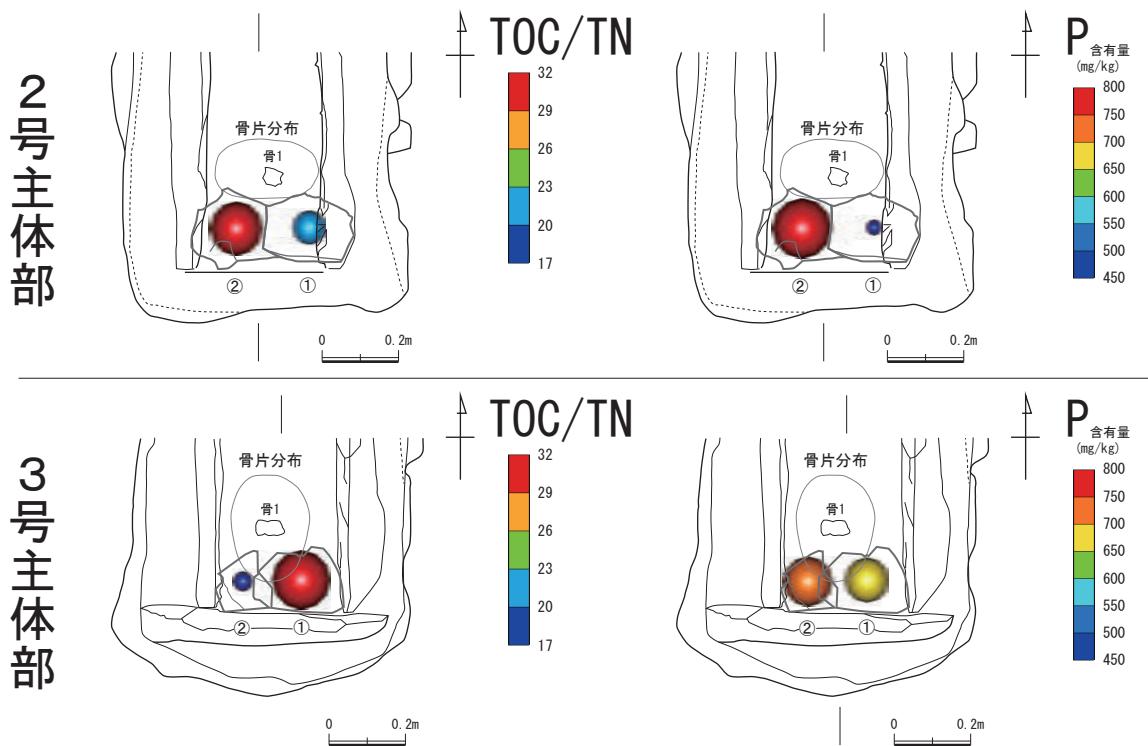
全試料で TC のほぼ 90%が TIC で、CaCO₃ 換算値で 22 ~ 39% となる。

TP・TOC/TN について

生物を構成する元素の割合は、生物それぞれに一定の傾向を持っている (渡辺, 2012)。石枕石表面には、遺体由来の有機物が付着していると考えられ、TP は高濃度、TOC/TN は 10 未満の値が得られることが期待された。

1) TP

石枕から得られる TP 値の指標として、渡辺・瀬戸 (2023) による出雲市山地古墳出土石枕 (今回同様に 2 個の石の組み合わせ) : 2970.6mg/Kg、3321.1mg/Kg、出雲市常楽寺柿木田 1 号墳第 1 主体部の礫状石枕 : 457.2mg/Kg の値がある。山地古墳出土石枕は、今回同様に石蓋付きの石棺内部に有り、石枕は埋土に覆われていなかった。一方、常楽寺柿木田 1 号墳第 1 主体部出土礫状石枕は埋土に覆われており、埋土からは 180mg/Kg 程度の値が得られていた。



第115図 TP、TOC/TNの分布

上段：2号主体部 下段：3号主体部

したがって、今回の分析結果は、前述の山地古墳出土石枕に比べ低いものの、常楽寺柿木田1号墳第1主体部出土礫状石枕と同程度かやや高い値を示したことになる。ただし、常楽寺柿木田1号墳第1主体部出土礫状石枕とは出土状況が大きく異なり、TPの相対的な高低の判断を行うための石棺上位や周囲の埋土を採取・分析ができなかった。このため得られたTPの絶対値は高いと考えられるが比較対象がなく、遺体痕跡を示唆するものか否かの判断はできなかった。

2) TOC/TN

人間指標の10を大きく超える値を示した。同様の傾向は前述の山地古墳や常楽寺柿木田1号墳第1主体部出土石枕でも認められ、出雲市神門横穴墓群第10支群J-5号横穴墓での一方の壁面に密集した根とTOC/TN分布の関係（渡辺、2020）から、未確認ながら石枕に密着した根に起因すると推定されている（渡辺・瀬戸、2023）。このように今回の測定値からは、人間（動物）を示唆するようなTOC/TNが得られなかった。

CaCO₃の含有と漆喰の利用

前述のように、分析試料のHCl処理時に発泡が認められた。TCとTOCに著しい差が認められたことから、CaCO₃とHClの反応によってCO₂が発生したものと推定できた。分析試料は石枕に付着した（骨由来と考えられる）白色物質と考えられていたが、今回の結果を踏まえると、石棺と石蓋の目止めに使われていた白色粘土が流れ落ちた可能性が高い。CaCO₃を主成分とする白色の物質（粘土）の代表的なものに漆喰があることから、この白色粘土は漆喰であったと考えられる。

漆喰付着による TP、TOC/TN 濃度への影響

漆喰の原料となる海藻や藁に含まれるリンの割合は、人体に含まれるリンの割合の 1/2 以下である（渡辺, 2012）。人体頭部の重量と付着していた漆喰の量から考えて、検出されたリンの内、漆喰の原料である海藻（フノリ）や藁、麻すさ由来のリンは極微量であったと考えられる。むしろ漆喰が付着したことによって、石枕に本来付着していた遺体由来のリンが希釈され、TP が低くなった可能性が指摘できる。

また、漆喰の原料である海藻（フノリ）や藁、麻すさなど植物の TOC は人体の 2 倍程度の値を示し、TOC/TN も人体の 2 倍程度の値を示す（渡辺, 2012）。漆喰に含まれるこれらの割合は不明であるが、微量でも TOC/TN を高める要因となる。神門横穴墓群第 10 支群 J-5 号横穴墓の例のように、今回も根の影響によるところが一般的であろうが、漆喰が付着していたことも TOC/TN が高かった原因の一つに挙げられる。

謝辞

本研究に当たり、倉吉市教育委員会より分析試料を御提供いただいた。島根大学エスチュアリー研究センター瀬戸浩二博士には CNS 分析を御担当いただいた。TP 分析は島根県産業技術センターに委託した。また、本研究には日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤 C(21K00989) を利用している。以上の諸氏・機関に対し、感謝いたします。

引用文献

- 土壤環境分析法編集委員会編 (1997). 28 全量分析分解方法.B フッ化水素酸分解法. 土壤環境分析法, 171-174.
- 日本薬学会編 (2010) 12) 総リン. (1) モリブデン酸による定量. 衛生試験法・註解. 2010, 947-948.
- 渡辺正巳 (2012) 中村 1 号分の前室石棺内埋土のリン濃度分布. 中村 1 号墳 本文編 (第 1 分冊), 出雲市の文化財報告, 15, 177-182, 出雲市教育委員会, 島根.
- 渡辺正巳 (2021) 検出石棺・石床の遺骸痕跡. 神門横穴墓群 第 10 支群 - 十間川防災安全工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 - 出雲市の文化財報告, 45, 71-78, 出雲市教育委員会, 島根.
- 渡辺正巳・瀬戸浩二 (2023) 常楽寺柿木田 1 号墳の第 1・2 主体部における PCN 分析. 常楽寺柿木田 1 号墳 主体部の内容確認調査, 出雲市の文化財報告, 54, 63-70. 出雲市教育委員会, 島根.

V 特論

1 中尾遺跡 1号堅穴建物の鉄器とその出土状況

村上 恭通（愛媛大学アジア古代産業考古学研究センター）

はじめに

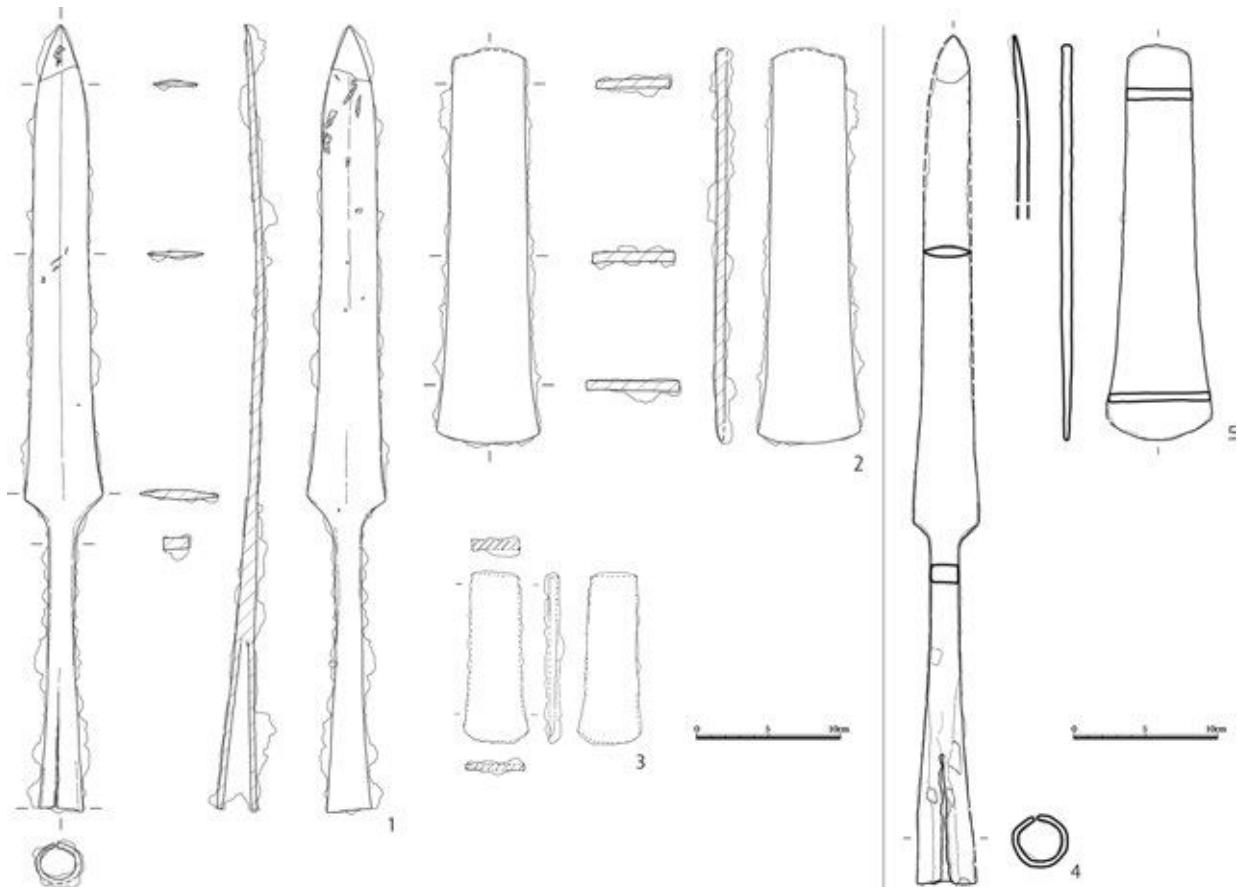
倉吉市中尾遺跡の第3次調査において、1号堅穴建物西半部の床面より3点の鉄器が出土した。本遺構は2014～2016年の第2次調査で東半部が発掘されており、その際も日本列島産と想定される小型の鍛造鑿状鉄器が検出されており〔勢村ほか編2017〕、鉄器出土総点数は4点となる。

3次調査の出土鉄器は、弥生時代の鉄器として初めてとなる特徴・情報をいくつも備えている。完形で出土した3点の鉄器は鍛造の矛、板状斧と鋤造斧であり、いずれも舶載品である。3点もの完形舶載鉄器の住居址1軒からの出土は過去例がない。また焼け落ちた建築材の下から現れたこれら3点の出土位置は約0.3m²の範囲に収まり、その集中度も特異である。さらに原報告の詳述にあるように、矛は切先を、板状斧は基部を床に刺して、立てた状態にあったと復元されている。鉄器を住居の床に刺す、立てるという行為もまた寡聞にして知らない。

ここではまず出土鉄器の由来について論じ、また矛や板状斧の出土状況について可能な限りのアプローチを行ってみたい。

1. 出土鉄器について—鋤造鉄斧を中心に—

1号堅穴建物から出土した鉄器のうち、矛、板状斧（第116図-1、2）については韓国東南地域における原



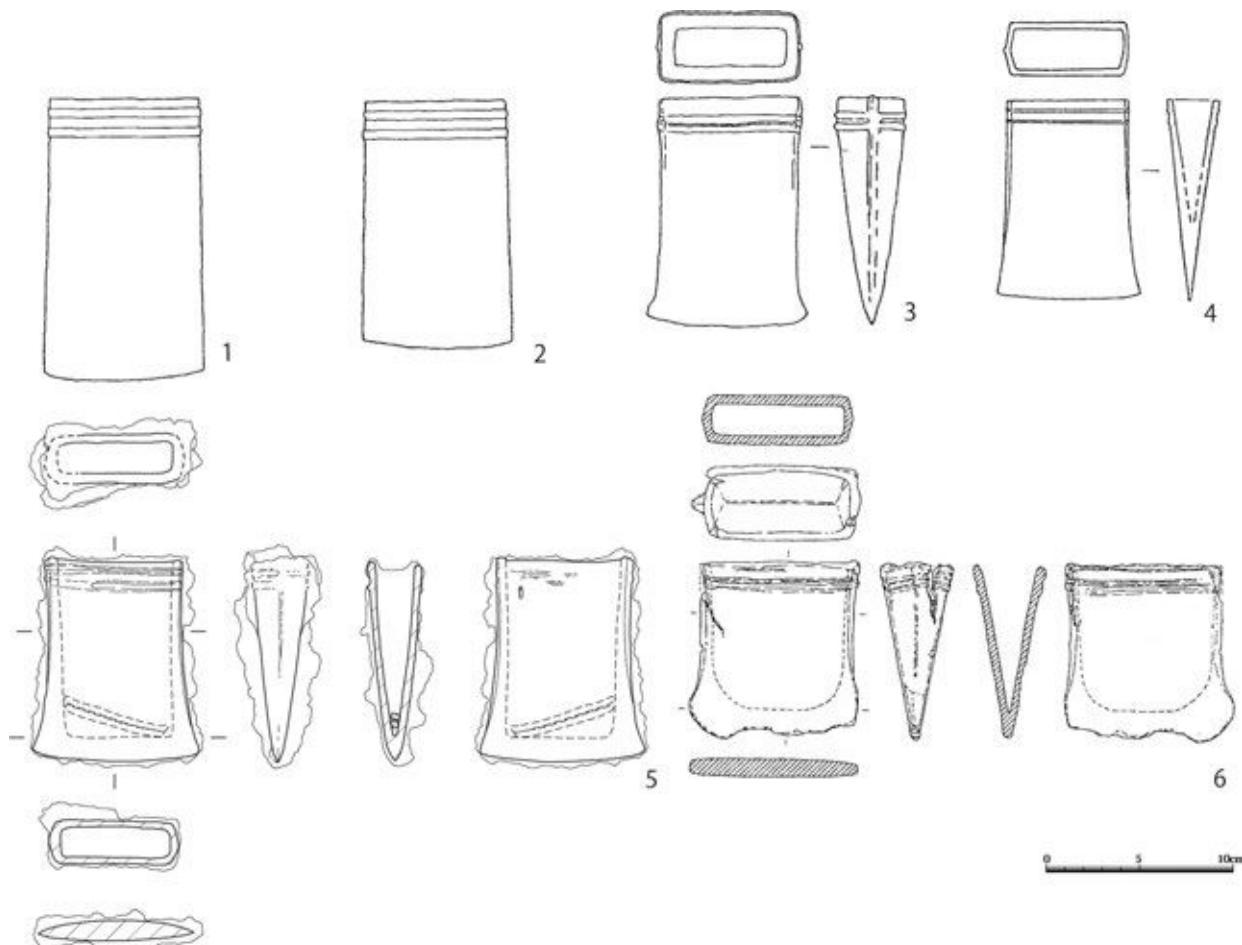
第116図 中尾遺跡と茶戸里遺跡の鉄器

1、2 中尾遺跡第2・3次調査1号堅穴建物 3 中尾遺跡第2次調査2号堅穴建物 4 茶戸里遺跡5号墓 5 茶戸里遺跡

三国時代前期の類例が想起され、舶載品と評価できる。ちなみに第2次調査の2号竪穴建物で出土した全長12.9cm、幅4.5cmの板状鉄斧も厚み、横断面の特徴から舶載品である（第116図-3）。この小型の板状斧は慶尚南道泗川市勒島遺跡出土品にみられるように、大型品による伐採の次工程を担う一般的な工具であった。

一方、鋳造鉄斧は袋端部直下に二条の突帶を有しており、この特徴をもつ斧は中国漢代の各地でみられる。朝鮮半島や日本で発見される二条突帶斧は遼寧省に設置された鉄官で生産された可能性が高く、一部西北朝鮮あたりまでを生産地の範囲として想定してもよかろう。二条突帶斧は戦国時代の東北地域に版図をもった燕国において、戦国時代前期には出現しており、それ以降、長さを減じ、刃幅を広狭変えながら漢代まで、一部はそれ以降にも存続する。その変遷に関する詳論によれば、全長15cm前後の縦長方形を呈するタイプをI式とし、その形状を維持したまま短くなるタイプをII式、そしてさらに短くなって平面形が梯形（台形）のIII式になる〔村上1988〕。各型式の年代には、I式が戦国時代から前漢代初頭、II式が前漢代、そしてIII式が前漢末～後漢初という年代が想定された。しかし各型式の中間的な型式やそれらの年代についてはまだ議論の余地が大きい。

例えば遼寧省旅順市魯家村の埋納遺構（窖藏）から出土した二条突帶斧は、全長14.5cm、袋部幅8cm、刃部幅8.5cmの大型品（5点）と全長13.2cm、袋部幅7.5cm、刃部幅8cmの小型品（3点）とに分けられる（第117図-1、2）〔劉1981〕¹⁾。わずかに刃部幅が広いことから、原報告は平面形を梯形としているもののII式として評価された〔村上1988〕。この鉄斧は精白鏡、日光鏡など鏡10面や漢代半両銭49枚、五銖銭7枚を共伴しており、前漢代中・後期の年代が与えられている。また北京市大葆台漢墓1号墓では全長10.6cm、袋部幅6.4cm、刃部幅7.4cmの二条突帶斧が出土している（第117図-4）〔中国社会科学院考古研究所編1989〕。報告書に掲載された図面に比べると、実物は袋部から刃部に向けてより直線的に広がっている²⁾。魯家村例に比較すると短



第117図　中国・日本の二条突帶鋳造鉄斧各種

1、2　魯家村　3　老河深　4　大葆台漢墓　5　中尾遺跡第2・3次調査1号竪穴建物　6　青谷上寺地遺跡

くはなっているものの、袋部と刃部幅の差は1cmであり、刃部が極端に広がっているという印象は与えない。この鉄斧は一面の突帶直下中央部に「漁」の陽刻をのこし、漁陽郡鉄官産の証となる初例と解説されている。また原報告には「斧面光洁呈暗紅色」とその表面の特徴が述べられているが、実際には滑沢面というよりは粗面であり、焼鈍（脱炭）を受けていることがわかる。部分的に痩せた「漁」の文字や突帶は、焼鈍が度を過ぎ、表面の剥落が深くまで及んだためと判断される。星雲文鏡、四乳四虺鏡、昭明鏡を伴った1号墓の被葬者は、元帝期に廣陽国を治め、紀元前45年に没した劉建と考証されている。二条突帶斧の中でもっとも時代の限定が可能な資料である。一方、周辺の夫余族の埋葬遺跡とされる吉林省榆樹県老河深遺跡より出土した24点の二条突帶斧には、全長12.5cmとやや大葆台漢墓出土品よりも長目ながら、刃部付近のみ急激に広がる例がある（第117図-3）。老河深遺跡では方格規矩鏡の副葬がみられ、後漢代に併行する時期が想定されながら、この二条突帶斧は長さも魯家村例と大葆台漢墓例の中間にあり、その時期を前漢代と想定しても問題ない。ただし、老河深遺跡出土の二条突帶斧は形態、大きさが多様であり、大葆台漢墓例とほぼ同じか、やや小型品も含まれている³⁾。したがって老河深遺跡出土の二条突帶斧は生産時期が前漢代に遡るもののが含まれるもの、副葬は後漢代以後であり、そこに伝世を考える余地がある。

ここで中尾遺跡1号竪穴建物出土品に目を向けると、その大きさは全長11.0cm、袋部幅7.3cm、刃部幅8.9cmを測り、斧身の中程から幅を徐々に広げ、刃が鉢状に広がる。大葆台漢墓例より0.4cm長いが、袋部幅と刃部幅の差がより大きくなっている、刃部の広がりが強調されている。大葆台漢墓例をⅢ式の初現例とするならば、中尾遺跡1号竪穴建物出土品はⅢ式の典型例とすることに問題はなく、中国における生産の時期が前漢末～後漢初に比定することも許容されよう。なおⅢ式の二条突帶斧にはさらに短くなり、全長と幅の差が小さくなる傾向がみられる。その好例が鳥取市青谷上寺地遺跡の県道4区②層出土品である（第117図-6）[湯村編2002]。全長9.4cm、袋部幅8.3cm、刃部幅9.0cmであり、その平面形は正方形の枠にほぼ収まる。中国での生産時期は中尾遺跡例よりも新しくなると考えられ、Ⅲ式の下限を後漢初よりもさらに新しくする必要があろう。

2. 鉄器の出土状況

1軒の竪穴住居址で舶載、完形の矛、板状斧、鑄造斧3点が出土したこと自体未曾有である。相互に近接し、さらに矛が切先を、板状斧が基部を床に突き刺して立てられた姿は住居址における鉄器出土状況の常を逸脱している。硬い面に鉄器を突き刺すという行為は、米子市の弥生墳丘墓である尾高浅山1号墓で認められ、鉄刀の一部が墳丘に突き刺さった状態で発見されている。「表土から刺されていたため後世の木野山神社に関係するもの」[小原編2015、35頁]と説明されている（第118図）。しかし、弥生時代後期の山陰地方であれば鉄刀は存在するので、当時の資料として評価する余地は残っている。ただ、それを認めた場合でも中尾遺跡例は住居での行為



第118図 尾高浅山遺跡1号墓の墳頂面に突き刺さった鉄刀

の痕跡であるため、両者の意味合いは異なる。

板状鉄斧も直立に近い状態で立てられた例を広く求めるならば、韓国慶尚北道慶山市にある陽地里遺跡II-5区の1号木槨墓出土例が挙げられる〔金・朴ほか編2020〕。その時期は原三国時代であり、茶戸里遺跡1号墓よりやや新しいという。ただし斧は、突き刺すのではなく墓坑の壁に立てかけられており、刃部は下を向いている。墓と住居の違いもあり、これも中尾遺跡の板状鉄斧との比較対象としては遠い存在であろう。刃を上に向けた板状鉄斧の異様には、廃絶され、火を受けた住居への立ち入りを拒む意図を読みとることが可能であるが、一方で鉄矛は切先を突き刺しており、その意図が相殺されているようにも思われる。床に突き刺すという行為の契機、そして器物に付与された意義に対する不可知性は、これらが儀礼の痕跡であるという程度の判断しか許さない。ただし、当時、鉄器が比較的豊富であった山陰地方であったとはいえ、きわめて価値の高い舶載品を3点も代償として消費する儀礼となれば、その渴仰の大きさは相当なものであったに違いない。

3. 山陰地方の弥生鉄器文化と中尾遺跡

中尾遺跡1号竪穴建物出土の鉄器は未曾有の発見であるがゆえに、その解釈には限界がある。しかし、鳥取市の青谷上寺地遺跡、米子市の妻木晩田遺跡の中間地を埋める存在となり、山陰地方における豊富な鉄器普及度を物語る遺跡として名を連ねたことは確かである。また、遺跡の約500m南を流れる国府川が約4kmで天神川に合流するという地理的環境は、鉄器の内陸部への供給を考えるうえでも重要である。著名な長瀬高浜遺跡を河口にもつ天神川はその源流を岡山との県境付近に有し、水源から南に山を越えると岡山県の奥津地域にいたる。山間部でありながらここには夏栗遺跡や久田原遺跡といった鉄器生産や舶載鉄器の消費をみせる遺跡がある。この地域における鉄素材や鉄器の入手が天神川を経由したものであることは十分に想定されるであろう。日本海沿岸地域から中国山地への鉄器の波及を考えるうえでも、中尾遺跡は重要な位置を占めている。

尾高浅山遺跡1号墓の写真掲載については下高瑞哉氏、高尾浩司氏に御配慮いただいた。また松井潔氏、鄭宗鎬氏の御教示、御協力を賜った。末筆ながら記名して感謝の意を表します。

註

- 1) 第117図-1、2は原報告の数値に基づいた概念図である。魯家村ではこのほか袋部より刃部幅が狭まる二条突帶斧も出土している。
- 2) 第117図-4および関連記述については、2005年、大葆台前漢墓博物館での調査所見を反映している。
- 3) 老河深遺跡出土二条突帶斧の中には中尾遺跡出土品に近い大きさ、形状の例も含まれているが、実に多様である。2005年、吉林省文物考古研究所で観察した。

参考文献

- 勢村茉莉子ほか編2017『中尾遺跡第2次発掘調査報告書』倉吉市文化財調査報告書150、倉吉市教育委員会
国立中央博物館編2012『昌原茶戸里遺跡1~7次発掘調査総合報告書』国立中央博物館古蹟調査報告41、国立中央博物館
小原貴樹編2015『米子平野の考古資料 尾高浅山遺跡-弥生時代環壕遺跡と墳丘墓-』米子市埋蔵文化財センター資料整理報告1、一般財団法人米子市文化財団
金東淑・朴基赫ほか編2020『慶山陽地里遺跡』聖林文化財研究院学術調査報告147、聖林文化財研究員・韓国土地住宅公社
中国社会科学院考古研究所編1989『北京大葆台漢墓』文物出版社
劉俊勇1981「旅順魯家村発現一処漢代窖藏」『文物資料叢刊』4、文物出版社
吉林省文物考古研究所編1987『榆樹老河深』文物出版社
村上恭通1988「東アジアの二種の鋳造鉄斧をめぐって」『たたら研究』29、たたら研究会
湯村 功編2002『青谷上寺地遺跡4』鳥取県教育文化財団調査報告書74、財団法人鳥取県教育文化財団

2 中尾遺跡 1号竪穴建物出土鉄鋤・板状鉄斧・鋳造鉄斧に残る有機質痕跡とその意義

塚本 敏夫（公益財団法人元興寺文化財研究所）

1. はじめに

中尾遺跡は鳥取県倉吉市大谷に所在し、国府川の北側の低丘陵地に位置し、旧石器時代から古代まで継続した遺跡である。第3次調査で見つかった弥生時代中期後葉の1号竪穴建物（直径約7.5mの柱穴6基の円形建物）の焼失した梁や屋根材の下から舶載品と思われる鉄鋤・板状鉄斧・鋳造鉄斧の3点がほぼ完形の形で揃って出土した。また、特異な出土状況と焼失時に貴重な舶載鉄器を家屋から持ち出さなかったことから、焼失住居は失火ではなく住居を意図的に焼却する際の何らかの儀礼として鉄器3点が利用された可能性が指摘されている（片岡2022）。

ここでは鉄鋤・板状鉄斧・鋳造鉄斧の出土状況や鉄器に残る有機質痕跡からその利用実態の解明とその意義について考えてみたい。

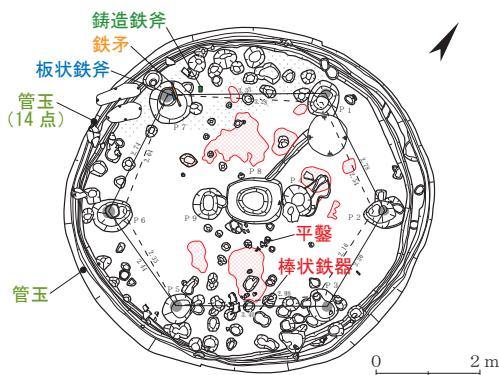
2. 鉄鋤・板状鉄斧・鋳造鉄斧の出土状況とその評価

2-1 鉄鋤・板状鉄斧・鋳造鉄斧の出土状況

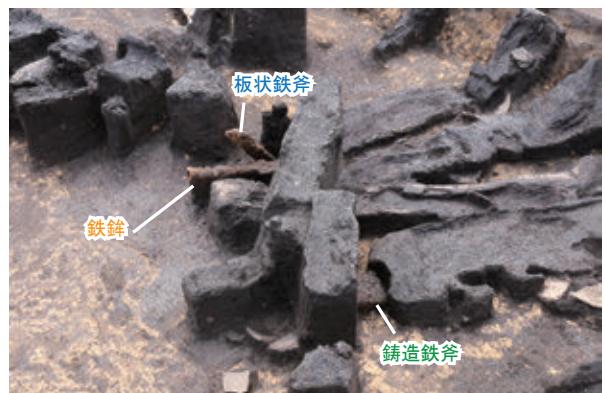
鉄鋤・板状鉄斧・鋳造鉄斧が出土したのは1号竪穴建物の6本の柱の、中心から見て北西の柱付近で、鉄鋤と板状鉄斧は柱の室内側に位置する。鉄鋤は横倒しになって出土しており、もとは柱近くに刃部を突き立てた状態であったと推定されている。板状鉄斧は刃部を上にして柱の根元付近に突き刺された状態で出土した。それに対して、鋳造鉄斧は北側に50cmほど離れた個所に床面から1cm浮いた状態で、炭化材片の上から出土していた。このことから何らかの方法で梁材に固定されていた可能性が考えられる。いずれも焼け崩れた梁材や屋根材の下から出土しており、3点とも柄は確認できなかった。また、西に1m離れたところから管玉18点中14点がまとまって出土している。出土状況からは糸で繋がっていたとは考えにくく、ばらした状態で撒いたか、袋にばらけた状態で入っていたものを置いた可能性が考えられる。また、貴重なガラス玉も2点出土している。南東側からは棒状鉄器と平鑿が出土地していている。

2-2 出土状況からの評価

鉄鋤や板状鉄斧が柱の根元付近に突き立てられて出土した。突き立てて住居内に保管していたとは考えにくく、また、当時の最も貴重な最新の舶載品の鉄器類を火事の際に持ち出さなかったとは考えにくい。何らかの祭祀的な作法に基づいて最新の武器を含む利器を儀仗として柱近くの床面に突き立てたり、棟材に括りつけて家屋を燃



第119図 1号竪穴建物遺物出土状況図



第120図 1号竪穴建物鉄器出土状況

やしたと考えるのが妥当である。

弥生中期後半の貴重な舶載品と思われる鉄器類が完形で家屋の焼失行為に利用されたことの意義は大きく、このことは玉類の出土状況からも祭祀利用との考えは肯定されよう。

3. 出土鉄器の有機質痕跡

3-1 鉄鉾の有機質痕跡（第121図）

鉄鉾は出土後の調査で片面は土や鏽をクリーニングしてしまっているが、反対側の面は未クリーニングの状態で保管されていた。クリーニングされてない面の表面を詳細に観察すると、表面に規則性のある粒々が確認できる。この粒々は先行研究から布の織目の名残と推定できる。したがって、何らかの布が鉄鉾の本体に巻かれていたことが推定される。また、写真やX線写真に幅4～5mmの紐状の有機質で螺旋状に巻いている状況が見て取れ、鏽瘤はこの紐の錆化した痕跡と推定できる。特に、鉾身の根本付近に幅3～4mmの紐状の有機質がループ状になっている箇所が見て取れる。確定はできないがこの位置で紐を結んでいた可能性もある。また、この位置には少し太めの有機質（布か革かの同定は出来ない）の痕跡が確認でき、確定はできないが鞘口状の有機質であった可能性がある。

3-2 板状鉄斧の有機質痕跡（第122図）

板状鉄斧には布痕跡は確認できないが、写真やX線写真から明瞭ではないが紐状の有機質で螺旋状に巻いている状況が見て取れ、鏽瘤はこの紐状の有機質の錆化した痕跡と推定できる。特に、基底部に密に有機質情報が確認できる。

3-3 錫造鉄斧の有機質痕跡と内部納入品（第123・124図）

錫造鉄斧にも布痕跡は確認できないが、写真やX線写真から明瞭ではないが有機質で螺旋状に巻いている状況が見て取れ、鏽瘤はこの紐の錆化した痕跡と推定できる。特に、側面で顕著に有機質情報が確認できる。特筆すべきは、X線及びX線CT調査で、袋部の中に全長52mmと56mmの方形断面の棒状鉄製品が確認された。

4. 出土鉄器の有機質痕跡の意義

出土鉄器の有機質痕跡に関しては日本海沿岸や瀬戸内地域では刀剣類の外装は弥生時代中期の抜身に布巻から弥生時代後期に入って木製鞘・柄が徐々に普及していくことが知られている（林2020、ライアン2020）。一方、近年、時代は下るが古墳時代中期以降の焼失住居や廃絶住居、祭祀遺跡や古代寺院や都城や官衙において、意図的に武器・武具や農工具を解体または装具を外して布や紐、藁縄等で巻いて住居や災害への鎮め目的の祭祀に利用している実態が明らかになってきた（塙本2022）。



第121図 鉄鉾の有機質痕跡



第122図 板状鉄斧の有機質痕跡



第123図 錫造鉄斧の有機質痕跡

本例でも兵仗や利器としての装具（木製柄）を外して鉄器単体で、しかも有機質を巻いて本来の機能を封じ込め、儀仗や祭器として焼失住居の鎮め目的の祭祀に利用されたことが伺える。

5. 焼失住居や廃絶住居での鉄器武器や利器の祭祀利用の展開とその評価

弥生時代の焼失住居や廃絶住居での鉄製武器の祭祀利用に目を転じると、鉄錐に関しては墳墓以外では完形品としては上田市上田原遺跡のI区第40号土壙出土品が知られているが住居跡ではなく、青谷上寺地遺跡の県道7区H層出土品（袋部破片）も包含層で、やはり住居ではない。管見では中尾遺跡1号竪穴建物出土の鉄錐が初例である。

そこで、対象を鉄剣とし、地域も九州以東に広げると、弥生時代中期・後期にこのような作法が散見される。まず、信越地域では中期後葉の佐久市五里田遺跡の第1号住居跡出土の鉄剣片が布状纖維で螺旋状に巻き付けられた状態で床から2~3cm浮いて出土している（塚本他1999）。住居の廃絶に伴う祭祀に利用されたことが伺える。後期では岡山市百間川原尾島遺跡の焼失住居である竪穴住居6から藁状の有機質で巻かれた¹⁾鉄製短剣が炭化材の上から出土しており、明らかに焼失住居の片付けに伴う祭祀行為に利用されたことが伺われる。また、播磨町大中遺跡の15次1号住居のベッドの段下から浮いた状態で出土した鉄製短剣も革紐状の有機質で巻かれた痕跡があり（藤原編2022）、住居の廃絶に伴う祭祀に利用されたことが伺える。

次に鉄斧の状況を見てみよう。板状鉄斧では、中期後半の長野市春山B遺跡の焼失住居SB01から板状鉄斧²⁾が太形蛤刃石斧とともに埋土中から出土しており、焼失住居の廃絶に伴う祭祀に利用されたことが伺える。鑄造鉄斧では、中期後半の朝霞市向山遺跡のC-3区第6号住居から分析結果からも舶載品とされる、ほぼ完形の二条突帶鑄造鉄斧が北西側の柱穴付近の床面に欠損面を下にして、柱状片刃石斧と隣接して出土しており、有機質痕跡は無いが廃絶に伴う祭祀に利用した可能性が伺える。

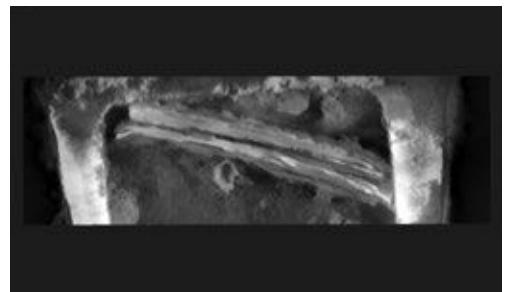
これらの焼失住居や廃絶住居での鉄剣や鉄斧の作法は先行する中尾遺跡での作法と類似しており、今のところ中尾遺跡が列島での初例であり、3点全てが完形の舶載品の可能性が高く、当時最も価値の高い威信財的舶載鉄器が住居の廃絶行為に伴う祭祀に鎮物として利用されたと解釈するのが妥当であろう。その作法が時代とともに他地域へ少しづつその内容を変えながら伝播していくことが看取できる。

6. おわりに

中尾遺跡1号竪穴建物での舶載鉄器を用いた焼失住居に伴うこの作法の実態とその意義が調査を通じて謄記ながら見えてきた。この発見の意義は大きく、今後の弥生時代以降の鉄器文化の受容と展開を考える際、重要なカギとなる事例である。しかし、まだまだ未解決の問題も山積している。最後に問題点を挙げて現段階での推論を提示して結びとしたい。

1. 鉄錐を柱穴付近の地面に突き刺す行為であるが、鉄錐での類例は無いが、銅剣では今治市経田遺跡のASK1 SP2872での柱穴横に突き立てた銅剣片が上げられよう。その行為の真意は不明であるが地鎮の意味が込められていたのではと推論している。また、時代は下るがU字型鋤鍬先を廃絶住跡の床に突き立てている事例は散見でき、今後事例を集めて再考すべき作法である。

2. 板状鉄斧は鉄錐とは逆に、刃を上側に向け根元を地面に突き刺して立てる作法であるが、板状鉄斧での類例は探し切れていない。時代は下るが9世紀中葉の市原市南大広遺跡では基壇中央から蕨手刀が、南西・南東の両隅から刀子が、切先を天に向けて出土した。同様に市原市萩の原遺跡の2号基壇中央でも大刀が切先を天に向



第124図 鑄造鉄斧袋部内部のCT画像

けて出土しており、地鎮のためではと推定されている（財団法人市原市文化財センター 1992）。今後事例を集め再考すべき作法である。

3. 出土状況から鋳造鉄斧は梁材に固定されていた可能性が推定された。管見では、類例は確認されておらず、その作法の意図も不明である。今後は民俗事例も含めて類例が集まつた後に再考すべきである。

4. 鋳造鉄斧の内部納入品の用途は不明である。ただ、一つの仮説として、袋部の規格と 2 本の棒状鉄製品の寸法から板状鉄斧を入れ子状態にした時の留金具ではなかつたかと推定している³⁾。

5. この作法の系譜は今のところ舶載鉄器の使用から大陸に求められそうであるが、現時点では特定できておりず、その解明が今後の大きな課題である。

謝辞 小稿をなすにあたって、以下の機関および個人に遺物実見・実測の便宜を図っていただいた。記して感謝いたします。

伊都国歴史博物館、大阪府立弥生文化博物館、岡山県古代吉備文化財センター、兵庫県立考古博物館、岡本泰典、岡部裕俊、補宜田佳男、藤原怜史、初村武寛、ライアン・ジョセフ

註

- 1) 藤状の有機質を巻く事例は長岡京正殿跡出土小札（塚本・山田・初村 2010）他でも確認されている。
- 2) 方形で袋状鉄斧の再加工品の可能性が指摘されている。有機質痕跡は未確認である。
- 3) 青谷上寺地遺跡の県道 7 区 H 層から入れ子状態で出土した鋳造鉄斧と板状鉄斧のセットは鉄器の地中保管や埋納の状況との解釈が推定されている（野島 2011）。しかし、板状鉄斧は鋳造鉄斧と接しておらず、間に何らかの介在物が存在したと考えられている。青谷上寺地遺跡出土品では板状鉄斧の刃先を鋳造鉄斧の袋部に差し込む形態で出土しているが、中尾遺跡出土品は板状鉄斧の底部を袋部に差し込む形態で両端に刃部を持つ武器として機能させていた可能性を想定している。このような組み合わせで器物として存在していた可能性もあり、解釈の一つとして青谷上寺地遺跡出土品の先行品で、祭祀行為を行うに際して、外して別々に利用したのではないかと推定している。その際に留金具として鉄棒 2 本を袋部の中に入れた可能性も考えられよう。

脱稿後、斎野裕彦氏より富沢遺跡 99 次 II 区 13 層下部（14 層の弥生前期水田跡上層）から樹皮巻石鎌？が出土していることをご教示いただいた。実見すると樹皮状有機質は全体に巻かれていたようで、器形から離形の石剣か石錐と考えられる。水田の廃絶に伴う儀礼に金属製の代替品として使用された可能性が高く、その作法の出自が注目される。

引用・参考文献

- 財団法人市原市文化財センター 1992 「4. 南大広遺跡（B 地区）」『第 7 回 市原市文化財センター 遺跡発表会要旨』財団法人市原市文化財センター pp. 14-15
- 江原 順編 2022 『台の城山遺跡と向山遺跡 - 弥生の斧を手に入れたムラ -』朝霞市博物館
- 片岡啓介 2022 「中尾遺跡」『発掘された日本列島 2022 調査研究最前線』文化庁 pp. 37-39
- 塚本敏夫 2022 「儀仗としての武器・武具」『古代武器研究 vol. 17』古代武器研究会 pp. 35-57
- 塚本敏夫・菅井裕子・平尾良光・鈴木浩子・大沢正己 1999 「付編 3 鳴滝遺跡群五里田遺跡出土金属資料の自然科学的分析」『鳴滝遺跡群五里田遺跡 - 長野県佐久市根々井五里田遺跡発掘調査報告書 -』佐久市埋蔵文化財調査報告書 第 74 集 佐久市教育委員会 pp. 138-161
- 塚本敏夫・山田卓司・初村武寛 2012 「長岡京出土小札の再検討」『都城』23 （財）向日市埋蔵文化財センター pp. 71-86
- 照林敏郎 1997 「朝霞市向山遺跡の調査 - 弥生～古墳時代前期 -」『東日本における鉄器文化の受容と展開』第 4 回鉄器文化研究集会 鉄器文化研究会・朝霞市教育委員会 pp. 2-22
- 野島 永 2011 「第 3 節 弥生時代鋳造鉄斧の形態変化と破片利用」『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告 6 金属器』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告 39 鳥取県埋蔵文化財センター pp. 92-106
- 林 大智 2020 「日本海沿岸地域における鉄製武器の普及と防御集落」『古代武器研究 vol. 16』古代武器研究会 pp. 25-51
- 藤原怜史編 2022 「弥生集落転生」兵庫県立考古博物館
- ライアン・ジョセフ 2022 「中四国・畿内における鉄製刀剣の普及」『古代武器研究 vol. 17』古代武器研究会 pp. 53-70
- 尚、紙幅の関係上遺跡文献は割愛させていただいた。

VI まとめ

今回の調査では、旧石器時代の石器、縄文時代の落し穴、丘陵上に展開する弥生時代中期後葉～古墳時代前期の集落跡と丘陵尾根から南斜面に築造された古墳時代中期～後期の古墳群などを確認した。ここでは、発掘調査で明らかになったことのうち特に注目すべき点について整理して、まとめとしたい。

1 第3次調査の成果について

(1) 旧石器時代の遺物

遺構は確認していないが、ナイフ形石器S 1 (安山岩製)、尖頭器S 2 (サヌカイト製)・S 3 (安山岩製)、石刃S 4 (玉髓製)などの石器が出土した。このうち、尖頭器と石刃は当遺跡では初めて確認されたものであり、1次調査に続き、新たな資料を得ることができた。
(小田)

(2) 縄文時代の遺構

丘陵尾根から北斜面で14基の落し穴を確認した。落し穴の分布と形状を概観すると、調査区の東部には3～6つの杭穴(床面ピット)をもつ楕円形プランの落し穴が分布し、中央部・西部には0～1つの杭穴をもつ円形プランのものが分布する傾向がある。また、3号と4号(楕円形プラン)、5号と6号(楕円形プラン)、10号と11号(円形プラン)のように、同一の平面プランの落し穴2基が3～4mの間隔で近接して隣り合うことや、2号・3号・5号(楕円形プラン)、2号・4号・6号(楕円形プラン)、12号～14号(円形プラン)のように、同一の平面プランの落し穴3基が北斜面の勾配に沿うように並ぶことも確認できる。

面積1,000m²当たりの落し穴の数を比較すると、1次調査地が5.7基(84基/14,700m²)、2次調査地が8.1基(75基/9,300m²)に対して、今回の調査地は1.0基と少なく、落し穴の分布は疎らといえる。
(小田)

(3) 弥生時代の遺構・遺物

遺構の時期 弥生時代の遺構は1号・4号～6号・8号竪穴建物、1号・2号土壙、1号貯蔵穴である。遺構内出土土器の形態から、いずれも中期後葉に比定され、さらに次の2時期に細分できる。

I期(弥生時代中期後葉古段階) 4号～6号・8号竪穴建物、1号・2号土壙

甕(20・21・23・24・44・46・47)は頸部から屈曲して立ち上がる口縁部を持ち、端部に3条の凹線文を施す。内面ヘラケズリは胴部最大径まで及ぶ。無頸甕(42)は胴部の途中で屈曲して内傾しながら立ち上がる口縁部を持ち、端部に6条の凹線文を施す。高坏(48・49)は坏口縁部が屈曲して立ち上がり、端部に5～6条の凹線文を施す。I期は高尾編年¹⁾のIV-2期古段階に比定できる。

II期(弥生時代中期後葉新段階) 1号竪穴建物、1号貯蔵穴

広口甕(1・4・37・38)はなだらかに立ち上がる頸部から緩やかに外反する口縁部を持ち、口縁下端部は斜め下方向へ拡幅する。拡幅した口縁端部に3～4条の凹線文を施す。甕(5・6)は内面ヘラケズリが胴部最大径を越え肩部まで達する。内面頸部下はハケメ後にヨコナデで調整する。小型の長頸甕(2)、脚付甕(3)は吉備系²⁾と目される。II期は高尾編年のIV-2期新段階に比定できる。

遺構の配置 遺構は全て調査地東部に分布し、1号・4号～6号竪穴建物・1号土壙は丘陵尾根上、8号竪穴建物・2号土壙は丘陵南肩部、1号貯蔵穴は丘陵北肩部に位置する。2次調査で確認した中期後葉の集落の最西端に位置し、これより南西の丘陵基部側では同時期の遺構は見られない。

5棟の竪穴建物のうち1号・5号・6号の3棟は中尾遺跡の弥生時代中期後葉の円形竪穴建物の中では大型に属する。いずれも建替えが行われており、建替え前は6本柱の建物であるという共通点がある。また、中央ピッ

トとその両脇に2基のピットが伴う点、それら3基のピットを通る軸が丘陵の尾根筋に沿うように配されている点も共通する。中央ピットとその両脇2基のピットを持つ竪穴建物は、朝鮮半島の松菊里遺跡を初めとする中期無文土器時代の竪穴建物に見られる典型例で、「松菊里型」と呼ばれ、日本では北部九州を中心に見られる³⁾。

1号竪穴建物について 1号竪穴建物は床面長径6.9m、床面積37m²を測る。主柱穴はやや東西に長い六角形に配される。床面には柱穴や中央ピットのほかに90基近くの浅いピットが見られ、その分布は柱穴間の長い2辺付近を中心に、建物中央付近のピットほど小さく、壁際のものほど大きくなる傾向がある。また、ピット群付近の床面には焼土面が見られ、鉄床石と思われるS 29も出土していることから、建物内で鍛冶を行っていた可能性がある。

1号竪穴建物は焼失建物であり、垂木、小舞、梁、茅材などの炭化材の下からは舶載品の鉄矛(F 1)、板状鉄斧(F 2)、鋳造鉄斧(F 3)が完形で出土した。F 1は全長54.6cmを測り、弥生時代の出土例では国内最長である。韓国の茶戸里遺跡出土鉄矛と類似する⁴⁾。F 2も全長27.4cmを測る大型品で、河原口坊中遺跡(海老名市)出土の28.5cmに次いで国内最大級である。韓国の茶戸里遺跡、勒島遺跡に類例がある⁵⁾。F 3は全長11cmで、県内の類例として青谷上寺地遺跡(鳥取市)が挙げられる⁶⁾が、それよりも古い型式である。3点の出土位置は主柱穴P 7付近に集中している。F 1は横倒しの状態で出土したが、床面の観察から、先端をP 7の根元付近に突き立てた状態であったと考えられる。F 2も同様にP 7の根元に突き立てられていたが、刃部を上に向け、基部を突き立てるという特異性がある。2点とも建物床面に突き立てるという点で儀礼的な意味合いを持つと考えられる。F 1から約0.5m離れて出土したF 3は梁と垂木に挟まれる位置で出土したことから、焼失の過程で垂木が倒れた後にF 3が垂木の上に載り、その上から梁が覆い被さったという順序が想定される。したがって、F 3は建物が焼け崩れる最中に投げ込まれたか、あるいは柱や梁などにくくりつけられており建物の焼失途中に落下した可能性が考えられるが、想像の域を出ない。

小型工具から鉄器の生産が開始したばかりの中期後葉の鳥取県内⁷⁾において、高い鋳造技術を要するF 1～F 3のような舶載鉄器は極めて価値が高く、中尾遺跡の集落において権威の象徴として保有されたと考えられる。北部九州を中心に副葬品として鉄製刀剣類が使用される例は多く見られるが、焼失建物内で鉄矛を含む完形の舶載鉄器が複数種類出土する例は国内では他に見られない。焼失の原因が自然災害や失火であれば、希少な鉄器を建物内に残したままにするとは考えられず、焼失は意図的な焼却によるものと思われる。また単なる廃棄のための焼却であっても建物内に鉄器を残すとは考えにくいため、1号竪穴建物の廃棄は儀礼祭祀の意味を持つと考えられる。したがって、1号竪穴建物の焼却については威信財としての鉄器を使用した廃屋儀礼が示唆される。さらに、出土遺物の型式から1号竪穴建物の時期は中尾遺跡全体を通してみると中期後葉の集落の中で最も新しい時期に属し、続く後期前葉には約300m離れた丘陵先端部に集落が移ることから、1号竪穴建物の廃屋儀礼をもって中期後葉の集落の終焉とした可能性が想定される。

1号竪穴建物は出土遺物に吉備系の土器が複数含まれる。2次調査では吉備地方に類例が見られる大型長方形竪穴建物を確認しており⁸⁾両地域の関係がうかがえる。また、中尾遺跡の南側を流れる国府川を7km北上すれば日本海に到達する。日本海沿岸には妻木晩田遺跡(米子市・大山町)や青谷上寺地遺跡など多数の鉄器を持つ交易の拠点が所在する。日本海と吉備地方を結ぶ地点の中尾遺跡が、地域間を結ぶ重要な役割を果たしており、貴重な鉄器入手するに至ったと推測する。

(片岡)

(4) 古墳時代の遺構・遺物

遺構の時期 古墳時代の遺構は、遺構内出土土器から前期と中期～後期に大別することができる。

古墳時代前期 2号・3号・7号・10号・11号竪穴建物、1号掘立柱建物、1号段状遺構

前期前葉では土井編年⁹⁾の宮ノ下4・6号住居址段階、牧本編年¹⁰⁾の天神川I期に比定される甕(32)や鼓形器台(31)、土井編年の宮ノ下3B・7号住居址段階、牧本編年の天神川II期に比定できる甕(14・36)が代表される。前期中葉は牧本編年の天神川III期に比定できる布留系高坏(15)、前期後葉は土井編年の上神猫山方形周溝墓段階、牧本編年の天神川IV期に比定できる甕(26)が見られる。

古墳時代中期～後期 1～25号墳

土師器では牧本編年の天神川VIII～X期に比定できる甕(62・79・82・130)、直口壺(31・118・119・141)、高坏(131・132)、脚付塊(63～71)などが代表される。須恵器では陶邑編年¹¹⁾のTK208～TK209型式に比定できる坏蓋(53・59・87・103)、坏身(54・55・60・91・105)などが代表される。5号墳周溝底出土の77・78は、脚部を欠いているがTK23～TK47の須恵器有蓋高坏を、13号墳周溝底出土の102は須恵器穗を模倣したものである。(片岡)

遺構の配置 前期の竪穴建物7棟と段状遺構1基は、調査区東部から中央部付近の丘陵尾根から南斜面に分布し、掘立柱建物8棟と柵列1基は、調査区東部から中央部付近の丘陵尾根から北肩部に分布する。また、中期～後期の古墳25基は、調査区全域の丘陵尾根から南斜面に分布する。

竪穴建物 特筆すべき遺構としては、前期中葉の2号竪穴建物で壁際特殊ピットを確認した。方形プランで両側に仕切り溝をもつタイプであり、埋土から土師器甕・高坏・低脚坏が出土した。形状の類似する壁際特殊ピットは、夏谷遺跡13号住居(5世紀後半)¹²⁾や上種第5遺跡竪穴住居跡1号(北栄町・5世紀前半)¹³⁾などで確認されている。東伯耆では、壁際特殊ピットは前期中頃に出現し、中期後半までに多く見られ、後期前半にかけて衰退すると指摘されている¹⁴⁾。ゆえに、2号竪穴建物の壁際特殊ピットは初期段階に位置づけられる。

古墳 中期～後期の古墳25基を確認し、円墳21基、方墳1基、不明3基と、ほぼ円墳で構成される。また、周溝を含めた墳丘規模が概ね20m以上の3基(1号・16号・25号墳)と20m未満のものに大別でき、前者は丘陵尾根筋に40m以上の間隔をとって配置されるのに対し、後者は丘陵尾根から南斜面の東西140m、南北50m程度の範囲に、23基が密集して配置されている。古墳の立地や規模から、前者は古墳群のなかで主となる系列で、後者は従属的な系列であると推定される。

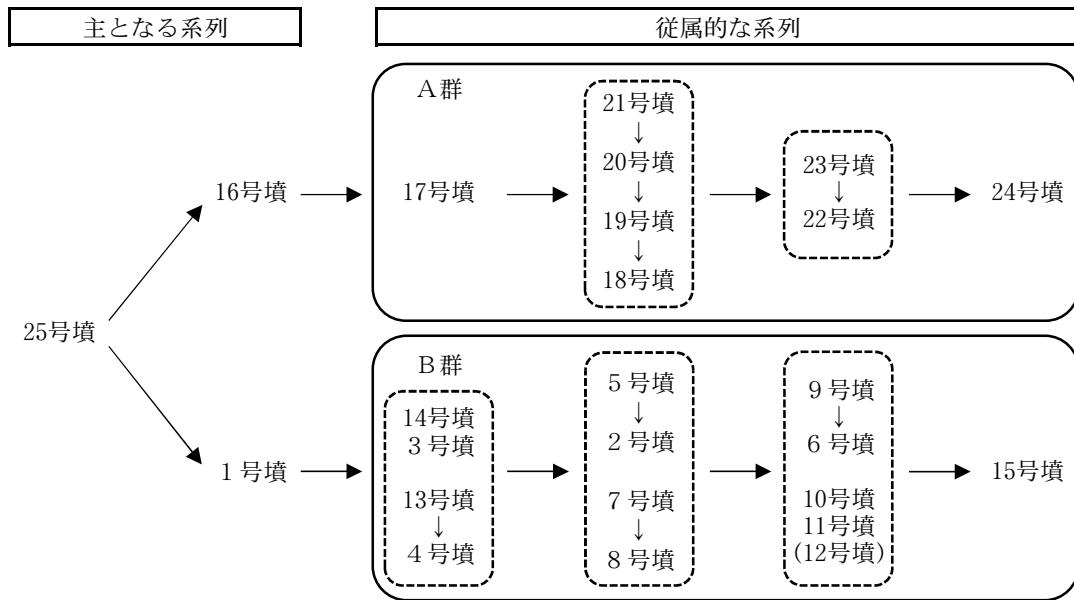
古墳群の形成 古墳の立地や規模、遺構の切り合い、供献土器などを基に古墳群の築造順序について検討する¹⁵⁾。近隣のイザ原古墳群¹⁶⁾や沢ベリ遺跡(第2次)¹⁷⁾では、丘陵尾根筋→斜面の順に古墳が築造されていることから、まず尾根筋に立地する主となる系列が築造され、その後尾根から南斜面に立地する従属的な系列が築造されたと考えられる。

主となる系列は、丘陵基部側の25号墳に伴う供献土器に須恵器が含まれず、先端側の16号・1号墳に伴う供献土器に須恵器が含まれることから、25号墳→16号墳・1号墳の順に築造されたといえる。一方、従属的な系列は立地と供献土器によりA・Bの2群に分けることができる。

A群は、16号墳の南側に広がる17号～24号墳であり、供献土器に直口壺を採用する傾向がある。これらは標高の高い側から①17号墳、②18号～21号墳、③22号・23号墳、④24号墳の4つのまとまりに分けられ、直口壺の時期から①→④、西→東の順に築造されたと考えられる。

B群は、1号墳の南側に広がる2号～15号墳であり、供献土器に直口壺をほぼ採用しない。これらは標高の高い側から①3号・4号・13号・14号墳、②2号・5号～8号墳、③9～11、(12)号墳、④15号墳の4つのまとまりに分けられ、基本的には①→④の順に築造されたと考えられる。

以上のことから、次のように古墳群が形成されたと推定される。



なお、墓道は、A・B群の境界で等高線と直交して延びるものと、A・B群①～④の周溝外縁に沿って等高線と平行して延びるものに復元できる。後者の墓道はA群とB群で違いが見られ、A群の墓道は直線的に延びるのに対し、B群の墓道は曲線的（円弧状）に延びる。

主体部 4基の古墳で7基の主体部を確認した。25号墳の主体部3基は、切り合い関係から2時期に分けられ、1号主体部（木棺墓）が造られた後に、2号・3号主体部（箱式石棺墓）が同時に造られている。

主体部の主軸に注目すると、6号・24号墳と25号墳1号主体部のように、1基を埋葬する場合は概ね東西南北方向（等高線に平行）である。しかし、8号墳と25号墳2号・3号主体部のように、2基を埋葬する場合は概ね南北方向（等高線に直交）であり、さらに2基がほぼ主軸を揃えて東西に並べて配置される。これらのこととは当遺跡で主体部を造る際の共通の規範であった可能性がある。

周溝内・外埋葬施設 15基の古墳において、周溝内で27基、周溝外で8基、計35基の副次的な埋葬施設を確認した（本書88～89頁第6表参照）。古墳1基につき周溝内・外にそれぞれ1～2基程度の副次的な埋葬施設が配置されるが、1号墳のみ周溝内に10基、周溝外に4基の計14基と突出して数が多い。東伯耆において周溝内・外埋葬施設の多い古墳は、管見では、長瀬高浜1号墳（湯梨浜町・5世紀後半の円墳）で周溝内8基、周溝外6基の計14基¹⁸⁾、下山平4号墳（6世紀中頃の前方後円墳）で周溝内10基、周溝外2基の計12基¹⁹⁾、大山2号墳（6世紀前半の円墳）で周溝内7基²⁰⁾などが挙げられる。よって、1号墳は東伯耆で最も多くの周溝内・外埋葬施設を有する古墳の1つといえる。なお、周溝内埋葬施設の配置に顕著な規則性は認められないが、1号墳では周溝の西側～北側に埋葬施設が配置される傾向がある。

25号墳周溝内の2号埋葬施設では、周溝内墳丘が遺存し、墳丘頂部に土師器小型丸底壺（143）と標石（川原石）が据えられていた。倉吉市内で周溝内墳丘を確認できた例は、中尾遺跡2次調査1号墳1号埋葬施設や大山2号墳3号埋葬施設、3号墳5号埋葬施設²¹⁾、沢ベリ21号墳2号・3号埋葬施設、25号墳1号埋葬施設、27号墳2号埋葬施設²²⁾などが挙げられる。一方、主体部上に土器と共に1～2点の礫を置く例は弥生時代には山陰地方で確認されている²³⁾が、古墳の墳丘頂部に土師器や標石を配置する例を倉吉市内では確認できなかった。

供献土器 18基の古墳の周溝底で、古墳に供献されたと考えられる土師器・須恵器が出土した（本書87頁第5表参照）。供献土器は土師器が中心で、器種は甕（18基中13基）が最も多く、直口壺（6基）、塊（4基）、高坏（3基）、脚付塊、坏蓋形・有蓋高坏形土器、穗形土器（各1基）と続く。須恵器は5基（1号・8号・13号・

16号・22号墳)で確認され、器種は壺身(5基中4基)、壺蓋(3基)、甕、穂(各1基)である。

副葬品 7基の主体部のうち1基、35基の副次的な埋葬施設のうち5基で副葬品を確認した(本書88~89頁第6表参照)。種類は鉄器(6基中3基)、ガラス玉類(2基)、須恵器・鉄滓(各1基)である。特筆すべきは11号墳1号埋葬施設であり、墓壙内の2箇所(被葬者の頭部側と足元側)に須恵器壺蓋・壺身が13点ずつ計26点供獻され、4種類の鉄製農工具(鍬鋤先、鎌、鉗、鑿)が被葬者の足元側にまとまって副葬されていた。多種の鉄製農工具を多数副葬する古墳としては、倉吉市内では国分寺古墳(前期後半の前方後方墳あるいは前方後円墳)²⁴⁾が知られるが、墳丘をもたない埋葬施設では類例を確認できなかった。
(小田)

2 中尾遺跡の変遷について

中尾遺跡第1~3次調査では、丘陵尾根から斜面の38,000m²に及ぶ広範囲で発掘調査を行い、旧石器時代の石器と縄文時代~古墳時代の遺構を確認した(本書164頁第125図)。以下、発掘調査で明らかになった当遺跡の変遷について時代ごとに述べる。

旧石器時代 遺構は未確認であるが、出土遺物から丘陵上でナイフ形石器や尖頭器、削器などを用いて狩猟の行われた様子が想像される。

縄文時代 遺構は1~3次調査地のほぼ全域に分布し、特に1・2次調査地に集中する。丘陵尾根から斜面に173基の落し穴が掘られ、狩猟場として盛んに利用された様子がうかがえる。

弥生時代 前期後半になると、1次調査地南西部の丘陵尾根上に平地建物と堅穴建物が1棟ずつ建てられ、人々の居住が始まる。平地建物は大型で、屋内に4基の貯蔵穴を伴うものあり、数戸の住居あるいは共同利用の貯蔵施設と想定される。

中期後葉には、集落が丘陵基部側(南西側)へ移動し、1次調査地西端部~3次調査地東端部の丘陵上に、堅穴建物・掘立柱建物・貯蔵穴などで構成される集落が営まれた。集落の規模は東西150m、南北70m程度である。堅穴建物は約20棟を数え、大型の円形堅穴建物(2次・3次調査1号、3次調査5号・6号)や、吉備地方に特有の大型の長方形堅穴建物(2次調査2号・13号)も見受けられる。また、掘立柱建物は7棟を数え、桁行6間・梁行2間と桁行4間・梁行1間の大型掘立柱建物(2次調査1号・10号)も認められる。さらに、完形の舶載鉄器が複数確認され、2次・3次調査1号堅穴建物で鉄矛・板状鉄斧・铸造鉄斧各1点が、2次調査2号堅穴建物で板状鉄斧1点が出土した。この時期が当遺跡の最盛期であるといえる。

後期前葉には、集落が丘陵先端部(北東側)へ移動し、1次調査地北東部の丘陵尾根上に、堅穴建物・貯蔵穴などで構成される集落が営まれた。4棟の堅穴建物が建てられ、それぞれ1~2基の貯蔵穴・方形土壙が伴う。

古墳時代 前期には、集落が再び丘陵基部側(南西側)へ移動し、3次調査地の東部から中央部の丘陵上に集落が営まれた。集落の規模は東西110m、南北80m程度である。6棟の堅穴建物と1基の段状遺構が丘陵尾根から南斜面に、7棟の掘立柱建物が丘陵尾根から北肩部に配置された。

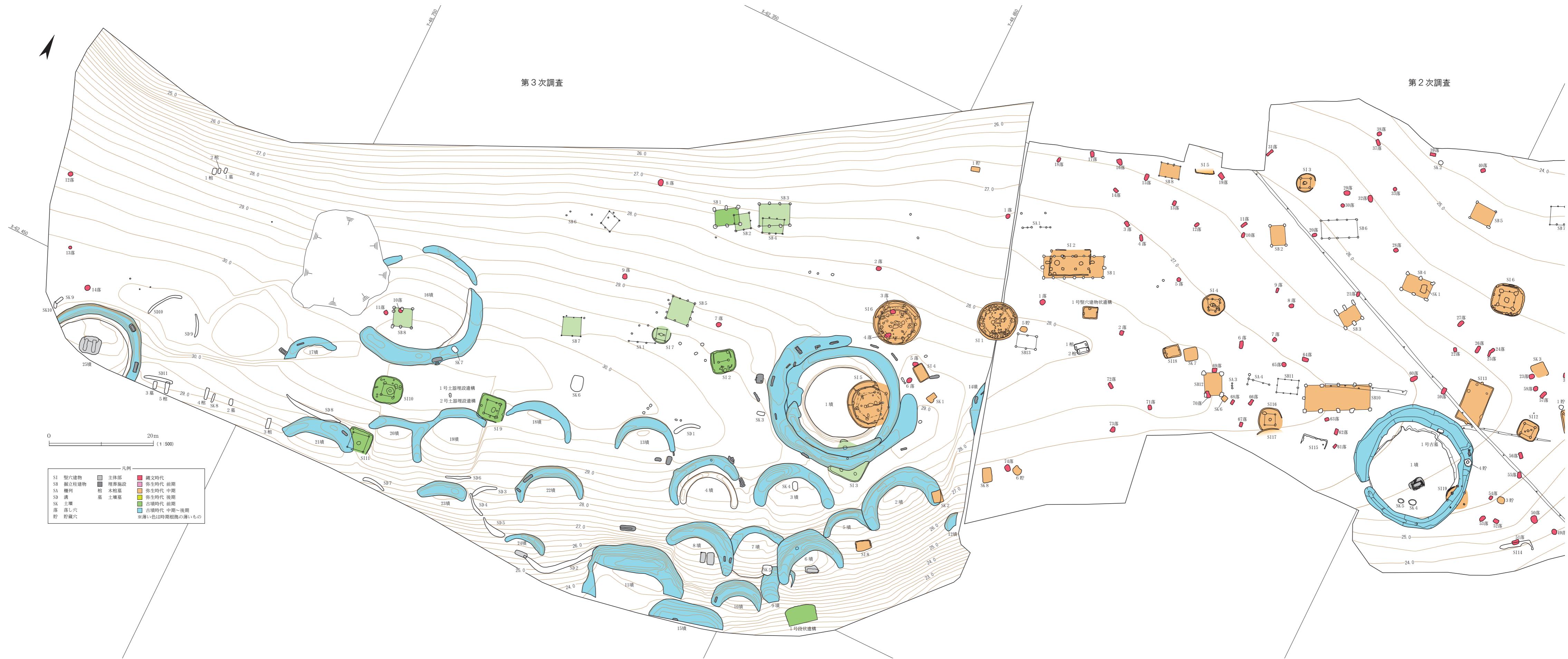
なお、集落の立地に着目すると、弥生時代前期後半~古墳時代前期の各時期の集落が重なり合わない。このことは集落に暮らす人々がそれほど多くなかったことを示唆する。

中期以降、丘陵上が集落から墓地へ変化する。1~3次調査地の丘陵尾根筋には、規模の大きな円墳5基が間隔を空けて築造される。このうち丘陵先端部に独立して立地する1次調査1号墳は、その立地や規模から盟主墳の可能性がある。そして、3次調査1号墳・16号墳より南側を中心に、比較的規模の小さな円墳・方墳23基が密集するように築造され、後期に至るまで墓地として利用された。
(小田)

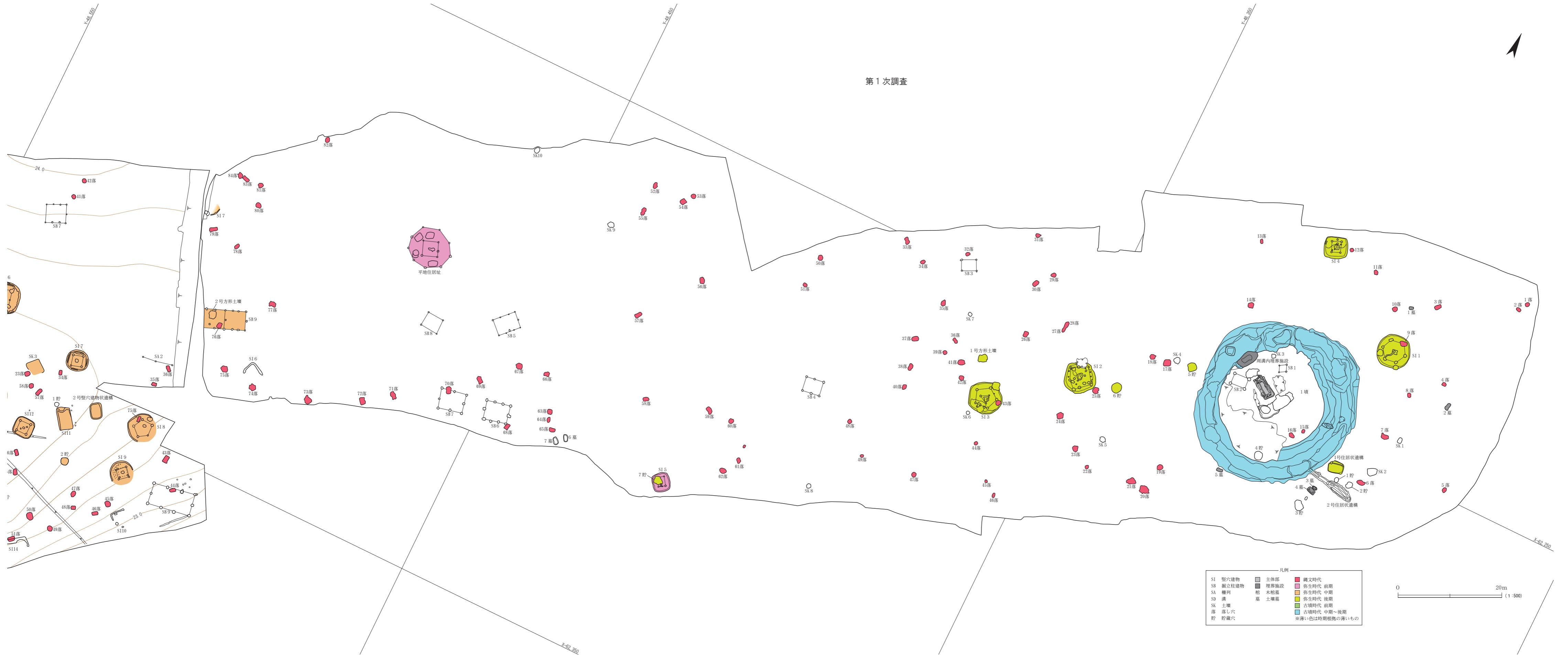
中尾遺跡第3次調査では、主に弥生時代中期後葉～古墳時代前期の集落及び古墳時代中期～後期の古墳群の一様相が明らかとなった。特に、3次にわたる調査により弥生時代中期後葉の集落の全域を調査できたことは貴重な成果といえる。その一方で、舶載鉄器の供給経路や入手の背景、特異な儀礼形態の意義など未解明な点も残されている。今後、調査研究が進展して、これらの問題が解明されることを期待したい。(小田・片岡)

註

- 1) 高尾浩司「山陰地方東部における弥生時代中期の土器編年－大山山麓地域を中心に－」愛媛大学法文学部考古学研究室編『地域・文化の考古学 下條信行先生退任記念論文集』2008年
- 2) 松井潔「東の土器、南の土器－山陰東部における弥生時代中期後葉～古墳時代初頭の非在地系土器の動態－」『古代吉備』第19集、古代吉備研究会、1997年
- 3) 中間研志「松菊里型住居－我国稻作農耕受容期における堅穴住居の研究－」『東アジアの考古と歴史 中』同朋舎出版、1987年
- 4) 村上恭通氏による御教示。
- 5) 註4と同じ。
- 6) 水村直人ほか『金属器』青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告6、鳥取県埋蔵文化財センター、2011年
- 7) 高尾浩司「鳥取県における弥生時代鉄器の様相」『考古学ジャーナル』No.467 日本海沿岸地域の弥生鉄器、ニューサイエンス社、2000年
- 8) 勢村茉莉子ほか『中尾遺跡第2次発掘調査報告書』倉吉市文化財調査報告書第150集、倉吉市教育委員会、2017年
- 9) 土井珠美「鳥取県下の状況」『弥生時代後期から古墳時代初頭のいわゆる山陰系土器について』第18回埋蔵文化財研究会事務局、1986年
- 10) 牧本哲雄「古墳時代の土器について」『長瀬高浜遺跡VIII、園第6遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書61、財団法人鳥取県教育文化財団、1999年
- 11) 『陶邑古窯址群I』平安学園考古学クラブ、1966年
- 12) 森下哲哉ほか『夏谷遺跡発掘調査報告書』倉吉市文化財調査報告書第84集、倉吉市教育委員会、1996年
- 13) 馬渕義則ほか『上種第5遺跡発掘調査報告』大栄町文化財調査報告書第14集、大栄町教育委員会、1985年
- 14) 岩崎康子「第8章第2節 古墳時代の集落の様相」『石脇第3遺跡－森末地区・操り地区－ 石脇8・9号墳 寺戸第1遺跡 寺戸第2遺跡 石脇第1遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書54、(財)鳥取県教育文化財団、1998年
- 15) 古墳群の築造順序の検討にあたっては、根鈴智津子氏に多くの御教示をいただいた。
- 16) 根鈴輝雄『四王寺古墳群 イザ原古墳群・小林古墳群発掘調査報告書』倉吉市文化財調査報告書第25集、倉吉市教育委員会、1983年
- 17) 竹宮亜也子・岡本智則『不入岡遺跡群発掘調査報告書 不入岡遺跡・沢ベリ遺跡2次調査』倉吉市文化財調査報告書第85集、倉吉市教育委員会、1996年
- 18) 西村彰滋ほか『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書V (本文編)』鳥取県教育文化財団調査報告書12、財団法人鳥取県教育文化財団、1983年
- 19) 影山和雅『下山平・天神原遺跡発掘調査報告書』関金町文化財調査報告書第13集、関金町教育委員会、1988年
- 20) 真田廣幸ほか『立縫遺跡群IV 大山遺跡発掘調査報告書(C・D地区)』倉吉市文化財調査報告書第54集、倉吉市教育委員会、1989年
- 21) 註20と同じ。
- 22) 岡平拓也『沢ベリ遺跡第4次発掘調査報告書』倉吉市文化財調査報告書第134集、倉吉市教育委員会、2009年
- 23) 大谷晃二「第3節 弥生墳丘墓における主体部上の祭祀の一形態」近藤義郎編『矢藤治山弥生墳丘墓』矢藤治山弥生墳丘墓発掘調査団、1995年
- 24) 梅原末治『因伯二國に於ける古墳の調査』鳥取縣史蹟勝地調査報告書第二冊、鳥取縣、1924年
岩本崇編『伯耆国分寺古墳の研究』島根大学法文学部考古学研究室・伯耆国分寺古墳研究会、2019年



第1次調査





調査前全景（南東から）



調査後全景（北西から）※右奥に打吹山と倉吉市街地、左奥に向山を望む

図版2

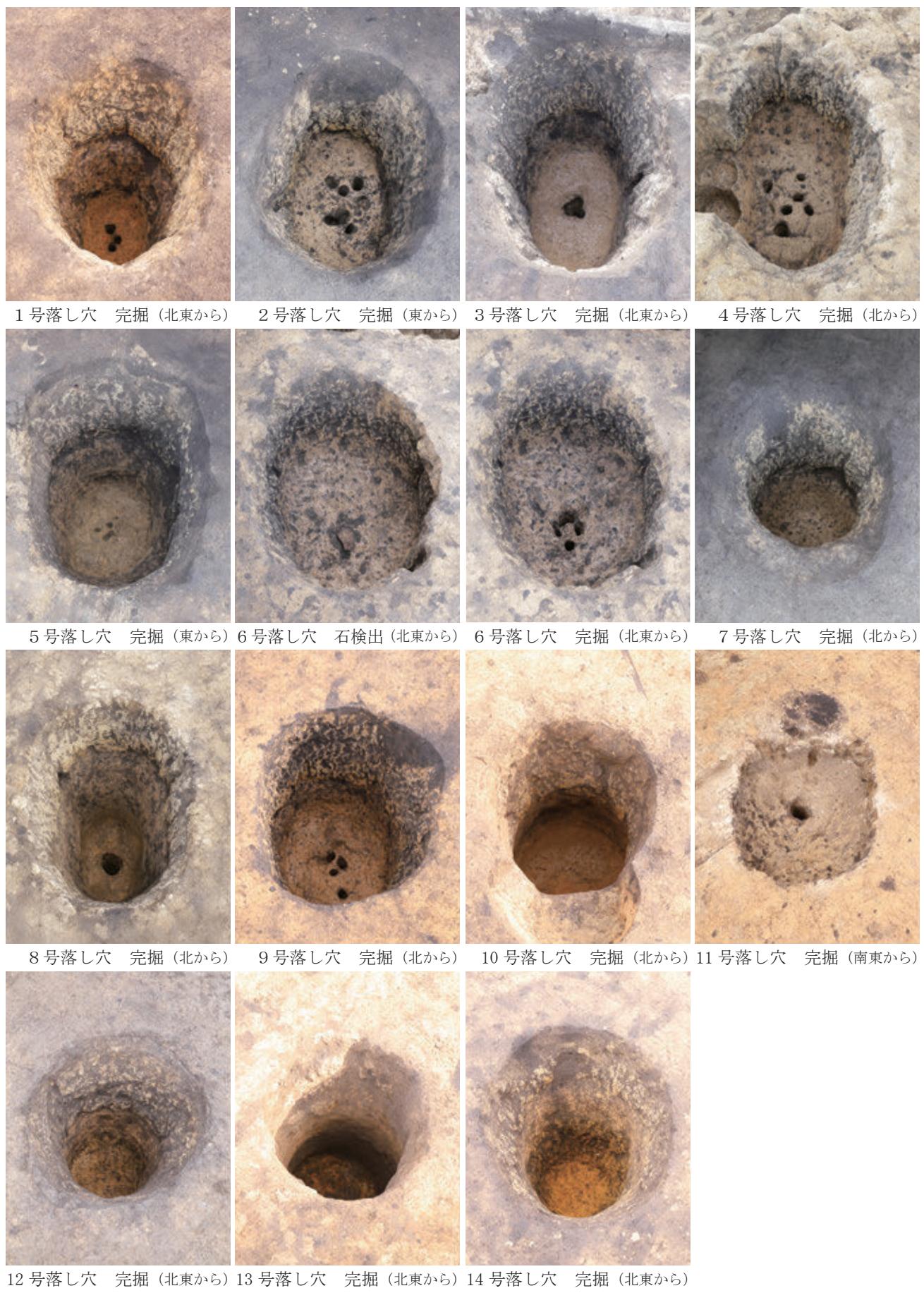


調査後全景（南東から）※調査地奥が四王寺山



調査後全景（南西から）

図版3



図版 4



1号堅穴建物
炭化材出土状況（南西から）



1号堅穴建物
床面遺物出土状況（南西から）



1号堅穴建物 完掘（北西から）



1号堅穴建物 炭化材出土状況（北東から）



1号堅穴建物 床面遺物出土状況（南から）



鉄矛・板状鉄斧・鋸造鉄斧出土状況（東から）



鉄矛・板状鉄斧・鋸造鉄斧出土状況（北から）



鉄矛・板状鉄斧出土状況（東から）



鋸造鉄斧出土状況（北西から）



P7柱痕跡 断面（南西から）



管玉（J6～J17）出土状況（東から）

図版 6



2号竪穴建物 P5
土器出土状況（北西から）



2号竪穴建物 完掘（北西から）



3号竪穴建物 完掘（南西から）



4号竪穴建物 完掘（北西から）

8号竪穴建物 完掘（東から）



5号堅穴建物 完掘（北東から）



6号堅穴建物 完掘（北から）



7号堅穴建物 P 5
土器出土状況（東から）



7号堅穴建物 完掘（北から）

図版 8



9号竪穴建物 完掘（東から）



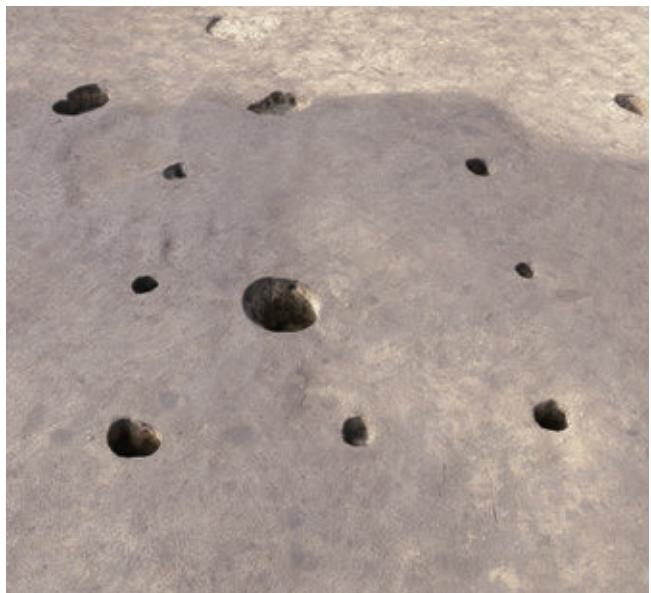
10号竪穴建物 完掘（東から）



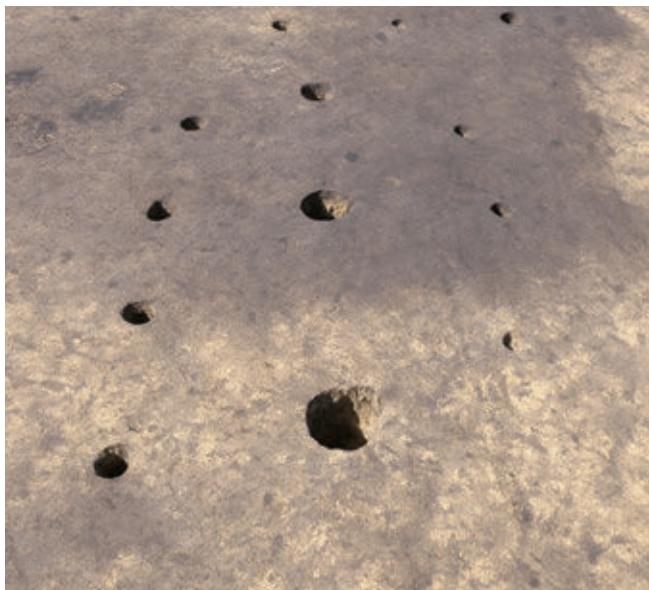
11号竪穴建物 完掘（北から）



1号掘立柱建物 完掘 (西から)



2号掘立柱建物 完掘 (南東から)



3号掘立柱建物 完掘 (北東から)



4号掘立柱建物 完掘 (北東から)



5号掘立柱建物 完掘 (東から)



1号柵列 完掘 (東から)

図版 10



6号掘立柱建物 完掘（南東から）



7号掘立柱建物 完掘（東から）



8号掘立柱建物 完掘（東から）



1号貯蔵穴 完掘（東から）



1号土壙 完掘（北東から）



2号土壙 完掘（北西から）



3号土壌 完掘（南から）



4号土壌 完掘（南から）



5号土壌 完掘（西から）



6号土壌 完掘（北から）



7号土壌 完掘（北西から）



8号土壌 完掘（南から）



9号土壌 完掘（東から）

図版 12



古墳群 調査後全景（南東から）



1号墳 調査前（西から）



1号墳 完掘（東から）



1号墳周溝・墳丘下周溝
東ベルト断面（南西から）

※向かって左側が墳丘側



1号墳周溝・墳丘下周溝
西ベルト断面（西から）

※向かって左側が墳丘側



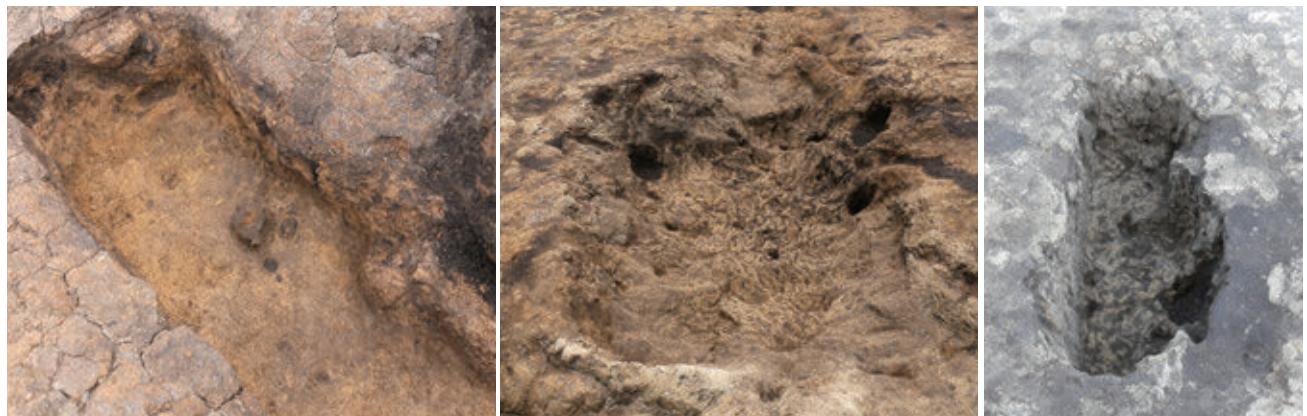
1号墳周溝・墳丘下周溝
南ベルト断面（南東から）

※向かって右側が墳丘側

図版 14



1号墳 1号埋葬施設 完掘 (北から) 2号埋葬施設 完掘 (北から) 3号埋葬施設 完掘 (南から) 4号埋葬施設 完掘 (北から)



4号埋葬施設 鉄滓 (F 4) 出土状況 (北東から) 5号埋葬施設 完掘 (北から) 6号埋葬施設 完掘 (南西から)



7号埋葬施設 完掘 (西から) 8号埋葬施設 完掘 (西から) 9号埋葬施設 完掘 (北西から) 10号埋葬施設 完掘 (北西から)



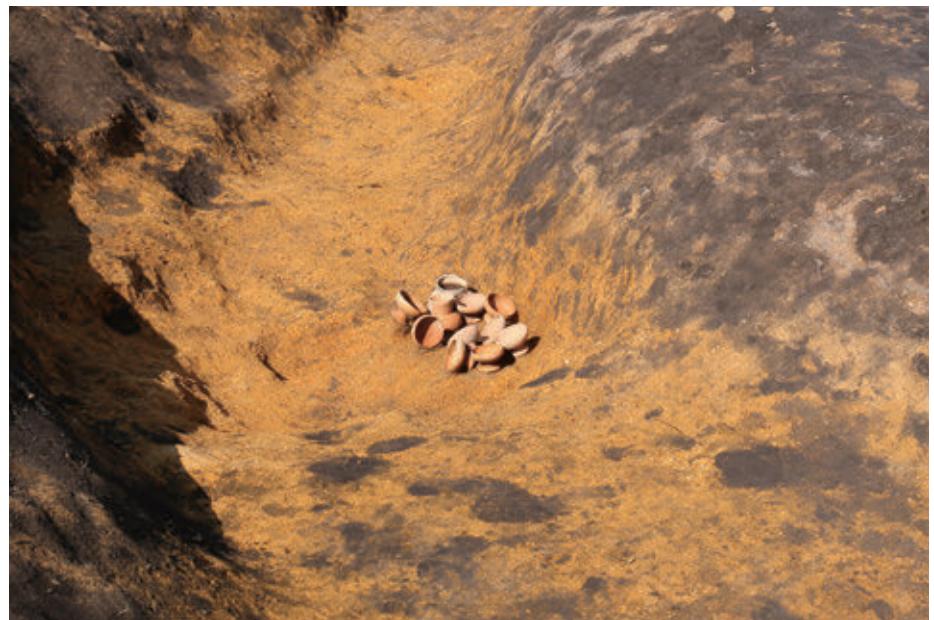
11号埋葬施設 完掘 (南西から) 12号埋葬施設 完掘 (北東から) 13号埋葬施設 完掘 (東から) 14号埋葬施設 完掘 (北西から)



2号墳 完掘（北から）



3号墳 完掘（北西から）



3号墳周溝底
供献土器出土状況（東から）

図版 16





6号墳 完掘（北東から）



7号墳 完掘（北東から）



6号墳 1号主体部 完掘（北東から）



7号墳 1号埋葬施設 完掘（南から）

図版 18



8号墳 完掘（北西から）



8号墳周溝底
供獻土器出土状況（北東から）



8号墳1号主体部
完掘（南から）



8号墳2号主体部
完掘（南から）



8号墳1号埋葬施設
検出（北から）



8号墳1号埋葬施設
完掘（北から）



9号墳 完掘（北西から）



10号墳 完掘（北から）



10号墳周溝底 供献土器出土状況（北東から）※左端は1号埋葬施設 10号墳 1号埋葬施設 完掘（南から）

図版 20



11号墳周溝底
供獻土器出土状況（北東から）

11号墳 完掘（北東から）



11号墳 1号埋葬施設
左：完掘（北東から）
中：土器出土状況（北東から）
右：鉄器出土状況（北東から）



12号墳 完掘（南から）



13号墳 完掘（東から）



13号墳周溝底
供献土器出土状況
左：(北西から)
右：(西から)



13号墳 1号埋葬施設
完掘（北から）



13号墳 2号埋葬施設
完掘（南から）



13号墳 3号埋葬施設
完掘（南西から）



14号墳 完掘（西から）

図版 22



15号墳 1号埋葬施設 完掘
(北東から)



16号墳周溝底
供献土器出土状況 (北東から)



16号墳 1号埋葬施設 完掘 (南西から)



2号埋葬施設 検出 (北東から)



2号埋葬施設 完掘 (北東から)



17号墳周溝底
供献土器出土状況（北東から）



17号墳 完掘（北西から）



17号墳 1号埋葬施設 完掘（南西から）



2号埋葬施設 検出（北西から）



2号埋葬施設 完掘（北西から）

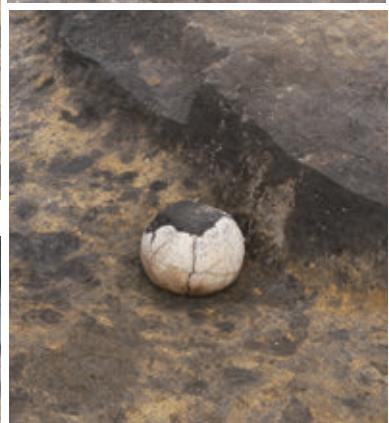


18号墳 完掘（北東から）

図版 24



19号墳 完掘（北東から）



19号墳周溝底
供獻土器出土状況
上：(北西から)
下：(南東から)



20号墳 完掘（北東から）



21号墳 1号埋葬施設 完掘
(東から)



21号墳 完掘（北から）



21号墳周溝底 供献土器出土状況（西から）



21号墳周溝底 供献土器出土状況（北東から）



22号墳 完掘（北東から）



22号墳1号埋葬施設 完掘（北東から）



2号埋葬施設 検出（西から）



2号埋葬施設 石棺（西から）

図版 26



23号墳 完掘（北東から）



23号墳周溝底 供献土器出土状況（北東から）



24号墳周溝底 供献土器出土状況（東から）



24号墳 完掘（北東から）



24号墳 1号主体部 完掘（東から）



25号墳 周溝・主体部
完掘（北東から）



25号墳 完掘（北東から）



25号墳 周溝・墳丘下周溝
北ベルト断面（北東から）

図版 28



25号墳2号・3号主体部（箱式石棺）と主体部掘方（北東から）



25号墳1号主体部 検出（東から）



25号墳主体部掘方 東西ベルト断面（北から）



25号墳1号主体部 完掘（東から）



25号墳主体部掘方 完掘（北から）※掘方北端に下層の1号主体部がみえる



25号墳 2号主体部 蓋石外面（復元）



25号墳 2号主体部 蓋石内面（復元）



25号墳 2号主体部 石棺（北から）



25号墳 3号主体部 蓋石検出（北から）



25号墳 3号主体部 蓋石内面（復元）



25号墳 3号主体部 石棺（北から）



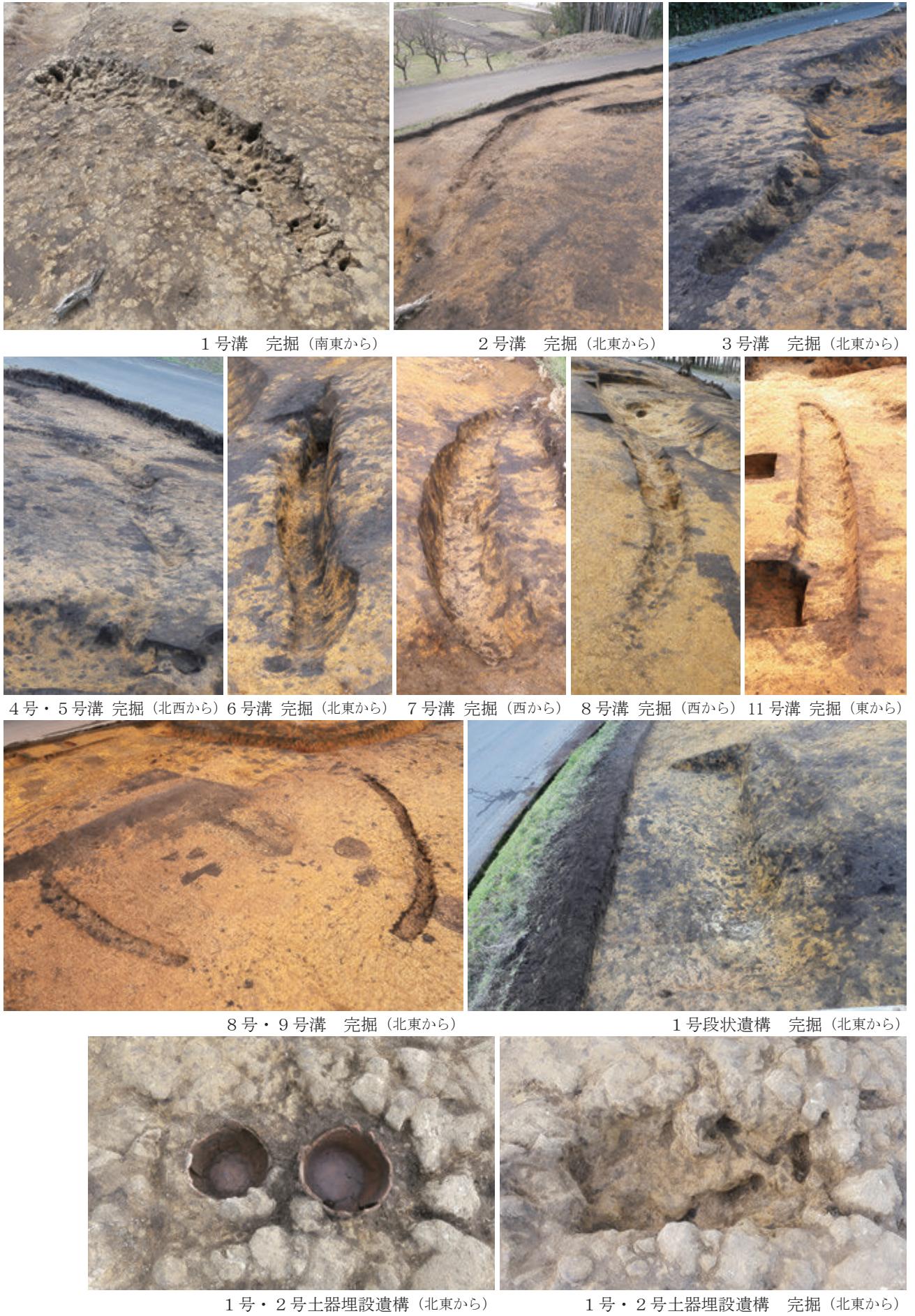
25号墳 2号主体部 石枕（北から）



25号墳 3号主体部 石枕（北から）

図版 30





图版 32



1号・2号竖穴建物出土土器



3号～7号・9号～11号竪穴建物、1号掘立柱建物出土土器

图版 34



1号貯蔵穴、1号・2号土壤出土土器



1号～3号墳出土土器

图版 36



4号・5号・8号・10号墳出土土器



11号・13号・14号墳出土土器

图版 38



15 ~ 17 号・19 号墳出土土器



20 号～24 号墳出土土器

図版 40



25号墳、1号段状遺構、1号・2号土器埋設遺構、遺構外出土土器、土製品

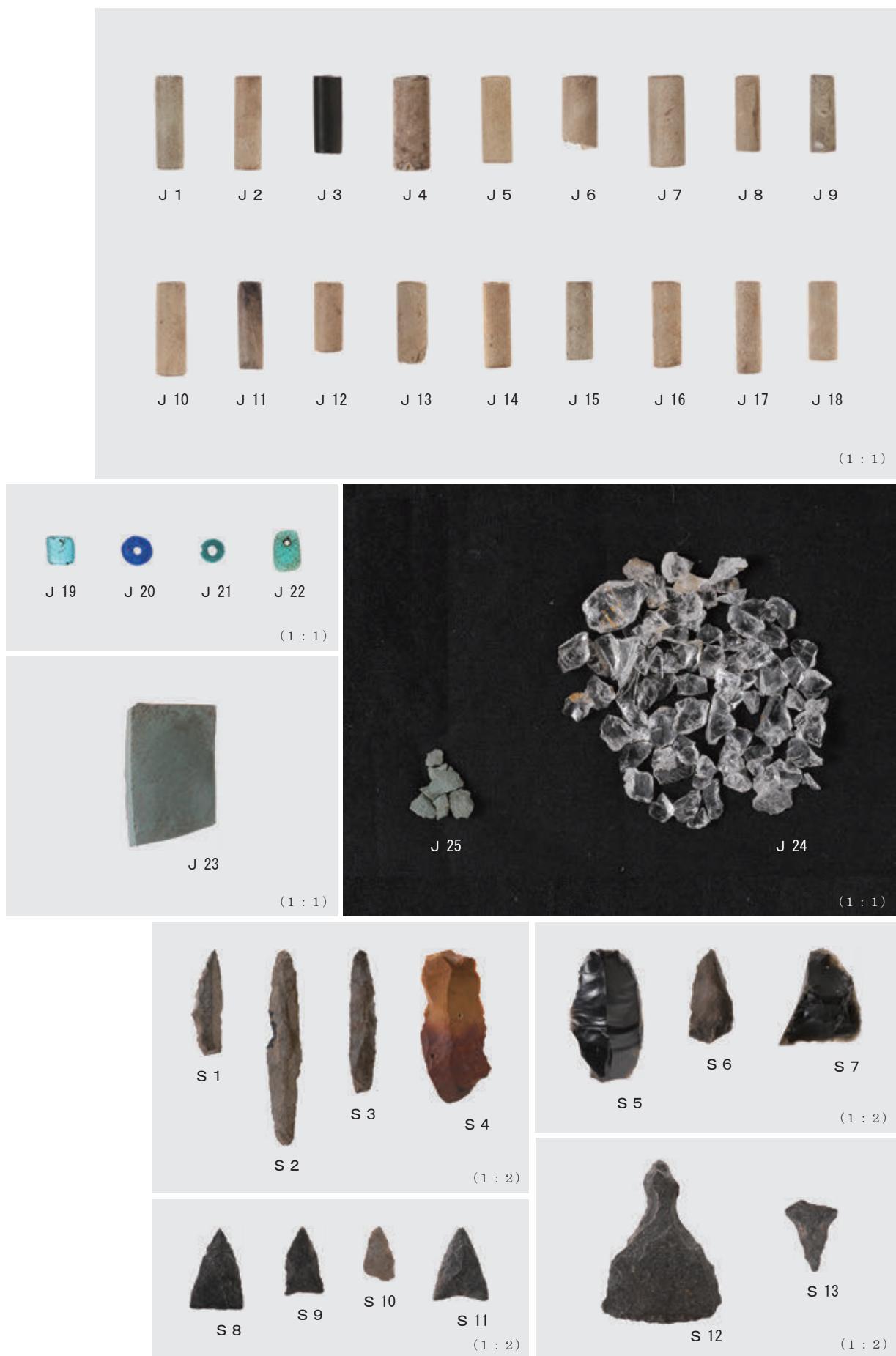


1号竪穴建物出土鉄器

图版 42



1号・4号・11号・25号墳、3号溝、1号段状遺構、遺構外出土鉄器



1号竪穴建物、16号・25号墳出土玉類、5号竪穴建物、1号墳出土玉作関係遺物
ナイフ形石器、尖頭器、石刃、剥片、石鏃、石匙、石錐

图版 44



1号贮藏穴出土石锤、5号竖穴建物等出土磨制石斧、1号竖穴建物等出土砾石、敲石、台石

報告書抄録

書名	なかおいせきだいじほくつちょううさはうこくしょ 中尾遺跡第3次発掘調査報告書							
副書名	大谷工業団地再整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査							
卷次	一							
シリーズ名	倉吉市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第160集							
編著者名	小田 芳弘（編）・片岡 啓介・西浦 千賀・橋本 有正・岡崎 健治・塙本 敏夫・村上 恭通・渡辺 正巳							
編集機関	倉吉市教育委員会							
所在地	〒 682-8611 烏取県倉吉市葵町 722 番地 TEL 0858-22-4419							
発行年月日	西暦 2024年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
		市町村：遺跡記号						
中尾遺跡	倉吉市大谷字中尾	31203 : OS0N・3	35° 26' 20"	133° 47' 39"	20190801 ~ 20220331	14,000 m ²	記録保存調査	
所収遺跡名	種別	主な時代：主な遺構	主な遺物			特記事項		
中尾遺跡	集落跡 古墳 その他の墓	旧石器：遺構外	ナイフ形石器、尖頭器、石刃、黒曜石剥片					
		縄文：落し穴 14 遺構外	なし 縄文土器（深鉢・磨消縄文）、石鏸、石匙、石錐、黒曜石剥片					
		弥生：堅穴建物 5 貯蔵穴 1 土壙 2 遺構外	弥生土器（壺、広口壺、長頸壺、脚付壺、甕、小型甕、高坏、器台）、土製紡錘車、鉄器（鉄矛、板状鉄斧、鋳造鉄斧）、玉類（管玉、ガラス管玉、ガラス小玉）、水晶剥片、緑色凝灰岩剥片、石鏸、磨製石斧、敲石、砥石、台石、炭化材、炭化種子			<ul style="list-style-type: none"> 中期後葉の集落の西端部で、焼失堅穴建物（1号堅穴建物）を確認した。 		
			弥生土器（壺、台付壺、甕）、石鍤			<ul style="list-style-type: none"> 1号堅穴建物から完形の船載鉄器 3点（鉄矛、板状鉄斧、鋳造鉄斧）が出土した。その特異な出土状況から、威信財としての鉄器を使用した廃屋儀礼が示唆される。 		
			弥生土器（壺、無頬壺、脚付壺、甕、小型甕、高坏） 管玉未成品、磨製石斧			<ul style="list-style-type: none"> 1号堅穴建物の炭化材の¹⁴C年代測定・樹種同定、炭化種子の種実同定を実施した。 		
		古代：遺構外 近世以降：土器埋設遺構 2 時期不詳：土壙 8 木棺墓 5 土壙墓 3 溝 8	古墳：堅穴建物 6 掘立柱建物 7 柵列 1 古墳 25	土師器（小型丸底壺、甕、高坏、低脚坏、鼓形器台）、砥石、敲石 土師器（甕）、須恵器 なし 土師器（直口壺、小型丸底壺、甕、高坏、壇、脚坏壇、壠蓋形土器、有蓋高坏形土器、壠形土器）、須恵器（壠蓋、壠身、有蓋高坏、壠、壺、甕）、鉄器（鏨、刀子、鍬鋤先、鎌、鉈、鑿）、馬具（鞍金具）、鐵滓、ガラス小玉、ガラス製品、人骨土師器（壺、甕、器台）、須恵器、鐵鏨 土師器（壺、甕、高坏、鼓形器台） 須恵器（壠蓋、壠身）、馬具（鞍金具）			<ul style="list-style-type: none"> 前期の集落跡と中期～後期の古墳群を新たに確認した。 前期中葉の2号堅穴建物で壁際特殊ピットを確認した。 最も規模の大きい1号墳では、周溝内10基、周溝外4基の計14基の埋葬施設を確認した。 11号墳1号埋葬施設では、墓壙内に26点の須恵器壠蓋・壠身が供獻され、4種類の鉄製農工具（鍬鋤先、鎌、鉈、鑿）が副葬されていた。 25号墳2号埋葬施設では、周溝内墳丘が遺存し、墳丘頂部に小型丸底壺と標石が据えられていた。 25号墳の2号・3号主体部（箱式石棺）で出土した人骨の鑑定と、石棺の内面に塗布されていた赤色顔料の分析、石枕のPCN分析を実施した。 	
			丹塗り土師器、布目瓦（平瓦）					
			土師質土器（短頸壺）			<ul style="list-style-type: none"> 胞衣壺の可能性がある。 		
			弥生土器、土師器 土師器 土師器 土師器、須恵器、磁器					
中尾遺跡は、四王寺山南麓の低丘陵上に位置する。第3次調査では、旧石器時代の石器と縄文時代の落し穴、丘陵上に展開する弥生時代中期後葉～古墳時代前期の集落跡、丘陵尾根から南斜面に築造された古墳時代中期～後期の古墳群などを確認した。特に、1号堅穴建物から出土した完形の船載鉄器3点は、弥生時代の鉄器の流通や祭祀を考える上で重要な資料である。								
第1～3次調査により、丘陵尾根から斜面の38,000 m ² に及ぶ広範囲で発掘調査を行い、旧石器時代の石器と縄文時代～古墳時代の遺構を確認し、時代ごとの遺跡の変遷を追うことができた。特に、弥生時代中期後葉の集落跡の全域を調査し、集落の様相が明らかとなったことは、貴重な成果である。								

中尾遺跡第3次発掘調査報告書

令和6年3月31日 印刷
令和6年3月31日 発行

編集 倉吉市教育委員会
発行

印刷 勝美印刷株式会社
製本
